

---

**【コミカライズ】現実世界にダンジョン出現！？ ~ 2**  
**8歳フリーターは攻略を目指す~**

---

私は航空券A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【コミカライズ】現実世界にダンジョン出現！？ ～28歳フリーターは攻略を目指す～

### 【Nコード】

N8016DS

### 【作者名】

私は航空券A

### 【あらすじ】

28歳、フリーター。世間ではアラサーと呼ばれ、すでに中年に片足を突っ込んでいる。

そんな俺の目の前に、ポツカリと開いたダンジョンの入り口があらわれた。

どうやら、これは俺にしか見えていないらしい。

バイク用プロテクターにバット、準備は万端だ。

さあ、ダンジョンに潜ろう！

BKコミックス様よりコミカライズして頂けることになりました。  
8月27日からコミックシーモアで、その後は9月上旬から順次、  
各種マンガ配信サービスで配信開始の予定です。そして、素晴らし  
き漫画を描いて頂けるのは、あきの実（漫画家）様でございます。  
何卒よろしく願います。

タイトルは『現実世界にダンジョン出現！？』28歳フリーター  
は攻略を目指す』から改題して、『現実世界にダンジョン現る！  
アラサーフリーターは元聖女のスケルトンと一緒に成り上がりま  
す！』です。

## ダンジョンに潜る準備

「なっ、なんだこれは……!?!」

アレが見えるようになったのは、ちょうど一週間前。

バイトからの帰宅途中、偶然通りかかった裏路地にポツカリと開いた、ダンジョン洞窟への入り口があった。

あまりにも、非現実的な光景に目を疑った。

だってそうだろ。なんの変哲もないビルの壁に、そんな物があったら誰だって驚く。

しかし、何度も目を擦って見直してみても、ダンジョン洞窟への入り口は消えることはなかった。

それどころか、こんなモノがあるのにもかかわらず、誰も気にする様子がない。

本来であれば、警察や消防隊が集まって大騒ぎになるはずなのに。

もしかして、俺にしか見えていないのか？

試しに触れてみると、ゴツゴツとした岩の感触が。

幻覚の類かと思ったけど。どうやら、そうではないらしい。

おまけに何の冗談か、洞窟ステータス情報の表示つきだ。

【始まりの洞窟RE】

難易度：

推奨レベル： レベル1〜

クリア報酬： 360ポイント

残り受付時間： 168：45：31

このステータス情報は、視覚にマスクするように表示されている。視線を洞窟から外せば消え、目線を戻せばスツとステータスが再度表示される。

まるでゲームのようなシステムに、恐怖心よりも好奇心の方が強くなった。

こんなものが目の前にあらわれては、とてもじゃないが無視など出来るわけがない。

だからと言って、何も考えずに飛び込んでしまうほど、俺の神経は図太くもない。

俺がまだ、十代であったなら何も考えずに飛び込んでいただろう。

しかし、残念ながら俺は、28歳。世間で言えば、アラサーだ。もうすでに、中年に片足を突っ込んでいる。

だから、悩んだ。多いに悩んだ。

家に戻っても、洞窟ダンジョンのことが頭から離れない。

それは風呂に入っているときも、食事をしているときもずっと、洞窟ダンジョンのことばかり考えていた。

冒険という二文字が、俺の心に残った少年の部分をしっかりと掴んで離さない。

しかし、洞窟ダンジョンというからには、きっとモンスターだっているハズだ。

そうなれば、当然、死ぬ可能性だってある。

正直に言えば、死ぬのは怖い。現実にはコンテニューなんてないのだから。

元々あった残り受付時間の表示が、168時間から28時間切るくらいになった頃。

俺は、ついに決断した。

洞窟ダンジョンに潜ると。

恐怖心や、不安よりも好奇心が勝ってしまった結果だ。

それに、『あのとき潜っていたら』と、年老いてから後悔はしたくない。

いざ、決断してみると遠足いく前のようなワクワクとした気持ちになった。

こんな高揚とした気分になったのは、何年ぶりだろうか。

急いで、銀行から現金を下ろした俺はダンジョンに潜る為の準備を始めた。

まず、用意したのは防具だ。

安全マージンを確保するためにも、防具には十分な予算を割いた。

バイク用のプロテクターで全身を覆い、靴には安全靴。

頭にはフルフェイスのヘルメットをと思ったが、視野の狭さと音の聞き取りずらさを考慮して。

コンバットヘルメットをネット通販で購入した。

防護盾も一緒に購入するかどうか悩んだが、ダンジョンの中がどのような広さなのかわからない事と、片手が埋まってしまうのは得策ではない気がして断念した。

あと、忘れてはいけないのは防護メガネ（曇り防止つき）だ。

視野は大事だ。毒を吹きかけるモンスターがいるとも限らない。只でさえ、洞窟ダンジョンという未知の場所で、視野を失ってしまえば致命的だ。

これは、二眼型を用意した。

他に用意したものは、これらだ。

武器： 手斧、硬めの金属バット、スタンガン、サバイバルナイフ

照明： ヘッドライト（ヘルメット装着）、発炎筒、LEDライト

その他： 食料、水、救急キット、登山用ロープ、防護マスク（アスベスト対応）、着火材、ライター、虫除けスプレー、スポーツタオル・スマホ

食料は調理が必要のないタイプを数日分。

携帯できないものは、登山用リュックに入れて持ち運ぶことにした。

貯金がずいぶん寂しくはなったが。これで、準備は万端だ。

きつと、いけるはず。

洞窟<sup>ダンジョン</sup>の入り口に立つ。

よかった、まだあった。

深呼吸で、息を整え、

パンツ。

両頬を叩いて、気合を入れる。

よし、洞窟<sup>ダンジョン</sup>に潜ろう！





## はじめてのダンジョン

いざ、ダンジョン洞窟の中へと踏み込む。

するど、

『ダンジョン洞窟【始まりの洞窟RE】の攻略が開始されました。』

ピッ。

『攻略終了までの残り時間： 72:00:00』

ピッ。

『ファースト・アタックにつき、冒険者のステータスを表示します。』

ピッ。

名前：ヤマダ タケシ

性別：男

種族：人間

ジョブ：冒険者

レベル：1

HP：31

MP：19

STR：6

VIT：4

INT：5

DEX：7

AGI：3

スキルポイント：0

お、おう。なんかでた。

いきなり色々と出てきたせいで、ビクツとしてしまった。

このステータスは、俺のもので間違いないようだ。だって、俺の名前が書いてあるし。もし、これで違っていたら色々信じられなくなる。

ちなみに、このステータス表示は、任意でオンオフできるようだ。表示したいときは、そう思えば表示できるし、消したいときは同じようにすることで表示が消えた。

中々と、便利な機能である。

しかし、レベル1とはいえ。このステータスの低さは大丈夫なのだろうか。

色々と不安が残るが。ここまできて、まさか引き返すわけにもいか

ない。

気を引き締めなおして、進もう。

剥きだしの地面に、緩やかな傾斜が続く通路。

少し、鼻につく苔の匂い。

不思議と視野は暗くはない。ライトが無くても、十分に進めるほどの明さ。

よく見れば、<sup>ダンジョン</sup>洞窟内の壁面がぼんやりと光っているようだ。どんな理屈で光っているのか、わからないがこれは助かる。

金属バットを両手で握り。一步、一步、慎重に<sup>ダンジョン</sup>洞窟の奥へと進む。いつモンスターが出てくるかわからないと考えると、

心臓がドクドクと、痛いほどに脈打つ。

暑くもないのにツート、一筋の汗が流れ落ちた。

「大丈夫だ、大丈夫」と、何の根拠もないことを呟きながら<sup>ダンジョン</sup>洞窟の奥へと進む。

そんな俺の気持ちとは裏腹に、モンスターに出会うこともなく。10分ほど進んだ先に、少し開けた空間にでた。

広さは三十畳ほど。天井が通路よりもずいぶん高い。あとは向こう側に通路があるだけで、特にこれといったものはない。

緊張したせいか、喉がカラカラだ。

周囲の安全を確認した後に。

登山用リュックから、水の入ったペットボトルを取り出して、勢いよく喉に流し込む。

ふう。お水が美味しい。

『ブフウッ　ブフウッ……』

なにか、音がする。

これは鳴き声か？

周りを見渡すと、向こう側の通路から猪に似た動物が一匹。大きさは体長およそ150cm。姿形は、猪や豚と大して変わらない気がする。

違うとすれば、額から大きな角がはえているところか。

ついに、モンスターとエンカウントしてしまったぞ。

覚悟を決めてきたはずなのに。初モンスターを目の前にして、心

臓がバクつく。

どうしよう、あんな角で突かれたらプロテクターなど簡単に突き破ってしまいそうだ。

そうだっ、まずはステータスだ。ステータス。

種族：一角豚

性別：男

レベル：1

HP：43

MP：0

STR：8

VIT：6

INT：0

DEX：1

AGI：9

猪じゃなく、豚だった。

表示されると思ってはいたが、モンスターにもステータスが表示されてよかった。このステータスなら、こっちは武器も持っているし、ゲームだったらず勝てる数値だ。

しかし、野生の動物を目の前にすると恐怖心が湧いてくる。

映像と実物では、まるで迫力が違う。

『ブフウッ ブフウッ……』と、鳴き声をあげながら少しづつ、距離を詰めてくる一角豚。

俺は、リュックを下ろして。

金属バットを握り直す。

たぶん、ここが俺のターニングポイントなんだ。

お世辞にも頭の良いと言えない大学を中退した後、プラプラとバイトをして過ごしてきた俺が変わるとしたら、きっとここ以外にない。

ずっと、待っていた。ほんの少しでいい。

俺の背中を押してくれる何かを。

「こいつ、豚野郎っ!!」

自身に気合を入れるつもりで、力いっぱい叫ぶ。

『ブウオオオオオオッ!』

それに反応したかのように俺に向かって、一直線走りだす一角豚。

想像していたより、ずっと早い。

慌てて、横へ転げるように避ける。

間一髪。一角豚は、そのまま壁へ突き刺さった。

その隙に、立ち上がり一角豚から距離をとる。

はあっ、はあっ……これはヤバイ。何度もできる芸当じゃないな。それに思っていたよりも、体力の消耗が激しい。

たった一回、避けただけなのにもう息があがっている。

一角豚は、壁に突き刺さったツノを引く抜くと、態勢をまた俺へと向ける。

あがった息を整えながら、考える。

正面から金属バットで殴りつけても、あの一角豚が止まるとは思えない。

それにあの角が邪魔して、正面からバットを打ちつけるのは難しそうだ。

かと言って、自分から近づくか？ いや、それは危険すぎる。

今の動きを見るに、小回りにはあまり得意じゃなさそうだ。

避けながら、殴りつけるしかない。これでいこう。

よし、やってみよう。



『ブウ、ブウツオオオオツ！』

後ろ足を蹴って、走りだす一角豚。

失敗は考えるな！ 絶対にできるハズだ。

震える足に活を入れて、それを正面から迎え撃つ。

今だっ！

「だあああああああっ！」

右側に避けて、側面から一角豚の頭部に向けて力いっぱいバットを叩きつける。

ドゴン。

鈍い音が響く。

血が飛び散り、ふらつく一角豚。

思ったよりも、効いたみたいだ。よし、もう一度だっ！

ドゴツ。

その場に倒れこむ、一角豚。

俺は、何度も、何度もバットを打ち込み続ける。

ドゴツ。ドゴツ。ドゴツ。ドゴツ。……

やがて、一角豚は動かなくなった。

バットは一角豚の血で染まって真っ赤だ。

はぁ、はぁっ……勝ったのか？

種族：一角豚

性別：男

レベル：1

HP：0 / 43

MP：0

STR：8

VIT：6

INT：0

DEX：1

AGI：9

「たっ、倒したあああああっ！」

気がつけば、俺は雄叫びをあげていた。

ピッ。

『経験値取得にボーナスがつきます。54の経験値を獲得しました。』

』

ピッ。

『レベルアップ。スキルポイント15獲得しました。』

』

## ダンジョン攻略1

「レベルアップ。スキルポイント15を獲得しました。」

ピッ。

「スキルポイント獲得につき、スキルが開放されました。」

ピッ。

「スキル、フルスイングレベル1を取得しました。」

取得可能スキル一覧：消費スキルポイント

- ・ビギナー支援パック：5
- ・HPストック：10
- ・火属性魔法レベル1：5
- ・土属性魔法レベル1：5
- ・戦士の雄叫び：10
- ・ステータスアップレベル1：10

お、おおっ！ ついにきてしまったスキルが。流れるログを目にして、興奮が抑えられない。思わず、ガッツポーズをしてしまう。

魔法が使えるちゃったりするのだろうか。

取得可能スキルの中に魔法の文字があるから、使えちゃうんだろっな。

亡くしたはずの中二的な何かが、コンニチハしてしまいそうだ。

ステータスの要領で、表示されたスキルに意識を集中させると、その説明が浮かびあがる。

### 【ビギナー支援パック】

新米冒険者に対してささやかな、はなむけ。  
初回スキル取得時のみ選択可能。

### 【HPストック】

HPがゼロになったとき、ストックされたHPが加算される。  
ただし、ストック分のHPは最大値HPを減少させる。

### 【火属性魔法Lv1】

初級火属性魔法を取得。  
スキルポイントを使用することでLvアップが可能。

### 【土属性魔法Lv1】

初級を土属性魔法を取得。  
スキルポイントを使用することでLvアップが可能。

### 【戦士の雄叫び】

STR値を5%アップ。

MP消費で発動可能、効果時間は30分。

#### 【ステータスアップLv1】

全ステータスを10%アップ。

スキルポイントを使用することでLvアップが可能。

で、先ほど覚えたスキルはどうかと言うと。

#### 【フルスイングLv1】

渾身の一撃。

MP消費で発動、STR値を10%アップ。

スキルポイントを使用することでLvアップが可能。

なるほど、結構強そうじゃない。

これを使用すれば一角豚も、一撃で倒せたりしちゃうんだろっか。  
ありがたく、使わせてもらおう。

さて、次へ進む前にスキルをとっておくか。

一通り目を通したところで、

やはり【ビギナー支援パック】が気になるな。

説明文に書いてある通り、初回スキル取得時のみ選択可能ってことは。

今しかとれない限定品ってことになる。

もう、これは取得するしかないだろう。

【ビギナー支援パック】に意識を集中させる、

『【ビギナー支援パック】を取得しますか？ はい/いいえ』

よし、できた。「はい」を選択するように意識を向けて。

『【ビギナー支援パック】を取得します。スキルポイント5消費されます。』

『スキル取得に成功。以下のスキルが付与されます。』

【アイテムパック】

アイテムを無制限に収納することが可能。  
ただし、生物は収納不可。

【マップ】

周囲のマップを表示。

ただし、未踏破ダンジョンの表示は不可。

### 【言語】

未知の言語を習得することができる。

### 【成長速度アップ】

取得経験値を大幅アップ。

色々と便利そうなスキルいっぱいある。

確かに、【ビギナー支援パック】の名に相応しい品揃えだ。

しかし、どう使えばいいのだろうか。

ステータスの要領で、発動させればいいのか。試してみるか。

【マップ】を発動するように意識を向ける。

お、視覚の左上にゲームで御馴染みの簡易マップが表示された。

そこに映しだされていたのは、今まで進んできた道のり。

その先は説明にあつたように、表示されていない。これがあれば、迷子にならないで済む。

せっかくだから、【アイテムパック】も使ってみる。何も無いハズの空間に歪みがあらわれた。

ここに入ればいいのか？ おっかなびっくり、手を入れてみるとスツと手首から先が消える。



どうやら、歪みの先が【アイテムパック】に繋がっているらしい。リュックをアイテムパックへ収納する。

これで、身軽になったぞ。

荷物の重量や大きさを考えずに持ち運べるのは、すごく便利なスキルかもしれない。  
無限の可能性が見えてくる。

残ったスキルポイントは、どうしようか。

魔法を使ってみたい気持ちは大きいけど、ここは涙を飲んで魔法をあきらめよう。

安全第一、いのちを大事に、だ。

次は、絶対に魔法をとってやるんだ。だって、使いたいもん魔法。

よし、【HPストック】、キミに決めた。

スキルを取得して、HPをストックと、

名前：ヤマダ タケシ

種族：人間

性別：男

ジョブ：冒険者

レベル：3

HP：45

MP : 27  
STR : 9  
VIT : 7  
INT : 8  
DEX : 9  
AGI : 5  
ストックHP : 10  
スキルポイント : 0

アクティブ : スキル  
HPストック : LvMax  
フルスイング : Lv1

パッシブ : スキル  
アイテムパック : LvMax  
マップ : LvMax  
言語 : LvMax  
成長速度アップ : LvMax

一つだと思っていたレベルが、二つもあがっていた。  
経験値取得にボーナスがつくって、表示されていたしそのせいかいもしれない。

よし、スキルもとり終えたし、先へ進むとするか。

と、思っで置いていたバットに手を伸ばした時だった。

背中に棒で打たれたような強い衝撃が走る。

倒れながらも、その主を視界に捉えた。

子どものような姿に、緑色の肌をした醜悪な容姿。

種族：ゴブリン

性別：男

レベル：1

HP：37

MP：0

STR：6

VIT：6

INT：0

DEX：1

AGI：4

ゴブリンだ。それも同時に三体。

## ダンジョン攻略2

『ギャツギャツ、ギャツギャツ』

不気味な笑い声をあげるゴブリンたち。

俺は転げながらも、ゴブリンたちから距離をとる。  
レベルがあがったせいか、痛みもそこまでじゃない。

名前：ヤマダ タケシ

種族：人間

性別：男

ジョブ：冒険者

レベル：3

HP：41 / 45

MP：27

STR：9

VIT：7

INT：8

DEX：9

AGI：5

ストックHP：10

思ったよりも、HPが全然減っていない。

それどころか、体が軽い気さえがする。これがステータス上昇の恩

恵なのだろうか。

立ち上がりながら、腰に下げていた手斧を持つ。先ほどの一角豚とは違い、人型のモンスター。

それに対して、手斧を切りつけるのは少し抵抗があるな……。

『ギャツギャツ、ギャツギャツ』

と、思ったけど。あそこまで化け物してくれているから大丈夫そうだ。

もう少し、人間に近かったらヤバかったかも。

『ウグウツ、ウウウツウウウツ』

唸り声をあげて、迫ってくるゴブリンたち。

覚悟を決めて、先頭のゴブリンに向かって手斧を振りあげ、

【フルスイング】を発動させる。

少しくらいは、ラグがあると思っていたけれど。スキルに意識を集中させるだけで、思いの他スムーズに発動した。

手斧を持つ手が淡く輝く。

力が漲ってくるのが、わかった。

迷っていれば、きっと俺がやられる。全力で、手斧を振り切った。

ズバッアアツ。

ゴブリンの首が、青い血飛沫をあげて宙を舞う。

『ウギャツ？ ギャギャツ？』

飛んだ仲間の首を見て、ゴブリンたちの動きが止まった。

続けさま、右側にいたゴブリンに向かって【フルスイング】を発動。

振り切った手斧が、胴を切り裂く。

『ギユアアアアツッ』

ひどい悪臭と共に、内臓がこぼれだす。

落ちた内臓をかき集めようと、うずくまりそのまま動かなくなった。

それを見て、残ったゴブリンは完全にパニック状態だ。

MPを確認すると、MP：7/27となっている。  
今のレベルだと、【フルスイング】は二回までが限度のようだ。

俺はパニック状態になっている、ゴブリンに近づき手斧で切りつける。

手斧は容易に、ゴブリンの体に命中した。

しかし、スキルが発動していないせいか、傷は浅い。

何度も、何度も、必死で手斧を振り続ける。

ビチャ、ビチャと、青い血が体に飛びかかった。

それを気にしている余裕などない。

ゴブリンも抵抗を見せるが、すでに血を失い過ぎているからか、ダメージを受けるほどの攻撃はできないようだ。振られる棒が軽い。

それを左手で受けながら、斧を振るう手を休めない。

手斧から青い血が滴り落ちる。

周囲を確認、ゴブリンたちはもう動かない。

いや、まだだ。

今さっき、油断をして背後から攻撃を受けたばかりだ。

ここはダンジョン。慎重に慎重を重ねなければ、俺みたいな素人はきっと生き残れない。

ステータスを表示させて確認する。

よし、三体ともにHPは0だ。

『経験値取得にボーナスがつきます。87の経験値を獲得しました。』

』

経験値取得のログが流れる。

こうして、ダンジョンでの二回目となる戦闘は終わった。

スキルを取っていないかったら、ヤバかったかもしれない。

その後、二度ほどゴブリンに出会いながらも、ダンジョンの奥へと進んだ。

6体目となるゴブリンを倒し終わったとき、レベルアップのログが流れた。

『レベルアップ。スキルポイント5を獲得しました。』

今回は前回のようには背後から、奇襲攻撃を受けないように壁に背をつけて、スキル習得することにした。

取得可能スキル一覧： 消費スキルポイント



- ・火属性魔法 L V 1 : 5
- ・土属性魔法 L V 1 : 5
- ・風属性魔法 L V 1 : 5
- ・水属性魔法 L V 1 : 5
- ・戦士の雄叫び : 10
- ・ステータスアップ L V 1 : 10

取得したスキル表示がなくなった代わりに、属性魔法が増えたみたいだ。

今回は絶対に魔法をとるぞ。

さっそく手に入れた5ポイントを使って、火属性魔法を取得した。理由は、俺の中二心がそう囁いたからだ。

だって、カツコイイだろ？ 火の魔法は。

『火属性魔法 L V 1 を取得しました。』

名前：ヤマダ タケシ

種族：人間

性別：男

ジョブ：冒険者

レベル：4

HP：55

MP：34

STR：11

VIT：9

INT : 10  
DEX : 10  
AGI : 7  
ストックHP : 10  
スキルポイント : 0

アクティブ : スキル  
HPストック : LvMax  
フルスイング : Lv1  
火属性魔法 : Lv1

パッシブ : スキル  
アイテムパック : LvMax  
マップ : LvMax  
言語 : LvMax

少しずつだが、確実に強くなっている。  
このまま油断せずにいけば、きっと攻略できるはずだ。

もう一度、頬を叩いて気合を入れ直す。

移動を始める前に、火属性魔法を発動させて確認。  
ぶっつけ本番で使うほど、危ないものはないからな。

MP5を消費して、拳サイズのファイアーボールが生まれた。

自分が生みだした魔法を見て、感動のあまり震える。本当に使っ  
てみたかったのよ、魔法を。

しかし、これどうやって動かせばいいんだ。まさか、手に持って投

げるわけにもいかないよな。

動け、動け。

そう念じていると、ファイアーボールは勢いをあげて壁に向かって動きだす。

着弾したファイアーボールは、数倍の大きさになって燃えあがった。

おお、カッコイイ。

これだ、これ。俺が求めていた魔法がそこにあった。ついに、俺も魔法使いになってしまった。

まだ、ファイアーボールしか使えないけど、魔法使いには違いな  
いはず。

俄然、ヤル気が湧いてきたわ。

剥きだしの壁が続く、通路をひたすら進む。

すると、今まで変り映えのしなかった景色に変化が生まれた。

下へと続く、石造りの階段だ。

光源がないのか、暗くて先が見えない。

発炎筒をアイテムパックから取りだして、投げ込む。

発火した発炎筒が、照らすしだす階段をゆっくりと降りる。

ビルで言えば、三、四階くらいは降っただろうか。

階段がなくなり、そこには石畳がどこまでも広がっていた。

突然、差し込んだ光に目を細める。

まるで、野外に出たような明るく広い空間。

所々に植物が育っており、欧州あたりの庭園に似た場所だ。

ひよっとして、外に出てしまったのか。

マップで確認すると、今まで通ってきた通路が表示されている。  
その先は表示されていない。

つまり、まだダンジョンの中だ。

文明を感じる景色に、毒気を抜かれ油断するところだった。

「あの、すみません……」

突然、かけられた声は、

とてもダンジョンに似つかわしくない、若い女性のものだった。

### ダンジョン攻略3

「あの、すみません……」

突然、かけられた若い女の声。

俺は、声の主を探す。

周囲を見回しても、それらしいものはいない。  
畏だるうか、バットを持つ手に力が入る。

「下です、下にいますっ」

下って、声の主らしきものは……いたっ。

崩れた石材の隙間に、真っ白な骸骨が。

「私ですっ、どうも……」

確かに、骸骨から声が発せられているが。

スケルトンっていうやつだろうか。

なかなかどうして、骸骨がカタカタと喋る姿は衝撃が大きい。

とりあえず、バットで殴ってしまおうか。

自然回復した分のMPで、一発分くらいフルスイングは発動させられるだろう。

「たっ、助けてほしいのですっ」

そんなの困る。敵なら敵で、ちゃんとしてくれないと、殴れなくなってしまう。

「助けてほしい……?」

「はい、挟まって動けなくなってしまうって……あっ、大丈夫です。私わるいスケルトンじゃありませんっ」

自分でわるくないと言ってしまうと、かえって疑ってしまうよな。

「ほっ、本当です。本当に良いスケルトンなんですっ」

涙声で訴えてくる、自称良いスケルトン。  
スケルトンって、涙を流したりするのだろうか。

ここまで必死に助けを求められて何もしなかったら、俺の方が完全に悪者にみえるだろ。

「わかった。助けられるかわからないが、やってみるよ」

「ありがとうございます、ありがとうございます。三ヶ月も抜け出せなくて、このまま朽ちてしまうのかと思っていました……」

「ここは、突っ込むところだろうか。」

「スケルトンだから、もう朽ちてるよね？ とか。」

「いや、やめておこう。」

しかし、よく見れば、見事にカッチリと隙間に挟まったものだ。引っぱって、抜ければいいけど。

「とりあえず、引っぱってみるか」

「はい、お願いします」

スケルトンの手……もとい、撓骨と尺骨しっかり握って引っぱる。

……ダメだ。ウンとも、スンともいわない。

ここは洗剤などで滑らすのが鉄板だと思うが、残念ながら持ち合わせていない。

まさか、隙間に挟まったスケルトンなど想定していなかったからな。

「やはりダメでしょうか……」

「もう、少しやってみよう」

「……お手数おかけします」

なんとも、申し訳なさそうに答える自称良いスケルトン。

さすがに、可哀想になつてきたわ。

しかし、スケルトンって、筋肉や腱もなくてよく骨同士が繋がっていられるよな。

バラバラになつたりしないものなのか。

ん、……待てよ。思いついちゃったかも。



「ちょっといいか？」

「なんでしょう」

「一度、全身の力を抜いてくれないかな？ それも、バラバラになつてしまつくらいに」

俺が言つて言葉に、ハツとした表情をみせる自称良いスケルトン。

「その発想はありませんでしたっ！」

ちゃんと、意図を理解してくれた様子。

「わかりましたっ！ やつてみます」

「力を抜くんだぞ、入れちゃダメだからな？」

「は、はいっ！」

本当に大丈夫かな。逆に力んでしまいそうな勢いだけど。

「いきますっ！」

力んでないか？ と、不安になったけど。

思いとは他所に、音を立ててバラバラになった。

「よしっ、上手くいったな」

「はいっ」

バラバラになった、自称良いスケルトンを隙間からかきだす。

上手くいってよかった。しかし、これちゃんと元にもどるのだろうか。

「ありがとうございますっ、ありがとうございますっ」

元の姿を無事にとり戻したスケルトンが、土下座スタイルで何度もお礼を述べるといふ。

なんとも可笑しなこの状況に、完全に毒気が抜かれてしまった。

まあ、無事に抜け出せた事だし、よしとするか。

「もう、変な隙間にはまるなよ」

さて、変な所で時間を喰ってしまった。先に進もう。

「ま、待ってくださいっ」

と、思ったラスケルトンに呼び止められてしまった。

今度は、なによ。

「ん、何だ？ まだ、困ったことでも？」

「まだ、お礼ができていません」

「十分言ってもらったから、もういいよ」

「それでは恩を返せません。しかし、お渡しできる物が無い以上、  
……この体で返しさせてください」

えっ、やだよ。体って、もうないじゃん。

それにスケルトンとするって、色々レベル高すぎだろ。

「恩が返し終えるまで、仕えさせて下さいっ」

なるほど、そっちなか。

とりあえず、スケルトンのステータスでも見てみるか。

名前：クリスティーナ・M・ブルーオーシャン  
性別：女  
種族：スケルトン  
ジョブ：元聖女  
レベル：1  
HP：27  
MP：350  
STR：3  
VIT：3  
INT：175  
DEX：1  
AGI：1

おう、このスケルトン。元聖女様だって。

## ダンジョン攻略4

隙間から救出したスケルトンは、元聖女様だった。

元聖女様が、その対極に位置するスケルトンになってしまった背景には、様々なドラマがあったであろうことは容易に想像できる。

当初の印象は完全に逆転し、このスケルトンも苦勞してきたのだなど。

同情的な気持ちになってしまった。

そのせいか、俺に仕えたいという申し出も。

「無害であればいつか」、とばかりに承諾してしまった次第である。

「しかし、まあ、何であんなところに挟まっていたんだ？」

庭園さながらの階層をスケルトンと二人、歩きながら問いかける。

「……実は、スケルトンになる前は、神職についていました」

クリスティーナの話をもとめるところだ。

クリスティーナのことを、良く思わない神官の謀略によって呪いをかけられてしまった。

その呪いは肉を溶かし骨だけの姿、つまり人をスケルトンにする禁術だったと。

スケルトンになってしまったクリスティーナは、町を追われ、追っ手から身を隠すためにダンジョンに入ったはいいが、崩れだした石材に挟まって動けなくなったようだ。

ちなみに、ダンジョンではモンスターに襲われなかったらしい。

同じモンスターという括りなのだろうか。

「そうか……なんか、まあ。元気だせよな」

思っていたよりも、大変そうな人生を歩んでいた。もっと、こう。未練があって、成仏できないとかポップな感じを想像してたわ。

「……はい。ありがとうございます」

当時のことを思い出してか、心なしに落ち込んで見えた。スケルトンの表情が読めるわけじゃないけど、あからさまに肩が落ちてるからな。

しかし、この庭園みたいな階層はすごく広い。東京ドーム、何個分って広さじゃない。

歩けど、歩けど、出口が見当たらない。  
一体、どれだけ広いんだってね。

すでに、通ってきた道もわからなくなってきた。  
これは、もう完全に迷子である。

28歳にして、迷子とか本格的にどうしよう。

そうか、こういうときはマップを使えばいいのか。

マップを表示させると、今まで通ってきた道が映しだされている。  
帰り道はわかった、今、知りたいのは進むべき道。

しかし、表示されている面積と、マスクされている未踏破部分を  
比較してみても。

未踏破部分は、その三倍以上はありそう。

この中から奥へと続く、出口を見つけるとなると。  
なかなかと、骨が折れそうだ。

「ご、ご主人様。そこにスライムがいますっ！」

クリステイーナが指で示しながら叫ぶ。

「ご主人様って、俺のことか。」

一瞬、誰のことかわからなかったわ。

クリスティーナが指す先には、わらび餅のようなプヨプヨとしたモンスターが。

大きさは、バレーボールくらいだ。

目や口などなく、想像していたスライムとちよつと違う。全体的に濁っていて、正直いって可愛らしさが足りない残念な感じだ。

「めずらしいですね。スライムなんて滅多に見つけることは、できないんですよ」

そうなのか？ こっちの世界ではめずらしいモンスターじゃない。まあ、それもゲームの話だけだ。

スライムはとくに動くことも、ましてや、襲ってくる気配もみせず止まったまま。  
これなら、簡単に倒せてしまいそうだ。

おもむろに近づいて、バットでえいっ。

プチッ、という感触がバット越しに伝わる。

すると、いとも簡単に潰れ液状になるスライム。

あれ、もう倒せちゃったのか？



『経験値取得にボーナスが付きまゝ。500の経験値を獲得しました。』

倒せてしまったようだ。

それにしても、経験値すごくないか。

今まで倒してきたモンスターに比べると、十倍近い。

もしかして、スライムさん。

ものすごく、経験値が美味しいモンスターのようだ。

「ご主人様。そこにもスライムがっ」

クリスティーナが指す方へ行って、えいつ。

プチッ。

「そ、そこにもいますっ」

えいつと、プチッ。

『レベルアップ。スキルポイント5獲得しました。』

よく見れば、あちらこちらにスライムさんが。

……マジか。

これは時間を割いても、狩るしかないな。

おいしい狩場を前にして、ネットゲーマーの血が騒いでくる。

## ダンジョンとスライムさん

プチッと、プチッと、スライムさんをバットで潰す。

それは、とても戦闘と呼べる代物じゃない。  
完全に流れ作業と化したものだった。

おかげで、レベルアップを知らせるログが流れ続ける。

かれこれ、数時間はスライムさんを潰し続けているのではなからうか。

レベルアップしては、HPやなにやらが全回復してるせいで疲れ知らずだ。

しかし、全然手が足りない。あっちにもスライムさん、こっちには色違いのスライムさん。

見つけては、プチッ。そして、また見つけては、プチッ。

途中から、クリステイーナにも手斧を持たせてプチプチと。

そのせいか、もうそこらじゅうに、スライムさんの体液が飛び散っている。

俺もクリステイーナも、スライムさんの体液でビショビショだ。

もうそろそろ、狩りつくしたんじゃないだろうか。

見渡してみても、形を保っているスライムさんは見当たらない。

さて、どれくらいレベルがあがったのか確認してみようか。

名前：ヤマダ タケシ  
種族：人間

性別：男

ジョブ：冒険者

レベル：37

HP：750

MP：590

STR：255

VIT：309

INT：248

DEX：225

AGI：370

ストックHP：10

スキルポイント：165

お、おう……マジか。  
すげー、レベルがあがってるわ。

ついさっきまで、一桁台であったレベルが今では40近くまでに。

これだけあがってれば、生存確率急上昇待ったなし。  
スライムさん、本当にありがとう。

「ご主人様、沢山スライム倒しましたね」

「あ、……ああ。もうこの辺には、いないみたいだ」

クリスティーナに声をかけられるまで、ステータスに夢中でビツクとしてしまった。

声は可愛いものだけけれど、見た目が骸骨だから、こっちとしては怖いものがある。

慣れるまで、もう少し時間がかかりそうだ。

「こんな数のスライムを見たのは初めてでした。ところで、魔石は回収しないでいいのでしょうか？」

なにそれ、初耳ですけど。

「魔石？」

「はい、魔石です。ダンジョンなどにいる魔物は全て体内に魔石を持っていて、町に持っていけば高値で買ってもらえますよ。わたしは、町に入れないですけどね……は、はは……」

自分で、自分のトラウマを抉っていくクリスティーナ。

なんか遠い目をしてる気がする。

スケルトンだから目がないけど、たぶんしているハズ。

しかし、魔石か。持っておいて損はなさそうだ。

スライムさんの体液の中から、魔石っぽい石ころを拾いあげる。

「これのことかな？」

「そう、それです。スライムの魔石は、特にめずらしくて高額で買ってもらえるはずですよ」

「なるほど、良い事を聞いた。ありがとう」

「いえ、お役に立てれて嬉しいですっ」

クリスティーナの話が自然に受け入れていたけど。  
話によれば、ダンジョンの外には違う世界が広がっている。

自分が住んでいる世界とは、また違った世界。  
異世界いいな。異世界料理、エルフにケモミミ、夢がどこまでも広がる。

無事にダンジョンを攻略できたら、行ってみるのも良いかもしれない。

あれから、スライムさんの魔石を集めること暫く。その量は、登山用リュック一杯になった。

これを換金したら、一体どれだけの金額になるのだろう。もうしかしたら、お家が建ってしまうかもしれない。

それもまだ先のこと。とりあえず、アイテムパックにしまっておこう。

「ごっ、ご主人様。それは、一体……？」

「どっした？」

「魔石を入れた袋が消えてしまいましたっ！」

「アイテムパックのことか？」

「あいてむぱっく……ですか」

何て説明をすれば、いいのだろうか。

物を収納するスキルです、と言ってわかってくれればいいけど。

かくかくシカジカ、まるまるウマウマ、と説明すると。

「なるほど、空間魔法をつかえるのですね。さすが、ご主人様です」

納得してくれた様子。

ところで、空間魔法ってなんだろうな。

スライムさんで経験値もつまかった事だし。次へ進むとしよう。  
しかし、なにか忘れている気がするけど。

まあ、いいか。

近くにあった噴水で、手と顔についたスライムさんの体液をバシヤバシヤと洗い落として。再び、出口を探し始める。

すると、出口らしきものが。

ついに、見つけてしまったようだ。

装飾された門の奥に、地下へと続く階段。

その前には、二体の石像がみえる。



神さまをモデルに作られているのだろうか。  
髭を生やした、筋骨隆々な壮年の男した石像だ。大きさは三メートルくらい。

ペタペタと触ってわかったが、なかなかと精巧な作りをしている。  
細かい細工とか、もう良い仕事してるよ。

これを作った職人は、さぞ良い腕を持っていることだろう。

プラモ愛好家が言うのだから、間違いない。

「ご、ご主人様……」

クリスティーナの呼びかけに、振り返る。

「そ、それ……ゴレムです」

## ダンジョン攻略5

「そ、それ……ゴレムです」

ゴレムって、アレだよな。

動く石像。知ってるよ、ゲームで見たことがあるもん。

この物知りスケルトンさんめ。

そういう事は、もっと早く言って……えぐおおおおあああああ  
ああああ。

突如、動きだした右側のゴレムは、

外見ではおおよそ、予想できない速さで俺を殴りつけた。

その拳を全身で受け止めた俺は、ピンボールごとく吹き飛ばす。

「ご、ご主人様あああっ！」

クリスティーナの音が響く。

全身粉碎骨折しても、おかしくない衝撃だった。

俺がまだ小学生だった時分、軽トラに跳ねられたときの衝撃に似てる。

地面に打ちつけられた俺は、二度ほど跳ねてようやく止った。

残りHPは、どうだった？

すばやく、自身のHPを表示させる。

【HP：725/750】

よし、まだ全然いけるぞ。

手足を動かして確認。大丈夫だ、どこも折れていない。

種族：ゴーレム

性別：男

レベル：12

HP：190

MP：0

STR：98

VIT：155

INT：0

DEX：35

AGI：57

ゴーレムのステータスを表示させてみれば、スライムさんがくれた経験値がなければ、一度退却も考えなければいけないレベル。

しかし、大幅にレベルアップを遂げたレベルは今や37。戦闘経験に乏しい俺でも、十分に圧倒できるはずだ。

「ご主人様っ、大丈夫ですか!？」

心配そうな声をあげて、駆けつけようとするクリステイーナ。

「俺一人で、大丈夫だ。ここは、任せてくれ！」

手でクリステイーナを制して叫ぶ。

「っ、ご主人様っ……」

今のセリフは、決まった気がする。

ずっと、言ってみたかったセリフの一つだ。

惜しむべくは、言った相手がスケルトンだということ。

できれば、美少女がよかった。

しかし、今は余計なことを考えている暇はない。

目の前のゴーレムに集中しなければ。

立ち上がり、転がったバット拾う。

バットを構えながら、ゴーレムにゆっくりと近づく。  
距離をとって、わかったことがある。

このゴーレムは、近づかなければ攻撃をしてこないようだ。  
もちろん近づかなければ、当然その先にある出口は通れない。

結果は同じだが。射程範囲からはなれてしまえば、追撃がない分  
マシか。

幸い動くのは、右側の一体だけだ。

油断さえしなければ、きっと大丈夫。

バットを握る手に力を込める。

その時だった、

左側に立つ、ゴーレムの目が赤く光る。

……マジかよっ。

咄嗟に、ジャンプして回避。

そこで俺は思った。人間が飛んだところで、たかが知れていると。人の胸以上はあろう、ゴーレムの拳を避けれるものかと。

しかし、結果はその予想を裏切って高く飛びあがった。

どのくらいの高さかというと、軽く三メートルは越えている。

これが、レベル37の実力か。

標的を失った、ゴーレムの動きが止まる。

これならっつ。

落下しながら、バットを振り上げて。

右側ゴーレムの頭に目がけて、振り落とす。

バットがゴーレムの頭を捉えた。

『フルスイング』を発動させて、そのまま、打ち抜く。

手に伝わる感触は、石を打ち抜いたような硬いものではなく。

まるで雪を砕いたような、柔らかなものだった。

頭部を粉々にされたゴーレムは、そのまま動かなくなる。

どうやら、頭部が弱点のようだ。

アレ、なんて言ってけ……ゴーレムの頭部かどこだかにある文字

を、一字消してとかいうやつだろう。

残ったゴーレムに向き合う。

すでに射程範囲内に入っていたのか、ゴーレムの予備動作は完了していた。

繰り返される拳に向かって、俺も『フルスイング』を発動させたバットを振る。

バットにぶつかった、ゴーレムの拳が砕けた。

足を踏ん張り、今度は頭だっ。

レベルアップで生まれたMPの余力で、三度目の『フルスイング』を発動。

拳を砕かれ、バランスを崩したゴーレムの頭部を砕く。

『経験値取得にボーナスが付きます。270の経験値を獲得しました。』

ふう、無事に倒せたようだ。

レベルアップで得た力がこれほどのものとは、正直思わなかった。

「じっ、ご主人様あああ。ご無事ですかあっ！」

クリスティーナが抱きつく。

その図は、さながら襲ってくるモンスター。

完全に腰が引けてしまった。

「あ、ありがとう……」

「ご無事でなによりです。う、うつつ……」

涙声を聞くに、本当に心配してくれていたようだ。

しかし、突然スケルトンに抱きつかれて、ビビッてしまうのは仕方ないよな。

ゴーレムが守っていた門を通り、階段を下ると、

その先に待っていたものは、真っ白な空間だった。

唯一あるものは、中央に置かれた石碑だけだ。

その石碑が光を宿す

『始まりの洞窟RE、最深部へようこそ。』



## 最深部

『始まりの洞窟REダンジョン、最深部へようこそ。』

優しげな女性の声が、真っ白な空間に響く。

その声が言うところによれば、

ここが、始まりの洞窟REダンジョンの最深部らしい。

中央に置かれた石碑以外、何もない空間。

ここが洞窟であるかも、あやしいくらいだ。

しかし、不思議と恐怖心はない。

それが攻略を終えたという安心感が、この空間が生みだす雰囲気かはわからないが。

『始まりの洞窟REダンジョンの、踏破者として、ヤマダタケシ、クリステイ  
ーナ・M・ブルーオーシャンを登録します。』

再度、女性の声が響いたと思ったら、

「きゃああああっ!」

クリスティーナの叫び声もあがった。

「どっしたっ？」

慌てて、クリスティーナのいる方へ振り返る。

すると、どうだ。

いるはずの、スケルトンが見えない。

代わりにいたのは、白銀の艶やかな髪を揺らした、まるで女神のように美しい少女だった。

それも、一糸纏わぬ姿で。

正直いって、わけがわからない。  
もしかして、洞窟ダンジョンのご褒美だったりするのだろうか。

そんな、嬉しい。

紅潮した頬、潤んだ瞳、まるで桃の果肉のように瑞々しい唇。

真近で見ると、その神々しい造詣に息を飲む。

少女の瑞々しい唇が開く。

「みつ、見ないでください、ご主人様っ」

「じ、ごめんっ」

反射的に、背を向ける。

声は間違はなく、クリスティーナだ。

「クリスティーナか？」

咄嗟に、名前を呼んでしまったけど。

さっきの声も言ってたし、大丈夫だよな。

「はい、クリスティーナです。何故か、わかりませんが呪いが解けたようで……」

なるほど、これで合点がいく。

どういう理屈で呪いが解けたか、わからないが。

クリスティーナ本来の姿をとり戻したようだ。

さっきまではスケルトン。当然、服なんて着ていない。

それが突然、本来の姿になれば……結果は、見ての通りというわけ

だ。

しかし、なぜ呪いが解けたのか。

考えられる理由といえば、この空間くらいだ。

もしかしたら、ここはバフ・デバフを打ち消してしまうような、セーフゾーンなのかもしれないな。

「ぜ、絶対に見ちゃダメですからねっ……」

「わかった、わかった」

これ以上、見ていたらコッチも色々ややばい。  
違う意味で、破壊力が桁違いだ。

『始まりの洞窟RE、攻略おめでとつございます。』

お、おう。

クリスティーナの姿に衝撃を受けて、完全に忘れてしまっていた。

『チュートリアルを終了します。報酬を受け取りください。』

目の前に、柔らかい光を放つ球体があらわれる。

チラリと横目でクリスティーナを伺えば、同じように球体があった。

球体に触れると、その形を変え始める。

それは徐々に変形し、やがてバットの姿になった。

『始まりの剣を取得しました。』

バットなのに剣なのかと、思ったが。

まずは、ステータスを表示させてみることに。

### 【始まりの剣】

持ち主と共に、成長する武器。

その姿は、持ち主の望む姿へと変える。

ステータスに5%アップの補正。

なるほど、攻略報酬に相応しい武器だ。

武器を育てていく系は、嫌いじゃない。

ネトゲではハマり過ぎて、サーバーでも数本しかない伝説の一本を作り上げたほどだ。

あのときは、やばかった。おもに、睡眠時間が。

俺の報酬は武器だったけど、クリスティーナ一体なにを買ったんだろうな。

報酬は武器以外にも、経験値が360ポイントついた。  
まだレベルアップすることはなかったが、これだけ貰えれば十分だ  
ろう。

『スタート地点に戻りますか？ はい/いいえ』

今度は、あの女性の声ではなく、ログに映しだされる。

「クリステイナー。俺は洞窟ダンジョンから出ようと思っけど、どうする？」

背を向けたまま、声をかける。

ついてくると言うなら、もう乗りかかった船だ。

クリステイナー、一人くらい面倒をみるものわるくない。

「もちろん、ご主人様についていきますっ！」

「はい」を選択した後、一瞬の浮遊感に包まれ景色は一転する。

場所は、スタート地点。

ダンジョン  
洞窟入って、すぐの所まで戻っていた。

振り返れば、クリスティーナの姿はスケルトンに。

やはり、呪いが解けたのは一時的なものだったらしい。

「……スケルトンに戻ってしまいました」

と、落ち込んだ姿をみせるクリスティーナ。

「一時的にも、呪いが解けたんだ。ダンジョンを攻略していくうちにきつと、解く方法も見つかるさ」

「そ、そうですねっ」

さて、一度、家に帰って次のダンジョンを見つけるとするか。きつと、ダンジョンの入り口はまだあるはずだ。

家に戻るにあたり、一つ問題があった。

スケルトンであるクリスティーナを、そのまま歩かせるわけにはいかない。

それこそ歩く骸骨などがいれば、大騒ぎになって警察のお世話になってしまう。

そこで俺は登山用リュックに、クリスティーナを収納することにした。

何かと、役に立つリュックだ。

すんなりと、リュックに収納されたクリスティーナを担いでダンジョンの外へ。

太陽の陽が、頬をなでる。

丸一日くらい、ダンジョンに潜っていたはずなのに、

太陽の位置は、入った当初と変わっていない気がする。

どっぴうことだ？

スマホで確認すると、ダンジョンに潜ってから10分と経っていない。

もしかすると、ダンジョンの中と外では時間の流れが違うのだろうか。

「あれ、先輩。こんなところで、何しているんですか？」



## 一時帰還

「あれ、先輩。こんなところで、何しているんですか？」

そう声をかけてきたのは、ショートカットが良く似合う少女。制服を着た彼女と、すれ違った男なら十人に九人は、振り返るであろう美しい容姿。

そんな彼女が、俺に対して『先輩』と呼ぶ理由はバイト先が同じ、それに尽きる。

しかし、他のバイト仲間には、『さん』つけて呼ぶのに。

なぜ、俺にだけは、『先輩』なのだろうか。

やはり、顔面偏差値か。少しばかり壁を感じてしまう。

俺も、女子高生から『さん』つけて呼ばれたい。

できれば、呼び捨て。

(クリスティーナ、驚かせてしまうから喋るなよ)

背負ったリュックに向かって、小声で話す。

(はいっ、わかりました)

物分りの良いスケルトンさんで助かる。

「ササキか、何ってサバゲーの帰りだよ」

アイテムパックのおかげで今は、バットや手斧などは持っていないが。

よくよく考えれば、通報されても仕方ない格好だったと、今になって気づく。

ダンジョンを目の前にして、そこまで考えがまわっていなかった。

それこそ、職質でもされていたら、完全にアウトだったわ。

問答無用で、市場に売られる子牛のごとく連行されてしまう。

「え、先輩サバゲーやっているんですか？ 私、前から興味あったんですよね。今度、連れて行ってくださいよ」

予想外に食いつかれた予感。

しかし、俺がやっていたのはサバゲーではなく、ダンジョン攻略なのだよ。

ササキ、わるいけど。お前の願いは、叶いそうにないわ。

「お、おう。今度な、今度」

「約束ですよ？ それでは、これからバイトなので行きますね」

「気をつけて行けよ、またな」

笑顔で手を振るササキにつられて、俺もまた手を振って応える。

サバゲーか。

女子高生の間で、流行っていたりするのだろうか  
始めてみるのも、わるくないかもな。

ピッ。

『近くに未踏破ダンジョンがあります。』

なんだ、なんだ。

突然、ログが流れたかと思ったら、マップが表示される。

そこには、マーキングらしきアイコンが赤く光っていた。

そこから予測するに、新しいダンジョンを見つけたようだ。

お、近いな。帰る前に、見に行ってみるか。

「見えるか、クリステイナー？」

歩くこと、10分。

少し大きめの公園の端に、新しいダンジョンの入り口があった。

やはり、洞窟ステータス情報の表示つきだ。

### 【境界の回廊】

難易度：

推奨レベル： レベル15}

クリア報酬： 550ポイント

残り受付時間： 95:55:29

「はい、これはダンジョンですか？」

リュックの隙間から、器用に覗きながら答える。

「ああ。明日あたり、このダンジョンにアタックしようと思うのだ

が。クリスティーナはどうする？」

「もちろん、ついていきますっ」

即答で返ってきた返事が、ちょっと嬉しい。帰ったら、線香の一つでも焚いてやろう。

スケルトンだから、きつと喜んでくれるはずだ。

「そうか、ありがとう」

「いえ、従者なら当然のことです。しかし、ご主人様……」

「ん、どうした？」

「ご主人様の住む街は、私がいたところと全然違いますね。見た事がないものばかりです」

街が違つと言うよりは、世界が違つただけだな。

などと、考えていたら。

ダンジョンの中から、音が聞こえてきた。

これはアレだ、人が走っている音。

音が近くになるにつれ、ハアハアと息づかいも聞こえてくる。

そして、ダンジョンの中から飛び出す人影。

それは、金髪をポニーテルにした、美しい少女。

全力で走ってきたのだろう、肩を揺らし、息が荒い。

それも、少し落ち着いていたのか。

キョロキョロと、辺りを一頻り見回した後、

少女がその蒼い目で、俺を睨む

「アンタ、誰よっ！」

いや、お前が誰だよ。

## 冒険者の少女

「アンタ、誰よっ！」

艶やかな金髪を、ポニーテールに結んだ少女が、その蒼い目で睨む。

ダンジョンの入り口から、飛び出てきたのは向こうであって。俺ではない。そのうえ、誰だと聞かれて何と答えれば良いのだろうか。

「ヤマダタケシです」

とりあえず、本名などを答えてみる。

「クリスティーナです」

リュックの隙間から、クリスティーナも続く。

それを聞いて、ポニテ少女は少し思案顔だ。

「あまり見ない格好だけれど、もしかして冒険者かしら？」

その辺、どうなんだろうな。

まだ、経験は圧倒的に少ないが、ダンジョンに潜ってるわけだから、冒険者と名乗っちゃってもいい気がする。

まあ、そう言ったほうが無難だろう。

フリーターですと、正直に言ったところで不信がられるだろうし。

それに違う意味で、俺のHPも削られてしまう。

「まあ、そんなところだ」

「その、従者ですっ」

クリスティーナが、リュックの中から元気に答える。

しかし、良く見ればポニテ少女も冒険者のそれだ。

シルバーで飾られた軽鎧に厚めのブーツ。腰には、細めの剣を携えている。

「わたしはローズよ。怒鳴ったりして、わるかったわ……しかし、ここはどこなのかしら。ダンジョンの中とは到底、思えないけど」



「ここは、ダンジョンではありませんよ」

クリステイーナが、リュックからひょっこり顔をだして答えた。

それを見た、ポニテ少女が腰の剣に手をおく、

「ス、スケルトンッ！」

これは、ちょっとまずい雰囲気。

「待つて、待つてっ」

すかさず、間に入って説明をさせていただく。  
かくかくシカジカ、まるまるウマウマ。

とくに隠す必要性を感じなかったので、まるっと正直に。  
その際に、「ぬおっ」と声をあげて一番驚いていたのは、クリステイーナだった。

「にわかには信じれない話ね……」

当然だろ。俺が逆の立場だったら、異世界うんぬん言われたら。

こいつ、ちょっとヤバイって思っちゃっもん。

「この際、そんな事はどうでもいいわ。あなた達、冒険者なら手を貸してもらえないかしら。お礼は、十分な額を用意するわ」

ローズが話した内容によると、

パーティーメンバーと共に、このダンジョンを探索途中、突如あらわれた冒険者崩れの無法者アウトローに襲われて、パーティーは半壊。

それでも何とか、仲間達の手によって逃げだしたローズは、助けを呼ぶ為に必死に走っていると、

気がつけば、ダンジョンの外に。

つまり、ここ行き着いたというワケだ。

そして、その手助けを俺たちに求めているらしい。

さて、どうしたものか。

相手は冒険者崩れの無法者アウトロー。

一角豚やゴブリンなどと、比べても危険そうだ。

しかし、助けを求める美少女に、まさか断るなんて出来るわけがない。

やっぱり、男なら女の子の前では、カッコつけたいよな。

決めた、助けに行こう。

「クリステイーナ。助けに行こうと思うけど……」

「もちろんです、行きましょうっ！」

言い終える前に、快諾を得られた。

さすがは、元聖女様。

人助けと聞いて、迷いはないようだ。

「なにも見えないのだけれど、本当にダンジョンの入り口があるのかしら？」

ダンジョンの入り口を前にして、ローズがつぶやく。

あれ、そうなのか？

俺とクリステイーナには見えてるのに、ローズにはコレが見えていないようだ。

この違いって、なんだろう。

「ただ、今はそんなことを考えている場合ではないな。アイテムパックから、『始まりの剣』という名のバッドを取りだして、

準備はオーケーだ。

「よし、いこう！」

ダンジョンの中へと、足を踏み入れる。

ピッ。

『【境界の回廊】の攻略が開始されました。』

ピッ。

『攻略終了までの残り時間： 120:00:00』

先ほどまでいた公園から一転して、景色がぐにやりと変る。

そこに広がっていたのは、神殿を思わせる遺跡群。

それは、白い石材で造られおり、所々朽ち落ちた跡が見られる。

俺達が立つ、石畳が中央の一際大きい建物へと続く。石畳の両脇に等間隔で並ぶ、モンスターを象った石像が印象的だった。

時間があれば、じっくり鑑賞したい逸品だ。

「本当にダンジョンに繋がっていたのね……」

その変化に、驚きを隠せないローズ。

しかし、今は時間が惜しい。

せつかく助けると決めたのだから、間に合わせたい。

着いたら全滅してましたとか、最高に目覚めがわるいだろ。

「パーティーメンバーのところまで、案内を頼む」

そう言うと、ローズは頷き、

「あの中央の神殿から中に入るわ。ついてきて」

「ああ、わかった」

それを合図に、俺達はダンジョンに向けて走りだす

## 冒険者の少女2

俺達は、走る。ポニテ少女こと、ローズの仲間達の元へ。

気分は、今まさに、囚われの姫を救出に向かう王子様。

しかし、現実には走るアラサー。

白タイツとか、絶対に似合わないと思う。

タイツに、つぶされたスネ毛が最高に無様だわ。

続く、石畳を走り終えて、神殿の中に入ってみると。

白い石材で出来た壁には、毒々しい植物の蔦がビッシリとはえており、

いよいよ、ダンジョンのソレを思わせる。

「こつちよ」

いくつかの通路を抜けると、地下へ続く階段が。

その階段を降り終えると、神殿内部よりも広い空間があらわれた。

ゴツゴツとした岩壁に囲まれたそこは、まるで地下祭壇。

良く見れば、あちらこちらに地底から、噴き上げてくるマグマの姿が見える。

最初のダンジョンに比べて、光源は低いが走れる程度には明るい。神殿内とは違い、ここからは、剥きだしの通路だ。

通路をあがったり、さがたりと、走り続けて。

ようやく、次の階層へと繋がる門に到着した。

ここまで、モンスターに出会わなかったのは、ローズのパーティーが道中、倒したからだろう。

モンスターが再ポップするのか、どこから来るのかはわからないが。

倒し終えてから、そう時間が経ってない気がする。

その為、道中は快適そのもの。

レベルアップの恩恵を受けて、今まで走り続けていても息があがることすらしない。

以前の俺であれば、今頃、脇腹あたりが悲鳴をあげていたことだろう。

ステータスの大切さを、再確認といったところか。

「フロアボスは、まだ復活していないわね」

ローズが、門の前で止まって、確認するかのようにつぶやく。



「フロアボスつてのは、復活するものなのか？」

「あんだ、それでよく冒険者をやっているわね。常識でしょ？」

どうやら冒険者にとって、フロアボスが復活することは常識だったらしい。

「なるほど、勉強になった。ありがとう」

「はあ……。まあ、いいわ。進みましょう」

はあ。こいつ使えねえ、とか思われてしまったのだろうか。

それから、ダンジョンを進むこと程なくして、目的地に到着。

そこは今まさに、大男が少女に暴行を働かんとする現場。服装の乱れ具合からしても、事後ではないようだ。

どっちが、ローズのパーティーメンバーかはわからない。しかし、攻撃をするべき相手は大男しかないだろう。

間違っていたときは、アレだ。まあ、そのとき考えよう。

俺は、走る速度をあげて、

そのまま、バット現行犯の腹へ打ち込む。

鈍い音と、肉の感触。

打ち付けられた男は、錐揉みしながら打ち上げられる。

「クレアッ！」

そう叫んだ、ローズが少女に駆け寄る。

クレアと呼ばれた少女は、服を乱暴に破られ、頬には殴られたであろう赤い痣が。

間に合って、本当によかった。

よく見れば、薄汚れた見るからにアウトロー無法者した男が三人。

そして、ローズのパーティーメンバーらしき人間は、先ほど助けた少女の他に。

十代後半くらいの男と、こちらは十代半ばの少女が一人。

どちらも、地面に倒れ動けないようだ。

男の方は、悔しそうに拳を握り締めている。

目の前で、パーティーメンバーが暴行を受けようとしていたのを、見ていることしかできなかったのだ。無理もない。

「ご主人様。わたしは、回復魔法にあたりますっ」

「ああ、まかせた」

って、クリスティーナさん回復魔法使えたの？

さて、アウトロー無法者と呼ばれた男達に向かい合う。

バットで打ち抜いた男は、戦線離脱が決定したようだ。

ピクピクと泡を吹いて倒れているから、間違いないだろう。  
もし、『フルスイング』を使っていたら、死んでいたかもしれないな。

「てめえっ、誰だっ！」

男の一人が叫ぶ、どちらの武器も刃の厚い剣。  
それに、似たような黒い毛皮を基調とした装備。

見分けがつかないな、もうこの際、AとBでいいだろう。

どうせ、ぶっ飛ばすのは決定事項だ。

バットをクルリと回した後、男達に向ける

「俺か……俺は、お前達をぶっ飛ばす男だ！」

### 冒険者の少女3

バットをクルリと回した後、男達に向ける

「俺か……俺は、お前達をぶっ飛ばす男だ！」

言ってしまったぞ。

まさか俺の人生で、こんなセリフを言ってしまうとは。

ダンジョンの雰囲気、やばい。

完全に当てられてしまっているわ。

「てめえ、正気か？ 俺達に勝てるつもりでいやがるのかっ」

厭らしく口角をあげて、嘲笑のを浮かべるアウトロー無法者A。

「そのつもりだ」

言ってしまったものは、仕方ない。

このノリを貫き通してしまおう。

変に恥ずかしがるから、いけないのだ。

今の俺は、ピンチに駆けつけた謎のヒーロー。

これだ、これでいこう。

「はっははは、俺達は元、『赤鉄』級の冒険者よお。お前みたいなヤツに負けるはずがねえ」

それに釣られて、アクトロー無法者Bも笑いだす。

さっそく、笑われてしまったぞ。

何だソレ、知らないよ。

冒険者に階級あるなんて、初めて知ったわ。

で、『赤鉄』級とやらのステータスは、どんなもんよ。

名前：ゲレレ

性別：男

種族：人間

ジョブ： 無法者

レベル：16

HP：155

MP：0

STR：31

VIT：33

INT：0

DEX : 19  
AGI : 29

見てみれば、ダンジョン推奨レベルギリギリ。

ネトゲであれば、パーティに入った途端キックされても、文句言えないレベル。  
曰く、「募集内容は、ちゃんと見てくれましたか？ すみませんが、キックしますね」

基準を満たしていない者に対して、世間の風は冷たいのだ。

もう一人はどうだ？

名前：モツスル  
性別：男  
種族：人間  
ジョブ： 無法者  
レベル：14  
HP：147  
MP：0  
STR：29  
VIT：25  
INT：0  
DEX：33  
AGI：35

こいつに到っては、レベルが下回ってるぞ。  
逆に、心配になってしまっわ。

そして、これが俺のステータス。

名前：ヤマダ タケシ

種族：人間

性別：男

ジョブ：冒険者

レベル：37

HP：750

MP：590

STR：255

VIT：309

INT：248

DEX：225

AGI：370

ストックHP：10

スキルポイント：165

その差は、まるで大人と子ども。  
我が戦力は、圧倒的じゃないか。

ふふっ、と笑いが漏れてしまったわ。

「何が可笑的い？ 笑うんじゃないよっ！」



不機嫌そうに、言葉を吐き捨てると向かってくるモブA。

自身は嘲笑したのに、理不尽な事を言うやつだ。

それを、向かい撃つべくバットを持つ手に力をこめる。

あれ、遅くないか。

モブAの動きが、まるでスローモーションのようだ。

いや、これはきつと上昇したステータスがそう見せているのかも  
れない。

切り込むモブAの剣を、バットで打ちつける。

金属の甲高い音が響く、厚い刃が粉々に割れた。

それを見て驚愕するモブA。

俺も、ビックリだ。まさか、粉々になるとは思わなかった。

しかし、今は驚いている場合じゃない。

すかさず、腹にバットを打ちつける。

「ぐはあっ」

モブAは、その場に倒れて動かなくなった。

続けて、モブBに向けて駆ける。

まさか、モブAが倒されてしまうとは、思っていなかったのだろ  
う。

剣すら抜いていない、隙だらけもいいとこ。

このまま、打ち込んでしまえ。

モブAと同じく腹部へ。

打ち込まれたモブBは、への字に体を折りながら、そのまま地面  
に倒れこむ。

ふう、終わったぞ。ミッションコンプリート。

これだったら、まだゴーレムさんのほうが強かったな。

「す、すごい……あなたは一体……」

## パーティーメンバー

「さすが、ご主人様ですっ」

カタカタと骨を鳴らせて、駆け寄ってくるクリスティーナ。倒れていたパーティーメンバーの回復は、無事に終わったようだ。

地面に倒れていたのは、すでに過去のこと。彼らも今は、元気に立ち上がっている。

回復魔法って、すげーな。

「クリスティーナもご苦労様、回復魔法なんて使えたんだな」

スケルトンであるが、よくよく考えてみれば、元聖女様だ。回復魔法の一つ、使えたところで不思議じゃない。

「いえ、スケルトンになつてからは、魔法が一切使えなかつたのですが……。あの白い部屋であらわれた輝く球体に触れてからは、少しだけですが、魔法が使えるようになりました」

「それって、呪いが少し解けたってことか？」

「私にも、わかりませんが。もし、そうなら嬉しいですよ」

スケルトンには、相変わらず表情なんてないが。

今はきつと、笑顔を浮かべてるはず。

少しづつだけど、感情の機微がわかってきた気がする。

「あの……助けて頂き、本当にありがとうございました」

そう言ったのは、金髪のイケメン。

悔しそうに、地面に倒れていた彼だ。

俺のいた世界であれば、モデルとかしているタイプ。

それもちょっと、チャラ目のやつ。

聞いてみれば、このイケメン、ローズのフィアンセ婚約者らしい。

「べつに、フィアンセ婚約者っていつでも親同士が決めたことよっ

などと、ローズは言っていたが。

それとなくローズを気遣うイケメンの感じが、ラブだよラブ。

許婚なんて、空想上の生き物か何か、かと思っていたけど。その幻獣を目のあたりにして、なんかこう色々と眩しい。

俺も、許婚がほしかった。

思春期を経てからの、お互いを意識し始める感じが最高だよな。

「助けて頂いて、ありがとうございます。……この恩は決して忘れません」

ペコリと頭を下げたのは、クレアと呼ばれていた少女。短く揃えた、青い髪が印象的だ。

暴行未遂とはいえ、まだ時間がそう経っていないせいか。表情は暗いが、それでも美しい顔立ちが見てとれた。

気になっていた顔の痣も、クリスティーナの回復魔法によって消えている。

傷が残らなくて、一安心といったところか。

他のメンバーに比べて、特に華奢な感じがする。

雰囲気的に見て、彼女は後衛か魔法職だろうな。

そして、パーティーメンバー最後の一人は、栗色の髪を後ろでまとめた剣士風の少女。

これまた、お礼の言葉を頂戴した。

しかし、前衛三人に後衛の魔法職一人という、何ともバランスの悪いパーティーだ。

こちらの世界には、パーティーロールという概念がないのだろうか。それとも単に俺が、ゲーム脳になっているのかもしれないけど。

「あんたが、こんなに強いなんて意外だったわ」

降下したと思われた、好感度が回復した予感。

「ローズ、助けて頂いたのにそんな言い方してはダメだよ」

さりげなく入れるイケメンのフォローが、経験値の高さを伺える。チャイとか言って、ごめんなさい。

ダメだ、これ以上このパーティーを見ていると、何か削れていく気がする。

キリの良いここいらで、早々に離脱せねば。

手遅れになってしまう前に。

「それじゃあ、俺達はここで」

この場を後にするべく、立ち去ろうとした時だ。

ローズにガツチリと、袖を掴まれてしまった。

その目つきは、獲物を狙うような目。

「な、なんででしょう……」

何かマズイことでも、してしまったのだろうか。

なにせ、異世界のマナーなどこれっぽちも知らない自分である。

些細なすれ違いが、大きなトラブルに、なんてこともあり得るかならな。

「まだ、お礼が出来ていないわっ」

ああ、お礼ね。

お礼か……。

完全に忘れてしまっていたわ。





## 迷宮都市

お礼をしたいと言う、ローズの提案でダンジョンから出ることに  
なった。

というのも、冒険者ギルドは銀行業務も行なっているらしく、そ  
こに寄るついでにアウトロー無法者も引き渡してしまおうという考えのようだ。

アウトロー無法者もとい、モブABCを持っていた登山用ロープで縛り。

来た道とは、違うルートで引き返す。

こちら側のルートは、行きのルートとは違い、街の近くに出口が  
あるらしい。

道中、ローズのフィアンセ婚約者こと、金髪イケメンが教えてくれた。

ちなみに、名前はルシアだそうだ。

名前までイケメンしてて、やまだとしては悔しいばかりだ。

見本に書かれたヤマダ太郎の文字を見た、

やまださんの気持ちを少しは考えてほしい。

えっほら、えっほら、ダンジョンを突き進む。

アウトロー無法者を捕縛している都合上、走ることができない。

そのせいか、行きよりも倍以上の時間がかかった。

しかし、休みなく進んだ我々一行の前に。

ようやく、出口がその姿をあらわした。

これを抜ければ、ついに異世界。

胸が、高鳴る。

その気分がそうさせるのか、進む足どりが軽い。

徐々に日の光が差し込んでくる。

「ここが、迷宮都市ローデンよっ」

ローズが一足先に飛び出して、迎えるかのようなしぐさで手を広げる。

目に飛び込んできたのは、屋台だった。

ダンジョンの出口に立ち並ぶ、屋台の数々。

それも、見たことない料理が並べられている。

その周りに賑わう、人々。

服装を見てみれば、鎧を纏った者から商人風の者まで。

異世界文化の風を、感じるものばかりだ。

そして、その中から。ついに、見つけてしまったケモミミ。

悲しいかな、それが男のケモミミだったこと。  
しかし、男のケモミミがいれば、即ち逆もしかり。

この事実だけで、まだ戦っていける。

希望を胸に生きていく。

「あそこに見える街の中に、ギルドがあるわ。いきましょう」

ローズが指差す先、そこには建物が立ち並んでいた。

その建物は、石造りだったり、木造だったりと。

どれも統一性がなく、無計画に建てられた町並みが心をくすぐる。

「クリステイーナは、ここに来たことがあるのか？」

「いえ、名前は聞いていましたが。来るのは初めてです」

ちなみに問題にならないように例の如く、クリステイーナはリュックにインだ。

「どんな街か、楽しみだな」

「はいっ」

屋台が立ち並んでいた通りを抜けて、街中に入る。

昼時なのだろうか、店舗を構えた料理屋の呼び込みが騒がしい。

流れてくる匂いが、腹の虫を刺激する。

どこかでスライムさんの魔石が売れたら、ご飯にしよう。

「なにやら、騒がしいわね」

ローズがつぶやく。

いつもと違う雰囲気なのだろうか。

始めてきた街だから、こんなものかと思っていたのだけど。

「確かに、ギルドのほうから喧騒が聞こえてくるようだ」

それに、乗っかるルシア。

すると、通行人の話し声が。

「おいおい、聞いたか。冒険者ギルドが大変らしいぞ」「ああ、聞いた聞いた。反乱が起きたらしいな」「どうやら、首謀者が『黒鷹』のリーダーらしいぜ」「マジかよ、前からやばいやつとは思ってたけど」「マスターが留守の時に狙ったって話だ」「あーあ、今日の買取は無理か」

など、など。

なかなか、パンクな話が聞こえてきた。

「とにかく行ってみましょう」

ローズの呼びかけに、応じて話題の冒険者ギルドへ向かう。

着いてみれば、人だかりの山。

皆、野次馬に来ているらしい。

木造建築の二階建て、ギルドと呼ぶに相応しい大きさ。

その二階の窓から、スキンヘッドのマッチョが体をのりだして叫ぶ

「冒険者ギルドは、俺達『黒鷹』が占拠したっ！」

噂通り、冒険者ギルドで反乱が起きた様子。

おう、やっぱりこの街パンクだね。

## 冒険者ギルドの反乱

その二階の窓から、体をのりだして叫ぶハゲマツチヨ。

冒険者ギルドで反乱が起きたせいで、野次馬達もヒートアップしている。

ハゲマツチヨに同調する者、ギルドの業務が停止したことに、不満を漏らす者と反応は様々だ。

ローズからのお礼が貰えなくなったのは、仕方ないがこれ以上関わっていても、時間ばかりとられてしまう予感がヒシヒシと感じる。

「ローズさん、ローズさん」

やまださんから、ローズさんへお問いかけ。

「な、なにかしら？　もしかして、あなたがアレを止める気じゃ…  
…」

「いえ、ここは一つ。現地解散つてことで」

「げ、げんちかいさん……？」

「それでは、お元気で！」

早々に、現場から戦線離脱。

モブABCは、ローズ達に任せておけば。

まあ、なんとかなるだろ。

異世界新参者の俺としては、冒険者ギルドの反乱よりも、腹の虫を治めるほうがよっぽど大事だ。

先ほどから、お腹の虫が鳴りっぱなしである。

よくよく考えれば、朝から何も食べていない。

早々にスライムさんの魔石を換金して、異世界料理を堪能しなくては。

アッチへいったり、コッチへいったり、街の大通りを歩く。その様子はまるで、お上さん。

しかし、どこで魔石を換金すればいいのだろう。魔石買い取ります、なんて看板どこにもない。



これは、困ったぞ。

「クリスティーナ、魔石ってどこで換金できるのかな？」

ここは一つ、リュックのクリスティーナさんに聞いてみよう。

「わたしも、実際には買い取ってもらったことがないので……お役に立てずすみません」

「謝らなくて大丈夫だよ、一緒に探そう」

「はいっ」

やみくもに探してみても、見つかる気配がなく。

ここはやはり、第一村人に聞いてみるのが一番だろ。

どねに……しようかな……っと。

よし、あの裕福そうな商人の男に決めた。

「あの、すみません」

かくかくシカジカと、聞いてみる。

「ああ、魔石か。本来なら冒険者ギルドで買い取ってもらうのが一番なんだが。今は騒ぎがおきているからなあ」

「そうなんです、それで困っています」

「なら、アリス魔法商店がいんじゃないかな。あそこは良心的と聞いているよ」

なるほど、それは良い事を聞いた。

お礼を言い、教えてもらった『アリス魔法商店』へと向かう。

確か、大通りの一本裏には入つてと、

あつた、あつた。アレかな。

確かに、掲げられた看板には『アリス魔法商店』の文字がしっかりと書いてある。

冒険者ギルドと比べると、かなり小さい木造建築。

しかし、小奇麗に整えられたその造りは、なかなか趣が良いではないか。

さっそく、木製のドアを開けると、カランカランと小気味よいド

アベルの音が鳴った。

中に入ってみると、怪しげな壺や、宝石をあしらった杖、はたまた藁のような素材で作られた人形だったり、色彩の商品が所狭しと陳列されていた。

「いらっしやいませ」

出迎えてくれたのは、小学生くらいの女の子。

お店のお手伝いでもしているのかな。

「お嬢ちゃん、魔石の買取をしてもいたいのだけど。店主さんはいないかな？」

後で、アメちゃんでもあげよう。  
アイテムパックに入っていたはず。

「コホンッ、私が店主です。こっに見えても、102歳なんです」

……マジかよ。

今年一番のビックリだわ。

ちなみに二番目は、五十過ぎの叔父さんが突然、女装をはじめたこ

と。

「これからは、よしえって呼んでね」と、言った叔父さんの顔が軽くホラーだったわ。

さて、場所は店舗の奥にあるカウンターに移して。

スライムさんの魔石を査定してもらうことに。

アイテムパックから無造作に取り出すと、店主さんが驚き顔に。

「それは……空間魔法ですか？」

「ええ、そんなところです」

「その年で、空間魔法が使えるなんてすごいですね……」

「そうなんですか？」

「……滅多にいないと思いますよ」

小学生が店主をやっているほうが、俺的には驚きだったけどな。

いや、102歳だっけか。

色々と反則だろ。

店主さんがおもむろに、ループのようなもので魔石を覗く。

すると、どうだプルプルと震えだしたではないか。

今度は、何よ。

「い、これは……もしかして、スライムの魔石ですか？」

もしかして、高額査定きちゃったのではないだろうか。

## 冒険者ギルドの反乱2

「こ、これは……もしかして、スライムの魔石ですか？」

魔石を持つ、店主さんの華奢な手がワナワナと震える。

よくみれば、店主さん。

耳が長いな。これはもしかして、エルフだったりするのだろうか。

しかし、イキナリ種族を聞いたりするのってどうなんだろうな。

「よく、おわかりで

などと、得意げに言ってみたが。

魔石の違いなど、これっぽちもわからない。

果たして、お値段は如何に。

「どこで、これを？」

「ダンジョンで手に入れました。実は、それだけではなく、まだあつて……」

アイテムパックから、残りの魔石を取り出す。

ガラガラと、カウンターに置いてみれば、魔石の山。それもそのはず、登山用リュック一杯集めたからな。

「お、おおおおおおおおおおお」

どうしよう、店主さんが大変だ。

もっと、小出しにするべきだったか。

「だ、大丈夫ですか？」

「はあっ、はあっ……取り乱して、すみません。これほどの量は今まで見た事がなくて……」

「それは、驚かせてしまってすみません」

「いえ、勝手に取り乱したのは私ですので……。それで、買取金額なのですが。魔石一個に対して大金貨三枚になります」

スライムさんの魔石は、大金貨三枚になるらしい。

うん、さっぱりだ。

ただ、金貨と聞いて。それなりの金額だということとはわかる。

「実は自分、異国から来たばかりで……よければ、この国の通貨について教えてもらえませんか？」

「そうだったんですね」

店主さんに教えてもらうこと、しばらく。

なるほど、わかったぞ。

この国に、流通している通貨の種類は四つ。

銅貨、銀貨、金貨。大金貨とあるらしい。

ざっくりいえば、銅貨で1000円、銀貨10000円、金貨で100000円の価値だ。

で、大金貨はというと、金貨の十倍。

つまり、十萬円の価値があるみたいだ。

それが、三枚。

スライムさんの魔石一個で三十万。



マジかよ……。

スライムさん、やばい。マジやばい。

「教えて頂き、ありがとうございます」

「しかし、ウチではこれだけの数は……とてもではありませんが、買いきれません」

見てみれば、二百個はありそうだ。

金額にして、六千万。

安い宿であれば、銀貨一枚で泊まれることを考えれば。この小さな商店にはさすがに、無茶な金額である。

「そうですか。では、どこに行けば買い取ってもらえるのでしょうか？」

「冒険者ギルドであれば、可能かと思います」

やはり、冒険者ギルドに買い取ってもらっしかないようだ。

「あの、もしよろしければ。少しでも売ってもらえないでしょうか？」

そう言う店主さんに、魔石を二個ほど売って。

大金貨六枚をゲットした。

無一文からの、六十万を手にして懐が暖かい。

ついでに、美味しいお店についても教えてもらった。

そのお礼として、アイテムパックからアメちゃんをいくつか出してお渡しする。

「じつ、これは？」

めずらしそうに、アメちゃんを持つ店主さん。

「それは砂糖菓子です、口の中に入れてコロコロと舐めると美味しいですよ」

「そんな貴重なものいいのですか？」

嬉しそうにほっぺを、プニプニとさせた店主さんかわいい。  
異世界でも、女性は甘いものが好きらしい。

「ええ、色々と教えてもらったお礼です」

アメちゃんで、ここまで喜んでもらえるとは思わなかった。  
また今度、なにか持っていこう。

店主さんに見送られて、ご飯屋さんへと向かう。  
どうやら、そこは冒険者ギルドの近くにあるらしい。

そろそろ、例の反乱おさまっていないかな。  
まったく持って、迷惑な話である。

許すまじ、ハゲマツチヨ。  
そのツルツル頭に、落書きしてやるうかしら。

着いてみると、ギルド会館に詰め掛けた野次馬の数が増えている。  
先ほどの、二倍以上になっているのじゃないだろうか。

それどころか、騒ぎが大きくなっている気がする。

その中心を見れば。

ああ、どうしたことが。腰に手を当てて、立っているローズの姿  
が。

それも、ギルド会館に向かって何か叫んでいる。

「黒鷹のリーダー出て来なさい。この私が、相手するわっ！」

## 冒険者ギルドの反乱③

「黒鷹のリーダー出て来なさい。この私が、相手するわっ！」

ギルド会館に向かって叫ぶローズ。

それを受けてか、野次馬たちもヒートアップだ。

「早くでてこいっ！」「女一人にビビッてるのか」「ギルドが使えなくて迷惑なんだよ」「そうだ、そうだ」「お前達のせいで依頼が受けねーだろうが！」「ハゲマツチヨ」

などなど。

すっかりと、同調する声はなりを潜め、野次馬からは罵倒する声ばかりに。

ちなみに、最後の野次は俺のだ。

「あんた達も冒険者なら、そんな所に立てこもっていないで。冒険しなさいっ！」

煽っていく、スタイルのローズさん。

そういえば、ステータス見たことなかったな。

どれ、どれ。

名前：シャーロット・T・グレース

種族：人間

性別：女

ジョブ：冒険者

レベル：7

HP：49

MP：35

STR：11

VIT：17

INT：19

DEX：12

AGI：15

誰だよ、お前。

どうやら、ローズさんは偽名だったようだ。

しかし、このステータスはどうなんだろう。

今まさに、叫んでいるように相手が出てきちゃったらヤバイのではないか。

ステータスを確認している途中も、ドンドンと煽っていくローズさん。

それを受けてか、

「うるせえ！」

と、怒鳴りながら『黒鷹』のメンバーと思われる数人が飛び出してきた。

一応、『黒鷹』のステータスを確認してみる。

名前：バルボン  
種族：人間  
性別：男  
ジョブ：冒険者  
レベル：10  
HP：88  
MP：12  
STR：23  
VIT：19  
INT：7  
DEX：15  
AGI：14

他にも、似たような数値だ。

それが、数えてみれば三人ほど。

これは、アレだ。ローズさん負けてしまっ。

「ようやく出てきたわね。いいわ、その性根叩き直してあげるわっ」

などと、剣を抜いてローズさんは、やる気マンマン。

一方、『黒鷹』のメンバーは青筋を浮かべ、頭に血がのぼっている様子。

まさに、一触即発。

……どうしよう。

助けに入れば、絶対に面倒なことになるの目に見える。

しかし、助けなければステータス的に見て、負けちゃうだろうな。

負けるだけならいいが、下手したら大怪我。

もしかしたら、死んでしまうかもしれない。

「ご、ご主人様。ローズさん大丈夫でしょうか？」

大丈夫じゃないよ、大変だよ。

「やっば、助けないと目覚めがわるいな」



「おいっ、このうるせえ小娘やっちまっぞー！」

『黒鷹』の一人が叫ぶ。

見た感じ、冒険者というよりも山賊と言ったほうがしっくりくる。

「来なさいっ、お仕置きしてあげるわっ！」

『黒鷹』の男達は剣を抜き、ローズへ向かう。

俺も野次馬を抜けて、ローズの元へ。

アイテムパックから、『始まりの剣』と言う名のバットを取り出して、『黒鷹』の一人に打ち付ける。

打ちつけられた男は、残りの二人を巻き込んで吹き飛んだ。

どうやら間一髪、間に合ったようだ。

「あ、あなたは……」

「ローズさん、俺も手を貸します」

「っ……、ありがとう」

もういいや、ちやっちやっとな『黒鷹』をやってしまおう。

## 冒険者ギルドの反乱 4

野次馬から一転、騒ぎの中心地へ。

やまだは、ただ、ご飯が食べたかっただけなのに。  
それもこれも、全てはローズ……いや、ハゲマツチヨがわるい。

そうだとも、あのハゲマツチヨが騒動を起こしていなければ。  
今頃、異世界料理に舌鼓を打っていたはずだ。

そう考えれば、考えるほどに。

ぎゅるるうっと、腹の虫が鳴りだす。

「あなたなら、きっと手を貸してくれると信じていたわっ」

キラキラとした瞳で、見ているローズ。

本当は、野次馬の側にいたかった。

しかし、それを言ったところで何も変わるはずもなく。

結局は、この騒動を治めなくては、ご飯にはありつけないようだ。

「キサマはっ……」

立ち上がるうとする、黒鷹メンバーの頭にバットをコツツと。

極力、力を抜いた一撃だ。

ステータス差を考えるに、死んでしまいかねないからな。

次に起き上がるうとした男にも、コツツと。

もう一人には、起きあがる前にコツツと。

それは、まるでモグラ叩き。

これで、当分は起きないだろう。

ちやっちやっつと、ハゲマツチヨの所へ行ってしまうおつ。

「ローズさん、首謀者のところへ向かいましょう」

「そ、そうねっ」

ギルド会館の扉から中へ入る。

すると、そこには武装した黒鷹と思われる男達が十人ほど。

カウンターや、テーブルに座りこちらを睨みつける。

やはり、どう見ても山賊にしか見えない。

これが、異世界冒険者のスタンダードなのだろうか。

だとしたら、ちょっとヤダ。

しかし、ローズのパーティーメンバーを見るに違うだろうな。  
コイツらがきつと、アバンギャルドなのだろう。

「野郎ども、やっちまえっ！」

とりあえず、目についたヤツからポコッと打つ。

倒れたメンバーを見て、他の男達の顔が青くなった。

出鼻を挫かれて、次に続く者がいない。

「くっ……」

「がああああっ！」

声をあげて、威嚇してみる。

あからさまに、ビクリと体を震わせて、後ずさる黒鷹たち。

「がっああああっ！」

もう一度。

ビクリと、震わす黒鷹たち。

ちょっと、クセになりそう。

「ローズさん、二階へ行きましょう」

「い、今は、何だったのかしらっ？」

「気にしないでください」

「そ、そうっ？」

二階にあがると、一階にはあったカウンターやテーブルなどなく。

とても、こざっぱりとした空間。

元々、あったであろう応接セットが、片隅に積み上げられていた。

その中央に、目当てのハゲマツチヨ。

周りには、黒鷹の男達が五人。

「くっ、あがってきやがったか……」

俺達の姿を見つげ、つぶやくハゲマツチヨ。

すると、先ほどあがってきた階段から複数の足音が聞こえてくる。

「お、お頭っ、侵入者ですっ！」

一階で、ビビッていた黒鷹の男達だ。

「目の前にいるんだ、わかってるっ！ くそっ……」

と、言つと腰の剣を抜くハゲマツチヨ。

「野郎ども、困えっ！ やっちまうぞぉ」

「おおっ」と、雄叫びをあげる黒鷹達。

「だ、大丈夫かしら？」

男達に囲まれ、不安そうな声をあげるローズ。

「ご主人様、ここはわたしに任せてください」

リュックの中から、クリスティーナさんが。

「大丈夫か？」

「はいっ」

と、言つとリュックの中から、モゾモゾと出てくるクリスティーナ。

それを見て、黒鷹達がざわざわと騒ぎ始める。

ムリもない。背負っていたリュックから、スケルトンが出てきたら俺でも驚くと思う。

「今度はなんだ、背囊にスケルトンを入れてるだどっ……イカレてやがる」



と、ハゲマツチヨ。

そんな言葉を気にすることもなく、クリスティーナは両手を広げ、ブツブツと、詠唱をはじめめる。

それに応じて、輝きだすクリスティーナ。

なんか、ことう神々しい感じ。

「ス、スケルトンが神聖魔法を使うなんて、そんな馬鹿げたことがあつてたまるかあああああつ」

ハゲマツチヨの叫び声が、響き渡った。

## 冒険者ギルドの反乱5

詠唱を終えて、さらに輝きだすクリスティーナ。

ついに、神聖魔法が発動してしまつ予感。

その神聖魔法とやらが、一体どんなものなのか、まったくわからないが。

クリスティーナから発せられる輝きが、伊達や酔狂ではないことを伺わせる。

ネトゲであればきつと、リキャストタイムが長いタイプのやつ。

しかし、わざわざ神聖魔法を発動させなくても、バットで殴ってしまえば。

この人数くらい、簡単に倒せるのでは、と思うのだが。

まさかここで、口に出すなんて出来るはずもない。

それほどまでに、圧倒的なエフェクトで光り輝いている。

「神聖魔法・ホーリーサークル」

クリスティーナの言葉と共に、眩い閃光が走った。

そして、聞こえてくる黒鷹一味の呻き声。

眩しくて、状況が掴めないが。  
きつと、範囲攻撃の類ではないだろうか。

程なくして、閃光が消えると、徐々に視界が戻ってきた。

周りを確認すれば、取り囲んでいた黒鷹一味のほとんどが倒れている。  
いる。

唯一、倒れていないのはハゲマツチヨのみだったが。  
それも片足をつき、肩で息をする様子。

ダメージもそれ相応に受けていそうだ。

やるなあ、ウチのスケルトン。

強いじゃないか。

「はあっ、はあっ……なんだよお、これは……意味がわかんねえ」

まったくもって、その通りだ。

しかし、食の恨みとはとても重いのだよ。

ふと、クリスティーナを見れば。

なにやら、様子がおかしい。

うつすらと、その姿が消えかかっている。

「お花……お花畑が綺麗……」

おう、やばいなこれは。

三途の川を渡っちゃうよ。

スケルトンが神聖魔法なんか使っちゃったせいで、成仏しかかっているのではないだろうか。

肩鎖関節あたりを掴んで揺さぶる。

「も、戻ってこいっ！ クリスティーナ！」

「そこにいるのは、亡くなったおじいちゃん……？」

「しっかりしろっ！」

「……はっ、ご主人様」

意識をとり戻したクリスティーナは、キョロキョロとあたりを見まわす。

どうやら、無事に山場は乗り越えたようだ。

「だ、大丈夫かしら？」

ローズさんから、クリスティーナの身を案ずるお声かけ。

「もう、大丈夫です」

「そ、そう？ ならいいのだけれど……」

さて、バットを持ち直してハゲマツチョ方へ。

すると、どうだ。

当初の勢いは、すっかりと消えうせ。狼狽したようにみえる。

おまけに、

「増援はどつした……なぜ来ない」

などと、つぶやいている。

もしかして、後から増援が来る予定だったのか。それはそれで、面倒くさいな。

「まあ……いい。お前達を殺せば、いいだけの話だ。少しばかり、計画が早くなるが仕方ねえ」

ハゲマツチヨが、俺を睨みつける。

ロックオンされてしまったようだ。

「うおおおおおおおっ！」

剣を振り上げて、襲い来るハゲマツチヨに向けて、

バットを振りかぶる。

気分はまるで、ホームランを狙うバッター。

少年野球で培ったバッティングを見せてやる。

振ったバットが、剣を捉えた。

バツゴツという音が鳴ったかと思えば、剣が粉々になる。

しかし、バットは止まらない。

そのまま、ハゲマツチヨの顔面を打ち抜く。

「ぐうえいっ」

ハゲマツチヨはクルクルと回転しながら、壁に激突し、そのまま外へ突き抜ける。

落下音が聞こえたかと思うと、野外から歓声があがった。

ハゲマツチヨ討伐戦終了のお知らせだ。

「まさか、あれだけの人数を、倒してしまうなんて思わなかったわ」

「いや、クリスティーナのおかげだよ」

人数だけ考えれば、クリスティーナが一番倒している。

ただし、自身も成仏しかけたが。

「お役に立てたようで、嬉しいですっ」

と、言いつつ自らリュックに入っていくクリスティーナさん。

ソコに入るのが、クセになってしまったのだろうか。

ぎゅるるつと、腹が鳴る。

「わっ、わたしじゃありませんからねっ」

と、クリステイナーさん。

大丈夫、鳴らないのはわかっているよ。

「そ、そうね……」

ローズさんが、リアクションに困っている。  
ごめんなさい、やまだのお腹が鳴ったのです。

体を動かしたせいか、本格的にお腹がすいてきたぞ。  
こんなところ、さっさと抜けだしてご飯だ、ご飯。

「ローズさん、俺達はここで……」

と、この場を去ろうとしたときだ。

騒々しい音が。

これは、1階から駆け上がっている音だろう。



数人の男女の姿が見えた。

先頭に立つ、壮年の男が口を開く

「これは一体どうなっているんだ？」

「マ、マスター？」

ローズさんの言葉で、相手がギルドマスターと推測できる。  
これで、ますますと面倒くさい展開になりそうだ。

異世界料理は、涙を飲んではあきらめよう。

(クリスティーナ、逃げるぞ)

小声で、リュックのクリスティーナさんへ。

(逃げっ……はっ、はい)

ハゲマツチヨを、吹き飛ばしたときに開いた壁から飛び降りる。

「ま、待ちなさいよっ」

叫ぶローズさんの声なんて聞こえない。

全力前進。

向かう先は、ダンジョンへ。

## ダンジョン再び

冒険者ギルドを後にした俺達は、行きに通ったダンジョンへ戻ってきた。

太陽はすでに真上まで昇り、昼時の様相。

屋台には来た当初と比べても、倍以上の人が群がっていた。

ここまで流れてくる、屋台の匂いが堪らないな。

目についた屋台から、串焼きを購入して小腹を満すのもわるくない。

「そつえば、クリスティーナは食べることは出来るのか？」

「それなんです、スケルトンになってからは食欲がなくて」

「いつか人間に戻れたら、腹いっぱいになるまで食べような」

「はいっ、楽しみにしています」

なるほど、思ってたはいたけど。

やっぱり、スケルトンには食事が必要ないようだ。

なんとコスパの良いクリスティーナさん。

ここの屋台にするか。

何の肉かはわからないが、ブツ切りにした肉が三つほど豪快に突き刺さった串焼き。

焼いた際に溢れでた油が、なんとも美味そうだ。

「おっちゃん、コレいくら?」

愛想の良さそうな、屋台のおっちゃんに声をかける。

良く見ればケモミミをしてる、何の獣人なのだろう。

「おっ、銅貨二枚だ」

円に換算すれば、およそ二百円。

このポリウムで、この価格は安いな。

これだけあれば、ビール二本は飲めてしまう。

「じゃあ、一本くださいっ」

と、言い大金貨一枚を渡す。

「おいおい、あんちゃん。そんな大きいの渡されても困るぜ」

マジか。どうしよう、「こっちの通貨これしないわ。

「だいぶ細くなるが、いいかい？」

なんとかなった様子。

助かった。

「すみません、お願いします」

ジャラジャラと、渡されるお釣り。

それを受け取って、お目当ての串焼きをもらおう。  
焼きたてなのか、串焼きから蒸気がたっている。

はやく、かぶりつきたいぜ。

「毎度ありっ！」

さっそく、いただきます。

大口を開けて、串焼きにかぶりつく。

口の中に溢れる肉汁、そして、濃厚な肉の旨味が広がる。

んー……うまいっ！

胡椒とは、また違ったスパイシーな味付けが、肉の美味さを引き立てている気がする。

食べるのが止まらない。

あつと、いう間に串を平らげてしまった。

美味かったな、この肉は何の肉を使っていたのだろう。

「おっちゃん、美味しいねコレ。何の肉なの？」

「あんちゃん、田舎からでてきたのか？ これは、一角豚の肉だ。この辺で肉といえば、こいつのことよお」

そうなのか、あの豚こんなにも美味しいのか。今度見かけたら、集めておくか。

アイテムパックがあれば、いくらでも入れられるからな。

もう一軒だけ屋台に寄って、ダンジョンへの入り口に向かう。

「クリステイーナ、俺だけ食べちゃってわるいな」

「いえ、そんなことはありません。ご主人様が、食べている姿を見ているだけで満足ですっ」

なんて健気なことを言うスケルトンなのだろう。  
今は、心にグツときちゃったよ。

ダンジョンの入り口は、兵士が二人ほど立っていたが。  
それは、ダンジョンの入場を制限しているわけではなかった。

おかげで、すんなりと入ることが出来た。

これは予想だが。

あの兵士はきつと、魔物が外に出てこないように配置されているの  
だろう。

ダンジョンの中に入ってみると、行きとは違い。  
俺達以外にも、冒険者の姿がみえた。

その数は、二十人程度だろうか。女や、獣人の姿も多い。

さすが迷宮都市と、呼ばれるだけのことはある。

「お兄さんも冒険者かい？」

その声をかけてきたのは、四十代くらいの男。  
人の良さそうな顔に、小太りの体型。

とても肉体労働を生業にしている、冒険者のそれとはかけ離れて  
いるように思える。

どちらかと言えば、商人風だ。

「ええ、そうなんです。まだ冒険者としては駆け出しで……」

「奇遇だね、私もそうなんだ。実を言うと、本業は商いなんだ。冒  
険者のほうは趣味でやっているんだよ」

「趣味でダンジョンに？」

「と言っても、比較的 안전한低層だけだね」

「なるほど」

「妻には、危ないからやめろって言われているんだけど。やっぱり、



冒険は男の夢だからねえ」

と言うと、商人風の男は、少年のような笑顔を浮かべる。

「ああ、紹介がまだだったね。私は、ニコライ。よろしく」

「ヤマダです、どうも」

「もし、良かったら途中までどうか？　ここにいる人達も、次の層まで行くようだし」

まあ、悪い人でもなさそうだし。いいか。

それに、まだ知らないダンジョンについての情報も聞けそうだ。

「ええ、よろしく願います」

こうして、予期せぬ同行者を得た、俺達はダンジョンを進むことになった。

## ダンジョン再び2

次の階層へ向かう道中は、和やかな雰囲気だった。

それもそのはず、ニコライさんの話によれば、この階層は殆ど魔物が出てこないらしい。  
出たとしてもレベルの低い魔物で、新米冒険者でも倒せししまうとのこと。

ゾロゾロと冒険者達に紛れて、広い洞窟のような通路を進む。

「ヤマダ君、あの石碑が何だか知っているかい？」

ニコライさんが指差す先に、  
大理石のような、ツルツルとした石材で造られた石碑が見えた。

「なんででしょう、記念碑か何かですか？」

「あれはね、『レコード』と呼ばれるものだよ」

「レコードですか？」

「ダンジョンを踏破したらね、あの石碑に攻略した者の名前が刻まれるんだよ」

そう言われてみれば、最初のダンジョンを踏破したときに、登録どっこい言われた気がする。

「へえ、そうなんですな」

「レコードに名が刻まれた者は英雄と呼ばれ、冒険者の憧れだよ。自分もいつかは、と思うのだけど。何分、年齢が年齢だけにね」

「冒険に、年齢は関係ありませんよ。大事なのは、ここですよ？」

と言い、自分の胸を親指で指す。

少しばかり、恥ずかしいことを言ってしまっただろうか。きくと、ダンジョンのせいだろうか。そうに違いない。

「あはははっ、そうだね。その通りだよ」

ニコライさんが、嬉しそうに笑う。

「そういえば最近、幻のダンジョンと呼ばれていたものが、攻略されたのを知っているかい？」

「いえ、初耳です」

幻のダンジョンか、心躍るネーミングだな。

「えっと……正式名称は『始まりの洞窟<sup>ダンジョン</sup>』だったかな。その踏破者の名前が、ヤマダ君と同じ名前だったはずだ。ここらでは珍しい名前だからね、親戚だったりするのかな？」

……マジかよ。

あのダンジョン、レアだったのか。

確かに、言われてみると思い当たるフシが。  
名称にREがついていたし、それにスライムが沢山いたのも納得がいく。

もしかして、報酬で貰った『始まりの剣』も、レアアイテムだったりするのだろうか。

「ここら辺では、珍しい名前ですが。俺の国では、よくある名前ですよ」

用紙記入の、見本になるくらいだからな。  
曰く、山田太郎さんに、山田花子さん。

あれで、どれだけのヘイトが、全国の山田さんに集まったことか。

「そうなんだね。そろそろ、見えてきたアレが次の層への入り口だよ」

ゴツゴツとした地面に現われたのは、白っぽい石材で組まれた階段。

その幅は、大人が十人横に並んでも余裕がありそうなもの。

行きに通ってきた、地下祭壇に似た階層だ。

「ヤマダ君、ここからは魔物が出るから気をつけてね」

「はい、わかりました」

バットを握り直して、ゆっくりと階段を下りていく。

和やかな空気も消えうせ、少し張り詰めた空気が流れ始める。

良く見れば、まわりの冒険者達も、各々の武器を用意し始めていた。

「あと、知っていれば余計なお世話だけど。魔物の横殴りはマナー違反になるからね」

なるほど、これはネトゲでも経験したことがあるからわかる。ファーストアタックしたプレイヤーに、権利がつくアレだろう。

42時間、張りついて沸かしたレアモブを、横取りされた時は腹が立ったものだ。

「勉強になりました。ありがとうございます」

階段を降りきったとき、ざわざわと周囲の冒険者が騒がしくなる。

「ニコライさん、ちょっと様子がおかしいですね」

「そうだね、魔物でも出たのかな」

先頭を進む、集団に目を向けると。

なにやら、必死に叫んでいるようだ。

「トレインだっ、トレインがおきたぞっ！」

トレインってあれか、大量の敵を引き連れて逃げている状態のことだろ。

ネットでトレイン受けて、何度も全滅した経験あるわ。

これは、ちょっとマズイのでは、ないのだろうか。

### ダンジョン再び3

「トレインだっ、トレインがおきたぞっ！」

先頭を進む、冒険者達が叫ぶ。

それに応じて、周りにいた冒険者達も騒ぎだした。

「トレインって、大量の魔物を引き連れたアレだろ……」「ど、どうする？」「どうするも何もないだろ、逃げるんだよ」「そうだな、逃げるしかないな」

一人が逃げ始めると、それにつられて次々と、冒険者が逃げだし始める。

「ヤマダ君、我々も逃げよう」

およそ、100メートル先に見えたのは、

魔物群れ、数にして50体はいるだろうか。

その殆どが、ゴブリンのように思える。

多少は、違う魔物も混じっているようだが、ここからは詳しく確認



できない。

それを、一人の冒険者が引き連れているようだ。

……確かに、この数はヤバイな。

(ご、ご主人様?)

リュックの中から、心配そうに声をあげるクリスティーナ。

「ニコライさん、先に逃げてください」

「えっ……何を言っているんだい？」

「俺は、大丈夫ですから。急いでっ！」

「わ、わかった。ヤマダ君、無理してはいけないよ」

と、言つとニコライさんは、困惑しながらも走りだした。

それを確認すると、リュックを地面に下ろす。

「クリステイーナ、アレを止めるぞ」

「ご主人様、すごい数ですよ？」

「ああ、でも、何とかしなくちゃならない。あの数の魔物がダンジョンから出てしまったら大惨事だ」

そんな事があれば、おっちゃんの串焼きが食べれなくなってしま  
うからな。

「わかりました、ご主人様について行きますっ」

と言うと、クリステイーナはリュックから出てくる。

さて、呑気にステータス一覧から、スキルを選んでいる時間はな  
い。

と、なれば……。

スキルポイント…165

アクティブ：スキル  
HPストック：LvMax  
フルスイング：Lv1  
火属性魔法：Lv1

パッシブ：スキル  
アイテムパック：LvMax  
マップ：LvMax  
言語：LvMax

こうだっ！

スキルポイント：0

アクティブ：スキル  
HPストック：LvMax  
フルスイング：Lv1  
火属性魔法：Lv20

パッシブ：スキル  
アイテムパック：LvMax  
マップ：LvMax  
言語：LvMax

前に覚えた、火属性魔法に全振りしかないだろ。  
これで、トレインを止めてやる。

イメージするのは、炎の壁。

そして、設置する場所は、先頭を走る冒険者と魔物の間。

両手を前方に向ける、きつとこの動作は必要ない気がするが。

やっぱり魔法を使うなら、これしかないだろ。

意識を集中させて、

「ファイアーウォール」

イメージを言葉にすると同時に、

ごっそりと、何かを持っていかれる感覚。

きつとこれは、MPを消費した感覚なのだろう。

次の瞬間、イメージした場所に炎が吹きあがる。

それは、幅にして3メートルほど、高さは10メートルは越えているであろう、

まさに、ファイアーウォールに相応しい姿。

薄暗い洞窟内を、炎の明かりが照らしだす。

炎の壁で視界が遮られている為、確認することはできないが。

魔物が壁に衝突しているのだろうか、その断末魔が幾つも聞こえてくる。

それでも尚、壁を突き抜けてきたゴブリンは、消し炭になって、その場に崩れ落ちる。

骨すら残さないとは……。

何という威力だろうか、ファイアーウォール恐るべし。

取得経験値のログが、止め処なく流れ続ける。思っていたよりも、魔物の数が多かったのかもしれない。

すると、トレインの先頭を走っていた冒険者が、俺の横で倒れこむ。

その姿は、まるでフルマラソンを終えたランナーのようだ。

はあっ、はあっ、と肩で息をして、

そのまま放っておけば、意識を失ってしまいそう。

「クリスティーナ、回復魔法を頼めるか？」

「はいっ」

クリスティーナが、冒険者に近寄る。

それにしても、この冒険者ずいぶん小柄だな。

「ひっ、スケルトン！」

と叫んで、意識を失う冒険者。

良く見れば、この冒険者は、獣人の少女のようだ。

### ダンジョン再び3（後書き）

本作を読んでいただき、ありがとうございます！  
ブックマ、評価、感想、大変嬉しく思います。

引き続き、

『現実世界にダンジョン出現！？』28歳フリーターは攻略を  
指す』を、

よろしくお願い致します。

## 送還

クリスティーナの姿を見て、気を失った冒険者は獣人の少女だった。

それにもめげず、回復魔法を施すクリスティーナさん。

マジ、聖女。

そして、倒れた獣人の少女。

見たところ、十代半といった感じ。

青色の髪が顔を隠して、よくわからないが、美形を思わせる雰囲気だ。

身に着けている装備は、冒険者のそれだけ。

ローズ達が身に着けていた物に比べると、お世辞にも上等な物だとは思えない。

どういった経緯で、この少女がトレインを引き起こしたかはわからないが。

まあ、起きてから聞いてみればわかるだろう。

しかし、このファイアーウォールは、いつ消えるんだろうな。

かれこれ、数分はゴウゴウと燃え続けている。



あげた手も、そろそろダルくなってきたので、地面に座り消えるのを待っている状態だ。

「んっ……」

「ご主人様、意識が戻ったようです」

さすが、聖女様印の回復魔法である、その効果は抜群のようだ。

「ここは……はっ、トレインは、トレインはどうなったニヤ」

あたりを忙しく、キョロキョロと見わたす獣人の少女。

語尾からして、彼女はきつと猫系の獣人なのだろう。

もし、これで犬の獣人だったりしたら、やるせない気持ちで一杯になってしまふ。

「もう大丈夫ですよ、トレインは、ご主人様の魔法で防ぎましたから、案心してください」

と、優しく微笑んで語りかけるクリスティーナ。

骸骨に表情なんてないんだけど、きつと微笑んでいるはず。

「ひっ、ひっ……スケルトン!？」

クリステイーナを見た、少女の顔が真っ青に染まる。

「だ、大丈夫だ。クリステイーナ……いや、このスケルトンは良いスケルトンだからっ」

クリステイーナ、ごめん。

出会って当初は、「良いスケルトン」を、バカにしてしまったけれど。

俺もついに、使ってしまったよ。

良いスケルトンだからって。

「ほ、本当かニヤ？ 襲ったりしないかニヤ？」

「ええ、襲ったりしませんよ」

優しく答える、クリステイーナ。

「これは、油断させる罠かニヤ？ 後で、奴隷商に売り渡す気じゃないかニヤ？」

「いいえ、罠ではありませんし。それに売ったりもしないから、大丈夫ですよ」

「……わかったニヤ」

少しの不安を残しつつも、納得した様子の少女。

「良いスケルトン」で、納得してしまったのだろうか。

自分で言うておいてアレなんだけど。

初対面で信じてしまうのは、それはそれで、どうなのよと思わなくもない。

「助けてくれて、ありがとうニヤ。わたしは、エルザニヤ」

「俺はヤマダで、こっちはクリスティーナだ」

「よろしくね、エルザさん」

「しかし、アレはなんニヤ？」

エルザが、ファイアーウォールを指さす。

「あんな魔法、初めて見たニヤ。ずっと、燃えてるけど大丈夫かニヤ？」

どうなんだろうね、いつ消えるのか俺も知りたい。というか、そろそろ消えてほしい。

そして、ファイアーウォールを見つめること数分。

ようやく、その炎は勢いを弱め、徐々に消え始めた。

あれだけいた魔物は見る影もなく、残っているものがあるとするれば消し炭だけだ。

「それにしても、何でトレインなんか起こしたんだ？」

俺の質問に、エルザは今までピンと、立たせていた耳を前に倒す。

「それは聞くも涙、語るも涙の話ニヤ……」

エルザの話を、簡単にまとめるところだ。

仲間とダンジョンを探索している途中、誤ってゴブリンの巣に入ってしまったエリザ一行は、その場から逃げだした方がいいが、大量のゴブリンに追われることになった。

そこからは良くある話。

仲間から見捨てられたエルザは、追ってくる大量のゴブリンから一人逃げることに。

結果、あのトレイン騒ぎとなったわけだ。

聞けば、ゴブリンの巣に入った原因はエルザにあったらしい。

なんとなく情景が思い浮かぶのは、なんでだろうな。

「でも、本当に助かったニヤ。わたしが死なずに済んだのも、ヤマダ達のおかげニヤ」

「旅は道ずれ世は情けって言うし、気にするな」

「よくわからニヤいが、猫人族は、受けた必ず恩は返すニヤ。迷宮都市に泊まるなら、ウチの宿に泊まるというニヤ」

「宿？」

「そうニヤ、『猫のマタビ亭』は迷宮都市でも一番の宿屋ニヤッ  
！ 自慢の料理、猫マンマを味わってほしいニヤ」

「そうだな、泊まらせてもらっか……」

と、言いかけたときだった。

ふいに、ログが流れだす

『残り時間がなくなりました。これより、送還を開始します』

『3……………2……………1……………』

ピッ。

意識は暗転し、気がつけば元の世界、あの公園の隅に戻っていた。

## 送還 2

『残り時間がなくなりました。これより、送還を開始します。』

『3……2……1……』

ピッ。

ログが流れ、アナウンスされた通りに元の世界、あの公園の隅に戻っていた。

目の前にあるダンジョンの入り口は、未だ消えておらず、送還された理由に到ってはさっぱりわからない。

視覚にマスクされたステータス表示も、当初のままのように思える。

……いや、変わったことが、一つだけあった。

### 【境界の回廊】

難易度：

推奨レベル： レベル15}

クリア報酬： 550ポイント

残り時間： 112:55:11

残り受付時間が、残り時間に変っていること。

「う、ご主人様。これは、一体……？」

振り返れば、クリスティーナの姿見えた。

どうやら、一緒に戻されたようだ。

正直、わけがわからない。

だからといって、考えるのをやめて放置するのは、いささか抵抗がある。

「……俺にも、どうして戻ってきたのか見当がつかない」

本音、まるっと、そのまま伝える。

俺が持つ、常識で考えてはダメな気がする。

ここはもっと、ゲーム的な思考で考えてみればどうだ。



ステータスにマップ、レベルなんてものは、まるでゲームそのものじゃないか。

だとすれば、そう考えるほうが正解な気がする。

そして、自分が行なったことを順に思い出してみる。

すると、一つの考えが浮かびあがった。

「クリスティーナ、ちょっと確認したいことがある」

リュックに入ったクリスティーナを背負い、向かった先は【始まりの洞窟RE】があった場所。

俺が考えていた通り、その洞窟は完全に消えていた。

入り口があった場所は、なんの変哲もないビルの壁。

さわってみても、見たまんまコンクリートの冷たい感触が伝わってくる。

なるほど……これは、わかってしまったかもしれない。

洞窟ダンジョンに表示されている残り時間とは、そのまま洞窟ダンジョンがこちらの世界に存在しつづけていられる時間を表している。

その時間がゼロになると、洞窟ダンジョンその物がこの世界から消えてしまい、クリアフラグを立てていた俺達もまた、異世界から強制的に元の世界へと戻されてしまった。

つまり、洞窟ダンジョンをクリアすることで、残り時間を異世界の滞在時間として使えるのではないのだろうか。そうだとすれば、二つ目の残り時間が余っていたことにも納得がいく。

そして、残り受付時間は文字通りに受けとれば、洞窟攻略開始までの猶予だと思う。クリスティーナが一緒に戻されたことも、システム的にパーティーを組んだ状態になっているのかもしれない。

何がトリガーで、パーティーメンバーになるかはわからないが。まあ、その辺はふわっとしてても良い気がする。

直接的な害は、なさそうだな。

真相はわからないけど、物証が足りない今の状況で考え続けたところ。

俺の頭では、これ以上の仮説が思いつくとも思えない。

とりあえずは、アレだ。帰るか。

レベルアップでその都度、体力は全快になってはいるが。

丸一日以上、動きっぱなしある。

精神的に、休息がほしいところだ。

帰る途中、俺が考えついた仮説をクリスティーナに説明する。

もちろん、<sup>ダンジョン</sup>洞窟のステータスについてもだ。  
共に行動する以上、共有しておきたい情報である。

「さすがはご主人様。<sup>ダンジョン</sup>洞窟の情報まで読み取れるのですねっ」

と、感心をしていたのだから。

きつと、俺の説明を理解してくれたことだろう。

などと、説明も終えた頃。

我が家が見えてきた、築35年の日本家屋。

もちろんこれは、俺の持ち物ではない。

厳密に言えば、祖母の所有物である。

いい歳なつても、未だフリーターをしている俺に、管理を任せられているのだ。

簡単にいえば、いい加減に実家から自立して世間の風を知れとのこと。

これは年末の親族会議で決まったのだが、俺に拒否権なんてなかった。

まあ、家賃なしで住めるのだから、文句はないのだけど。

ただ、その中でも一番心配してくれていた叔父さ……もとい、よしえさんが親戚会議の場まで、女装で来たことが一番の心配だった。

フリーターの甥っ子に心配されるって、どうなのよ。

鍵を開けて、いつも使っている部屋へ。

リュックを降ろすと、中からクリスティーナ出てきた。

「ここが、ご主人様の家……」

「何もないけど、くつろいでくれ」

「じいじでーっ、思い出す。」

「そっだ、これ渡すのを忘れていた」

「そうそう、これだ。」

アイテムパックから、ある物を取り出してクリスティーナの首に巻く。

「これは……ご主人様？」

俺がクリスティーナの首に巻いたのは、屋台で買ったピンク色の

リボンだ。

決して、高価なものではないけれど、その可愛らしさに、ついつい買ってしまったものだ。

それにもし、他のスケルトンに出くわしたときも、これがあれば一目で見分けがつくと思うんだ。

「クリスティーナには世話になったからな、プレゼントだよ」

「あ、ありがとうございます……ずっと、大切にします」

巻かれたリボンを、まるで宝物のように触れるクリスティーナ。

すると、突然クリスティーナが輝きだす

眩いほどの光を放ったかと思うと、

スケルトンだったはずの、クリスティーナが元の姿、

聖女様の姿に戻っていた。

送還2（後書き）

1 / 3 0 ダンジョン 洞窟の説明に加筆、修正を入れました。

## スケルトンとリボン

眩い光と共に、聖女様の姿をとり戻したクリスティーナ。

始まりの洞窟<sup>ダンジョン</sup>最深部から、二度目のことだ。

しかし、目の前にいる彼女はスケルトンから一転、一糸纏わぬ少女に。

それも、超がつくほどの美少女だ。

こんな状況で、それがたとえ二度目であったとしても、驚かすにはいられない。

ここに、鏡がなかったことを心底よかつたと思う。

今の俺の顔はきつと、相当なマヌケ面だ。

それぐらいに、驚いている。

「きゃあつ ああああああつ」

クリスティーナが声をあげる。

それに応じて、俺は反対方向へ急転回。

幾度となく、レベルアップを凝り返して得たステータスのせいか、想像以上の速度で回る。

ブオンと、風が巻き上がる感じ。

「い、いめんっ……！」

何に対しての「いめん」と、思うかもしれない。  
しかし、それはきつと、見てしまった事に対する「いめん」なんだ  
と思う。

「い、いえ……ご主人様はわるくありませんっ。だけど、これはど  
ういうことなんでしょうか？」

クリステイーナも突然、元の姿に戻ったこと不思議に思っている  
ようだ。

「わからない……でも、そのままじゃマズイから何か着るものを持  
ってくるっ」

「あ、ありがとうございますっ」

確か、洗濯し終えたTシャツか、何かがあったはずだ。



乾燥機の中から一枚を広げてみると、ドクロをあしらったデザイ  
ンのTシャツがでてきた。  
さすがに、これを着させるのはどうかと思つので、そのままあつた  
場所へリリース。

数あるTシャツの中でも、一番無難であろう無地のTシャツを持  
つて部屋に戻る。

その際は、後ろを向いたままクリスティーナのほうへ向かう。

不可抗力で、あつごめん……ワザとじゃないんだつ、

的なアレも一瞬、浮かんだのだが。

クリスティーナ相手にそれは、さすがに心が痛む。

そして、邪な考えを捨て去つた結果が、この後ろ向き戦法である。

い。  
我ながら、不審者極まりない動きだが、こればかりは仕方がな  
い。

Tシャツを渡すときに、柔らかな指が触れてドキドキとしなが  
ら、このミッションは無事に成功した。

ダンジョン  
洞窟でトレインを防いだ時よりも、緊張したのではないだろうか。

「も、もう大丈夫です……」

お許しがでたとところで、クリスティーナの方へ向き直す。

そこで俺は、とんでもないミスを犯したことに気がついた。

あろうことか、着る物をとか言いつつも、Tシャツ一枚しか渡していなかったのだ。  
グッジョ……、いや、これは完全に俺のミスである。

そして、目の前にいるクリスティーナは、Tシャツの丈が短い  
か。

手で必死に伸ばそうと、モジモジとしている。

それを女神と称されてもおかしくない、美しい少女がしているの  
だ。

その破壊力は、とてつもない。

おもに、目の前にいるというこのリアル感がやばい。

白く、艶やかな太ももがマジヤバイ。

踵を返すように、急いでジャージを取りに戻り、なんとかこの窮  
地を脱することに成功したようだ。

「そ、そういえば、スケルトンになってから食事してないんだろ？」

少し落ち着きを取り戻した俺は、クリスティーナに話しかける。

「は、はい。もうずっと、食事なんてしていなくて……」

スケルトンになってからの事を思い出したのか、俯いてしまう。

聖女様からスケルトンになってからというもの、町を追われ、ダンジョンに逃げこまなきやいけない状況にまで追い込まれていたと言っ。

その間、辛いことが一杯あったことは想像に難くない。

ここは一つ、この世界の料理を食べてもらい、少しでも気を晴らしてもらおうのはどうだろうか。

ああ、わるくない、わるくない気がするぞ。

「少し、この部屋で待っていてくれるかな。ちょっと、出かけてくる」

「ど、どこに行かれるのですかっ?」

と、断りを入れてから部屋をでる。

その際に、笑顔でサムズアップをしたが、クリスティーナに伝わっただろうか。

……伝わっていないだろうな。

だって、俺のサムズアップにクリスティーナは首を傾げ、頭にはクエスチョンマークが浮かんでいたもんな。

そして、買い物も一通り終えて、家に帰ってみると。

なにやら、騒々しい。

クリスティーナが騒いでいるとも思えないし、一体何が起きているのだろうか。

中に入って、すぐその原因がわかった。

「タケ兄い、お帰りっ！」

## 訪問者

「タケ兄い、お帰りっ！」

と、声をかけてきたのは従兄妹のユキノだ。

ぱつと見は、中学生。

見る人によっては、小学生にさえ、見えてしまうのではないだろうか。

しかし、これでもれっきとした大学生だ。

この幼く見える容姿は、本人もコンプレックスらしく。

俺はこの話題には、触れないことにしている。

なぜなら、その後がすごく怖いから。

きつと次に、触れたときが俺の最期の時だろう。

……本当に、ごめんなさい。二度と言いません。

「あれ、来てたのか？」

と、言ひつ。

ニマニマとした顔で、近づいてくるユキノ。

手で口を隠しながら、小声で、

「まさか、 タケ兄いが外国人の彼女を、連れて来るとはねえ……」

どうやら、盛大に勘違いをしているらしい。

そもそも、外国人じゃないしな。

「異世界人だ、異世界人。」

しかも、人間ですら怪しい状態だ。

なんせ、さきほどまでスケルトンだったのだから。

「……なにか勘違いしているだろ？」

「またまたあゝ、隠さなくてもいいよ、っと」

「いてっ」

パンツと、叩かれるお尻。

このチビっこい体の、どこにそんな力があるのか。

甚だ、疑問である。

「あつ、ご主人様、おかえりなさい。お客様が見えていますっ」

「ただいま、クリスティーナ。こいつが変なことしてなかったか？」

「はい、それは大丈夫なのですが……この方は？」

「ああ、こいつは従兄妹だ」

「ご主人様のご親戚だったのですねっ」

と、ニッコリ。

袖を引っぱられる、振り向けばユキノだ。

「ちよい、ちよい」

「なんだよ、ユキノ」

「いつからタケ兄いは、外国語を話せるようになったの？」

ああ、そうか。

言語スキルを取得したおかげで、クリスティーナとも自然に話せているけど。

にとつては、外国語……もとい、異世界語なんだよなあ。

「ね、ネット講座ってやつ？ アレで覚えたんだよ、はっはは……」

「なんで、疑問系なのよ。まあ、いいや、私にも紹介してよ」

「ああ、そうだったな。彼女は、クリスティーナ」

「よろしくね、クリスティーナさん」

クリスティーナに握手を求める。

「クリスティーナ、こいつはユキノだ。よろしくだつてさ」

ユキノの手をとる、クリスティーナ。



「はい、ご主人様。こちらの言葉で、よろしくとは何とこののですか？」

「『よろしく』だよ」

俺が教えた日本語で、たどたどしくも『よろしく』と挨拶するクリステイーナ。

まあ、とりあえずは、外国人ということにしておくか。

まるっと、正直に話したところで、頭のおかしいヤツだと思われかねないからな。

……いや、今までの行いを考えれば。

すでに、思われているかもしれないが、またそれは別の話だ。

「これは……また豪勢だな」

目の前に並び、色彩りの料理に圧倒される。

海老ピラフに、ピーマンの肉詰め、パスタに青菜炒め、冷奴とシーザーサラダ。

トドメといわんばかりに、なめたけの味噌汁がついてきた。

どれもこれも、俺の好物ばかりだ。

「わたしにかかれば、こんなもんよっ！ 普段、碌なもの食べてないでしょ？ それに、よしえさんから頼まれているからね。タケ兄いが餓死しないようにって」

ユキノが言う通り、暇をみては、ちよくちよくと飯を作りに来てくれている。

以前、スルメばかり食べ続けて、死にかけてのが効いているらしい。

本当に、有難い話だ。

「これは……」

並べられた料理を目の前にして、クリスティーナが感嘆を漏らした。

「どうぞ、クリスティーナさん。遠慮せずに食べてね」

ユキノの言葉をクリスティーナに伝えて、

では、いただきますっ。

「イタ、イタダケマス……」

クリスティーナも、俺を真似てか。

カタコトの日本語を使って、フォークに手を伸ばす。  
向こうの世界にも、似た食器があるのか、器用にフォークを使って料理を口にする。

ところが、クリスティーナは、少しばかり口にした所で俯いてしまった。

どうしたのだろうか、味が口に合わなかったのか。

「どうした？ こっちの料理は、口に合わなかったのか」

「いえ、とても美味しいです。また、食事ができるとは思ってもいなかったもので……」

その宝石のような瞳から涙が零れる。

「これだけの量だ。俺とユキノでは食べきれないから、クリスティー

「ナも頑張って食べてくれ」

「どうやら、感動の涙ようだ。」

「どれだけの期間、スケルトンでいたのかはわからないが。」

「再び、食事できたことが嬉しいみたいだ。」

「ねえねえ、タケ兄い。クリステイナさん何で泣いているの?」

「ユキノの料理が美味くて感動してるってさ」

「ユキノが用意してくれた料理も全て平らげると、」

「クリステイナさんにワルイことしちゃダメよっ」と言い残して、ユキノは帰っていった。

「まともな食事をとって、まったりとしたのが効いたのか。」

「どっと、眠気と疲れが湧いてきた。」

「寝るには少しばかり、早い時間だが。」

「一日の活動量を考えれば、あれだ、寝てしまおう。」

「さて、寝る場所なのだが、自分の部屋は使えないな。」

スケルトンの姿ならまだいいが、今のクリスティーナと同じ部屋で寝るのは、色々とまずい。

普段使っている部屋をクリスティーナに渡し、俺は別室に移動。押入れの奥から予備の布団をひいて、横になるとすぐさまその意識を手放した。

そして、翌日、クリスティーナの叫び声で目を覚めることになった。

「う、ご主人様っああああっ！」

## ダンジョンに向けて

「ご、ご主人様っ ああああっ！」

クリスティーナの叫び声で目が覚めた。

瞼を開けてみれば、目の前に迫る髑髏。

それがカタカタと動くものだから、思わず悲鳴をあげてしまいうちになる。

落ち着け、これはクリスティーナだ。うん、クリスティーナ。

……よし、もう大丈夫。

しかし、骸骨が動き回るお家ってどうなんだろうな。

確実に、事故物件だろう。

家賃の値下がり、待ったなしだわ。

「クリスティーナか……」

昨日までの聖女様の姿ではなく、目の前にいるのは見慣れつつあるスケルトンの姿。

一体どうして、などと考えたところで、わからないものはわからない。

ここは一つ、落ち込んでいるであろう、クリスティーナを励ます意味でも。

前向きにいこう、ポジティブシンキングってやつだ。

「ご、ご主人様、またスケルトンに戻ってしまいました……」

と、落ち込んだ様子を見せるクリスティーナ。

ぬか喜びしてしまった分、落胆してしまうのも仕方ないことだろう。

「今まで解けなかった呪いが、二度も解けたんだ。そのうち解決方法も見つかるさ、一緒にその方法を探そう」

今しがた言ったことも、あながち間違いではないと思う。

この短時間の間に一時的とはいえ、二回もその呪いが解けたのだ。

もしかしたら、完全解除もそう遠くはないのかもしれない。

「そ、そうですねっ！　ありがとうございますっ」

そう答えるクリスティーナの姿は、少し希望を持ったように思えた。

俺も呪いの解除については、協力したい気持ちである。クリスティーナには、色々と世話になっているしな。

そう考えると、ダンジョン攻略にも、熱がこもるといふものだ。

バイトも、ここ一週間は休みにしてある都合、まるっと、そのままダンジョンに費やすことができる。

それに昨日は、早めに寝てしまったせいも気力も満タンだ。

これは早々に、ダンジョンの準備を始めてしまおう。

自家用にコーヒーを炒れて、食事をとれないクリスティーナには、仏間から拝借した線香を焚く。

これで、何かが満足するわけではないだろうが、

さすがに、一人だけコーヒーを頂くのも気が引けてしまう。

まあ、気持ちの問題ってやつだ。

さてと、コーヒーに口を付けつつ、ステータスを開く。



名前：ヤマダ タケシ

種族：人間

性別：男

ジョブ：冒険者

レベル：39

HP：830

MP：620

STR：275

VIT：340

INT：265

DEX：240

AGI：380

ストックHP：10

スキルポイント：20

思っていた通り、レベルがあがっている。

トレインで得た、経験値が効いたようだ。

レベルがあがったことで、スキルポイントも無事に納品されている。  
今のうちに、スキルを取得しておくのもわるくない。

ダンジョンの中だと、ゆっくりと選んでいられないからな。

取得可能スキル一覧：消費スキルポイント

・土属性魔法LV1：5

・風属性魔法LV1：5

- ・回復魔法Lv1： 10
- ・戦士の雄叫び： 10
- ・ステータスアップLv1： 10
- ・戦神の鼓舞Lv1： 10

取得したスキルは消え、新たなスキルが一覧に並べられている。

新スキルに意識を合わせて、その説明をみることに。

#### 【風属性魔法Lv1】

初級を風属性魔法を取得。

スキルポイントを使用することでLvアップが可能。

#### 【回復魔法Lv1】

初級を回復魔法を取得。

スキルポイントを使用することでLvアップが可能。

#### 【戦神の鼓舞Lv1】

周囲の味方及び、パーティーメンバーに効果時間30分のバフを付与。

その効果は、全ステータス10%アップ。

などと、スキルの説明文に目を通してると、

「う、ご主人様……」

今にも、死にそうな声でお呼びがかかる。

振り向けば、いつぞやの神聖魔法を行なった状態に。つまり、薄っすらと消えかかっているではないか。

「か、川が見えます……」

やばい。このままでは、クリスティーナさん三途の川を渡ってしまふ。

思い当たる事といえば、焚いた線香くらい。もしかして、スケルトンに効いてしまったのだろうか。

主に、成仏的な意味で。

素早く、線香を消して、クリスティーナを揺さぶる。

「しっかりしろっ！ クリスティーナ！」

すると、程なくして薄れかかった姿も元に戻り始めた。

危うく、クリスティーナを退治してしまうところだったわ。

意識をとり戻したクリスティーナに、謝りを入れ、快く許しを頂戴した所で準備の再開である。

その間、クリスティーナには、テレビを見て時間を潰してもらっている。

終止、驚きつばなしだったが。

簡単にテレビの仕組みを説明すると、「な、なるほどっ」などと、答えてはいたが。

本当に理解をしたのかは、怪しいところだ。

ちなみに今は、子ども向け人形劇に夢中のようなのである。

そして、中断していたスキル習得は、【回復魔法Lv1】を取得することにしている、  
さらに、残ったスキルポイント10を使って、Lv2までにあげることが成功した。

スキルポイント：0

アクティブ：スキル

HPストック：LvMax

フルスイング：Lv1

火属性魔法：Lv20

回復魔法：Lv2

パッシブ：スキル

アイテムパック：LvMax

マップ：LvMax

言語：LvMax

即死攻撃に備えてのHPストックと、どこまで回復するかはわからないが、自前の回復手段を手に入れたことで生存確率は、格段に向上したのではないだろうか。

後は、家にある物をアイテムパックに放り込めば、準備は完了だ。

うろつろつと、部屋を物色しつつ、香辛料の類から、日用品まで、目につくものは片っ端から放り込んでゆく。

どこで、何が役に立つのかわからないからな。

ダンジョンを前にストレッチで体をほぐす。

魔物を前にして、足がつったなんて最悪だ。  
些細なことが命取り、なんてことも有り得る。

何ていったって、相手はダンジョンだ。  
用心してし過ぎ、なんてことはないだろう。

十二分に体もほぐれたところで、

パンツ。

両頬を叩いて、気合を入れる。

「クリスティーナ、次はこのダンジョンを攻略するぞ」

「はい、ご主人様っ」

リュックの中から、元気の良い返事が返ってきた。

「よし、潜るっ！」

ピシ。

『【境界の回廊】の攻略が再開されました。』

ピシ。

『攻略終了までの残り時間： 90：13：05』

## 境界の回廊

一度目はローズのパーティーメンバー救出に、二度目はトレイン騒ぎからの送還。

今日で三度目となる、【境界の回廊】へ踏み込む。

三度目の正直とは言わないが、今回は攻略を目的としたアタックだ。

遺跡群のような場所から、神殿内部に入り、

そして、地下祭壇のような階層を経て、トレイン騒ぎあった場所までやってきた。

やはり、ニコライさんが言っていた通り、

ここまでの階層は、ほとんど魔物が出ないと言う話は本当のようだ。

現に、俺達は魔物に会うこともなく、ここまでやって来ることができた。

途中、一組のパーティーを見ただけで、以前のような賑わいがないかったのは、先日のトレイン騒ぎが影響しているからだろうか。

「クリスティーナ、そろそろ出てきてもいいよ」

リュックを地面に降ろしながら、クリスティーナに話しかける。



「はいっ」

と、返事が聞こえたかと思うと、中からクリスティーナが、もそもそと出てきた。

「ご主人様、今日はあまり、冒険者の方を見かけませんね」

「ああ、そうだな。先日のトレインを警戒しているのかな」

しかし、これは好都合である。

周りを気にすることなく、攻略に専念できるというものだ。

ニコライさんの話では、ダンジョン探索でも暗黙のルールやマナーがあるらしく。

その辺に疎い俺としては、気兼ねなく探索できるのは有難い。

「ここからは、魔物が出るらしいから。十分気をつけてくれ」

「わかりましたっ」

渡した手斧を両手に持ち、少し腰のひけた感じで、周囲をキョロ

キヨロと警戒するクリステイナ。

そうは言ったが、クリステイナ自身は魔物にカテゴリーされているのか。

魔物が自発的に、クリステイナを襲ったりしないようだ。

だから、お前は大丈夫だ、などと言うつもりはない。

もう既に、クリステイナは、大事なパーティーメンバーだからな。

ちよつとした言動が、相手を傷つけてしまうなんてことも多いに有り得る。

剥きだしの岩肌に、所々見かける白い石材で造れた人工物。

そのどれもが、柱だったり、崩れた祭壇のような何かだったり。

もしかすると、かつては此処も、入り口付近で見た遺跡群のような場所だったのかもしれない。

ダンジョンに歴史背景などがあるとすれば、これを調べてみるのも面白いかもしれないな。

しばらく、進んだところで、獣のような荒い息づかいが聞こえてきた。

手で、後ろにいるクリステイナに合図をだす。

その意図を理解したのか、動きを止めて前方を警戒する。

暗がりから、ノソノソと出てきた魔物は、豚を二足歩行させたらこつなるだろつ姿。

胸元から、背中にかけて体毛が覆い。

ぶうぶうと荒い息づかい、口からは下から上に生えた牙が。

そして何より、10数メートルは離れているのにも関わらず、ここまで臭ってくる生臭さが強烈だ。

手早く、ステータスを表示させて確認。

種族：オーク  
性別：男  
レベル：16  
HP：15  
MP：0  
STR：22  
VIT：31  
INT：0  
DEX：7  
AGI：11

どうやら、今回の相手はオークさんのようだ。

このレベル差を考えれば、雑魚と呼べる相手ではなからうか。

ステータス表示のおかげで、心に余裕が生まれる。

ここは一つ、オークさんの経験値を美味しく頂いてしまおう。

「クリスティーナ、こいつは俺一人でも大丈夫そうだ」

「わかりましたっ」

今だ俺達に気が付いていないオークを仕留めるべく、バットを握り締めて、慎重に距離を詰めていく。

慎重に進んだつもりだったのだが、足元の小石を蹴り飛ばしてしまった。

飛んだ小石が、別の石にぶつかって音を立てる。

カコンッ。

その音に気づいたオークは、俺達を見つけ。

突然、咆哮をあげる。

「ブオオオオオオッオオオオオオオオオ」

重低音が効いた鳴声が、洞窟内に響き渡った。

それを、聞きつけてか。

洞窟の奥から、幾つもの影がゾロゾロと。

そのどれもが、オークさんだ。

数は、ざっと見ただけでも、30体以上はいるのではないだろうか。

おう、マジか。

これは、ちょっとヤバイかもしれない。

## 境界の回廊 2

オークの鳴き声で、仲間達が続々と集まり続ける。

ざっと見ただけでも、30体以上。

今尚、その数を増やし続けている。

以前見たトレインよりも、ヤバイのじゃないだろうか。

「ご、ご主人様、この数は……どうしましょうか？」

一体、一体はレベル差的に考えて問題はないのだが。

こつも、数があると……。

しかし、だからと言って、ここで逃げたとしたらトレインが発生してしまふ。

それも今回は、俺が発生源とか笑えない。

もう、ここで迎え撃つしかないだろ。

「仕方ない……迎え撃つぞ」

「わ、わかりましたっ」

以前のトレインで遺憾なく、その威力を発揮してくいれた。信頼と、案心のファイアーウォールさんの出番だ。

「ファイアーウォール」

発現場所を定めて、ファイアーウォールを撃つ。

寸分の狂いなく、生まれた炎の壁がオークと俺達を分断する。

轟々と、燃え盛る炎の壁。

ここまで離れていても、ピリピリと肌を熱風が撫でる。

それを眺めること、幾分。

前回と同様、徐々に火力は弱まり、やがて消えるファイアーウォール。

「あっ……ご主人様」

「いい……、言わなくてもわかってる」

ファイアーウォールが消えた向こう側、ピンピンとした無傷のオークさんの姿が。

……うん、わかってた。

ファイアーウォールを、発動してから気がついたけど。

前回、上手くいったのは魔物が獲物を狙って走っている途中、突然ファイアーウォールが進路を塞いだからであって、走っていない状態でファイアーウォールが目の前に現われても、誰も突っ込んで行ったりしないよね。

これは、そうアレだ。完全にMPの無駄遣いである。

それでも、突然あらわれたファイアーウォールを警戒しているのか、  
すぐには、襲っては来なさそうだ。

仕方がない、違う手を考えなくては。

これだけの数を相手に、バットで立ち回るのは効率的じゃないな。

それに囲まれてしまっただけ、幾らレベル差があっても危険があるかもしれない。

もういつそ、ファイアーボールを撃ち込んでしまっただけか。

何か困うものがあるならば、一匹も逃がさずに一網打尽に出来るのだ  
だけ。

困うものか……。



おつ、良い事を思いついちゃった。

「ファイアーウォール」

発現位置を定めて、二度目のファイアーウォールを発動。

それも、今回は一度に四枚だ。

ごっそりとMPが減る感覚と共に、四枚のファイアーウォールが、オークの集団を囲う。

そして、待つことしばらく。

消えたファイアーウォールの先に見えたのは、倒れたオーク達。

流れ続ける、経験値取得のログが、勝利を確認させてくれる。

「ご主人様、これは何が起きたのでしょうか？」

疑問の声をあげる、クリステイナーナ。

ここは、一つ。ドヤ顔で解説してあげましょう。

「ファイアーウォールで囲うことで、炎が場の酸素を奪ったんだよ。生物は、酸素がないと呼吸ができないからね、その結果、一酸化炭

素中毒を起こし、オークは死してしまったんだ」

「サンソなるものですか……」

普通に酸素とか言ってしまったけど、迷宮都市の文明レベルをみれば、化学がそこまで発達しているとは思えない。良くて、中世レベルだ。

俺達の世界ですら、酸素が発見されたのは1771年頃。  
日本で言えば、明治に入ってからだ。

それなのに酸素がどうのと、言ったところでチンプンカンプンだ  
る。

「まあ、簡単に言えば、オーク達が呼吸できないようにしたってことだよ」

「な、なるほど」

ふわっとした説明で、流してしまうしかないな。

それがいい。そうしよう、これ以上は知識の無さが露見してしまう。

やまだとしての威厳が、消えてなくなっちゃう。

そして、問題となったオーク達の死骸はというと。

時間の経過と共に、溶けて地面に吸収されていき、魔石だけが残った。

それらを拾い集めて、アイテムパックにしまい込むと。俺とクリスティーナは、ダンジョンの奥へと進み始めた。

ちなみに、魔石の数は52個あった。目算よりも、だいぶ多かったようだ。

後からも、どんどん数が増えていたしな。

緩やかな傾斜が続く、通路を進み続けると、幅5メートルほどの石材で組まれた橋が見えてきた。

その下には、水の代わりにマグマが流れている。

落ちないようにおっかなビックリと、その橋を渡りきったところで。

奥へと続くであろう、階段がその姿を現わす。

一步、一步、慎重に降りていく。

階段を降りきった所で見上げれば、一瞬、外に出たのかと錯覚するほどに、広い空間が広がっていた。

風景こそ変りはしないが、球場くらいはあるだろうか。天井なんて、体育館のそれよりもまだ高い。

その中央に鎮座するのは、巨大な亀。

高さにすれば、5メートルは越えている。

岩のような甲羅から、頭が出ていなければ小山と見間違えるくらいだ。

遠目に、ステータスを確認つと。

種族：エンシャント・タートル

性別：男

ジョブ：フロアマスター

レベル：27

HP：930

MP：330

STR：195

VIT：420

INT：235

DEX：11

AGI：12

ついに、フロアマスターと遭遇してしまったぞ。

## 境界の回廊2（後書き）

主人公はドヤ顔で語っていますが。

1771年頃は、明治ではなく江戸時代です。

### 境界の回廊3

「大きいなあ……」

「大きいですね……」

遠目から、中央に鎮座する巨大な亀を、眺める俺とクリステイナ。ナ。

クリステイナもエンシャント・タートルを前に呆けている姿を見るに、

やはり、この世界でも、この亀はデカイらしい。

その巨大な甲羅から伸びた首は、悠々と地面に寝かせ、目を閉じたその姿は。  
然も、自身より強者がこの場あたかにいないと、主張しているかのように思える。

前のゴーレムと同様に、この巨大な亀もまた、こちらが近づかなければ攻撃してこないようだ。

「とりあえず、休憩するか」

「そ、そうですねっ」

近くにあった崩れた石材に腰掛、アイテムパックからスपोर्टリンクを取り出して。

ゴクゴクと、喉に流し込む。

ふう。

しかし、この亀、本当にデカイよな。

いや、デカイのは好きだよ、巨大生物とかロマンが詰まっているし。

だけど、デカイっても限度があると思うんだ。

亀の後ろに薄っすらと見える出口と、此処に降りてきた階段。それと比較しても、何倍も大きい。

あの亀は一体、どうやって此処に来たのだろうか。いや、ダンジョンに常識を求めるのはやめておこう。

あの亀が、フロアマスターである都合上、倒さなくては前に進めないわけだから。

とりあえずは、一発殴ってから考えるとするか。

「クリスティーナ、まずは一人で攻撃してみるから待っていてくれ。

何かあったら、回復魔法よろしくな」

「わかりましたっ、任せてください」

バット手にゆっくりと、エンシャント・タートルに近づく。

狙うは、甲羅から伸びているあの頭だ。

岩のような甲羅や、大木のような足を狙うよりか、大分効率的だろ。

5メートル程度、近づいてもまだ反応はない。

3メートル、2メートルと、その距離を縮めていく。

1メートルをきつたであろう時だった。

今まで閉じられていた、エンシャント・タートルの目が、カッと大きく開いた。

そのタイミングでバットを振り下ろすが、一瞬、早く首が甲羅の中へと入っていった。

空振りに終わったバットが、地面に叩きつけられる。

おう、マジか。

図体に似合わず、素早いじゃないの。

ズズ……と、地鳴りのような音が響き渡る。

それにもなってエンシャント・タートルの体が、左へと傾いていく。



そして、上げられた左足。

パラパラと、砂が落ちてきたかと思うと。

巨木を思わせる左足が、俺のいる場所へ落とされる。

ズドンッと、重低音が体に響いた。

間一髪、転げながらも左足の攻撃を避けた俺は。

エンシャント・タートルから、少し距離をとる。

さすがにアレで踏まれたら、タダでは済まなそうだ。

やはり、狙うとすれば頭か。

などと、脳内作戦会議をしていたのも束の間、甲羅から勢い良く出てきた頭が、口を大きく開いて液体が吐き出す。

咄嗟に、後ろ側に飛んでソレを避ける。

そして、着弾した液体は、その場にあつた石材を溶かした。

石材から、あがつた蒸気が鼻腔を刺激する。

生ゴミから発せられるような悪臭だ。

避けたことで距離が警戒範囲から外れたのか、エンシャント・タートルは、

その首を、地面に下ろして元いたように目を瞑った。

ははん、わかったぞ。

これはアレだ、腕力<sup>パワー</sup>を試されているのだ。  
きつと、この強固な甲羅を越えて来い、的なサムシングだろ。

狙いやすそうな、頭をあえて見せているのも。  
ミスリードを狙った、ものなんじゃないだろうか。

俄然、そんな気がしてきたわ。  
ちよつと、やまだ的にヤル気が沸いてきたぞ。

今度は、前回のように、ゆっくりと近づぐことはしない。

最初から、全力疾走だ。

エンシャント・タートルの警戒範囲に入ると、その頭は素早く、  
甲羅の中に入っていく。  
十分な助走がついたところで、甲羅へと飛び乗る。

目指すは、甲羅の頂上。

甲羅はザラザラとして、その上、凹凸がある為<sup>ため</sup>に思っていたよりは  
登りやすい。

そのおかげで、すんなりと甲羅の頂上に着いた。

先ほどと、同じように左足があがるが、これを出っ張った部分を  
掴んで、落とされないように耐える。  
エンシャント・タートルの動きが収まったところで、バットを甲羅  
に打ちつける。

まるで、石に打ちつけたような感触が、バットを通して伝わってきた。

打ちつけた部分の甲羅が、欠け飛び散る。

よし、数打てばいけそうな気配。

次は、スキル『フルスイング』を使ってバットを打ち込む。

このスキルは、MP消費して、STR値を10%アップさせるものだ。

『フルスイング』で強化された一撃が、甲羅に小さなヒビを入れた。

打撃音も、幾分か重くなった気がする。

エンシャント・タートルも、俺を振り落とそうと体を振るが、これに耐えながら何度もバットを甲羅へと打ち込み続けた。

打ち込んだ回数が、20を越えたところで、ヒビが甲羅全体に走りだす。

ピシッ……ピシピシィッ。

パリンッ。

甲羅が、粉々になった瞬間だ。

『ピギユウウウウウウッ』

エンシャント・タートルが叫ぶ。

背を走り、露になった頭に向かって『フルスイング』の一撃を。

エンシャント・タートルの頭部が、肉片となって吹き飛ぶ。

そして、硬くなっていた筋肉から力が抜けてエンシャント・タートルは地面に沈んだ。

ピッ。

『フロアボスの撃破を確認しました。』

どうやら、ボス戦終了のお知らせだ。

## 境界の回廊 4

ピッ。

『フロアボスの撃破を確認しました。』

ピッ。

『経験値取得にボーナスがつきます。1900の経験値を獲得しました。』

ピッ。

『称号【金剛を破りし者】を取得しました。』

お、なにか称号を頂いてしまったぞ。

表示されたログの中から、取得したばかりの称号に意識を合わせ、説明文を浮かびあがらせる。

【金剛を破りし者】

金剛の如く、硬いエンシャント・タートルの甲羅を打ち砕きし、破天荒者に与えられる称号。  
VITに10%アップの効果を付与する。

……お、おう。

てつきり、腕力<sup>パワー</sup>を試されているのだと、信じて疑わなかったけど。もしかすると、他に正攻法がちゃんとあって、俺がやってしまったのは、完全なゴリ押しだったのではないだろうか。

なんか、破天荒者とか説明文に書かれちゃってるし。

素直に喜べない、この感じはなんだろう。

まあ、やってしまったものは仕方がない。

称号も貰えた事だし、気にしない方向でいこう。

そう、俺はいつも、前向きな考えで生きてきたじゃないか。だからこそ、この年までフリーターをやってきたのだけれど……。

やばい、違う意味でHPが削れてしまいそうだわ。

エンシャント・タートルの背から降りて、眺めているとオーク同様に、肉体がブクブクと溶け始める。

液状になった肉体は、やがて地面へと吸収されていた。

そして、目の前に残ったのは粉々になった大量の甲羅と、一際大きな魔石。

「ご主人様っ」

カタカタと骨を鳴らせてやってくるクリステイーナ。

端から見れば、冒険者と魔物。

しかし、そろそろこの光景にも慣れてきた。

今朝のような、寝起きの不意打ちじゃなければ、もう大丈夫だ。それに、よくよく見れば、愛嬌があってかわいいじゃないか。

骨格もなんだか、小柄であるし。

なんだか、丸みを帯びている気もしないでもない。

そして、美しい少女は、骨格まで美しいのかと思わせる流線美。

……イカン、イカン。

こちらの世界で、色々と見てきたせいかな。

価値観の崩壊……いや、ずいぶんと思考が、毒されてきた気がするぞ。

おそろべし、ダンジョンと異世界。

「エンシャント・タートルの甲羅って、割れてしまうものなのですね……」

エンシャント・タートルってのは、こっちの世界では有名なだろうか。

それとも、クリスティーナさんが物知りなのか。

たぶん、後者なんだろうな。

つい、スケルトンの姿に忘れてしまいそうになるけど、何て言っただって元聖女様だからな。

「硬そうに見えたけど、意外と割れるものなんだな」

「ご主人様なら、エンシャント・タートルであっても、倒してしまおうと思っていましたが。まさか、あの硬さを誇る甲羅を割って、倒してしまうとは思っていませんでしたよ」

「そうなのか？」

「はい、エンシャント・タートルの甲羅は、ヴァルト鋼に次いで硬いと言われています。それを見事に砕いてしまうのは、さすがご主人様ですっ」

褒められているか、なんなのかわからないのが、少しばかり気になるが。



この際、それは置いておこう。

「まあ……アレだ。せつかくの素材だ、頂いておこう」

ゲームの中では、ボスからドロップする素材は大抵が、レアものだったりするのが鉄板。  
まさかそれを、置いてなどいけるはずもない。

エンシャント・タートルの魔石、それに粉々に割れた甲羅を片っ端からアイテムパックに入れていく。細かく割れたとはいえ、元があの巨大な甲羅だ。

全て入れ終えるまでに、二時間ほどかかった。  
それでも、容量を気にせずに、入れていけるのは本当に有難い。

一仕事終えて、凝った体を伸ばす。

「うづっーっと、ようやく終わったか」

「ええ、すごい数でしたからね」

「ようやくこれで、前に進めるな。行こうか、クリステイナー」

「はいっ」

エンシャント・タートルがいた向こう側、次のフロアに続く階段へと向かう。

黒い光沢のある大理石のような石材で組まれたアーチをくぐり。

また、同じような石材で出来た階段を下へと降りていく。壁には、光を放つ水晶がはめ込まれていて、その光源のおかげで足元が明るい。

階段を降り終わると、さっきまでいたフロアとは違い、黒く光沢のある石材の床だ。

アーチや、階段に使われていた物と同じやつだろう。

ダンジョン表層にあった遺跡群と、似た作りの通路を、俺とクリステイナは進む。

途中、いくつか分岐はあったが、その中で一番幅の大きな道を選ぶ。体感で15分くらい歩き続けたらどうか、前方から生き物の気配が近づいてくるのがわかった。

歩みを止めて、いつでも応戦できるように警戒を強める。

ヒタヒタと、まるで裸足で歩いているような音。

壁にはめられた水晶の光源が、少しずつ人物を照らす。

「た、たすけてくださいっ、 た、たすけてくださいっ」

通路の先からあらわれたのは、服を乱暴に乱された人間の少女だった。

## 境界の回廊 5

「た、たすけてくださいっ、 た、たすけてくださいっ」

通路の先から、あらわれた人間の少女。

服は乱暴に乱され、よく見れば肌にはアザが浮かんでいる。

その様子から、少女に何があつたのは容易に予想がつく。

こんなダンジョンの奥でこんな少女がどうして？ と、思わなくもない。

だけど、今は保護することが一番の優先事項のはずだ。

他の事は、後から考えればいい。

「もう、だいじょ……」

と、言いかけた時だ。

後ろにいたクリスティーナが叫ぶ。

「ご主人様っ、その子は魔物ですっ!!」

え、マジで。

駆け寄ろうとした足が、ピタッと止まる。

いや、でも。どうみても目の前にいるのは人間の少女。

しかし、こんな状況でクリスティーナが、冗談を言うとも思えない。

ゆっくりと、後ずさる。

次の瞬間、バキンッと、床の石が割れる音が鳴った。

そして、飛び散る破片。

目の前には、鎌のような形状に変化した少女の右腕が、床に打ちつけられていた。

本当に魔物じゃんか。

あぶない、あぶない。

クリスティーナに教えてもらわなきゃ、あの一撃を受けていたかもしれない。

よく見れば、先ほどまで少女の顔だったものが、今では酷く崩れている。

一部、少女の部分が残っているせいか、かなりグロテスクだ。

出会い頭でこの顔に遭遇したら、悲鳴をあげる自信があるわ。

「きゃあっ」とか、乙女みたいに叫んじゃうよ、やまださん。

しかし、この魔物は擬態で相手を油断させた所を、やっちゃん系か。

大抵、そのタイプは耐久が低かったりするんだよな。

これも、偏った知識によるものだけど。

試しに、ファイアーボールを撃ち込んでみるのもいいかもしれない。

何度も、撃ち込まれる鞭のような攻撃を、避けながら後退をする。幸いにも攻撃自体は、避けれない速さではなかった。

と言うよりも、逆にゆっくりと見えるレベルだ。

油断さえしなければ、まず、当たることはないだろう。

クリステイナがいる付近まで下がった所で、ファイアーボールを発動させる。

以前、試したせいとか、自身の想像よりもスムーズに炎の玉が生まれた。

ただ、その大きさは前回の手の平大と比べて、ずいぶん大きい。

直径1メートルは、越えているのではなからうか。

これはレベルアップで大幅にあがったINTのせいだろう。もしかしたら、予想よりスムーズに発動したのも、これの影響を受けているのかもしれない。

突然あらわれたファイアーボールを見て、魔物が一瞬だけ怯む。

その隙に、轟々と燃えるファイアーボールへ、命令を下す。

といつても、脳内で描いた軌道を伝えるだけだ。

そして、イメージを受けたファイアーボールが、ブルツと揺れたかと思うと、

少女の擬態をした魔物へと放たれる。

トレースするかのように、イメージ通りの軌道を描いて、ファイアーボールが魔物に着弾する。

「グユウウツアアアツ」

人と獣声が混ざったような不気味な咆哮をあげて、魔物が焼かれていく。

距離が近かった為か、チリチリと肌を焼くような熱風がここまで伝わってきた。

それと同時に、肉の焦げる臭いが鼻につく。

ファイアーボールが消えた後に残っていたものは、灰と魔石だけだ。

魔石をアイテムパックへしまいながら、クリスティーナに声をかける。

「クリスティーナ、よくあれが魔物だってわかったな」

「はい、この体になってからは、魔物と人間の違いがわかるようになって」

「なるほど、教えてもらって助かったよ。ありがとう」

「いえ、お役に立てて嬉しいです」

よくよく考えてみれば、事前にしっかりとステータス確認をしていれば、擬態に、騙されることもなかったよな。

今までが、上手くいっているせいかな。

少しばかり、気が緩んでいるのかもしれない。

どこで足を掬われるか、わからないダンジョンだ。

これはもっと、気を引き締めていかないといけないな。

今一度、頬をパンツと両手で叩く。

あの後、二度ほど擬態する魔物にであったが。



どれも同じ少女の擬態だった為、ステータス確認で見破るまでもなく、遠目からのファイアーボールで撃退していく。

擬態が通用しなければ、オークと変らない難易度の敵だ。自身の弱さを、きつと、あの擬態で補っているのだろう。

それでもさすがに、三度目ともなると苦笑い漏れた。まるで、リピート再生するかのような登場が、悪い冗談かなにかと思えてしまう。

この階層は、あの魔物のテリトリーなのだろう。それ以外の魔物は、見ることはなかった。

一番幅の広い通路を道なりに進んでいくと、階層の出口にあたるであろう豪華な扉が見えてきた。

左右の扉に、天使と悪魔を思わせる彫刻が施されており、その見事な細工に息を呑む。

一頻り、扉の芸術とも呼べる細工を愛でた後に、両手で押し開く。

ギィィイツと、音を立てて開かれた扉の先は、

王座の間を、思わせる空間が広がっていた。

そして、玉座には兜のない甲冑が鎮座する。



## 境界の回廊 6

玉座に鎮座する兜のない甲冑。

本来であれば、頭部にあるはずの兜は、左腕に抱えられている。

わざわざこんな広間に、それもさも意味ありげに鎮座しているのだから。

間違いなく、ボスだろう。

じゃなくても、それに準じたキーキャラクターに違いない。

【

種族：デユラハン

性別：男

ジョブ：ダンジョンマスター

レベル：31

HP：977

MP：125

STR：195

VIT：325

INT：95

DEX：110

AGI：85

ステータスを確認してみれば、まさにボスの貫禄。まだ数値的に勝っているが、俺のステータスにも迫る勢いだ。

「クリステイーナ、あれがダンジョンマスターだ。」

どんな攻撃が来るかわからない、十二分に注意をしてくれ」

「これが、ダンジョンマスター……、わ、わかりましたっ」

「今まで通り、俺が前衛で戦うから。何かあればフォローを頼む」

「あつ、ご主人様。戦いの前に、祝福を」

祝福……？

戦いの前と言うからには、バフみたいなものだろうか。あるじゃんね一定時間、耐久をあげるみたいなやつ。

などと、考えていると。

詠唱を始めた、クリステイーナの体が光輝き始める。

前にも見たことがある、神聖魔法の輝きだ。

しかし、以前これを使ったときは、クリステイーナ自身が成仏しかけた。

なのに、使っちゃっても大丈夫なのだろうか。

今からボス戦ですよ、クリスティーナさん。

「バトル・ブレス  
戦神の祝福」

詠唱が終わると、赤く淡い光が俺を包む。

それと同時に、腹の底から力が湧いてくるような、高揚感を感じる。

【バトル・ブレス  
戦神の祝福】

戦いに赴く者に、女神からの祝福を。

一時間の間、ステータスを10%アップの効果。

ステータスを確認すれば、思っていた通り強化系のバフだ。

しかも、中々と心強い効果じゃないか。

ステータス数値の低いときは心もとないパーセント増加も、数値自体が大きくなればなるほど、その振れ幅も大きくなるからな。

フルスイングと合わせれば、なんと当社比20%の増加だ。それ単体で、キャンペーンなんか開いちゃうレベルだろ。

そして、クリスティーナの方を確認してみれば、

今回は、以前のように消えかかっていない。

「クリステイーナ、神聖魔法なんて使っちゃっても、大丈夫なのか？」

「はいっ、気をしっかり持てば大丈夫みたいですよっ」

と、元気いっぱいに答えるクリステイーナさん。

なに、その根性論は。

練習中は、水を飲むな的な、体育会のノリを感じてしまっぞ。

まあ、大丈夫ならそれに越したことはないな。うん。

さてと、準備が終えたところで。

ダンジョンマスターである、デュラハンへ。

数歩ほど進んだところで、反応が見えた。

玉座の傍に置かれていた、刃の厚い大剣を右手で握ると、デュラハンは、甲冑が擦れる金属音と共に、玉座を立ち上がった。

座っている姿では、わからなかったが、二メートルはありそうな巨躯。

『よく、ここまで辿り着いた、ふれいやーよ』

重低音の効いた、よく響く声。

一体、どこから声をだしているのか、気にならなくもないが。

それにしても、ふれいやー……！？

もちろん、プレイヤーの事だと思うが。

少しばかり、その言い方に違和感を感じてしまう。

ロールプレイをしている、そんな感じの。

しかし、喋る魔物は初めての予感。

いや、擬態の魔物も喋ってはいたけど、あれはリピート再生みたいなものだし。

コミュニケーションが出来るって、意味では初めてだ。

ならば、少しばかり質問を投げかけてみてもいいだろう。

「ちょっと、聞きたいが。冒険者ではなく、ふれいやーと呼ぶのは何故だ？」

直球勝負で、どつだ。

『ぶれいやーは、ぶれいやーだ。それ以外に呼び方を知らぬ』

おうふ、全然答えになってない。

しかも、えっ何を言ってるんだコイツみたいな雰囲気。

……まあ、いい。

ダンジョンを攻略していけば、きっと何かしらわかるだろう。

今は、目の前の戦闘に集中しよう。

『さあ、こい。ぶれいやーよ、見事、我を倒して見せよ』

そう言い終えると、デユラハンは大剣を軽々と構えてみせる。

そして、左腕に抱えられた兜の目が赤い光を放つ

どうやら、準備完了のお知らせだ。



## 境界の回廊6（後書き）

前作、『俺のハーレムが乗っ取られたって！？ 上等だ。お前ら全員、見返してやる！』が完結しました。本当にありがとうございました。ます。

本作、『現実世界にダンジョン出現！？ ～28歳フリーターは攻略を目指す～』も、完結まで頑張っていたと思います。引き続き、どうぞ宜しくお願いします。

## ダンジョンマスター

『さあ、こい。ぶれいやーよ、見事、我を倒して見せよ』

どうやら、準備完了のお知らせだ。

相手はダンジョンマスター。

どんな攻撃をしてくるかわからない以上、最初から、全力で迎え撃たないとダメだろ。

舐めプなんかやって、やられてしまっただけでは目も当てられない。

「ファイアーボール」

先手必勝、デュラハンに向かって、ファイアーボールを飛ばす。

直径1メートルを越えた炎の玉が、イメージ通りの軌道を描いて直撃する。

もちろん、全身甲冑の魔物に、炎で倒せるとは思っていない。

目隠しになればいい、程度の攻撃だ。

『ぐっつ ああああああっ』

……あれ、マジかよ。

なんで、効いちゃってるんだよ。

直撃したファイアーボールが燃えあがる。

そして、苦しそうにもがき苦しむ、デュラハン。

【

種族：デュラハン

性別：男

ジョブ：ダンジョンマスター

レベル：31

HP：850 / 977

MP：125

STR：195

VIT：325

INT：95

DEX：110

AGI：85

ステータスを見てみれば、結構なダメージを与えてしまったようだ。

この世界には、属性とか、どうなっているのだろう。

いや、これは属性を越えてダメージを与えてしまったと、考えるべきなのか。

ダメージが与えられると、わかった以上、ムリに近づく必要はない。

安全な距離から、ドンドン削っていく。

前に、ネットゲでやった定点狩りを思い出すわ。

「ファイアーボール」

「ファイアーボール」

「ファイアーボール」

と、何度もデュラハンに向かって、ファイアーボールを打ち続ける。

その度に、『ぐうっああああああっ』と、叫び声をあげるデュラハン。

なんかこう、一方的な感じ。

それに何か、感じないわけでもないが。

とは言え、こっちも命が掛かっている以上、

安全マジンが取れるなら、それに乗っかるばかりだ。

さて、どのくらい削ったのだろう。

【

種族：デユラハン

性別：男

ジョブ：ダンジョンマスター

レベル：31

HP：57 / 977

MP：125

STR：195

VIT：325

INT：95

DEX：110

AGI：85

お、おう。デユラハンさん、すでに瀕死だったわ。

これは、HPゲージが赤色になっているやつだ。

『さすがは、ふれいやー……その名に恥じぬ、力量よ』

遠目から、ファイアーボールを連投してただけなのに、そう言われ  
ちやうと、

何かこう、込みあげてくるものがあるな。

剣に寄りかかっている姿が、更に追い討ちをかけてくるようだ。

そして、彼のデュラハンさんを、よく見てみれば。

何度も炎に晒されては、外気に冷やされたせいも、甲冑の所々にヒビが入っている。

まさに、満身創痍といった感じ。

『しかし、まだ我が剣は折れぬ……』

それに対して、デュラハンさんは、まだまだヤル気のようにある。

もしかして、必殺技とかきちゃうのだろうか。

よくあるじゃんね、ボスのHPゲージをある程度、切ったら出てくるタイプのやつ。

油断してたら、大ダメージ喰らうんだよな。

『うおおおおおおお』

咆哮をあげて、向かってくるデュラハン。

高く挙げた大剣が、俺に向かって振り降ろされる。

俺も、これに向かい打つべく、『フルスイング』を発動させてバットを振り切った。

高い金属音が鳴り響く。

次の瞬間、刃の厚い大剣が、粉々に割れる。

思っていた通り、何度も、熱に晒されて脆くなっていたようだ。

それとも、ダメージの蓄積によるものかはわからない。

しかし、今は攻め続けるべきだろう。

剣を失って竦む、デュラハンの胴へ向かって、

二度目の『フルスイング』を発動させたバットを打ち込む。

バットを通して、甲冑が割れる感触が伝わる。

『ぐっおおおおおおおおおおおおおおおお……』

大剣と同様に、粉々に割れる甲冑。

カーンッ。

そして、抱えるものを失った兜が床に落ちた。

落ちた兜の目には、もう、赤い光は宿っていない。

ピッ。

『ダンジョンマスターの撃破を確認しました。』

ピッ。

『経験値取得にボーナスがつきます。3900の経験値を獲得しました。』

ピッ。

『レベルアップ。スキルポイント20獲得しました。』



## 報酬

ピッ。

『レベルアップ。スキルポイント20獲得しました。』

ダンジョンマスターの撃破を知らせるログが流れ終わると、

玉座の奥にある壁が、ズズツと音を立てて左右に開かれる。

ちょうど、自動ドアが開くような要領だ。

そこから地下へ続く、階段が見えた。

もしかすると、前回と同様に、あの真っ白な空間。

ダンジョン最深部へと、繋がっているのかもしれない。

「さすが、ご主人様。無事にダンジョンマスターを倒してしまいましたね」

「ああ、クリステイーナがかけてくれたバフ……いや、祝福のおかげだよ」

「わたしは、アレくらいしかお役に立てれないので……」

「助かったよ、ありがとう。クリスティーナ」

デュラハンが残した兜と、魔石をアイテムパックに回収して、

あらわれた階段を降りる、俺とクリスティーナ。

程なくして、白く柔らかい光が見えてきた。

やはり、この先にあるのは、あの真っ白な空間で間違いないよ  
うだ。

「クリスティーナ、ちょっと待ってくれ」

「は、はいっ」

「これを」

アイテムパックに突っ込んでいた、ジャージを差し出す。

あの空間では、クリスティーナにかけられていた呪いが、一時的  
にせよ解けていた。

そして、今のクリスティーナは、前にプレゼントしたりボン以外は

装備していない。

つまりアレだ、このまま入ってしまえば、またあの事故が起きてしまうというわけだ。

さすがに、それは色々とまずいだろ。

そう何度も、剥いてしまうわけにはいかない。

「ありがとうございますっ」

と言うと、嬉しそうにお礼を言うクリスティーナ。

手渡したジャージを、いそいそと着始める。

「お待たせしましたっ」

「じゃあ、行くっ」

「はいっ」

階段の先には、【始まりの洞窟REダンジョン】と同じ、

石碑以外、何もない空間が広がっていた。

『境界の回廊、最深部へようこそ。』

以前と同じ、優しげな女性の声が響く。

『境界の回廊の、踏破者として、ヤマダタケシ、クリスティーナ・M・ブルーオーシャンを登録します。』

ふと、クリスティーナを確認すれば、スケルトンの姿から聖女様へと戻っている。

以前は、確信を持てなかったが、これでハッキリとした。やはり、ここはバフ・デバフを打ち消してしまうような、セーフゾーンのようだ。

事前に、ジャージを渡しておいて正解だったな。

こんな美少女しているクリスティーナが、あられもない姿でいたら、とてもじゃないが平常心でいられる自信がない。

『クリア報酬をお選びください。』

と、声が聞こえたかと思うと。

目の前に、二つの光り輝く球体があらわれる。

今度の報酬は、選択制らしい。

ダンジョン  
洞窟のステータス情報のように、二つの球体にも情報がマスク表示されている。

### 【セリシアの息吹】

大森林と呼ばれる場所の奥深く、セリシアの大樹が50年に一度、生みだす息吹。

使用者のレベルを10アップさせる効果を持つ。

### 【アブダラの霊泉】

竜峰に湧くとされる霊泉。

使用者のあらゆる状態異常を消し去る効果を持つ。

……これは。

ついに、きちちゃったか。

【アブダラの霊泉】を使えば、クリスティーナの呪いを解けるじゃないか。

レベルを10アップも確かに魅力的だけど、これを使わないと上がらないわけではない。

しかし、【アブダラの霊泉】に関しては、これを逃がしたらいつ

手に入るかわからないし。  
もしかしたら、二度と手に入らない可能性だってある。

もう、これは【アブダラの霊泉】一択しかないだろう。

「クリスティーナにも見えてるか？」

「はい、見えています。ご主人様、どうぞ、【セリシアの息吹】をお受けとりください。

使った者に大きな力を与えると、そう書いていますので、ご主人様に相応しいかと思えます」

あれ？ 見えている説明文が違うのか。

まあ、いい。今はそんな場合じゃない。

「これじゃなくても、力はつけられる。だけど、呪いは違うだろう？」

「しつ、しかし……私は後について行くばかりで。ほとんどがご主人様の成果ではありませんか」

「俺がそうしたいんだ、クリスティーナは何も気にしなくていい」

と言うと、【アブダラの霊泉】の表示がされている球体に触れる。

すると、眩い程に光を放ち、液体の入ったガラス瓶に姿を変えた。手の平大のガラス瓶に、澄んだ青色の液体が並々と入っている。

「いっ、いっしゅじんさまぁ……ぐすっ、あ、あ、ありがとう……っっく、いっせいます」

振り向くと、真っ赤に目を腫らしたクリスティーナの姿が。

その宝石のような瞳から、ポロポロと涙が零れ落ちる。

「いっ、ごめん。だ、大丈夫か……」

何で謝っているのかわからないが。

俺は、焦りながらも言葉を探す。

「ぐすっ、……い、いえ、うっく、……これは嬉し泣きですっ」

そう言うと、クリスティーナは、首を小さく傾げて笑顔を見せた。

そうやって見せた笑顔は、破壊力抜群だった。

童貞の俺としては、オーバーキルもいいところ。

最高にあたふたとしてしまうのが情けないわ。

ピッ。

『規定レベルに達しました。彼の地への滞在制限を解除します。』

ピッ。



## ダンジョンからの帰還

クリステイナーナが落ち着きをとり戻してから、アナウンスにあった言葉を思い出す。

たしか、『規定レベルに達しました。彼の地への滞在制限を解除します。』つと言っていたはずだ。

もしかすると、これは文字通り、異世界にいつまでも居ていいよって、

ついに、お許しがでたと考えていいのだろうか。

その肝心の承認元が、甚だ不明であるが。

しかし、せつかく降りた許認可だ。

ここは、有難くちょうだいしておこう。

これは本格的に、やまだの異世界ライフが始まっちゃった気がするわ。

異世界料理、ケモミミ、冒険と、夢がどこまでも広がる。

絶対に見つけてやるんだぜ、パラダイスワールドを。

さてと、この部屋を出てしまふ前に、報酬でもらった【アブダラの霊泉】を使っておかなくては。

しかし、これはどう使えばいいんだ？

特殊な呪文とか、スキルが必要だったらどうしよう。

おっと、

よくよく見てみれば、表示に使用方法が書かれていた。  
契約書の隅っこに書かれている、あの小さな文字みたいな感じ。

こんなのやまだでなければ、見落としてしまつところだったわ。  
書かれていた使用方法は、いたって単純なものだった。

『飲用又は、ふりかけるとのこと』

スケルトンの姿であれば、ふりかけるところだが。

今は、元の姿である聖女様だ、ここは素直に飲用してもらおう。

そのほうが、効く気がするじゃんね。

「クリステイナー、これを」

コルクのような蓋を開けて、【アブダラの霊泉】を渡す。

その際に、飲用することを伝える。

「あ、ありがとうございます。ご主人様、このご恩は決して忘れません」

霊泉を受け取るクリスティーナの手が、少し震えていた。

どのくらいの期間、スケルトンでいたかはわからないが、ついに、人間に戻る時がきて、思うところがあるのだろう。

やはり、この報酬を選んでよかった。

クリスティーナは、おそろおそろガラスの瓶に口をつけると、中に入っている液体を飲み干した。

「どうだ。何か変化は？」

「いえ、今のところは何も……」

クリスティーナが言う通り、見た感じこれといった変化はないように見える。

と、思っていた時だった。

クリスティーナの胸元が閃光のように輝きます。

「あっっ、ああああっあああああっ」

おう、なんかこう、すごく光ってるわ。

どのくらいかと言うと、家電量販店の照明コーナーくらいの眩しさだ。

逆に、心配になってしまっただけ、クリスティーナさんは大丈夫だろうか。

心配していたのも束の間、その光は徐々に弱まっていく。

そして、数十秒も経たないうちに光は消えてなくなった。

「クリスティーナ、大丈夫か？」

「はあっ、はあっ、もう大丈夫です。こ、これで元に戻ったのでし  
ょうか？」

あれだけのエフェクトを放って、何も無いわけ、ないだろうとは思  
うが。

一応、ステータスを確認。

右よし、左よし、ステータスよし、ってやつだ。

名前：クリステイナ・M・ブルーオーシャン

性別：女

種族：人間

ジョブ： 聖女

レベル：17

HP：214

MP：320

STR：55

VIT：97

INT：205

DEX：127

AGI：65

ジョブに表示されている文字が、元聖女から『元』が消えている。

これは、霊泉の効果があったとみていいだろう。

「ああ、もう大丈夫だよ」

と言うと、クリステイナは胸に手を当てて、安堵を漏らす。

「よ、よかったあっ……」

こんなに嬉しそうな姿を見ると、こっちまで嬉しくなるよな。

「ご褒美タイムも無事に終わり、ダンジョンの最深部を後にする。

前回と同様、ログに帰還を問う項目が表示されたが。

『スタート地点に戻りますか？ はい／いいえ』

これに、『いいえ』を選ぶ。

『はい』を選んでしまえば、元の世界へ戻ってしまうからだ。

「さてと、地上へ戻るか」

「はいっ、ご主人様」

元気をとり戻した、クリステイナが答える。

クリステイナが裸足だったことに気がついた俺は、アイテムパ  
ックから予備のスニーカーを渡す。

履いてみると、かなりブカブカだったが、地上に出るまでは、こ  
れで我慢してもらおう。

『マップ』を視野の隅に表示させて、ダンジョンを進む。

一度、通った道ならダンジョンの中でも表示されるので、迷わずに済む。

おまけに、魔物も表示される高機能のおかげで。

事前に魔物の位置を把握して、サクサクと狩りながらダンジョンの出口まで、苦勞することもなく来ることができた。

ダンジョンから出ると、太陽の光に目を細める。

チラリ、横を伺えばクリスティーナも同じようにしていた。

「ご主人様、まぶしいですねっ」

「ああ、ダンジョンは明かりがあるとはいえ、地上よりも暗いからな」

「はいつ、スケルトンだったときよりも、全てが新鮮に見えます。

この太陽の光も、肌をふれる風も、それに人の喧騒さえも……」

「これから色んな体験をして、スケルトンだった時間をとり戻せばいい」

「はいつ、ご主人様」

俺にしてみれば、その満面に浮かんだ笑顔のほづが、よっぽど眩しいけどな。

スケルトンだったクリスティーナよりも、今の聖女様の姿に慣れる方が、時間掛かりそうだ。

そして、きゆるきゆる、お腹が鳴る音が聞こえた。

その音源は、横にいるクリスティーナだ。

「はづつ、あわわ、ごめんなさいっ」

と、顔を真っ赤にして慌てるクリスティーナ。

それを見て、思わず笑いがこぼれた。

「はっはは、まずは腹ごしらえからだな」

「……はい」

屋台で賑わう人々の中へ、俺とクリスティーナは進む。





## 迷宮都市と靴

ダンジョンを出て、屋台通りを歩く。

出口付近は何やら騒がしかった。

しかし、警備していた衛兵に、少し変な顔をされたものの、特に何も言われる事もなく、通る事が出来た。

屋台通りは、以前来た時と同様に賑わいを見せている。

そして、前と同じように食欲をそそる香りが、鼻腔をくすぐり続けた。

しかし、今は食欲に負けるわけにはいかない。

今回の食事は、クリステイナーのお祝いも兼ねているので、もっとしっかかりとした店舗でしようと思っている。

幸いにも、『アリス魔法商店』でスライムの魔石を売って得たお金があるから、少々お高い店でも足りないということはないだろう。

まあ、もし、足りないときはアレだ。

大量に保有している魔石を、いくつか置いていけば何とかなるだろう。

「ご主人様、どこの屋台も良い匂いがしますねっ」

「ああ、どれも美味そうだな。だけど、今回は屋台じゃなくて店に入るうと思うけど、いいかな？」

「よろしいのですか？」

「スライムの魔石を売ったお金もあるし、大丈夫だよ」

と、思ったけど。

今のクリスティーナは、ジャージにブカブカのスニーカー姿だ。

俺ならそれでも構わないけど、さすがに新調したほうがいいだろう。

ドレスコード以前、女の子相手に、こんな格好させておくのは忍びない。

その事をクリスティーナに伝えると、

「服でしたら、ご主人様から頂いた、これがありますので不要です」

と、言われてしまった。

スケルトンから人間に戻っても、健気なクリスティーナさん。

それでもやはり、サイズの合っていないスニーカーは、靴擦れの原因にもなると、力説をして何とか靴だけは買うことになった。

後ろ髪を引かれながらも、屋台通りを後にして。

迷宮都市の、大通りへ向かう。

あの辺りなら店が並んでいたはずだ、きっと見つかるだろう。

靴屋を探して、あっちへウロウロ、こっちへウロウロ。

勝手がわからずに、大通りを歩いていると、

「ああ、やっぱり、ヤマダさんだ」

お声がかかった。

一体、誰だろうか。

振り返ってみれば、トレイン騒動で途中までご一緒した、商人のニコライさんだ。

「これは、これはニコライさん」

そう返事をする、ニコライさんは元々浮かべていた笑顔を、さらに破顔させた。

「ご無事でなによりです。あの節は、大変お世話になりました」

「いえ、ニコライさんこそ、ご無事でなによりで」

「しかし、あの TRAIN を止めてしまうとは……ヤマダさんは一体……」

何者と言われても、フリーターですけど。

週3勤務で、ごめんなさい。

「何者のもなにも、只の、駆け出し冒険者ですよ」

「駆け出し冒険者ですか……まあ、詮索はよしましょう。」

ところで、何かお探しのようですが、私でよかったら協力させていただきます。

「こう見えても、ここらでは多少、名の知れた商人のつもりです」

そう申し出てくれた、ニコライさんに靴屋の場所を尋ねる。

ニコライさんが教えてくれた靴屋の場所は、大通りにあるようで。

「ここからも、そう遠くはない。」

お礼を言つて、別れようと思つていると、

「もし、お時間が空いていれば夕食をご一緒させて頂きませんか？  
あの時、助けてもらったお礼をさせてください」

「いや、お礼を貰うような事はなにも……」

と、言ったものの、ニコライさんの意思は硬く、夕食を「馳走になる事になった。」

アレはついでと言うか、成り行きだったので、改めてお礼とか言われると少しむず痒いな。

そして、今はニコライさんから、教えてもらった靴屋の前に来て  
いる。

さっきほどまでの場所から、徒歩で数分とかなり近かった。

店構えも立派で、高級店の雰囲気を放っている。

木製のドアを開くと、カラン、カランと澄んだドアベルの音が響いた。

「いらっしやいませ」

執事のようなナイスミドルが出迎える。

「あの、ニコライさんの紹介で来たのですが」

「ニコライ様の……!?!」

結果から言えば、ニコライさんの名前は絶大だった。

そのおかげで、通常価格の半額で買うことが出来てしまった。

ニコライさんは、多少と言っていたけど、もしかすると、ここいらでは顔なのではないだろうか。

デザインの良い皮製の靴を買って、店を後にする。

クリスティーナは、プレゼントした靴を気に入ったのか、終始、満面の笑みだ。

時折、靴を眺めては「えへっ」と、嬉しさを漏らしている。

それだけ喜んでもらえれば、買った甲斐があるってものだ。

さて、靴屋の後に来てくれと、ニコライさんは言っていたな。いよいよ、本格的な異世界料理が、食べれると思うと胸が躍る。

まだ見ぬ、異世界料理へ思いを馳せながら、

待ち合わせ場所である店へ向かう途中だった。

「ようやく見つけたわ、探したのよっ！」

そう、声を掛けられたのは。



## 迷宮都市とご飯

「ようやく見つけたわ、探したのよっ！」

誰かと思えば、ローズさんとクリアさん。

この二人に会うのは、冒険者ギルドから、逃げだして以来だ。

ところで、クリアさんの心の傷は、もう大丈夫だろうか。

結果的に間に合ったとは言え、暴行される寸前だったからな。

その傷の深さたるや、トラウマものだろ。

「これはこれは、ローズさんにクリアさん」

「なんであの時、逃げたのよっ？」

なんでって、メンドクサイからだよ。

絶対に事情聴取とかされて、長時間拘束されるじゃんね。

下手すれば異国の出を理由に、変な容疑をかけられる可能性だってあるだろ。

前に読んだやつに書いてあったもん、間違いないって。

「ちょっと、用事を思い出して……」

「ちょっと用事って……まあ、いいわ」

「あつ、あの……」

と、ここでクレアさんからお声かけ。

桃色のローブ姿に、両手で杖を握った姿がとてもキュートだ。

「この前は、助けて頂きありがとうございましたっ！」

そう言い終えた後に、ペコリと頭を下げるクレアさん。

勢い良く頭を下げたせいか、ローブがふわりと、舞い上がって白い素足がチラリ。

ポーカーフェイスで決めなければ、ガン見してしまうところだった。

あぶない、あぶない。

「いえ、間に合って何よりです。お怪我は、もう大丈夫ですか？」

「はいっ、おかげさまで。この通り、傷も残っていません」

なるほど、思っていたよりも、元気そうで良かった。

ダンジョンに潜るくらいだ、きっと、芯は強い子なのだろう。

「それで……貴方の後ろに、連れている人は誰かしらっ？」

誰って、クリステイーナさんですよ、ローズさん。

と、言っても以前に会ったのは、スケルトンの姿だったけど。

その辺をザックリと説明させて頂くこと、かくかくシカジカ、まるまるウマウマ。

それはもう、目をまんまるにするとは、この事かというぐらい驚いていた。

未だに、二人の口があんぐりと、開きっぱなしだ。

こちらの世界でも、こんな事は滅多にないらしい。

二人の反応で、わかつちやったわ。

「あらためて、よろしくお願いしますっ。ローズさん、クレアさん」

「よろしくね、クリスティーナ」

「よろしくお願ひしますっ、クリスティーナさん」

クリスティーナが挨拶をすると、ローズにクレアと挨拶を返した。

「と、言うワケで、これから待ち合わせがあるので行きますね」

そろそろ、お店に行かなくては、ニコライさんを待たせてしまい  
そうだ。

「と、言うワケでって……、ちょっと待ちなさいよっ！ 私も行く  
わっ」

いや、ダメだろ。

お呼ばれする側が、勝手に人を増やしちゃいけないと思うんだ。

と、説明するものの「大丈夫よっ」と言って、一步も引かない口  
イズさん。

結果、なし崩し的に、ローズとクレアさんが加わって、待ち合わせ  
せのお店に向かうことになった。

まあ、ローズとクレアさんの分は、俺が出せばいいか。幸いにも、ニコライさん効果で靴がお安く買えた為、まだ懐が暖かい。

多分、大丈夫だろ。

銀座の回らないお寿司だっけいけるって。

大通りから、一本入った通りに待ち合わせのお店はあった。

ここいら一帯は、大通りと比べてみても、比較的に高級店が立ち並んでいるようだ。

そして、目的地であるお店はと言つと。

その中でも、さらに高級そうな雰囲気だ。

というのに、この格好で突入してもいいのだろうか。

一人はバイク用プロテクターつけているし、クリスティーナにいたってはジャージ姿だ。

しかも、高校指定の紺色ジャージである。

ここが銀座であれば、「お客様、その格好では」と、言われてしまふこと山の如し。

とは言え、これ以上ニコライさんを待たせてもいけないので、入っ

てしまうか。

重厚な木製のドアを開いて、中へと進む。

すると、これまた執事スタイルのナイスミドルが。

ここいらでは、これがステータスを示す、アレだったりするのだろうか。

ウチのナイスミドルがすごいのよ、いやいやウチの方が、的な感じのやつってあるじゃんね。

「ニコライさんと待ち合わせをしているのですが」

「ヤマダ様ですね、お待ちしております。こちらへどうぞ」

華麗な一礼を決めたかと思うと、流れるような動作で案内を始めた。

どうやら、今回の会場は個室らしい。

ナイスミドルがドアを開けて、中へと入るとニコライさんが待っていた。

俺達を見て、にこやかな笑顔から一転、驚きの表情に変わる。

勝手に人数を増やしちゃったのが、まずかったか。

「シャーロット……王女……!?!」

## ローズのお願い

「シャーロット……王女……!？」

驚きの表情を浮かべたニコライさんが、声を漏らす。

シャーロット王女って、誰だろう。

なんとなく、その名に覚えがあるけど、思い出せない。

シャーロット、シャーロット……。

ああっ、わかった。

確か、ローズの本名がシャーロットじゃなかっただろうか。

以前、ステータスを確認したときに、見た気がするぞ。

「貴方は確か、御用商人のニコライだったかしら？」

今日は、一冒険者のローズよ。そう、接してもらえると嬉しいわ」

と、答えるローズさん。

シャーロット王女で、間違いないようだ。

それにしても、ローズが王女ってマジか。

何で、冒険者なんかやっているんだよ。



「わかりました。では、そのように」

ナイスミドルと、同じようにローズに向かって、一礼をするニコライさん。

それから、本家ナイスミドルにイスを引かれて席につく。

丸いテーブルを囲んで、正面にニコライさん、左にはクリステイナ、右にはローズ。そして、ローズの横にクレアさんが座る配置だ。

「しかし、ヤマダさんが、王女……いや、ローズ様のお知り合いだったとは驚きました」

俺も、驚いたじゃんね。だって、初めて聞いたし。

「彼には、仲間の命を救ってもらったことがあるのよ」

「それは奇遇ですね、私もヤマダさんには、助けられた経験があります。今日も、そのお礼をしたくて、食事の機会を頂いたのでよ」

などと、会話が進むうちに、数人の給仕によって食事が運ばれてきた。

どうやらコース料理のようで、一品目はスープだ。オレンジ色のスープが、陶器の大きめなお皿に盛られている。

湯気が運ぶ、美味そうな匂いが堪らないな。

そして、グラスにワインのような物が注がれ、準備は完了のようだ。

ニコライさんが、グラスを掲げる。

それに合わせるように、皆がグラスを掲げた。

「それでは、始めましょうか。ヤマダさんに感謝をつ！」

ニコライさんの合図で、グラスのワインに似た液体をゴクリ。

やはり、見た目通りワインのようだ。

葡萄の芳醇な香りが、鼻を抜ける感じが気持ちいい。

そして、スープをスプーンですくって口に運ぶ。

少し、酸味の効い濃厚な豆のスープ。

後からくる、ピリツと辛い、香辛料の味がスープをすくう手を止められない。

「そういえば、以前一緒にしたダンジョンが踏破されたようで、『レコード』にはヤマダさんと同じ名前が刻まれていましたが、もしかして……?」

ニコライさんからのお問い合わせ。

って、もう知れ渡っているの。

さすが、迷宮都市、情報が早すぎるだろ。

さてと、どう答えたものか。

隠したところで、特にメリットもあるわけでもないし。

普通に、答えちゃってもいいだろう。

「はい、ニコライさんが仰る通り、ここにいるクリスティーナと一緒に踏破しました」

と、言ったところ。

何故だが、クリスティーナ以外の全員から視線が集まる。

あれ、マズイことでも言ってしまったか。

もしかして、勝手に踏破しちゃうと、ダメな感じだったらどうしよう。

いや、でも。出口で警備兵に、何も言われなかったし。

大丈夫、大丈夫。……たぶん。

などと思いつつも、次の言葉を待つ。

「やはり……ヤマダさんでしたか。さすがと言ったところですね」

と、ニコライさん。

よほど、トレインを撃破した事実がニコライさんの中で大きいようだ。

「あの、あれは、そんなに難しいダンジョンだったのでしょうか？」

「っ……」

またしても、フリーズ。

ややあって、今度はローズさんの口が開いた。

「知らなかったのっ!?! あのダンジョンは今まで、誰もクリアされていなかったのよっ」

少し興奮気味で語る姿を見るに、大事件の予感。

チラリ、横を見ればスプーンを両手で握りキョトンとした様子。薄々感じていたけど、このクリステイーナさん、ダンジョンには余り詳しくないらしい。

ローズの力説を聞くに、あのダンジョンは比較的に新しいものようだ。

しかし、ダンジョンの探索者として有名な『ニッカー』が、攻略を断念したことで、一躍有名に。

ダンジョン入り口付近が、賑わっていたのもそれが原因らしい。

きっと有名探索者が断念したダンジョンを踏破して、名をあげようとしている冒険者達なのだろう。

それが、ついに攻略され、『レコード』に踏破者の名が刻まれた。そのニュースは瞬く間に、迷宮都市に広まり、今一番ホットな話題になっているだとか。

「いやあー、憧れますよ、ヤマダさん。いつかは、『レコード』に自分の名も刻んでみたいものです」

と言ったニコライさんにローズが、うんうんと頷く。

ローズも、かなりのダンジョン好きらしい。力説しているときの目が、マジだったもん。

そういえば、ローズは何でついて来たのだろうか。  
何か用事でもあったような、雰囲気だったけど。

「そういえば、ローズさん。自分に何か用事でもあったのではない  
ですか？」

さりげなく、お声がけ。

「そ、そうよっ、貴方に頼みたい事があって来たのよっ」

一応、ローズは王女らしいし、出切る事なら受けておいたほうが  
良さそうな気がする。  
やっぱ、コネは大事だって、叔父のよしえさんが口癖のように言っ  
てたからな。

女装で、黄昏る姿は結構くるものがあった。

「なんでしょっ」

「あ、貴方に、護衛依頼をしたいのっ！」

ローズさんからヤマダに、ご指名が入ってしまったぞ。

## ローズのお願い2

「あ、貴方に、護衛依頼をしたいのっ！」

ローズさんからご指名を頂いたけど、これは一体どういうことだ。

「どづいづいことでしょうか？」

「実は……」

かくかくシカジカ、まるまるウマウマ。

ザックリと、まとめてしまえば、こんな感じ。

どうやらローズには、異母姉妹の姉がいるらしい。

第一子である姉よりも、正室の子であるローズの方が継承権が高く、それを良く思わない姉から、命を狙われているとのこと。

今回は、その護衛をしてほしいようだ。

「私の冒険者としての階級は、『黒曜石』よ。

これは下から数えて二番目。それなのに、指名依頼が来るなんてあ

り得ない。」

「畏の可能性があると？」

「ええ、間違いないわっ」

「その依頼を断ることは、できませんか？」

畏とわかっていて、わざわざ突っ込んでいく必要なんてない。

「それはできないわよっ、冒険者が依頼を断るなんて信念に反するわっ！」

何の信念だよ、ローズさんあなたは、ブレイキの壊れたトラックですか。

しかし、止めたところでいっってしまうんだろうな。

だって、握り拳を作りながら、熱く語っちゃってるもん。

「もちろん、前回のお礼も上乘せして、お礼は弾むわ」



まあ、しゃーないよな。

知り合ってしまった以上、見殺しにはできないわ。

「わかりました、受けましょう。で、その受けた依頼とは？」

「ゴブリン退治よっ！」

その後、終始和やかな雰囲気、ニコライさん主催のお食事は進んだ。

運ばれ続けた料理は、見た事がない肉や野菜と、刺激的だったが。

どれも、美味しい物ばかりだった。

宴もたけなわ、腹もこれ以上入らないといったところで店をでることに。

「ニコライさん、ご馳走様でした」

「いえ、こちらこそ、楽しい時間をありがとうございました」

「では、ローズさん、後ほどに」

「ええ、よろしくお願いするわ」

みんなに見送られながら、その場を後にする。

気がつけば、陽もすっかりと暮れ、町並みは夜の様相に。

さて、今日の宿を探さなくては。

さすがに、知らない街で野宿とかハードルが高い。

「ご主人様っ、とても美味しい食事でしたねっ」

満足気な表情をしたクリスティーナが、声をかけてきた。

確かに、クリスティーナが言うように、もう一度食べに行きたくなる味だった。

「ああ、ダンジョンで稼いだら、また食べに行こうな」

「はいっ、私がんばりますねっ!」

「そっだ、クリスティーナ」

「なんでしよう、ご主人様っ」

「今日は、エルザの、『猫のマタタビ亭』に泊まるっかと思っけど、  
どうかな？」

この街に疎い俺には、そこぐらいにしか当てがない。

「ダンジョンで、ご主人様が助けたあの猫人族の方ですね。いいで  
すねっ、いきましよう！」

と、大袈裟に手をあげて答えるクリスティナ。

なんだか、普段よりも動作がオーバーな気がするし、頬も桃色に  
染まっている。

これは、もしかすると、酔っ払っているのかもしれない。

そういえば、給仕に注がれるまま、ワインを飲み干していた気が  
する。

確認しただけでも、4、5杯は飲んでいるじゃないだろうか。

まあ、アレだ。楽しそうにしている何よりだ。

俺もほろ酔い気分で、気持ちいい。

夜風を頬に受けながら、街を歩く。

街灯がある為か、日が暮れた今もそこまで暗くない。それどころか、オレンジ色の暖かい光が、建物や歩く人々を照らす姿は異国情緒あふれる。

『猫のマタタビ亭』は、名前だけしか知らなかった為、歩く人にその場所を聞くと、すぐにわかった。

それなりに、この街では有名らしい。

程なくして、『猫のマタタビ亭』に着く。

猫をあしらった木製の看板が、印象的な宿だ。

木造建築の二階建て、そこまでは大きくないが、温かみのある雰囲気がいい。

木製のドアを開けると、まさに、お目当てのエルザがお盆を持って立っていた。

俺達を見て、エルザが固まる。

お尻のシッポなんか、ピンツと直立不動だ。

「おっ、おっ、お……、お化けニヤ ツ……!!」

エルザの叫び声が、猫のマタタビ亭に響き渡った。

「い、いめんニヤ……てつきり、お化けかと思ったニヤ」

エルザの母親、つまり猫のマタタビ亭の女将に「お客さんをお化け扱いするとは何事か」と、怒られたエルザが謝る。

まあ、気持ちにはわからないでもない。

なにせ、『送還』で、目の前から突然消えてしまったしな。

「もう気にしていないから、大丈夫だよ」

「でも、来てくれて嬉しいニヤ。ヤマダは命の恩人だから、うんとサービスするニヤ」

と言うエルザに、部屋へを案内されて入る。

今回は、部屋を二つとることにした。

男女が一つ部屋にいたら、もしかしたら、もしかしたら、もしかしたら、と、言っても、そんな勇気があったら、この年まで童貞してないけどな。

「じゃあ、クリステイーナ。また明日」

「は っ」

おう、ご機嫌さんだなクリステイーナさん。

「では、ゆっくりニヤ」

そう言い残して、エルザはパタパタと去っていった。

他にもお客さんで賑わっていたし、きっとエルザはエルザで忙しいのだろう。

ベットに身を投げると、お酒が入っているせいか、眠気が襲ってきた。

ギギイ ッ。

ドアが開く音で、目が覚める。

どっちら、少し眠っていたらしい。

ドアの向こう、顔を赤らめた姿で立っていたのは、クリスティーナだった。

「……クリスティーナ？」

### ローズのお願い3

「……クリスティーナ？」

ドアの向こう、顔を赤らめた姿で立っていたのは、クリスティーナだった。

こんな夜更けに、どうしたのだろうか。

もしかして、これは夜這いという名のやつ。

マジか、マジか。まだちょっと、心の準備が出来てないのだけど。

「いじゅじゅたまあ……」

ゆっくっりと、部屋に入ってくるクリスティーナ。

その瞳は潤んでいて、桃色に染まった頬と、あわせてすごく色っぽい。

どうしよう。このまま、ビッグウェーブに乗ってしまっているのだろうか。

しかし、どきまぎするも、すでにタイムアウト。

クリスティーナさんの顔が近い、吐息が届く距離ってやつだ。



肌から漂う、甘い香りが脳を熱くする。

ストンッ……。

……あれ？

間近まで、迫っていたクリスティーナの顔は、俺の横をすり抜けてベットへダイブした。

どうやら、夜這いではなく、寝ボケていたらしい。

少しホツとしたような、俺の純情を返せと言いたいような、複雑な気分のまま。

クリスティーナに上掛けをかけて、一階のエリザから布団を一組借りに行った。

俺の今日の寢床は、床に決定したようだ。

翌日、日が昇ると同時に、一階の食堂へと向かう。

クリスティーナは、まだ眠ったままだ。

とても気持ち良さそうに寝ているので、起こしてしまうのは、なん

だか可哀想な気がして、そのままにしてきた。

食堂は三つほどの、テーブルが並ぶ広さで、まだ朝が早いせいか、他の客は見えない。

「おはようニヤ、良く眠れたかニヤ」

と、入るなりエルザから、挨拶をもらう。

俺が起きて来るよりも早く、作業をしていたらしい。結構早く起きたつもりだったけど、一体いつ起きたのだろう。

見た目とは違い、中々の働き者だ。

「おはよう、おかげさまで良く眠れたよ」

椅子に、腰をかけながら答える。

すると、テーブルにコーヒーに似た飲み物が置かれた。

「これは？」

「コーヒーニヤ、朝の目覚めに一杯どうぞニヤ」

「ありがとう」

エリザにお礼を言い、コフィーと呼ばれた温かい飲み物に口をつける。

名前もよく似ているが、味もコーヒーにソックリだった。

まさに、ブラックコーヒー。

目覚めの一杯といえばこれだよな、コーヒー党の俺としてはありがたい。

「しかし、あのダンジョンでヤマダは突然消えたけど、アレは何かの魔法かニヤ？」

おっと、良い方向へ勘違いしてくれたみたいだ。  
さすがに、『送還』について、上手く説明できる自信がない。

何て言ったって、自分自身でさえ、完璧に理解していないからな。

「に、似たようなものかな……」

「おおっ、やっぱり魔法かニヤッ！　すごいニヤ、私は魔法なんて使えないから尊敬ニヤァッ！」

感嘆をあげるエルザに対して、騙したよつで心苦しいが、「こ」はこれで通すしかない。

「そういえば、あの後パーティーメンバーとはどうなったんだ？」

突っ込まれる前に、話題を変えてしまえ。

「あんにゃやつらは、もう知らないニャー！」

どうやら芳しくない様子、さすがにトレインを前にして一人、置いていかれてはシコリが残ってしまったのだろう。

「そうか、悪い事を聞いてしまったな……」

「いいニャ、いいニャ。それよりもご飯はまだニャ？」

と言うと、ニヤリと笑うエルザ。

厨房に入ったかと思うと、すぐに大きな皿を持ってきた。

「猫のマタタビ亭、名物の猫マンマをご堪能あれニャ」

目の前に置かれたそれは、米に似た物の上に、炒めた肉や野菜などがのった丼もの。

確かに、名物というだけに美味そうなのだが、朝食としては些か、へビーな気がする。

だけど、出された以上は食べないとダメだよな。

なんとか猫マンマを食べ終えて、一度、部屋に戻ることにした。

そろそろ、クリスティーナを起こさないとな。

食堂を出る際に、エルザが「あれを食べきるとは、恐るべきニヤ」と言っていたのが聞こえた。

あの野郎、食べきれない量を出しやがったなど、思いながらもパンに膨れた腹を抱えながら、二階の部屋へとあがる。

ドアを開けて迎えたのは、ベットの上で正座をしたクリスティーナ。

「ご、ご主人様、も、も、申し訳ありませんっ！」

日本人には、御馴染みの土下座スタイル。

こっちの世界でも、この謝り方が一般的なのだろうか。

「ああ、昨夜のアレか」

「は、はひっ」

「とくに何かあったわけじゃないし、そんなにも謝らなくても大丈夫だよ。それよりも、下の食堂で朝ご飯食べておいで」

「ありがとうございますっ、わかりました!」

「あっ、クリスティーナ」

「は、はいっ」

「猫マンマが、ここの名物らしいから、頼んでみたら?」

「ひどいですっ、ご主人様……」

猫のマタタビ亭を出て、ローズとの待ち合わせ場所へ向かう途中、クリステイーナが不満を漏らす。

俺の言葉を、素直に従ったクリステイーナは、猫マンマの洗礼を受けたようだ。

「あはっはは、でも味は良かっただろう？」

「美味しかったですけど、うっ、くるし……」

ローズとの待ち合わせは、街の外れにある乗り合い馬車停。猫のマタタビ亭から、徒歩で20分ぐらいの場所にあるらしい。

宿を後にする際に、女将さんから教えてもらった。

そして、女将さんは「娘の恩人からは、お金はもらえないにや」と、宿代を受け取ってはくれなかった。

おまけにお弁当まで頂戴してしまって、まさに至れり尽くせりとはこのこと。

今度は、ちゃんと宿代を払って、泊まりにいかなくてはなと思う。

などと、考えながら歩いていると、待ち合わせ場所に到着。

そこには、ローズとクレアさんの姿が見えた。

少しばかり早く着いたかと思っていたが、もうすでに、待っていてくれていたようだ。



## ローズのお願い 4

「待ってたわっ！」

着いて早々、元気なローズさん。

それに引き換え、クレアさんのなんと、優しげなことだろう。

「おはようございます、ヤマダ様にクリティナーさん」

何故、クレアさんが、俺だけ様つけなのかはわからない。

しかし、今は、こんな美少女にお金を払わずにして、様つけで呼んでもらえることの悦に浸ろうと思う。

きっと、歌舞伎町であれば諭吉さんが、かかると思うんだ。

「おはようございます、お待たせしちゃいましたか？」

「おはようございますっ、ローズさん、クレアさん」

クリスティーナも挨拶を交わしたところで、

「いいのよっ、私たちが、ちょっとだけ早く来てしまったただけだからっ」

「と、言っています。夜も明けきらぬ、前からローズ様が出発すると騒ぐもので……」

と、クレアさんが突っ込む。

よく見てみれば、ローズの目が少し赤い。

もしかすると、昨日はあんまり、寝ていないんじゃないだろうか。

「ク、クレアッ、余計なこと言わないのっ!」

すごく、慌ててるローズ。その姿を見るに、凶星を突かれてしまったのだろう。

しかし、ローズとクレアさんって、どんな関係か気になってしまっ  
な。

仮にも、ローズは王女なワケだし。

どこの国の王女かは、わからないけどさ……。

そもそも、ここがどこの国かわかってないのは、さすがにマズイ  
気がしてきた。

今日日、迷子だって自分のいる国くらいわかっている。

もし、ここはどの国ですか？

なんて聞くのものなら、もれなく可哀想な子を見る目で見られちゃうだろ。

「ど、どうしたの？ そんなに深刻そうな顔をして……」

「いえ、お気になさらずに」

おふう、顔にでちゃってたか。

「乗り合い馬車停で待ち合わせは聞いていましたが、これに乗ってどこへ向かうのですか？」

「ポロロ村よ、馬車で半日といったところねっ」

それから、詳しくローズが指名依頼されたと言う、内容を教えてもらう。

どうやら、その村ではゴブリンによる被害が相次いでおり、ホトホト困り果てているようだ。

今回は、その駆除が依頼内容だという。

内容がわかったところで、馬車が到着。

他に乗客はいないらしく、貸切状態だ。

後ろの幌車に乗り込んで、馬車は目的のポロ口村へ向かって走りだす。

カタカタと揺れるものの、想像していたよりも乗り心地はわるくない。

「あの、ローズさんとクレアさんはどういった関係なのですか？」

気になっていたところをドンピシャ、質問するクリスティーナ。

ローズは御者の方をチラリ、伺って話します。

「私の事は以前、話したわね。クレアは、近衛所属の護衛よ」

「それにしても、仲がよろしいようですが？」

と、クリスティーナ。

「ええ、クレアとは幼少の時から仲よ。俗に言う、幼馴染と言っのかしらね」

なるほど、道理で仲が良いわけか。

「そ、そちらの、かつ、関係はどうなのかしらっ？」

「俺と、クリステイーナですか？ どんな関係もなにも、大事なパートナーメンバーですよ」

大事だいじなと言った部分に反応してか、クリステイーナがモジモジと俯うつく。

心なしか、顔が赤い。

もしかして、クリステイーナさん。お友達が少ないのだろうか。

大丈夫、俺も少ないから。

「そ、そ、それならいいのだけれどっ」

なにがいいのかサッパリだけど、本人がいいのなら、いいのだろう。

こんなこんなで、パカパカと馬車は進む。

途中、何度か休憩を挟みながら。

お日様が真上にあがったお昼頃、目的の場所であるポロロ村に着いた。

20世帯ほどの大きさだろうか、さつそく依頼主である村長の元へ向かう。

「ようこそ、ポロロ村へ」

笑顔で迎えてくれたのは50代と思わしき男性。

背はあまり高くはないが、農作業で鍛えられた筋肉が印象的だ。

「さつそくだけど、現場を案内してもらえるかしら？」

挨拶もそこそこに、開口一番、ローズが案内を村長へ頼む。

その姿は、やる気がみなぎって思える。

「さすがは冒険者の方々、その勤勉さに敬服いたします。ええ、わかりました。こちらです」

着いて早々、村長の案内で、ゴブリンが出没するという現場へ。

村か外れ、20分くらい歩いた先に、その場所があった。

なんの変哲もない草原、馬車で走ってきた道と大差ない場所だった。

こんな所に、ゴブリンが出没するのだろうか。

「本当に、ここで合っているのかしら？」

ローズが、疑問を口にする。

「どうやら、そう思っていたのは、俺だけじゃないらしい。」

「……わ、悪いが、これも全て村の為なんだ」

そう言った、村長が突然、走り出す。

呆氣にとられその姿を見ていると、鎧が擦れる音と共に、武器を持った男達があらわれた。

数にして30人くらいだろうか、俺達を取り囲むように立ち並ぶ。

ゴロツキと言うよりは、どごその傭兵団のような格好だ。

「ハメラれたわねっ」

と、言つとローズは腰にかけた剣に手を伸ばす。

「ええ、そのようです」

なんて答えたけど、まさか村ぐるみとは思わなかった。

色々と、大事な予感がする。

「シャーロット王女。アンタには恨みはねえが、ここで死んでもらうぜ」

そう言った、リーダーらしき男が、腰の剣を引き抜く。



## ローズのお願い5

「シャーロット王女。アンタには恨みはねえが、ここで死んでもらうぜ」

リーダーらしき男が、腰の剣を引き抜く。

それに応じて、周りを取り囲む男達も武器を構える。

しかし、これだけの人数を用意するとは、どれだけ、ローズに消えてもらいたいと思っているんだろう。

ちょっとだけ、特権階級の闇を覗いた気分。

兎にも角にも、ステータスだ、ステータス。

相手のレベル次第では、逃げることも考えないといけない。

名前：ケロノア

種族：人間

性別：男

ジョブ：傭兵団リーダー

レベル：18

HP：265

MP：81

STR：74

VIT : 88  
INT : 36  
DEX : 44  
AGI : 67

リーダーっぽい男のステータスを表示させる。

見れば、冒険者ギルドで戦った『黒鷹』と、あまり変わらない。さっと、他の男達も流し見たが、どれも似たり寄ったり。

リーダーよりも、高レベルは見当たらなかった。

で、自身はどうなのよ、とステータスの再確認だ。

名前 : ヤマダ タケシ  
種族 : 人間  
性別 : 男  
ジョブ : 冒険者  
レベル : 40  
HP : 1020  
MP : 854  
STR : 330  
VIT : 340  
INT : 315  
DEX : 290  
AGI : 425  
ストックHP : 10  
スキルポイント : 20

おお、ついにHPが4桁に。

しかも、レベル40になってスキルの大幅上昇している気がするぞ。

もしかすると、このレベル40は一種の節目なのかもしれないな。

拡張パックで、レベルキャップが開放！ 大幅ステータスアップ！

みたいなのってあるじゃんね。

よし、これで情報は揃った。

目の前の敵に、意識を集中させよう。

(クリスティーナ、ローズとクレアさんを頼む)

(は、はい、わかりましたっ！)

これだけいけば、とり逃がしも有り得る。

後衛にクリスティーナがいれば、万が一の事故にも対応できるはずだ。

アイテムパックから、『始まりの剣』と言う名のバットを取り出して構える。

「おいおい、兄ちゃん。これだけの人数を前にしてやる気がよ？」

ニヤリと笑いながら、ケロノアが言う。

強面がそうやるのだから、ちょっと迫力がある。

「何事も、やってみないとわかりませんよ」

何気ない会話でも、ジリジリと距離を詰めてくる様が、場慣れを感じさせる。

鎧の上からもわかる屈強な筋肉。それに、着込んでいる鎧にも、細かな傷がついており、醸し出す雰囲気は歴戦の戦士のそれ。

だからと言って、負けるわけにはいかない。

俺が負けてしまえば、クリスティーナやローズのステータスでは、太刀打ちできないはずだ。

その後の事を考えれば……いや、考えたくないな。

今、絶対を守るって、覚悟を決めただろ。

と、思ったところで、バットが光輝き始める。

あまりの眩しさに、思わず、手放してしまいそうになるほど。

ピッ。

『実績が解除されました。』

ピッ。

『一部、制限解除。形態が変化します。』

と、ログが流れたかと思うのも束の間。

バットから、片刃の戦斧へと形が変化する。

おう、マジか。

【始まりの剣：Lv2】

持ち主と共に、成長する武器。

その姿は、持ち主の望む姿へと変える。

ステータスに10%アップの補正。

何が、どうなってしまったのかはわからないが、パワーアップしてしまったマイウエポン。

とりあえずアレだ、考えるのは後にしよう。

「チツ、魔導具持ちか……」

バットの变化を見て、あからさまに警戒を強める ケロノア。  
その仲間達も同じように、警戒をしているようだ。

よし、まずは殴ってみるか。

囲まれた場合、そのボスを倒してしまえば、何とかなるって偉い人が言ってた気がする。

俺が知っている主人公達は、そうやって危機を乗り越えてきた。

全力でいけば、きっと、何とかなるって。

戦斧を握り直して、ケロノアめがけて全力で走る。

踏み込んだ地面が大きく抉れ、土埃が立ちあがった。

おう、おう。マジか、マジか。

想像以上のスピードに焦り、急ブレーキだ。

このままでは、距離を詰めるどころの話ではない、そのまま通り過ぎてしまう。

ブレーキをかけた右足が、地面にめり込む。

ケロノアは、このスピードに驚愕の表情だ。

当然だ、俺も驚いている。

せつかくなので、そのまま戦斧を振上げると、ブオンと豪快に風を切る音が鳴った。

しまった……！

完全に目測を誤ってしまったようだ。

振った戦斧は、ケロノアに当たることはなく虚しく空を斬り、そして衝撃波を生む

それは、地面を大きく抉った。

幅3メートル、長さ10メートルくらいの溝だ。

その溝を見て、ケロノアは顔を青くする。

「ば、化け物かよ……」

## ローズのお願い6

「ば、化け物かよ……」

俺達を囲む傭兵団リーダー、ケロノアが驚愕の表情で言葉を漏らす。

自身もまさか、空振りをした衝撃で、こんな溝が出来るとは思ってもいなかった。

しかし、これは好機かもしれない。

驚き固まったケロノアの腹部に向けて、戦斧の柄を打ち込む。

隙だらけだったせいも、すんなりと命中する。

ドゴツと、鈍い音を立ててケロノアは、錐揉みしながら吹き飛ばされた。

10数メートルは、飛んでいったんじゃないだろうか。

それを見た、他の団員が後ずさる。

リーダーがいとも簡単に倒されるのを目の当たりにして。自分達では勝てないと、判断でもしたのだろうか。誰も彼もが、ひどく引き攣った顔だ。



もう一押しと、いったところ。

適当な方向へ向けて、もう一度、戦斧を振るう。

刃が風を斬り、その衝撃波が地面を大きく抉りとる。

そして、先程と同じように、溝が地面に生まれた。

「実力の差は、明らかだつ！ 退けば、手出しはしない。それでも、やると言つのであれば、容赦はしないぞ！」

と、大声でハツタリを一つ。

どうだ……、これで退いてくれないかな。

チラリ、様子を伺えば団員同士、顔を見合わせている。

すると、ここで声があがった。

「ひ、退くぞ！ た、退却だつ」

鶴の一声、誰かがそう叫ぶと、一斉に傭兵団は走りだす。

かくして、傭兵団は脱兎のごとく、視界から消えていった。

その様子を見て、ローズ達が俺の元へ近寄ってきた。

「さ、さすがは、私が見込んだ男ねっ！」

と、ローズさん。

一体いつ、見込まれてしまったのだろうか。

「ご主人様、ご無事ですか？」

「ああ、この通り何ともないよ、クリスティーナ」

「あれだけの人数をほぼ無傷で、撃退してしまうとは……さすがです、ヤマダ様」

クレアさんからも、お褒めの言葉を頂戴してしまった。

心なしか、見つめる目がキラキラとしている。

もしかして、好感度上昇のお知らせだろうか。

「ローズさん、これが言っていたあの？」

「ええ、間違いないわっ。お姉様からの刺客よ」

やはり、姉からの刺客との事。

しかし、アレだ。毎度、撃退するにも限度がある。

根本的に、解決すべきなのではないのかと思う。

異母とはいえ、血を分けた姉妹だ。その辺、話し合って円満解決できないのかな。

「話し合いで、解決しないものなのですか？」

「そんなのはムリよっ、だって証拠がないのだから。問い詰めたところで、シラをきられるに決まっているわ」

その様子を見るに、どうやら一筋縄ではいかない人物のようである。

しかし、証拠ねえ……証拠つと……、あつたわ。

「証拠なら……、あそこに転がっていますよ」

俺が指した先に、傭兵団リーダーが泡を吹いて転がっている。どうやら、逃げる際に置いていかれたらしい。

可哀想なケロノアさん、団員の人望はそこまで厚くなかったよう

だ。

失神していたケロノアに、クリスティーナが回復魔法をかける。もちろん、登山用ロープで簀巻きにすることを忘れない。

「へえ、クリスティーナ。回復魔法使えたのね、すごいじゃない」

その様子を見て、ローズがそんな事を言っていた。

もしかしたら、回復魔法を使える術者は少ないのだろうか。

ややあつて、ケロノアの意識が戻る。

「うっ……」

さて、これから尋問をして証言を得なければいけない。

相手は仮にも、傭兵団のリーダーだ。

果たして、そう簡単に口を割ってくれるのだろうか。

「雇い主を答えなさい。素直に答えるなら、生かしておいてあげる

わっ  
「

目覚めて早々、ローズが問い詰める。

おう、答えなきゃ殺しちゃうのかよ。

ちょっと物騒ですよ、ローズさん。

「……答えたところで、どの道殺される」

口封じってやつだな、きつと。

海外ドラマとか映画で、よく見るじゃんね。

「殺しはしないわっ、だって大事な証言者だもの」

確かに、ケロノアは大事な証言者だ。

ここで、証言を得ると、得ないのでは結果は大きく違ってくる。

なにせ、村まるごと一つ使って、罠にはめようとしてくる相手だ。  
証拠の一つでもなければ、相手にされないだろう。

と、同じく。

ある物が、目に映る。

ケロノアのすぐ横に、キラツと光るコインのようだ。

ポケットからでも、落としてしまったのだろうか。

拾い上げてみると、金貨みたい。

だけど、俺が持っている大金貨よりも、一回り小さいな。

しかし、そこに彫られた意匠は凝っていて、中々の一品だ。量産品の雰囲気ではない。

俺が持つコインに気がついたのか、ローズが声をあげる。

「そ、それは……、ちょっと、見せてもらえるかしらっ?」

コインを渡し、それを持ったローズが、

「っ……!」

驚きの表情から、確信めいた表情へと変る。

「っ、これよ! これが証拠になるわっ」

## 儀礼金貨

ローズさんが叫んだところによると、この金貨は証拠になるらしい。

金貨って、それなりの量が出回っていきそうだけど、その辺どうなんでしょうか。

「この金貨が証拠になるんですか？」

と、素直に聞いてみることに。

「ええ、この金貨は普通の物とは違うのよっ」

普通の金貨が、わからないやまだにはサッパリだ。

「すみせん、異国の出で。普通の金貨すらよくわかっていなのですが、そこから教えてもらえませんか？」

「ええ、そうねっ。この国で流通してる通貨はわかるかしら？」

「ええ、そこまでは。確か、銅貨、銀貨、金貨、大金貨の四つですよね」

「さすがは博識ね、その通りだわっ」

おう、褒められちゃったぞ。

しかし、その褒め方はちょっとムリがあると思うんだ。

園児がオモチャを片付けをしたときに、「よくできましたね、えらいえらい」みたいな、シンパシー的なものを感じてしまう。

「普通、こちらの事を言うわ」

腰につけていた皮袋から、もう一枚金貨とりだして見せる。

右手には、落ちていた金貨。左手には、皮袋からとりだした金貨という感じ。

遠目にも違いは、一目瞭然だ。

意匠された模様が、全然違う。

普通の金貨と呼ばれた方は、国旗のような模様に対して、さきほど拾った金貨は、王家の紋様をあしらったような手の込んだものだ。



どちらが高価かと聞かれたら、間違いなく拾ったほうだろう。

「こっちは、あまり知られていないのだけれど。王家が発行した儀礼通貨よ」

なんだ、新ワードがでてきた。

儀礼と聞いて思いつくのは、どこだかの部族が、成人の儀式でやるバンジージャンプくらいだ。

「儀礼通貨ですか、それは一体どのような物ですか？」

「一般的に流通している金貨は、通貨院が発行しているのに対して、儀礼通貨は王家が発行しているのよ」

ああ、アレか。

日本でも、通貨は政府が発行しているわけじゃない。

発行元は、日本銀行だ。こちらも、似たような構造をしているのだから。

権力の一極集中をさげるとか、なんとか。

「なるほど、もしかして、その金貨は限られた者しか持っていない

のでは？」

思いついたままに、口にするとローズはハッと、いった驚きの表情を浮かべる。

どつやら、正解らしい。

「本当にすごいわ……その通りよ。ただ一つ、言えば、この儀礼通貨はお姉様しか持っていないものだわっ」

「といつとっ？」

「これは、儀礼金貨と名前がついている通り、王家の儀式を記念して発行されるものの。

そして、儀式ごとに刻まれる模様が一つ、一つ違うのよ。

この刻まれている模様は、お姉様の成人を記念して作られたもの。だったら、すべての金貨は、お姉様に渡されているはずだわっ」

儀礼金貨は元々、流通するものではないが、それでもまったくないわけではない。

しかし、ローズの姉が成人したときに作られたこの金貨に限っては、発行された全ての金貨をローズの姉が持っている。

だとすれば、出回っていないはずの、この金貨を傭兵団が持って

いたことで、その依頼主がローズの姉である証拠になるとローズは言いたいらしい。

ここで、傭兵団リーダーである、ケロノアに振り向く。

「と言ってますが、まだ黙秘を続けますか？」

見るに、もう既に観念した様子。

「わ、わかった……全て話す」

と、言うとケロノアは知っていること全てを語りだした。

その話をまとめると、こうだ。

直接依頼にきたのは貴族の男。

その男は、依頼内容と前金である金貨を置いていった。金額は、金貨にして100枚だったらしい。

ちなみに、ローズの素性は教えられていなかったようだ。

チヨロイ仕事のもりで来てみれば、結果はこの通り、依頼は失敗に終わり、捕まって大罪人の出来上がりというわけだ。

「もしかして、その依頼に来た男というのは、左頬に火傷の跡があったのではないかしら？」

「ああ、確かに火傷の跡が……」

ケロノアは、言葉を言い切ることはなかった。

ポロリと、落ちた。

それが、最初の感想だ。

ケロノアの首に赤い線が走ったかと思ったら、その首は地面に落ちた。

本来、首があった場所から、噴水のように血が飛び散る。

「依頼を失敗した拳句、依頼主の情報まで喋ってしまうとは、こやつにはプロ意識と言うものが、ないのかのう……」

咄嗟に身構えて、声の聞こえた方向へ向く。

すると、そこには

刺客（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。  
第47話です。

## 刺客

「依頼を失敗した拳句、依頼主の情報まで喋ってしまったとは、こやつにはプロ意識と言うものが、ないのかのう……」

とつさに身構えて、声の聞こえた方向へ向く。

すると、そこには 黒いドレスを着た少女。

いや、違うな。

少女と呼ぶには、あまりにも幼すぎる。

正確に言えば、黒いドレスを着た幼女だ。

……ゴトッ。

首を失った、ケロノアの胴体が地面に倒れる。

まるで、糸の切れた操り人形のように。

それを見て、満足そうな笑みを口元に浮かべる幼女。

そのミスマッチな感じが、何とも言えない不気味さを醸しだしている。

ここは何か、こちらから言葉を投げかけるべきか。  
などと、思索しているぞ、

「本来であれば、出てくる気はなかったのじゃが。まあ、仕方ない  
……」

そんな言葉を言い終えるかどうか、地面を蹴って俺に目がけて飛んできた。

文字通り、幼女が飛んできたのだ。

こっちの世界の幼女は飛んでくるらしい。

そんな馬鹿な、この個体が特別なのだろう。

そんなにホイホイと、幼女が飛んでたまるか。

金属と金属が、激しくぶつかる音が響いた。

しかし、実際にぶつかったのは、戦斧と幼女のグー。

拳と呼ぶには、あまりにも小さい。なので、グーだ。

「これを止めるのはのう……」

見た目とはギャップを感じる語り口で、感嘆ともとれる言葉を漏らす。

確かに彼女が言う通り、このグーは重い。

今まで見てきた魔物のそれよりも、上ではないだろうか。

だからといって、決して受けきれない攻撃でもない。  
現に、飛んで来るのを見てから、対応してこの通りだ。

パッと、何か爆ぜた音が鳴ったかと思うと、幼女が後ろに飛び退く。

この際に、ステータスウィンドウかもん。

名前：アリナリーゼ・バン・オメガ  
性別：女  
種族：古種  
ジョブ：  
レベル：32  
HP：552  
MP：495  
STR：210  
VIT：184  
INT：250  
DEX：127  
AGI：300



アリナリーゼさん、コンニチワ。

まだ、俺の方がレベル的なアドバンテージがあるものの。今までで見た中で、ダントツの高ステータス。

これはちょっと、油断できないな。

「これなら、どうじゃっ」

そんな声が聞こえたと思ったら。

目の前に迫る大きな岩。

一体、どこからそんな物かと思ったが。

しかし、今は、詳細など気にしてはいられない。

もし、避けようものなら、後ろにいるクリスティーナ達に直撃してしまう。

実力的にみて、クリスティーナは大丈夫だろうが。

ローズやクレアさんなどはどうだろう。

死なないにしても、重症を負うかもしれない。

となれば、やることは決まっている。叩き割るしかない。

飛んでくる岩に、全力で『フルスイング』。

ドガアアアアン！！

雷が落ちたかなのような、轟音が響く。

視界を覆っていた、大きな岩は粉々に砕け散った。

しかし、それだけでは終わらなかった。

俺が戦斧を振った軌道上、見えない刃が走るかのように、地面が大きく抉れる。

それは、幼女……もとい、アリナリーゼがいる方向へ。

距離にして、10数メートルは離れている。

しかし、その勢いは衰えず、アリナリーゼに直撃した。

砂埃が巻き上がり、姿をスッポリと覆う。

それも束の間、風に砂は流され、出てきたのは両腕でガードするアリナリーゼ。

着ていた黒いドレスはボロボロに、肌からは血が流れているのが見えた。

幼女相手にこれは、さすがに心痛む。

だけど、相手は俺や、クリスティーナ達を殺そうとしているのだ。

さあ、どうぞ。とはいかないだろ。

ここは一つ、心を鬼にして向かえ打つ所存である。

「ちっ……これも効かぬか」

そう漏らしたアリナリーゼは、距離を詰め、何度もグーを打ちつけてくる。

俺もそれを、戦斧で何度も防ぐ。

そして、今回二度目のバックステップ。

後ろに退いたアリナリーゼと距離が空く。

「そろそろ、退いてくれる気になりましたか？」

「そうじゃのう……今の妾では勝てそうにもないわ……」

どこか、余裕のある語り口。

なにか、強くなる秘策でもあるのだろうか。

「もし、雇われているのであれば、雇い主の倍を支払いますよ？」

と、適当に言ったが、お金のことはローズが何とかしてくれるだろう。

何て言ったて、王女様らしいからな。

それに、大事な証人が死んでしまった以上、彼女が寝返ってくれば有益な情報が得られるだろうし。

そんな言葉に、アリナリーゼは怪訝な表情を浮かべる。

「お主の実力なら、有無を言わずに殺すことも出来ように……」

なるほど、その発想はなかった。

何とかしなくてはと思っていたけど、それは撃退すると意味であって。

さすがに、殺してしまおうなんて考えてもいなかったからだ。

「ふむ、そうじゃな。今回はお主の言葉に甘えて、退くとするかのう……」

「そうしてもらえると助かります」

「くっ、……はっはははっ。面白い奴じゃ、お主の名は何と言っのじゃっ。」

「……ヤマダです」

「妾はアリナリーゼじゃ。また会おうぞ、ヤマダよ……」

そう言った、アリナリーゼの足元から、影が濃い霧のように立ち上った。

最初は一つだったものが、何本にも分かれてアリナリーゼを包む。

完全に包み込んだかと思うと、ブワツと風が周囲を撫でた。

そして、影と共にアリナリーゼは、その場から姿を消した。

## 刺客2

「ご主人様、お怪我はありませんか？」

クリスティーナ達が駆け寄ってきた。

岩を粉々にした際に、破片でも飛んでいないか心配だったが、元気なその姿を見て安心する。

どうやら、その心配は杞憂に終わったらしい。

「ああ、大丈夫だよ。ありがとう、クリスティーナ達も無事でよかった」

そして、ローズの方に目をやれば、なにやらキラキラとした目線を向けられた。

なんかこう、キラッキラと効果音がつきそうな感じ。

「……どうしました？　ローズさん」

「……っ！」

俺の問いかけに、少し顔を赤くしたローズは、大袈裟に手を振ってみせる。

まるで、何かを誤魔化すような仕草だ。

もしかして、オシッコでも漏らしてしまったのだろうか。それなら、気がつかないフリをしてあげるのが、大人の男というやつだろう。

「な、な、なんでもないわっ。き、気にすることなんて何もなにのよっ」

と、よくわからない返答が返ってきた。

なので、ここはスルーをして話を進める。  
空気を読める男って、こんな感じじゃね。

「しかし、先ほどの少女もローズさんを狙った刺客でしょうか？」

俺達を襲ってきたのは、紛れもない事実だ。  
ただ、ローズを直接的に狙ってきた傭兵団とは少し毛色が違う気がする。

強さもそうだけど、ケロノアを真っ先に狙った点を考えても、我慢できずに、つい出てきてしまった、という感じだ。

「……そ、そ、そうねっ！ きつと、私を狙っていた刺客に違いな  
いわ。」

また貴方に助けられてしまったわね、そ、その……感謝するわっ」

と、ローズから感謝の言葉をもらった。

それを見ていたクリステイナが、どこか誇らしそうにしている。

もし、クリステイナに尻尾があれば、きつと左右に揺れている  
はずだ。

「それにしても、証言者を失ってしまったのは痛いですね」

ケロノアの遺体に目をやる。

こちらの世界に来て、初めての人間の死だ。

それを見て、感じることは多々あるが、感傷に浸るのは後回しだ。

今は目の前のことに集中しなくては、ローズや、もしすれば、ク  
リステイナ達にも危害が及ぶかもしれないからな。

気持ちを引き締めていこう。

「……ええ、確かに儀礼通貨だけでは、証拠として弱いと思うわ。」

きつとお姉様のことだから、あれやこれやと、言い逃れてしまっわ」



傭兵団を逃がしてしまったのは、ミスだったかもしれない。  
とはいえ、乱戦を防ぐにはアレが有効だったのは間違いないだろう。

俺のモットーは、『安全第一、命大事に』だ。

と、ここで思い出した。

なにもこの事に関わっていたのは、傭兵団だけじゃない。

ポロロ村の村長もそうだ。

傭兵団リーダーの証言よりも弱いが、無いよりはマシだろう。

一つ、一つが弱くても、それが集まれば説得力が増すはずだ。

「とりあえず、ポロロ村に戻りましょう。俺達をハメた村長を尋問すれば、何かわかるかもしれせん」

「ええ、そうねっ」

ケロノアの遺体に手だけ合わせて、俺達は来た道を引き返した。

行きは20分くらいかかった道のりだったが、急いで戻ってきたおかげで、その半分くらいの時間でポロロ村に着いた。

鼻につく焦げ臭い匂い。

目の前には、村を焼く炎が広がっていた。

おう、マジか。

ここまで、やっちゃうのか……。

ファンタジーな部分が、ファンタジーしてないぜ。

とにかくアレだ。助けれる人は助けられないとな。

「まだ、生きている人はいるかもしれません！ 救助しましょう！」

「そうねっ」

「はい、ご主人様っ」

「わかりました！」

俺の言葉に、ローズ、クリスティーナ、クレアさんが続く。

結果から言えば、誰も助けることが出来なかった。

と、言うよりも、最初から村人は死んでいた。

もっと正確に言えば、何者かに殺されていたのだ。

それはまだ、焼け焦げていない遺体から判明した。

どれも、目を背けたくなるような刃物傷が残っていたからだ。

きつと、村長の口封じに、村ごと始末したのだろ。

映画とかではよく見る光景だが、現実にも目の当たりにすると気持ちの良い物じゃない。

悪意をそのまま、突きつけられているような、そんな気分になる。

しかし、証言者がいなくなった以上、このまま、ここにいても危険なだけだ。

襲撃は一度だけだったが、二度目が無いとは限らない。

ここは一度、迷宮都市にでも、戻ったほうがいいだろう。

そこで態勢を整えて、次の対策を考えよう。

乗りかかった船だ。ローズの安全が確保されるまでは協力しようと思っ。

「こうなった以上、ここに留まる理由もありません。一度、迷宮都市まで戻りましょう」

「ええ、そうねっ」

どうやら、俺の出した意見に賛成らしく。

ローズ、クリステイーナ、クレアさんも共に頷く。

それから、歩いて乗り合い馬車停まで戻ると。

タイミングよく来ていた、迷宮都市行きの馬車に乗ることが出来た。

クレアさん曰く、乗り合い馬車は時間にアバウトらしく、待つ時間がなく、乗れるのは運が良いらしい。

こうして、乗合馬車に揺られること半日。

迷宮都市に着いた頃には、すっかり陽も沈みかけていた。

時刻にして、午後六時を過ぎた頃合だろうか。

街灯は街を照らし、家路に着く人々、酒場や屋台で舌鼓を打つ者と様々な人々が行き交う。

今宵の宿は、ローズ達が泊まる『狼の尾っぽ亭』で、部屋をとる事にした。

猫のマタタビ亭でもよかったのだが、近いほうが何かと便利だからな。

街を歩き、へ向かう。

場所は大通りを抜けて、少し行った所にあるらしい。

そこで、一つの屋台に目がいく。

野菜と肉が入ったスープに、小麦粉か何かを練って作られた、蕎麦掻のような食べ物を売っているようだ。

俺の目を惹いたのは、そのスープではなく。

それを、はふっはふっと、一心不乱にかきこむ少女の姿だ。

「……あ」

「……あ」

そこにいたのは、つい午前中、俺達に襲いかかってきたアリナリ  
ーゼだった。

## 屋台と幼女

「……あ

「……あ

「なんで、迷宮都市の屋台で飯なんか食っているんだよ。アリナリーゼさん。」

まさか、こんな所で再会するとは、夢にも思ってもいなかった。

目が合った向こうも、そう思っていたらしく、俺とアリナリーゼの時間が止まった。

「やああって、

「なんでやっ！」

「つい、エセ関西弁が出てしまったのは、仕方のないことだろう。」

「アリナリーゼは、俺の声にビクッと体を震わす。」

「それに応じて、右手に持っていたスプーンが、熱々のスープの中へポチャンと音を立てて落ちた。」

「おっ、お、あちちっ……いきなり大声だすなっ、びっくりするぞ  
わないか……」

いやいや、それ以上に、俺の方がビクビクしているからね？

あんなに大物風吹かせて帰ったクセに、屋台で飯食っているって、  
その辺どうなのよ。

と、思わなくもない。

しかし、考えてみれば。これはチャンスかもしれないな。

ケロノア、ポロロ村の村長と、立て続けに証言者を失った俺達の  
前に、ひょっこり現われた証言者候補。

彼女の協力が得られれば、一気に解決へ向かうのではないだろう  
か。

ローズ達からは感謝をもらい、俺とクリスティーナは次のダンジヨ  
ンへ向かえる。

うん、これはわるくないな。

「……いえ、大声だしてすみません。まさか、こんな所で再会する  
とは思ってもいなかったもので」

「それは妾のセリフじゃ。……な、なんじゃ……その目は。」

お主、再戦する気か？ やるか？ おっおっ？」

両手にグーをつくって、威嚇し始めるアリナリーゼ。

おっと、イカン、イカン。思惑が顔に出てしまったか。

「いえ、戦う気はありませんよ。それよりも一つ、お願いがあるのですが……」

かくかくシカジカ、まるまるウマウマ。

先程、考えていたことを丁寧に説明すること暫し。

イメージするは、セールスマンの営業トーク。

フリーターの俺に上手く出来たかはわからないが、内容はちゃんと伝わったようだ。

「ほう……、お主は妾の助力が欲しいというワケかのう？」

アリナリーゼは、クリクリとした可愛らしい目を細めて、俺へと向ける。

これはアレだ、わるい顔だ。

今、アリナリーゼは悪代官のような顔つきで、ん？ わかってる



よな？　と言わんばかり。

そのお手ではスーパを指して、チヨイチヨいと。

指す物を見てみれば、具は既に無くなり、残っているのはスーパだけ。

オーケー、わかった。

ここは一つ、大人の財力つてやつを見せてあげようじゃないか。

魔石を売ったお金で、色々と買い物をしたが。

まだまだ、懐は温かい。円にして、50万相当は残っている。

石油王と言っても、過言ではない財力ではないだろうか。

『アイテムパック』から、硬貨の入った袋をとりだす。

その中から、銀貨一枚を屋台のカウンターに置いて、

「大将、お代わりを。お釣りは取って置いてください」

と、言う。

プルプルと、体を震わしたアリナリーゼの目が、クワツと見開かれる。

「釣りはいらぬだと……！？　お、お主は、富豪なのか……」

ふふん、どうだ。これが大人の財力というやつだ。

まいったか。

「へいつ、お待ち」

お代わりが置かれてると、アリナリーゼはスプーンを手に、はふつはふつと、勢いよく食べ始めた。

あっという間に、お代わりを食べ終わったアリナリーゼは、小さな体の割りにぶっくりと膨れたお腹を、満足そうな顔でさすっている。

「どうですか、協力する気になりましたか？」

「うぬ、協力するのも吝かではないなっ」

もう一押し、といったところか。

意外とチヨロイな、この幼女。

「他に何かあれば、言ってもらえると用意いたしますが」

証言者を買収しているようで、少し気がひけるが。

ここは異世界だ、細かいことは気にすまい。

「そうじゃな、お主は強いようだし、一つ頼みたいことがあるのじやが」

「なんでしょっ?」

もしかして、体でも要求されてしまうのだろうか。

初めてだし、優しくしてもらえたらうれしいのだけれど……。

「あるダンジョンから、ある物をとってきて欲しいのじやが」

おう。全然、違ったわ。

「それを持ってくれば、証言してもらえると?」

「ああ、もちろんじや。妾に二言はないっ」

どつやら、お使いイベントが発生したようだ。

## 乗り合い馬車は行く

こんにちは、ヤマダです。私は今、乗り合い馬車に揺られ迷宮都市から一日の距離にある、とあるダンジョンへと向かっています。

トコトコと揺れる馬車の乗り心地は、現代日本の乗り物と比べるもないもので。

半日も乗っていれば、お尻がとても痛くなってしまふこと受け合いです。

しかし、その欠点を補って余りあるのは、この価格。

一日乗っても、銅貨たったの10枚、なんという低価格でしょうか。

日本円にして、1000円にも満たないこの価格で一日中、乗っていられるのです。

タクシーでこの距離を移動したら、一体どんな金額になるのか、考えるのも怖くなってしまいますね。

ちなみに、個人的に馬車を借りれば、銀貨10枚は越えるそうなので、いかに乗合馬車が安いのか、おわかりいただけるでしょうか。

と、まあ、冗談はさておいて。

昨日、アリナリーゼからの提案を了承した俺は、ローズ達がついていた宿で一泊し。

太陽が昇り始めた早朝と共に、乗合馬車に乗って迷宮都市を出発してきた。

今回は、クリスティーナをローズの護衛に置いてきたので。

俺一人でダンジョンに向かうはず、だったのだが……。

「ところで、ローズさん。迷宮都市にいるはずでは？」

隣に座る、フードを被ったローズに声をかける。

「……っ」

ビクリと肩を震わすところを見るに、もしかして変装したつもりなのだろうか。

「わ、わたしはローズなんかじゃないわっ。ろ、ローズよ！」

なんだか、美味しそうな名前になっちゃったな、おい。

おもむろに、ローズが被っているフードを引っ手繰る。

「あっ……!!」

すると、ふわっと綺麗な金髪が顔を覗かせた。

これでもう、言い逃れはできまい。

「なぜ、ついて来たのですか？ ローズさん」

俺の言葉を受けて、ローズは。

あっちへキョロキョロ、こっちへキョロキョロと、忙しなく視線を動かしたかと思えば。

ついに、観念したらしく、その視線をやや下にさげて俺へと向けると。

「だ、だって、これからダンジョンに行くのでしょ？」

ダンジョンといえば、冒険よっ！ 私だって行きたいじゃない」

このローズさん。自分が狙われていることを、完全に、忘れてしまっているのではないだろうか。

「こっぴどしているうちにも、狙われる可能性もあるのですよ？」

「だ、だって、貴方がいるじゃないっ。宿に籠もっているよりも、ずっと安全だわっ」

ああ、これはアレだ。

冒険と、身の安全を天秤にかけて、冒険のほうへ振り切ってしまったのだろう。

そんな、目をしているわ。

だけど、その気持ちは、わからなくもない。

現に俺も、目の前にあらわれたダンジョンに飛び込んで、今に至るわけだから。

しかし、だからといって。ローズを助けると決めたい以上、危険とわかったまま、連れて行って良いのだろうか。

……やめだ、やめ。

考えるのは終わり、来てしまったものは仕方がない。  
なるように、なるだろう。敵が来たら、俺が頑張ればいいのだ。

よし、その方向でいこう。

「わかりました。ただし、俺の指示には従ってもらいますからね？」

俺の言葉に、あからさまに笑顔を浮かべたローズは、

「もちろんよっ！」

と、言い放った。

乗合馬車は、トコトコ走る。

最初は俺とローズだけだった乗客も、一つ目の馬車停を過ぎたあたりで、一組のパーティーが乗り込んできた。

そのパーティーは四人組で、戦士風の男三人と、魔術師のようなローブを羽織った女性が一人。着込んだ装備を見ても、いかにも冒険者といった雰囲気だ。

彼らも、ダンジョンへと赴くのであろう。

「よう、ニイチャン達も、ダンジョンへ行くのかい？」

向かい側に座った彼らの中でも、一際いかつい男が声をかけてきた。

見た目は、盗賊団のお頭と言っても、違和感のない感じだけだ。



どこか人の良さそうに見える。

「ええ、そうなんですよ」

「にしても、パーティーは二人だけかい？」

「……まあ、ワケがあつて」

ワケなんてないよ。ローズが勝手についてきただけ、なんだけどな。

ただ、話しかけてきた男は、それを重く受け取ったのか。

「詮索はしねえが、おたくも色々とおつたようだな……」

見てみれば、残りのパーティーメンバーも男の言葉に、ウンウンと頷く。

こちらの世界も、パーティーに歴史ありといったところか。ネットゲでそういうの沢山見てきたから、わかるよ。

一人のヒメチャンのせいで、チームが解散とかよくあったもん。

「わるいことがあった後には、良い事があるって言うしなあ。元氣だせよなっ！」

と、よくわからない内に、励まされてしまった。

まあ、訂正するのも面倒くさいので、このままいこう。

ちなみに彼等は、『黒鉄の剣』という名のパーティーらしい。目的地は、俺達と同じダンジョンとのことだ。

ゴトっ。

今まで、トコトコと揺れていた馬車が止まった。

あれ、もう着いちゃったか。

小さな窓から外を覗いてみるが、今まで、通ってきた街道と変わらない。

変わったところがあるとすれば、行く道を塞ぐように立つ男達。

数は、だいたい20人くらいだろうか。

どれもこれも、柄が悪そうなヤツラだ。

「盗賊団か……」

俺に話しかけていた男が、そうつぶやくと。

武器を準備し始める。

目を移せば、他のメンバー達も、各々の武器を持ち始めていた。

「ここは、俺達に任せてくれ」

そう言うと、勇み足で馬車を飛び出して行く、『黒鉄の剣』のメンバー。

自信たっぷりな彼等に任せておけば、きっと大丈夫だろう。

と、思っていたのは数分前。

「ね、ねえ……大丈夫かしら？」

ローズが不安そうな声をあげる。

それもそのはず、自信満々で出て行った『黒鉄の剣』のメンバーだったが。

あっと言う間に盗賊団にやられ、地面に倒れているからだ。

「……大丈夫じゃないでしょうね」

乗り合い馬車は行く2 (前書き)

更新が遅れてしまい申し訳ありません。  
第51話です。

## 乗り合い馬車は行く2

はりきって出て行った、『黒鉄の剣』のメンバーだったが、アツサリと盗賊団にやられてしまった。

さて、どうしたものか。

正直、一人であれば逃げちゃっても、いいのだけれど。この状況では、そももいかない。

それに、『黒鉄の剣』のメンバーは、良い奴っぽいし。ここで見殺しにしたら、きっと目覚めがわるい。

やっぱり、朝は気持ちよく起きたいもんな。

「あの、ローズさん」

「な、なにかしら？」

「あの盗賊団は、お姉さんからの刺客だったりしませんかね？」

「それはないと思うわ。いくら王女とはいえ、大人数の刺客をそう何度も送れるほど、自由にできる金はないハズよ」

なるほど。王族とはいえ、お金を湯水のように、使うことはできないらしい。

だからこそ、傭兵団を雇うために、儀礼通貨なんて虎の子を出してきた訳だ。

しかし、逆にいえば、少人数の刺客なら可能かもしれないということ。

「なるほど、わかりました。ローズさんは、この馬車から出ないようお願いします」

「えっ、ちょ、ちょっと……あなた一人で何とかする気なのっ？」

「ええ、そのつもりですが」

なんだろう、心配でもしてくれるのかな。

それでもって、涙を流しながら心配するローズに、カツコイイセリフなんかを、言っちゃうシーンだったりするのだろうか。

やばい。人生でやってみたいことリストがまた一つ、埋まってしまっ予感。

と、思ったけど。

……違うわ、これ。

涙どころか、すげーキラキラした目してるもん。

『ねえ、今度は、どんな戦いを見せてくれるの？』、みたいな感じ。

自身の安全も振り切って、全力で趣味に生きるローズさんマジパネエ。

よほど、冒険とか、冒険者に憧れているらしい。

まあ、そういう生き方は、嫌いじゃないけどね。

心配だったローズも大丈夫そうだし。

よし、行くか。

馬車を降りて、向かうは盗賊団。

さっそく、見つかったようで、三人ほどが俺へと近づいてくる。

もちろん、凶器持参でお出迎えである。

これはどう見ても、話し合いで解決できるような雰囲気はないな。

ステータスで確認したところ、レベルは10前後。

他のパラメーターも、これといって特出するものはない。

至って平凡その物。逆に、こちらが手加減をしなければ、死んでしまいそうだ。

今回は、マイウエポンの使用をやめておこう。



過剰戦力というやつだ。

「へっへ、まだいやがったか」

盗賊の一人が、ニヤけた笑みを浮かべる。

その見た目は、汚れが目立ち余り衛生的ではない。装備も使い古された皮の胸当てだったり、切れ味の悪そうなショートソードだったり。

冒険者がする物よりも、一段下に見える。

「おい、コイツなんか黄色くねえか？」

もう一人の男が、そう言っていると残りの二人も、

「顔も平たいぞ」「ああ。黄色くて、平たいな」

などと、好き勝手に言ってくる。

やめてよ、もう。

アジアン野朗のデリートゾーンを抉るのは。

しかし、相手は薄汚いとはいえ、白人のような彫り深さに返す言葉がない。

「馬車に上玉の女が見えたぜ。さつさと、この男を殺って楽しもうぜ」

「ああ、そうだな。ぐへへ」

さすがに、この言葉は無視できない。

足に力を込めて、踏みだす。

数メートルは、あつたであろう距離が、あつという間に詰まる。

本来であれば、こんな高スピードに自身の反射神経がついていけないと思うが。

しかし、今は高ステータスの恩恵を受けて、まるでスローモーションに感じる。

そして、盗賊の隙だらけの腹へ、蹴りを入れる。

ドコッ。

鈍い音をあげて、蹴られた盗賊が盛大に吹き飛んだ。

突然、俺が目の前に来たかと思ったら、仲間の一人が吹き飛んだ状況に、

理解が追いついていないのか、完全にパニック状態になる盗賊達。

続けて、残った二人にも蹴りを入れる。

最初の一人と同様に、遙か向こうへ消えていった。

その様子を受けて、盗賊団の視線が俺に集まる。

強面の方々に睨まれて、ちょっとビビるが。

ここは、格好のつけどころ。

最高にハードボイルドしてみせるんだから。

ボスっぽい男のへ向けて、ずず、ずいっと歩く。

すると、どうだ。

ボスっぽい男の顔が、どんどん青ざめていくではないか。

「あっ、ああ……」

あれ、ちょっとやり過ぎてしまったか。

「ああ、あっ、アンタは……アンタは……」

なんだこれ、ちょっと想像していた反応と違う。

ん、待てよ。

スキンヘッドに、はち切れんばかりの筋肉。

……どこかで見たことあるな。

「アンタは、あの時の……」

ああ、思い出した。

冒険者ギルドを占拠していた、『黒鷹』とかなんとか団のやつか。確かハゲ、ハゲ、……ハゲマツチヨ。そうそう、ハゲマツチヨだ、間違いない。

なんで、こんな所にいるんだよ。

「せっかく、逃げ出してきたというのに……ま、まさか、捕らえに来たのか」

完全に言い掛かりである。

最高潮に、プルプルするハゲマツチヨ。

汗は滝のように流れ、青くなった顔は、死相が見えているのではないだろうか。

「お、お頭、どうしたんですか？」

そばにいた男が、ハゲマツチヨに声をかける。

しかし、ハゲマツチヨは、俺を見つめたまま震えるばかり。

「ば、化け物だ……あれは、化け物なんだ……」

そう言ったかと思うと、ハゲマツチヨは踵を返して走りだした。

その慌てぶりは、見ていて可哀想になるほど。

よほど、冒険者ギルドの一件がトラウマになっているらしい。

「お、お頭っ！ ちょっと、ちょっと」

釣られるように、盗賊団のメンバーも逃げだす。

それを呆気にとられながらも、見守るばかりだ。

そして、数分も経たないうちに、盗賊団の姿は遙か彼方。

完全に、見えなくなった。

「さすがだわつ。睨みを効かせるだけで、相手が逃げだすなんて」

声がする方へ、視線を移せば。ローズさん。

いつの間に来たのだろうか。

なぜか、ドヤ顔で語るその姿は。頬に朱がさし、お人形のような瞳は爛々と輝いている。

どうやら、相手がハゲマツチヨだとは、まるで気がついてないようだ。

まあ、ここで教えて水を差す必要もないだろう。

こうして、突発イベントの『盗賊団討伐戦』は無事に終了した。

……と、思ったけど『黒鉄の剣』のメンバーは大丈夫だろうか。

乗り合い馬車は行く3 (前書き)

またまた、更新が遅れてしまい申し訳ありません。  
第52話です。

### 乗り合い馬車は行く3

盗賊団にやられてしまった、『黒鉄の剣』メンバーの元へ駆け寄る。

様子を伺えば、全員が全員、重症と言ってもいいダメージ。

死者が出ていないのは、不幸中の幸いと言ったところだろうか。

とくに、馬車の中で話しかけてきた男……名前なんて言ったけ。

ええつと、セニョ……セニョールでいいか。どこか、メキシカンな感じがするしな。

とにかく、セニョールの傷が酷い。

放っておけば、そう長くないのが見てわかる。虫の息というやつだ。

きっと、このパーティーでの盾役が彼なのだろう。

さて、どうしたものか。

多少の会話を交わしたせいだ。心情的にも、このまま放っておいていくワケにもいかない。

クリステイナがこの場にいれば、回復を頼めるのだが。いない人間を嘆いても、仕方がない。

ここは一つ、自力で頑張ってみようじゃないか。

確か、スキルで回復魔法をとっていたはずだ。



というワケで。ステータスウィンドウさん、かもん。

スキルポイント：20

アクティブ：スキル

HPストック：LvMax

フルスイング：Lv1

火属性魔法：Lv20

回復魔法：Lv2

パッシブ：スキル

アイテムパック：LvMax

マップ：LvMax

言語：LvMax

とっておいて良かった、回復魔法。

Lv2という数値に些か不安を感じてしまつが、……まあいい、と  
りあえずは試してみたらだ。

ダメだったら、余っているスキルポイントを振りなおして再度、挑  
戦しよう。

掌を横たわるセニョールに向けて。

「とぶあつあ」

傷が癒えるイメージで、掛け声をあげる。

すると、薄っすらと輝きだす彼の体。

それと同時に、体からMPが抜ける感覚が。

次第に、その光は輝きを増していき、柔らかな光がセニョールの全体を包み込む。

大きく裂けていた傷に肉が盛り上がり、まるで逆再生しているかのように傷が治っていく。

どうやら、上手く発動したようだ。

しかし、この治癒力はLv2というには、ちょっと凄すぎないか。アレだけ酷かったセニョールの傷が、完治と言っていいほどに塞がっている。

これは、想像以上の効果だ。

もしかするとこれは、INT値が回復力に加算されているのではないだろうか。

「ん……」

傷が癒えたせいか、失っていたセニョールの意識が戻る。

「あ、あんたは……」

「よかった、意識が戻ったようですね」

「……これは、あんたがやったのか？」

多少、ぼんやりとしているが。

ここまで話せば大丈夫だろう、残りの怪我人も治してしまおう。

セニョールほどではないが、どれも、軽い怪我には思えない。

「もう、大丈夫そうですね。では、残りのパーティーメンバーの治療に向かいます」

「……ああ、すまない」

残りのメンバーの一人に回復魔法をかけていると、後ろから声がかかる。

その声は、ローズだ。

「え、えつと。わつ、私も何か手伝えることはないかしら？」

指をモジモジと絡めながら、視線はやや下向きでそう言うローズ。

しかし、回復魔法で傷が癒えてしまう都合上、とくに手伝いは必要がないのだよな。

だからと言って、せっかく手伝いたいと申し出てきたローズを無碍にするのもアレなので。

「ありがとうございます。でしたら、この水をセニョールさんに飲ませてあげてくれませんか？」

『アイテムパック』から取り出した、ミネラルウォーターの入ったペットボトルを手渡す。

「セ、セニョール……？」

あっ、やべ。思わず口にだしてしまったわ。

完全に俺の中で、セニョールで定着してしまったよ。アミーゴ。

「いえ、何でもありません」

「そ、そう？　なら、いいのだけれど」

「開け方はわかりますか？　蓋をひねるよつに回せば外せます」

「わかったわっ！　じゃあ、水を飲ませてくるわ」

と言うと、ローズはペットボトルを持って、セニョールの元へ走りだした。

その後、残りのメンバーにも回復魔法をかけて回り。

無事に、全員の傷を治すことができた。

あれだけの傷を完全に治してしまうほどの回復魔法を連発したのにも関わらず、MPは思ったよりも減らなかった。

全体の、三分の一ぐらいを消費しただけだ。

予想では半分くらいは持っていられるかと、覚悟はしていたのだけ  
ど。

まあ、燃費が良いに越したことはない。

また時間があるときにでも、スキルポイントを回復魔法に振っておいてもいいかもしれないな。

やはり、自前で回復手段を持つか、持たないかでは大違いだ。

そして、今は、再びダンジョンへと進みだした馬車の中だ。

このアクシデントで、馬車に被害がなかったのは、不幸中の幸いと言えるだろう。

カタカタと揺れる中、座る位置も盗賊団に襲撃を受ける前と変わ

らない。

変わったといえ、『黒鉄の剣』メンバーが俺に向ける視線だろうか。

当初、ルーキーを見るようなものだったが、今は尊敬すら感じさせるものだ。

間違っても、社会の底辺を担う、フリーターなんぞに向けるようなものではない。

普段、そんな視線に慣れていないせい、どうにも居心地がよろしくない。

ケツのあたりがモゾモゾとしてしまう。

そして、そうさせる原因がもう一つ。

「今回は本当に助かった。本当にありがとう！」

そう言って、深々と頭を下げるセニョール。

他のメンバーも、同じように頭を下げている。

馬車が動き出してからというものの、ずっとこの調子だ。

何度、お礼の言葉を貰ったことか。

そろそろ、やめてほしいのだけれど……。

「もう充分、お礼を言ってもらいましたので、どうぞ頭をあげてください」

「いや、そんな事はない。貴殿がいなければ、我々のパーティーは全滅していただろう。」

間違いなく、貴殿は、我々の命の恩人だ。

その恩人に対して、この程度の礼を重ねたところで、決して足りるものではない。

『黒鉄の剣』はこの恩に報いたい、何をお礼とすれば喜ばれるだろうか」

「そんな、お礼なんて……」

こう謙遜しまうのは、日本人なら仕方ないことだろう。

ふと、横に目をやれば何やら自慢げなローズさん。

腕を組み、アゴをあげて、今にもフンと鼻歌など唄ってしまいうな感じである。

なにが、彼女の琴線にふれてしまったのだろうか。

「そういうワケにはいかない。もし、金銭でよければ、街か今向かっている集落で換金するまで待つてもらえれば、満足してもらえ金額を用意することができるのだが」

「そうですね……では、こつしませんか？ 次に、ボクが困っていた時に、手を貸してもらおうというのはどうでしょうか？」

「いや、しかしそんなことでは、あまりにも申し訳が……」

「見ての通りボクは異国の出で、当然、国が違えば、勝手も違う。困ることも多々あると思います。

そんなときに、手助けをしてくれる人がいるというのは、大変心強いものです。

ですから、ボクにとってこれは、金銭を貰うよりもずっと価値があるのですよ」

「……わかった。『黒鉄の剣』は、何かあれば喜んで手を貸そう。

と、言っても盗賊団をいとも簡単に撃退するその実力と、司祭級の回復魔法を持つ貴殿の力になれるとは、とっても思えないがな」

「そ、そうよ！ 彼はすごいものだからっ！」

会心のドヤ顔で、ローズが続く。

「ああ、違くないっ」

と、言い終わると豪快に笑いだすセニョール。



それにつられて、他のメンバーにも笑みが浮かんだ。

　　こんなかなで、馬車の中は和やかな雰囲気だ。

　　しかし、俺だけはモゾモゾとした居心地のわるさを感じつつも、馬車はダンジョンへ向けて進んだ。

## ダンジョンと集落

『陽の差すダンジョン・アルカン』は、地上に存在していた。ダンジョンは洞窟や、地下遺跡にあるものばかりだと思い込んでいた俺は、目の前に現われたアルカンの存在感に度肝を抜かれた。

なぜならそれは、地上100メートルは超えるであろう巨大な石壁。

それが幾重にも入り組み、迷宮を形作っていたからだ。

これほどまでの巨大建造物は、元の世界でもそうそう見れるものではない。

大きいというそれだけで、人に存在感や感動を与えるものだ。

「どうだ、デカイだろう？」

馬車の窓から、アルカンを眺めているとセニョール……もとい、クラリスから声がかかる。

しかし、アイツの名前がクラリスなんて、こんなシャレたものだとは思わなかった。

なんかもう、完全に裏切られた気分だわ。

絶対に、セニョールのほうが似合ってるって。アミーゴ。

「ええ、聞いていた話よりも大きく思えるくらいですよ」

「本当ねっ！　こんな大きい物なんて見たことがないわっ」

ちよつと、ちよつと、ローズさん。

こんな小さな窓を二人して見るのは、色々とマズイと思うのですよ。

だって、ほら。ね？

お顔と、お顔が、今にも、くつついてしまいそうじゃないですか。

顔だけ見れば、そこいらのなんちゃらモデルなんかよりも、断然綺麗ですから。

私めの顔なんかに、くつついた日にはもう、童貞のゲージはレッドゾーンギリギリ。

もしかしたら、振り切ってしまうかもしれない。

「あれ、どうしたの？　もう、見なくもていいの？」

「……ええ、何でもありません。もう、充分です」

「そ、そう？　なら、いいのだけねど……」

痛恨のギブアップからの戦線離脱。

童貞風情には、ここいらが限界だったようです。

くっくっくっ……ローズさん、良い匂いだったな。ちくしょう。

カタカタと、揺られていた乗合馬車もついに到着。

ダンジョン周辺に作られた集落にある、停留場へと止められた。

集落といっても、山中にある過疎なものとは違い。

冒険者ギルドの支店に二件の宿泊施設、雑貨店や飲食店、拳句の果ては売春宿まで揃っていて、中々の規模といったところだ。

まあ、これはすべて、クラリスから聞いた話の受け売りだけ。

しかし、見るからに人の流れも集落のそれではない。

さすがに、迷宮都市と比べると見劣りするものの、これはこれで活気を感じる。

「貴殿には世話になったな。また会おう」

「ええ、また会いましょう」

『黒鉄の剣』のメンバーとは、ここでお別れだ。

彼らは、ここから少し行った所にある村で依頼をこなすらしい。その後は、拠点である迷宮都市へと戻るそうなので、機会があればまた会うこともあるだろう。

俺とローズは、『黒鉄の剣』のメンバー達に見送られ、集落の中心部へと向かう。

停留場から徒歩で、五分とかならない距離だ。

「ねえ、これからどうするの？」

横を歩く、ローズから声がかかる。

「今から、宿をとって。それから、食事でもしましょうか。昼は盗賊団に襲われて、食べる機会を逃がしてしまったからね、お腹がすいたのではないですか？」

「そうね。もう、お腹がペコペコだわ」

一日、馬車に揺られていたせいで日はずいぶんと下になってきている。

もう少しすれば、あたりも暗くなり始める頃だ。

夕食には、ちょうど良い時間帯だろう。

今日はゆっくりと休んで、明日からダンジョンにアタックをかければいい。

「焦っている時には、良い結果はでない」「これは、よしえさんの口癖だ。

今回はこれに従おうと思う。と、言っても特段、焦っているわけではないので。

本音を言えば、馬車移動に疲れたから。今日は休んでしまえだ。

宿をとって早々に、酒場にでもくり出して、異世界情緒の雰囲気を楽しみつつ、いい感じに酔っ払ったらベットにダイブイン。

ああ、素晴らしいプランじゃないか。

これがいい、これでいいこう。

ダンジョン帰りであろう冒険者、それに行き交う商人達をすり抜けて、お目当ての宿へ向かう。

クラリスの話では、ここには二軒の宿屋がある。

『麦わら亭』と、『黄金の稲穂亭』だ。

この二軒は、ローファン兄弟が経営しているらしい。

兄が『麦わら亭』を、弟が『黄金の稲穂亭』をそれぞれ営んでいる。

なんでこんな集落に二軒も宿屋があるのかと思ったが、クラリス曰く兄弟喧嘩が原因らしい。

こちらの世界も、兄弟というものはあまり違いはないようだ。

しかし、この小さな集落に二軒も宿屋があれば、どちらに泊まればいいのか悩んでしまう。

いっそ、迷宮都市のように沢山あれば、適当に選ぶことも出来るが、二択というのはいただけない。

そこでクラリスに、どちらがオススメかと聞いてみたところ、どちらも変わらないと返された。

そう返されては、さらに悩んでしまうのが日本人。

ここは一つ、ローズさんに丸投げしてみることにした。

「それはもちろん、『麦わら亭』よ！」

鶴の一声、今夜の宿は『麦わら亭』に決定した。

「ちなみに、『麦わら亭』にした理由を聞いても？」

「ええ、いいわよ。この地方では、旅立つ冒険者に家族が麦わらで編んだ馬の人形を贈るの。  
それは、無事に帰ってこれるように願いを込めてね。だからこそ、これからダンジョンに挑む私達に『麦わら亭』が相応しいと思うわ  
っ  
っ」

「なるほど、そんな風習があつたんですね。勉強になりました」

「ぜ、全然いいのよっ。わからないことがあれば、な、なんでも聞いてくれていいのよっ」

「ありがとうございます。ローズさん」

「っ……」

そうと決まれば早かった。

麦わら亭で空いている部屋を二つ取り、前金で支払い近くの酒場へとくり出す。

ちなみに、宿泊費は銅貨で三十枚。迷宮都市よりもやや高めの設定だ。

その宿屋代は、「これも経費の内よ」と、ローズが支払った。



酒場の中に入ると、そこは仕事を終えた人達によって賑わいを見せていた。

仕事終わりの一杯、というやつだろう。

店の奥のほうでは、見たこともない弦楽器が、アップテンポな曲を演奏して場を盛り上げていた。それにつられて誰も彼もが、楽しそうにお酒を飲んでいる。

その中から、空いているテーブル席を見つけ、この店でオススメのお酒と料理を注文する。

ものの数分も経たないうちに、発泡性の琥珀色をしたお酒が木製のジョッキで運ばれてきた。

注文した料理も、もうすぐ運ばれてくることだろう。

「ここは、私のおごりよっ。遠慮せずに食べてね」

「何から何まで、すみません」

「い、いいのよ、全然気にしなくていいのだからっ。貴方には無理をお願いしているもの。それに……」

ローズの視線が少しばかり、下がる。

「それに、なんですか？」

「本当は、貴方に断られると思っていたの……」

ローズの華奢な指が、木製のジョッキを撫でる。

その仕草は彼女の容姿も相まって、まるで映画のワンシーンのように様になって見えた。

よくよく考えてみれば、異性と二人きりでお酒を飲むのは初めてじゃなからうか。

まあ、アレだ。従兄妹のユキノは家族のようなものだし、ノーカンだノーカン。

家族から貰ったバレンタインデーチョコをカウントしない要領と同じもの。

そして、一度、異性と二人きりでお酒を飲むというシユチエーションを意識してしまえば、ドギマギとしてしまうのは、童貞の性というものだ。

それを悟られまいと、ビールに似たお酒をジョッキの半分ほど一気に煽り、次の言葉を待つ。

「だって、貴方はダンジョンを踏破してしまうほど英雄じゃない？ その強さだって、歴代のオリハルコン級にも引けをとらないものだわ。いいえ、それ以上かも」

歴代のオリハルコン級がどれだけ凄いのか、この世界に疎い自分にはサツパリだが。

ローズの中で、俺に対する評価がずいぶん高いようだ。

「それはちょっと、持ち上げすぎではないですか」

「いいえ、そんな事はないわつ。これでも、足りないくらいよ。だから、私の依頼を貴方が、受けてくれた事は本当に嬉しいの」

今までの人生で異性に、これほどまでに期待を向けられたことがあつただろうか。

それは、否だ。だとすれば、これに応えるのは吝かではない。

どうやら、この依頼に対して、少しばかりやる気が芽生えてきたようだ。

今だったら、週3勤務だったバイトを週5までなら頑張れてしまいそう。

フルタイム勤務からの、正社員昇格だつて夢じゃないだろ

「そこまで褒められては、いやがおうにも頑張るをえないですね」

持っていた木製のジョッキを、ローズに向けて差し出す。

「ええ、頼りにしているわっ」

と言うと、ローズは自分のジョッキを俺の持つジョッキに軽くぶつける。

コーンと、小気味良い音が鳴る。

それが合図だったかのように、運ばれてくる料理の数々。

それらに舌鼓を打ちつつ、その日の夜は更けていった。

## ダンジョンと集落2

チュン、チュンと、スズメに似た何かの鳴声が朝を告げる。

どうやら昨日は、飲み過ぎてしまったようだ。

頭に走る、この頭痛が何よりの証拠。

間違いなく、あのお酒のせいだろう。

シュワ、シュワとした発泡性に琥珀色。

ビールのように、グイグイとってしまったのが、いけなかったらしい。

似ているのは喉越しと味だけで、思いほかアルコール度数が高かったようだ。

やけに酔いが早いなど、思ったところまでは覚えているが、いかせん、その先がまったく記憶にない。

どうやって、この宿に帰ってきたかも覚えていない始末だ。

兎にも角にも、この頭痛を治めることが今一番に必要とされているところ。

先日、初めて使用した回復魔法を使ってみることに。

頭に手を当てて、「とふぁっあ」と一つ。

前回と同様、柔らかな光が頭部全体を包み込む。

すると、あつという間に頭痛は遙か彼方。頭痛薬も真つ青な効果だ。

『アイテムパック』から、スマホを取り出して時間を確認してみれば、午前八時頃。

飲みすぎたとはいえ、盛大に寝坊はしてない様子に一安心といったところだ。

「ん……」

ベットにかかる掛け布団、その右側から聞こえてきた自分のではない人の声。

よく見てみれば、掛け布団にふつくらとした盛り上がりが見てとれる。

およそ、人が一人分が寝転べば、出来上がるであろうその膨らみ。

おそるおそる、掛け布団をめくってみれば。

艶やかな金髪がパラリと揺れ、その姿を覗かせる。

お布団の中からあらわれたのは、すやすやと気持ち良さに寝息を立てたローズさん。

完全に思考がフリーズすること数分。

とりあえず、捲りあげた掛け布団を元の位置へと戻す。

しかし、それで元には戻らないのが今の現状。

……おう、マジか。マジなのか。

ついに、俺も大人の階段を登ってしまったのか。

いや、そんなまさか。

自身の過去を振り返ってみて。

そんな大それたことが出来ないのは、自分自身が一番わかっている。

伊達に、信頼と実績の童貞じるしを掲げてはいない。

だからと言って、絶対にならないと言い切れないのが、お酒の怖いところ。

グルグルと堂々巡りのような思考が続くこと、更に数分。

モゾモゾと、お布団から顔をだすローズさん。

ついに、お目覚めのご様子。

心の準備などつくはずもない。童貞野郎としては最高にあたふた。しかし、外面だけはどうにか取り繕って、ローズさんを黙って見つめるばかり。

ここで声などでもかけようものなら、上擦ってしまうこと必至。今できる最高の虚勢と、いったところだろう。

そして、当のローズさんといえば。

寝ぼけ眼で、部屋の中をキョロキョロと見回して視線が合えば、スツと逸らされた。

「……ローズさん？」

勇気をだして、若干上擦りながらも、ローズさんへお声がけ。

「っ……」

ビクリと、震える華奢な肩。

そのお顔は端から見てわかるくらいに、真っ赤だ。

気まずい沈黙に抗えるはずもなく、流されるまま幾ばくか。

俯いていたローズさんが、スッと立ちあがる。

「……やつ、や、やどの……や、宿の前で待ってるわっ」

と、言い終えるかいなや、クルリと踵を返してドアの外へ走りだした。

それに伴って、ローズのスカートがふわり舞いあがる。

しかし、今の俺には中身を確認する余裕などなく……いや、やめておこじろ。

見てしまった自分に、ウソはつけない。



本日のパンツは、フリルのついた薄いピンク。

繰り返す、本日は薄いピンクであります。

裏井戸で手早く身支度を済ませて、宿の前へと向かう。

向こう数日間は部屋をとっている都合、部屋を引き払う必要もなく、そのまま出てきた形だ。

ローズから指定された宿屋の前で待つこと、10分と三十秒。

どうやら、向こうも準備が終わったらしい。

「あ、あの……そ、その、待たせたわねっ」

やや、緊張を思わせるその面持ち。

「そ、そんなことないアルよ。お、れも今来たところだからっ」

それ以上に緊張していたのは、この俺。  
一体、何人だよって、心の中で自身に一人突っ込みをいれる。

したのか、していないのか。

眞実は失われた記憶と共に、全ては闇の中へ。

さすがの回復魔法も、失われた記憶までは回復してくれなかった  
ようだ。

「……と、とりあえずダンジョンへ向かいますしょうか？」

「そ、そうねっ。それがいいわっ」

今はアレだ、アリナリーゼから頂戴した課題に集中しよう。

そうだ、それがいい。

ダンジョンに潜って、魔物を狩って、お宝を探そう。

もしかしたら、冒険という刺激がよくわからないナントカ神経を  
刺激して、お酒と一緒に消え去った記憶も戻るかもしれない。

刺激療法に一縷の望みを託し、ダンジョンへと歩を進めようとし  
た時だった。

「じ、ご主人様あつ！」

声がする方へ、振り返ってみれば。

そこに見えたものは、迷宮都市でお留守番しているはずのクリステイナーだった。

## 陽の差すダンジョン・アルカン

「ご、ご主人様あつ！」

声がする方へ、振り返ってみれば。

そこに見えたものは、迷宮都市でお留守番しているはずのクリスティーナだった。

その後ろには、クレアさんの姿まで。

「クリスティーナ？」

「ご、ご主人様っ！ ローズさんが、ローズさんがっ……」

少しばかり焦った様子を見せるクリスティーナ。

と、ここで俺の後ろに隠れようとしているローズを見つけたようで。

クリスティーナとクレアさんの表情が一変した。

それは、「見つけた！」ではなく、「やっぱり、ここにいた」って感じ。

「っ……」

見つけられたほうは、ピクリと肩を揺らしてサッと俺の後ろへ身を隠した。

しかし、すでに遅し。バツチリと犯行現場は目撃されてしまっている。

現行犯逮捕というやつだ。

「あああっ！ ローズさんっ！」

クリスティーナに声をかけられて、どこかバツのわるそうなローズ。

その態度を見て、これはピーンときちゃったわ。

やはりと言うか……このローズさん。相当な困ったちゃんである。

冒険という二文字にテンションが振り切れてしまった結果。

二人には、何も言わず勢いのまま宿を飛び出してきたのだろう。

そして、ローズがいないことに慌てたクリスティーナとクレアさんが後を追ってここまで来た。

と、まあそんなところだろうか。

どんなもんだ、やまだにだってこれぐらいわかってしまうのだよ。

冒険者に憧れるローズを知っているクレアさんにしたら、行きそ  
うな場所なんて容易に見当がつくってものだ。

「……しっ、心配をかけたわねっ」

プイツとそっぽ向いて、言葉を口にするローズ。

謝罪の言葉を口にするものの、反省の色が伺えない様子。

それを見て、クレアさんがスツと一歩前へ。

「シャーロット……いえ、ローズ様」

今日のクレアさんは一味違う。

表情こそ、いつもと同じ優しげなものだけけれど。今日は、目  
が完全に笑っていない。

こんな視線を向けられたら、すぐさま『ごめんなさい』と言っちゃ  
う自信があるわ。

体感温度も、三度は下がった気がする。

「な、なっ、なによ……」

一方、言葉だけは強気なローズさん。

しかし、その実はクレアさんに対して完全にビビッてるようだ。

それが手にとるようにわかる。

だって、俺もビビッてるもん。クレアさんマジ怖い。

ゴゴゴ……とか背後から、あの効果音が聞こえてきそう。

この間に割って入るなど、とんでもない。黙ってことの行く末を見守るばかりだ。

「いいですか。あなたの御体は、貴方お一人のものではありません。もしもの事があれば、王家……いえ、王国の危機と言っても過言ではないですよ。

そもそも、ローズ様がダンジョンに潜ることなど……」

「わ、わかったわよっ！ 充分、注意するわ。それでいいでしょ！  
？」

続く言葉を遮るように、声を張るローズさん。

どうやら、勢いで押し切る作戦らしい。

それに対して、クレアさんは黙って視線を向ける。

その迫力は相当な物だ。

ダンジョンのフロアボスにも匹敵するのではないだろうか。

ゴクリと、生唾を飲む音が聞こえた。

ちなみに、これは俺の喉が立てた音だ。

なんで関係のない俺が、こんなに緊張しているのだろうか。

横を伺えば、クリステイーナも同じ様子。

華奢なおててをぎゅっと握りしめて、瞬きを忘れてしまったかのよう  
に二人の間を行ったりきたり。

「……わかりました。ちゃんと理解して頂けるならこれ以上なにも  
言うことはありません。それに今回はヤマダ様がいらっしゃるので  
すから、万が一も起きないと信じています」

と、ここでクレアさんの視線がチラリ。

安心と信頼のアイコンタクトというやつだ。

思わぬところで責任を頂戴してしまったが、元よりそのつもりだ。

『パーティーメンバーは、いついかなる時もメンバーを見捨てない』と、言っていた某ネットゲでお世話になったあのギルドマスター  
は元気にやっているだろうか。

風の噂では、自身のギルドを放逐されたと聞いたけど。



俺たちは今、ローズたちと合流した場所から離れて『陽の差すダンジョン・アルカン』の目の前にいる。

クレアさんからヒシヒシと感じる重圧プレッシャーに耐えきれず、早々と場所を移した結果である。ダンジョンへの距離も宿から近い位置にあり、徒歩五分といったところ。

都内でこの立地条件であれば、きっと人気物件になっていたことだろう。

果たして、この世界にダンジョンから徒歩五分という条件に価値があるのかはわからないが。

「ここは迷宮都市のダンジョンとは違って、ベテラン勢が多いわねっ！」

ダンジョン入り口付近にいる冒険者たちを見て、ローズが嬉しそうに口を開く。

迷宮都市にあるダンジョンに比べて、人数は少ない。

それでも、三十人弱はいるだろうか。潜る前に装備を確認する者、仲間と打ち合わせをしている者と様々だ。

「ええ、そのようですね」

などと、格好をつけて言ってみたものの。

ベテラン勢と言われたところで、冒険者として日の浅い俺にはその違いがさっぱりわからない。

ん、いや……待てよ。

よくよく見てみれば、着けている装備の類が年季入っているように思える。

持っている武器にしても、なにやらお高そうな感じ。

試しに軽く、『ステータス』でまわりの冒険者を確認してみれば、確かに迷宮都市の時よりも若干高めだ。

なるほど。こっちに来てから強さを測るときはいつも『ステータス』を使っていたけど、使えない人間にとってはこんな細かな所から判断していくしかないのだよな。

それが装備だったり、物腰の鋭さだったりと。

どうやら、こっちに来てから『ステータス』の便利さに頼りつきりになっていたようだ。

ここは安全な日本とは違い、異世界である。もっと自身の目を養わなくてはいつかそれが命取り、なんて事になりかねない。

これは少しばかり緩んでしまった気を引き締めないといけないな。

パアッンと自分の頬を叩いて、気合を入れる。

それに驚いたのが、そばにいたビクリと体を震わすローズ。

「き、急にどうしたのよっ?」

驚かせてしまったようだ。「ごめんごめん。」

「自分なりの気合の入れ方ですので、気にしないでください」

「ならいいのだけれど……」

さてと、気合も入れ直したことだし。

今回の目的である『陽の差すダンジョン・アルカン』へ潜るとするか。

陽の差すダンジョン・アルカン (後書き)

更新が遅れて申し訳ありません。

ネトゲの二年ぶりとなる拡張パックを夢中で遊んでいたのが原因です。

更新を待っていてくれた方、本当にすみませんでした。

## 陽の差すダンジョン・アルカン2

『陽の差すダンジョン・アルカン』は巨大な石材が連なり、複雑に入り組んできた迷宮だ。

屋根など天井を塞ぐものは存在せず、その中に入って見上げれば空が望むことだろう。

文字通り、陽の差すダンジョンというわけだ。

じゃあ、ご丁寧に通路を通らなくても石材の上を行けば、最深部までショートカット出来るのではないか？

と、一瞬邪な考えが浮かんだが、それはすぐさま消え去った。

なにせ、目の前の壁は優に百メートルを超える高さだ。

そんなのをよじ登って、ダンジョンの最深部に当たる中心地へと向かうことは、到底出来そうに思えない。

見上げてみるに、その頂上部は薄っすらと霞がかっている。

例えば世界的なロッククライマーであっても、これを登るのは無理ではないだろうか。

もし、飛行魔法なんて物があれば、可能かもしれないが。

今は無い物ねだりをしていても仕方がない。

ここは正攻法で踏破していくしかないだろう。

それに俺は高所恐怖症だ。できれば足を地につけて進んで行きた

い。  
あんな高い所ではきつと、ヘッピリ腰のうえ、生まれたての子鹿のようにプルプルと震えてしまうこと間違いなし。

「ほえ……ご主人様、大きいですね」

ダンジョンを覆う壁を見上げて、クリスティーナが言葉を漏らす。

「ああ、真近で見ると迫力が違うな」

確かに、クリスティーナが言った通り大きい。

いや、大きすぎる。とてもじゃないが、人の手で造られた物とは思えないほどだ。

現代日本の技術力を持つてすれば、やって出来ないこともないと思うが。

それでも、国の総力を挙げた一大プロジェクトとなるだろう。

それを日本よりも遅れた文明レベルのこの世界で、作り上げるのは絶対に無理だ。  
いや、魔法なんてファンタジー満載なものがあるのだから、不可能とは言いきれないのか。

しかし、これは人の手ではなく、もっとこう……より大きな存在の影を感じてしまうのは。

この迫力に飲まれてしまっているからだろうか。

「このダンジョンは、太古の昔に巨人族タイタンが造りだしたと言われているわ」

と、ここでダンジョンを見上げている俺達にローズさんからの声がけ。

まるで、心を読まれたかのようなナイスタイミング。

なにその中二心をくすぐるワードは。  
ファンタジー世界では、ドラゴン、エルフに並ぶパワーワードだろう。

そんなのを聞いてしまったら、遠い昔に封印された漆黒のナニヤラが復活してしまっちゃうよ。

「巨人族タイタンですか、それは一度見てみたいですね」

滾る心を抑えながら、冷静に返す。

「それはムリよ。だって、巨人族タイタンはとうの昔に絶滅したと聞いているわ」

えっ……まじで。

全滅か……そっか、全滅しちゃったのか。

幼少頃からの夢だった、巨人族タイタンの肩に乗ってキャツキャウフフは露つゆと消えてしまった。

が、しかし、ここはファンタジー溢れる世界である。

巨人族タイタン以外にも、まだ見ぬパワーワードがきつとあるはずだ。もしかしたら、他に思い描いた夢は叶うかもしれない。

よし、やる気がでてきたぞ。

山田さん頑張つて、ダンジョン攻略しちゃうわ。

「さあ、ダンジョンに潜ろう！」

クリスティーナ、ローズ、クレアさんに呼びかける。

「はいっ」

「もちろんよっ」

「準備はできています」

三者三様の返事だっけど、元気よく返してくれた。それと同時に、俺たちはダンジョンの入り口へ向かう。



迷宮都市と同じように、二人の衛兵が立っているあの場所がそうだろう。

確かあれば、ダンジョン内への立ち入りを防ぐものではなく、内部から魔物を出ないようにするものだったな。

しかし、まあ。二人程度の衛兵で大丈夫なものなのだろうか。

などと、考えつつ。

ダンジョンの入り口へその歩を進めていると、

周りにいる冒険者の中でも、一際目立ったパーティーが近づいてきた。

人数は五人、その全員が白銀の軽甲冑を見に纏っている。

パーティー名をつけるなら、きっと、『シルバーソード』とかナントカ。

見るからにキラキラと輝いていて、とてもお高そう。

その装備一つで、誰かの人生が簡単に買ってしまうそんな予感。

先頭を歩くのは、長髪に金髪の子様系イケメン。

背景に咲くお花が見えてしまうのは、西洋系イケメンの成せる業。

対して俺の背景には……やめておこう。

わざわざ、自らダメージを負いにいく必要はない。

しかし、生まれ持ったデバフの解除ってどうやるんだろうな。

当の子様系イケメンは、俺達の前まで来て止まると。

じつと目線を向ける。

最初は絡まれるかと思っていたが、どうやらそうではないようだ。

俺のことなどアウト・オブ・眼中。その目線の先にはクリスティーナが捉えられていた。

この王子様系イケメンとクリスティーナは知り合いなのか？

目線を向けられた方のクリスティーナといえば、きよとんとした様子。

そして、王子様系イケメンが口を開く

「こんな場所でまさかと思っていましたが、やはり貴方は聖女クリスティーナ様ですね」

### 陽の差すダンジョン・アルカン3

「こんな場所でまさかと思っただけですが……。やはり貴方は聖女クリスティーナ様ですね」

「いいえ、違います。まるっと全然、人違いです」

王子様系イケメン問いに、無機質な表情で即答するクリスティーナ。

「おいおい、この聖女様ってば。」

ナチュラルに嘘をついたのだけれど、これって聖女様のどのだろうか。

この世界的にアリなのか、……いやギリギリアウトだろうな。

それを受けて王子様系イケメンはどうかというところ。

さすがに、次の言葉が出ない。

まさか全力で否定されるとは思っていなかったよう。

鳩が豆鉄砲を喰らったようとは、正にこの事。

もし自分があのような対応をされた日には、三日ほど部屋にこもってしまうこと必至。

しかし、それでも負けないのがイケメンのバイタリティだろうか。すぐさま立ち直り、呆けていた表情をキリツとしたイケテルフェイスに戻すと、その口を開く。

「……いえ、そんなワケがありません。

以前、この目でそのお姿を拝見してからと云うもの。一度たりともそのお姿を忘れたことなどないのです。格好は違えど、聖女様を間違えるはずはありません」

……。舞台役者さながら語ってみせる姿は。

まるでイケメンのイケてる部分を様々と見せつけられているかのようで。

今にもキラキラとした何か零れんばかりだ。

ナウでヤングなジャパン女子であれば、きっと今頃、目がハートマークになっているだろう。

俺もあんな風になりたかった。……切に思う。

イケメンであれば、イケメンでさえあったのならば。

あんなことも、こんなことだって思いのままだったはずだ。

「世界は私を中心に回っているの」なんて、スイーツ極まる発言を一度でいいからしてみたかった。

そして、SNSで拡散からの炎上などスイーツ女子の花道ではなからうか。

「……もういいでしょうか？」

「っ……っ」

クリステイーナさんからのトドメの一撃。

これ以上、もう何も話すことはない、意思表示しているかのような鉄壁の防御。

聞いているコツチまで、胃が痛くなってくるこの感じ。

過去のトラウマが、沸々と湧き上がってくる。

中学二年の夏、佳代ちゃんから向けられたあの目が今も忘れられない。

などと考えていると、

ふいに服を引っぱられる感触に視線を向ける。

そこには、クリステイーナさんが上目使いでコンニチワ。

王子様系イケメンとはまるで違う、柔らかさを持った表情で口を開く。

「ご主人様、行きましょっつ」

グイグイと服を引っばられるまま、ダンジョンの入り口へと進む。それにつられて、ローズとクレアさんも俺たちの後を追う。

「ちよっ、ちよっと待つてく……！」

先程よりも遠くなった王子様系イケメンの声を背に、俺たちは『陽の差すダンジョン・アルカン』の中へと入っていた。

灰色の石材で組まれた壁と床。

そこにアクセントを加えるのは、蔦のようにはえた植物。

巨大な壁に囲まれて圧迫感を感じ入るものの、地下へと続くダンジョンに比べると圧迫感はない。

それも全て、青く澄み切った大空が見えているせいだろう。

『陽の差すダンジョン・アルカン』の中へと踏み込んで30分余り。

圧巻ともいえるその景観を楽しむ間もなく、俺たちは全力で走っていた。

後ろからは豚とカエルを合わせたかのような、なんとも形容のしづらい魔物。

それが「ブフゲロツゴブフゲロツゴツ」と、カエルなのか豚なのか

ハッキリしない鳴き声をあげて迫っている。

ざっと見た感じ、10数体。

一つだけ言うと、逃げてる理由はその魔物がけっして強いわけでも、数が多いからでもない。倒した時に吹きでる体液がとて臭かったからだ。

二匹目を見た瞬間、即座に逃亡を決めてしまうほどの悪臭。

これが都内地下鉄なんぞでぶちまけられた日には、消防車や救急車を巻き込んだの大騒動となること間違いないだろう。

テロ問題に敏感な昨今。もしかすると防護服を着た人たちが現れて、お昼のニュースなんかを独占してしまうかもしれないそんな臭さマジヤバイ。

「いつ、行き止まりよっ！」

先頭を走っていたローズが叫ぶ。

その言葉通り、袋小路となった壁が俺たちを阻む。

このままでは、あと数十秒もしないうちに追いつかれてしまうだろう。

覚悟を決めて、始まりの剣という名の戦斧を握りしめて魔物に向き合う。

これはあれだな、俺が泥を被るしかないだろう。  
まさか女性陣にあの臭い体液を浴びせるわけにはいかない。

「俺がと……」

「ここは私に任せてっ！」

……まじかよ、ローズさん。

「しかし、あの魔物の体液は……」

「そうですよ、ローズさんっ！ 死んでしまいます！」

いや、死なないけどな。

体液は臭いけど、レベル的にローズでも倒せるものだし。

ただ、ちょっと数は多いかなとは思っけど。

「今まで全然、役に立ててないからこれくらいは……っ！」

それは、覚悟を決めた声だった。



ふと横を伺えば、クレアさんがこつ誇らしいものを見るような視線をローズに送っている。

「ろ、ローズさんっ」

それでも尚、止めようとするクリスティーナを手で制する。

違うのだ、違うのだよクリスティーナ。

ここまで覚悟を決めた者を止めるのは、侮辱以外のなにものでもない。

そう、ローズは今、死地へと向かう戦士なのだ。

それを止める手段など、ああ、あるはずもない。

ローズは腰から剣を引き抜き、振り上げる

「うおっ あああああああああああっ！！」

雄叫びをあげて魔物へと向かうローズの勇姿を、俺たちは尊敬の眼差しで見送るのだった。

## 陽の差すダンジョン・アルカン4

一時間にも及ぶ死闘の末、全ての魔物を倒し終えたローズさん。その代償に、全身緑色の体液でベトベトになってしまった。

この距離からでも漂ってくる強烈な臭いに、つい鼻をつまんでしまふ。

しかし、当のローズさんといえば、一仕事終えたとばかりに清々しいまでの笑顔である。

「ローズさん、大丈夫ですか？」

鼻をつまんでいるせいで、声がモザイクの向こう側で喋る人みたいになってしまった。

「問題ないわ！ 数は多かったけれど、私の相手ではないわねっ！」

何度か、思わず手を出してしまいそうになった場面もあったけど。それは黙っておいたほうがよさそうだ。

だって今、めちやくちゃイイ笑顔しているもん。

そして、ローズが一步、俺たちの元へ。

それを受けて俺たちは、まるで足並みを揃えたように後方へ一歩下がる。

少しばかりの沈黙をおいて、

「……………やっぱり?」

「……………ええ、やっぱりです。ローズさん」

当のローズさんは全身に臭い体液を浴びてしまったせいか、お鼻が馬鹿になっているようだ。

しかし、まあアレだ。これはどうしたものか。

このままではパーティーの連携に支障がでてしまうレベルの悪臭。

だからといって、手持ちの水をぶっかけても焼け石に水。

それこそ石鹸などを使って、シャワーでも浴びるくらいのことをしてしなければならぬだろう。

……………って待てよ。

あつたわ、シャワー。

というわけで、かもんスキルウィンドウ。

スキルポイント…20

アクティブ：スキル  
HPストック：LvMax  
フルスイング：Lv1  
火属性魔法：Lv20  
回復魔法：Lv2

パッシブ：スキル  
アイテムパック：LvMax  
マップ：LvMax  
言語：LvMax

これをこようだ。

スキルポイント：19

アクティブ：スキル  
HPストック：LvMax  
フルスイング：Lv1  
火属性魔法：Lv20  
水属性魔法 Lv1  
回復魔法：Lv2

パッシブ：スキル  
アイテムパック：LvMax  
マップ：LvMax  
言語：LvMax

どんなもんだ、スキル振りもだいぶ慣れてきた感があるぞ。ではさっそく、納品ほやほやの水属性魔法を試し撃ちしてみるとするか。

イメージはこう、掌から流れだす緩やかな水流。

できればマーライン、マーライオン、こいマーライオン。

体の中心から何かが掌に集まる感覚と共に、水が放射線を描いて流れだす。

おっと、これは水量が多いな。

もっと抑えて、シャワーに近づけなければ……ふおるああっ！

よし、だいぶシャワーぽくなってきたぞ。

しかし、あれだな。これはもしかすると、温度調整なんかも出来ちゃったりするのだろうか。

いくら此処が気候が穏やかとはいえ、この冷水をローズさんにぶっかけてしまうのは忍びない。

せつかくであれば、心地の良いお湯加減で快適なシャワーライフをお届けしたいじゃんね。

『アイテムパック』には、自宅から持ってきたシャンプーやボディソープも入っていることだし。

目の前で美少女がシャワータイムとか。

……おう、これはご褒美か。

「ご褒美だな、間違いない。今決めた。」

俄然、山田さん頑張っちゃうわ。  
最高のシャワー作ってやるんだから。

調整に調整を重ねること数分、理想のシャワーを作りだすことに成功した。

この水圧にお湯加減であれば、きっとローズさんも満足して頂けることだろう。

掌から流れでるシャワーを止めて、『アイテムパック』から取り出したお風呂セットをローズに手渡すと、キョトンとした表情でそれを受け取った。

イマイチこちらの意図が伝わっていない様子。

「ローズさん、お湯を出しますのでそれで魔物の体液を洗い落としてください」

「えっえ……それって……？」

どうにも歯切れの悪いローズさん。

ああ、そうか。着替えだな、清潔なお着替えを欲しているのだろう。

せっかく洗い流してもまた同じ服を着ては意味ないからな。

これは山田さん、気が利かなかつたわ。

「すみません、これは気が付きませんでした」

再度、『アイテムパック』を開いてTシャツとハーフパンツを取り出す。

男物でわるいが、ここは我慢して頂こう。

それを、今度はクレアさんに手渡す。

ローズの手が魔物の体液で、ベトベトになっているためだ。着替えを汚さない小さな気配りが最高にダンディーじゃね。

「そ、そうじゃなくて……」

魔物の体液を洗い流すお風呂セットに洗濯した着替え、それに程よい水圧に調整された温度のシャワーここまで揃っていて、あと一体なにが足りないというのか。

「もしかして、魔力の心配でしたら大丈夫ですよ。これくらいで尽きることはないと思います」

もし、足りなくなつたとしても気合で補う所存である。

だから、何も心配しなくてもいいのだぜ。

「っ……」

俯き加減だったローズが、まるで覚悟を決めたように俺を見据える。

心なしか、頬が赤くなっているように見えた。

「わ、わかったわっ！　じゃあ……お、お、お願しようかしら？」

太ももをモジモジと擦り合わせるローズさんラブリー。

お願いされましょう。

最高のシャワータイムをローズさんにお届けするぜ。



## 陽の差すダンジョン・アルカン5

いざゆかん、魅惑のシャワータイム。

指をわきわきと入念なウォーミングアップ。

といっても、手元で操作するわけではないのだが、まあいい。

こつこつたものは気持ちの問題なのだ。

さあ、いつでも発射準備オツケーなのだぜ、ローズさん。

「こつ、ご主人様っ！」

……なんだね、クリステイナーさん。

やまださんはちょっと忙しいのだよ、邪魔しないでくれるかね。

「どうしたんだ、クリステイナー？」

「わたしがっ、隠しますね！」

隠すってなにをよ。

ここには隠すもんなてないけど。

むしろどちらかといえば、率先して見せて頂きたい。

などと考えていると、クリスティーナのお手てが目の前を塞ぐ。目の前が闇で覆われた時、自身が畏の中に落ちたことに気づいた。

くっ……計ったな。

しかし、しかしだ。俺にはこれを振り払う術すべを持たない。

そんな事をすれば、ローズの裸を見たいと声高々に宣言しているようなもの。

今後のパーティー活動を考えれば、それだけは断じて避けなければいけない。

まさかこんなところに、伏兵が潜んでいたとは……クリスティーナなんて恐ろしい子。

カタ……カサ……スッ。

こっ、これは……そんな、装備を外して服を脱いでいる音かっ！？

視界を奪われたことで、音がより鮮明に聞こえてくるようだ。

十数センチ先、手を伸ばせば届いてしまうそんな距離で、異性が服を脱いでいるという事実。

なんとという圧倒的リアリティー。

危うく童貞を脱してしまっただかのような錯覚を覚えてしまいそうだ。

やばいな目隠し……新しい可能性に目覚めてしまいそう。

「わあっ、ローズさん大きいですね！ 肌もスベスベですし」

大きいですね……いですね……すね……。

……。

わあああいつ！。

ローズさん大きいってさ！

「そ、そうかしら？ クリスティーナも大きそうに見えるけど」

「わ、わたしはそんな……」

脳内に響くりフレイン。妄想が、妄想が、どこまでも広がっていく。

このままでは、行き場を失った血流が登頂を果たしてしまうのではないか。

しかし、抑えようと焦れば焦るほど、一点を目指し、集結しようとする血流。

まさに、絶体絶命とはこの事。

主にやまださんの社会生命がピンチだ。

「あ、あの……お湯をお願いしてもいいかしら？」

「あ、はい。今だします」

ナイスタイミングだよ、ローズさん。

今まさに設営されようとしているテントを阻止する為にも、ここは一つ魔法に集中させていただく。

掌に向けて魔力が流れるイメージ。

すると、体の中心部から何かが抜ける感覚と共に、温水が噴きだす。

そう、先ほど。調整に、調整を重ねて作りあげた理想のシャワーだ。

温度、水圧どれをとっても、一流ホテルにも負けないものだと自負する自慢の一品である。

「ダンジョンの中で湯浴みができるなんてとても贅沢だね」

「魔力は気にせずに、ゆっくりと汚れを落としてください」

「ありがとう、その言葉に甘えようかしら」

などと、余裕のある男を演出。

どうやらこのシャワーを喜んでもらえた様子、頑張った甲斐があるじゃんね。

とここで、一つ思い浮かぶ。

このシャワーに、回復魔法をミックスしてみたらどうだろうか。湯船のようなホッと一息とまではいかないが、多少は疲れがとれるかもしれない。

一度に、二つ以上の魔法を使った経験はないが。物は試しに、やってみてもいいかもしれないな。

失敗したとしても回復魔法だ、爆発なんてしないだろうし。せいぜい、魔法の発動が止まるくらいのもだろう。

では、さっそく。

イメージを練る、緑色したキラキラと光る癒し成分。それを水属性魔法で作るシャワーに合わせる入浴剤。

おっ、お。上手くいった感じがビンビンときたぞ。

クリスティーナに目隠しされている都合、目視での確認はできないが。

これは絶対、上手くいつているって。

「っ…………！」

どうだろうか、ローズさんのリアクションがないのが、ちょっと不安なのだけれど。

「あっ、あ…………んっ…………」

不安になって間もなく、当人から声があがる。

「大丈夫ですか、ローズさん？」

「だ、大丈夫よ。ただ、お湯がとても気持ちよくて…………」

思惑は成功し、ローズさんからご好評を頂いたようだ。今度、機会があれば湯船にこのお湯を張ってみるのもいいかもしれないな。

これは日本的に、是非とも入ってみたい。

「少しでも疲労がとれればと、お湯に回復魔法を加えてみました」

「お湯に回復魔法を!？」

「ええ、いかがでしょうか？」

「とても気持ちがいいわっ……んっ……最高よ。これはクセになっ  
てしまそっ……」

「さすがご主人様ですっ。複合魔法まで使いこなしてしまうなんて」

なるほど。こちらの世界では、複数の魔法を同時に使用するの  
はレアなのか。

日本ではよく見かけていたけどな、といっても漫画や小説の中の話  
だが。

「ヤマダ様っ、アレは……!？」

クレアさんの声があがる。

ちょっと緊迫した感じ。

しかし、アレと言われても。やまださんは今、目隠しされていて  
見ることができないのだけねど。

「う、ご主人様……来ていますっ！」

だから、なにがよ。

もしかして、阻止したと思っていたテントが設置されてしまったの  
だろうか。

それは一大事である。

だけれど、そんな感覚はないから大丈夫だと思うけど。

というか、信じてる。……お願い。

ここで、目を塞いでいたクリスティーナのお手てが離れた。

少しばかりの眩しさを感じながら、目を開くとそこには



## 陽の差すダンジョン・アルカン6

目を開くとそこには

肌は傷一つなく、白く艶やか。

背中から流れるようなライン、くびれたウエスト。

その下には、引き締まりながらも肉付きの良いまさに桃尻。

ローズのお尻が目の前で揺れる。

それは見事にもうプルンプルンツと。

しかし、惜しいことに、それを見続けるわけにはいかない。

なにせ、ローズの先には頭だけで大人一人分はありそうな大蛇が迫っている。

ダンジョンの壁が余りにも巨大で感覚が狂いそうになるが、あれはヤバイ。

クレアさんはローズを庇うように前に、クリステイナは魔法を発動させるべく詠唱を始めているが、とてもじゃないが間に合いそうにもない。

俺は『アイテムパック』から、始まりの剣と名のついた戦斧を取りだす。

なぜ、戦斧なのに剣なのかと。甚だ疑問なのだが、今は……いい。

随分と手に馴染む武器を片手に、大蛇に向かって走りだす。

黒い鱗、横に入った赤いライン。

蛇特有のよろによると左右に体を振る走り方は、巨大になってもあまり変わらないようだ。

ただ違いがあるとすれば、大蛇が進む度に、地面の石材が削れ砂埃を巻き上げている点だろう。

正直、ちよつと怖い。

しかし、だからといってここで退いてしまえば、後ろにいるクリスティーナ達に被害がでてしまう。

更にいえば、俺達がいるこの場所は袋小路である。

逃げようにも状況がそれを許さないのだ。

であれば、やまだとしてはパーティーメンバーの為、前へ進むのみである。

覚悟を決めて、大蛇に向かって全力前進。

踏み込んだ床が割れ、離れていた距離が目に見えて縮まっていく。

気がつけば、もう目前に。

飛びあがり戦斧を振りあげて、『フルスイング』を発動させると、淡い光が俺の体を包み輝く。

スキルによって10%ほど強化されたそれを、大蛇の頭めがけて全力で振り下ろす。

ブオツンと風が唸る。

振り下ろされた戦斧が大蛇の肉に食い込み、黒い血が勢いよく噴きだす。

肉を切り裂いた感触に目をやれば、頭の右半分が無くなっていた。

床にべとりと大蛇の肉塊が落ちる。

それでも戦意は喪失してないらしく、シャーッと聞く者の危機感を煽る威嚇音を立てて襲ってきた。

おう、マジか。魔物すげえ。

俺は慌てて再度、戦斧を振り抜く。

逆袈裟切りのように振りぬかれた戦斧は、肉を裂き、大蛇の頭を完全に切り落とした。

全体の三分の一ほど、起きあがっていた大蛇の体は支える力を失い、重厚な音と共に石材で造られた床の上へと倒れた。

舞い上がった砂煙が晴れた時、聞き慣れたメッセージが響く。

『 レベルアップ。スキルポイント15を獲得しました。 』

「ご主人様っ！ 大丈夫ですか？」

「ああ、見ての通り怪我一つないよ」

駆け寄ってきたクリステイナーに、手を広げて無事を知らせる。その後ろには、ローズとクレアさんの姿も見えた。

しかし、何故だろう。あろうことに、ローズは既に服を着ていた。なんで着てるんだよ、服なんて着なきゃいいのに……いや、普通に考えて着るよな。

しかも、替えの服を渡したのは俺だし。

「また、貴方に助けられてしまったわね」

「いえ、ローズさん。私達はパーティーメンバーです、当然の事をしたままですよ」

「……パーティーメンバー。ええ、そうだね、私たちパーティーメンバーよっ！」

そう言ったローズは、どこか嬉しそうに見えた。

もしかしたら冒険好きのローズの事だ、きっとパーティーとか仲間  
に憧れでも抱いていたのかもしれない。

さてと、倒した大蛇の方へ振り返ると。

例の如く、肉体はブクブクと溶けだす。

そして、魔石と、骨、鱗を残してダンジョンへと吸収されていく。

既に何度も見た光景だが、果たして吸収されたモノはどこへ消えていくのか。

ひょっとして、魔物を産み出す為に再利用されたりしちゃうかもしれない。

そう考えると、このダンジョンというものも、何か一つの生き物のように思えるな。

などと、珍しく感傷的なことを考えていると。

大蛇の骨がある場所、ちょうど中腹あたりだろうか。

そこに男が横たわっていた。

年齢は二十代前半、雰囲気的にイケメンだ。

身につけている装備はとてもお高そう。

ローズのそれと比べても、遜色のない高級なのだろう、きっと。

しかし、どこかで見たことのあるこの感じ。

だけれど、今ひとつ思い出せない。ワンモヤモヤと云ったところ。

この男を見るにきつと、運悪く食べられてしまったのだろうか。

不幸中の幸いであったのは、蛇特有の丸呑みであったこと。

そのままゴクンとやられたおかげで、傷らしい傷は見当たらない。

ただ、もう少し遅ければ胃液が何だかわからないものに消化され、めでたく大蛇の栄養分になっていいことだろう。

運がいいなこいつ。

いや、そんなことないか。蛇に丸飲みされた時点で運がわるい。

ややあつて、丸飲み男に変化があつた。

もぞもぞと動きだしたかと思うと、目を大きく開き辺りを見まわす。

そして、俺を見つけハツとした表情になり

「……おっ、お前は誰だっ！」

蛇の腹から出てきたやつに言われたくないわ。

## 聖女

「…………おっ、お前は誰だっ！」

という前に、大蛇のお腹から現れたお前が、誰だよ状態なのがそれは。

しかし、目の前の当人は至って真剣なご様子であるからして。さて、この状況をどうしたものかと考えたやまださんは、まるっと有りのまま説明することに。

かくかくシカジカ、まるまるウマウマ。

説明自体は簡単で、数分もかからずに終えることが出来た。

曰く、あなたは倒した大蛇のお腹から出てきました云々。

内容は簡単でも、ショックは大きいようで当初の勢いはまるでなくなってしまうた。

かくも、現実とは残酷なものである。

「そうか…………では、助けてもらったということか。なのに、その恩人である貴殿達に声をあげてしまって申し訳ない」

説明が上手く伝わったようで何よりである。

些細な行き違いから、大きな問題に発展などよく聞く話だ。

とくに、ダンジョンのような命の危機がすぐ傍にある場所なら尚更だろう。

問題の芽になりそうなモノは、早めに取り除く。それがパーティーリーダーの役目だつて。

以前、読んだラノベにそう書いてあったもの。

「ところであなたは何故、大蛇のお腹の中に入っていたのかしら？」

何故つてそれは、食べられちゃったからだよローズさん。

誰も好き好んで、蛇のお腹には入らないと思うよ。

もし、入った人がいたとしても、それはそれで相当ハイレベルだ  
と思うわ。

「……それが、大蛇の魔物を目の前にしたところまでは記憶がある  
のだが。それ以降は……」

「なるほど。しかし、大した怪我もなく、大蛇の腹から無事に出て  
これたのは幸運なことでしょう」

と、やまださんからのアフタフォロ。



最近、こついった細かい気遣いが出るようになってきた気がする。  
もしかして、もしかすると。このやまださんにも、モテ期なんてものが来ちゃうかもしれない。

「ああ、確かに貴殿の言うとおつ……なつ……!?」

ここで、男の視線が俺からクリスティーナへ移った。

すると、どうだろうか。

伏し目がちだったものが、クワツと開かれる。

「せ、聖女様っ……!!」

ははん。この反応でやまださん、思い出しちゃった。

この男アレだ。ダンジョンの入り口で、クリスティーナに声をかけていたあの王子様系イケメンだろ。

確か名前はシルバー、シルバー……、シルバーソードだったか。

あつ、これは勝手につけたパーティー名だ。

本当のお名前は何と云うのだろうか。

「まさか。聖女様が率いるパーティーに命を救われるとは……これも我が神のお導きか」

おう、今度はブツブツと何やら言いだしたぞ。

大蛇の体液か、胃液かわからないけど。何かしらそういった愉快的な成分が含まれているのだろうか。

だったら、回復魔法の一つでもかけてあげるのも吝かではない。

「……ご主人様、ご主人様っ」

近寄ってきた、クリスティーナが耳元で囁く。

その際に、吐息が耳に当たって背中あたりがゾワゾワと少し気持ちいい。

「チャンスです……仲間のいない内に、殺<sup>ヤ</sup>つてしましましょう」

おうふ。リアルに吹きだしてしまったわ。

このクリスティーナさんは一体全体、何を言っているのだろうか。

「……クリスティーナさん？」

驚きの余りに思わず、「さん」づけになってしまったじゃない。

「あの者達は危険です。もしかすれば、ご主人様やローズさん達までも被害が及ぶかもしれません」

なにそれ。めっちゃめっちゃ物騒じゃないですか。

「……そんなに危険なのか？」

「ええ。彼らは教会の中でも、さらに過激な思想を持つ清鎖派せいさと呼ばれる組織に属する者たちです。その信仰に対する姿勢は狂……」

「ちよつ、ちよつと待つてくれ。クリスティーナも知っているように、こつちの世界はあまり詳しくないんだ。もう少しわかりやすく説明してくれないか？」

「も、申し訳ありません、ご主人様。まさかこのような場所で会うとは思っていなかったもので、少しばかり焦ってしまったようです」

「ああ、それはいいんだが。さっき言った教会というのは、特定の神又は人物を信奉する人達の集まり。その認識で間違いはないかな

「？」

「はい、それで間違いありません。その教会中でも彼らが所属する清鎖派は、聖女の守護者を称する者達の集まりです」

クリスティーナの職は、<sup>ジョブ</sup>聖女である。

そして、彼はその聖女を守護するグループに所属している。

というならば、味方ではないのか？

なのに、チャンスだから殺<sup>ヤ</sup>つてしまおうなんて物騒な言葉が出てきたのかサツパリわからない。

「それがどう危険と繋がるんだ？ 聞いた感じだと味方のように思えるけど」

と、質問を投げかける。

すると、クリスティーナは普段見せない険しい表情を浮かべて口を開いた。

「問題なのはその考え方で、彼らは余りにも潔癖過ぎるのです。それは狂信的と言ってもいいでしょう。もし、彼らのご主人様やローズさん方を聖女についた錆<sup>錆</sup>びと感じたとしたら、なんの躊躇もなく排除に向かいます。そこに強い弱いは関係ありません。彼らにと

って、自身の命すら、信仰の前ではとるに足りないもの。そう考え  
ている危険な者たちなのです」

「どうやら思っていたよりも、過激な集団のようだ。  
できれば、係わり合いを持ちたくない。」

しかし、どうしたものか。クリスティーナとの関係を説明しよう  
としても、色々とアレがアレなので、とてもじゃないが、上手く説  
明しきる自信なんてないぞ。

それにだ、こちらの世界では新参者である俺には、どこにどの様  
な地雷が埋まっているかわからない。何気ない一言が大惨事なんて  
ことも十二分に考えられる。

もういっそ、逃げてしまった方がよっぽど楽なような気がしてき  
た。

フリーターの社会的責任の軽さと、ブツチ率を舐めんなよ。

「あの……話し込んでいるところわるいだけねど」

おう、ローズさん。どうしたの？

声が聞こえる方へ振り向くと、ローズがなにやら神妙な表情で続  
ける。

「蛇の魔物のお腹から出てきた彼、ちょっと様子がおかしいみたい

なのよ  
「

言われるがまま、視線はローズから清鎖派のイケメンへ。

すると、どうだろうか。

今までの雰囲気とは一転、めちゃくちゃこちらを睨んでいるではないか。

その視線はまるで、今にも射殺さんばかり。ちょっと怖い。

「……聖女様」

「いいえ、私はせいじょっ」

クリスティーナが言い切る前に、イケメンが言葉を重ねる。

「貴方がいくら否定したとしても、我々が聖女といえは聖女なので  
す」

なんとという有無を言わせぬ、ゴリ押し。

それを受けて、クリスティーナも次の言葉が続かない。

「……」つねたい。聖女様の傍にいる者は何者ですか？」

聖女（後書き）

14ちゃんのパッチ4・2に夢中で更新が遅れてしまいましたみません。



## 聖女2

「……一つ尋ねたい。聖女様の傍にいる者は何者ですか？」

先程までとは打って変って、修羅場のそれ。

この短時間の間に彼の中で、一体どんな心境の変化があったというのか。

しかし、目の前の彼は今にも射殺さんとはかりに、俺を睨みつけている。

どこで、どんなトリガーをひいてしまったのかわからないが。ターゲットを、ロックオンされてしまった予感がひしひしと伝わってくる。

おいおい、マジかよ。どうしよう、これ。

きっと、彼を何とかしたところで、後からワラワラと出てくるパターンでしょ。

クッククク……、ヤツは清鎖派四天王でも最弱云々。

絶対にメンドクサイやつだわ。

おっと、クリスティーナが何か言うようだ。

「どうやら、これ以上は騙し<sup>おお</sup>遂せないようですね」

終始、一ミリたりとも騙せてはいないけどな。  
どこからそんな自信がきたのか、やまださんにちょっと教えてほしい。

「貴方が言う通り、私は聖女クリスティーナです。しかし、それはもう過去のこと。私の後、次代の聖女が選ばれたと聞きましたが」

そう語ってみせる姿は、いつものと違ってちょっと凛々しい。  
これが仕事モードのクリスティーナなのだろう。

普段の感じもわるくないが、意外な一面がこうグッとくるぞ。  
これがギャップ萌えというやつなのだろうか、だとすれば今、完全に萌えている。

新しい自分を再発見しちゃってる。

「我々、清鎖派はあの女を聖女だと認めていません」

「……それは教皇に反するということですか？」

「神の御心に従うのみです。それは教皇ではない」

おっと、まだ真面目な話しは続いているようだ。  
少しばかり緩んでしまった表情を戻して、耳を向ける。

「では、……仮に認めないと言っているのであれば、どうするといつのですか？」

「もちろん排除します。教皇だとうと、聖女を詐称するあの女だとうと錆びは落とさねばなりません」

おう、おう。これはヤベー奴等だ。

こちらの世界で、教会がどんな組織かはわからないが、  
教皇と名がつく以上、トップじゃないとしても、それ相應の地位にあるはず。

それを一派閥が排除するなんて言葉を簡単に出してくる辺り、その狂信さが伺える。  
クリスティーナが言っていたことも、あながちオーバーではないかもしれない。

そうとわかれば、こんなヤベー奴等とは今すぐにも、おさらばしたほうがいいだろう。

触らぬ神にナントやらだ。

「お話し中あれなん……」

「傍にいる者は何者かと聞きましたね、それを答える前に一つ。聖女に与えられた役目はなんですか？」

やまださんの会話は、被せられたクリスティーナのそれに掻き消されてしまったようだ。

どうしよう。何か重要そうな話のようだし、ここで再度声をあげようものなら、完全に空気の読めない人間じゃんね。

それにまわりの様子を見てみれば、ローズやクレアさんも黙って二人のやりとりを見ているようだし。ここは一つ、それに便乗しよう。

もし、次も流されでもしちゃったら、やまださんのお腹が痛くなっちゃう。

「聖女の役割それは、大いなる信仰の光を示し民を正しき道へ導くこと。もう一つは、救世の体現者である『救いの御手』を見つけた事。

……聖女クリスティーナ。清教騎士団、団長であるこの私に教義を説くというつもりですか？」

「そう、救いの御手……確かあなたは、傍にいる者は何者ですか？と聞きましたね」

「ま、まさかつ……」

ビツと、伸ばされたクリスティーナの手が俺を指す。

「ごしゅ……いえ、この御方こそ。主神がその出現を予言された救いの御手なのです」

「っ……！！」

驚きを浮かべる清派の彼、さらに驚きを浮かべるローズとクレアさん。

そして、一番驚いてるのはなにを隠そうこの俺だ。

「ま、まさかつ……この男が、救いの御手だと言つのですか。聖女クリスティーナ」

「ええ、その通りです」

「いや、しかしこの様な凡庸な男が……」

話題の中心であるはずの俺が、何故か、完全に置いてきぼりである。

だがあえて、ここは空気になろう。俺は空気になれる男だ。

時間単位で給料を得るフリーターにとって、空気になりきるということは即ち、余計な仕事を押しつけられないことを意味する。できる男はこつやって日々の勤務を乗り切るのだ。

まあ、できる男はフリーターなんぞやってはいないけどな。

「聖女の言葉が信じられませんか？」

クリスティーナの問いかけに、イケメンは押し黙る。

重い空気があたりを包む。

しかし、空気と化した俺にはノーダメージだ。へへんっ、ざまーみる。

「……ね、ねえ。あなた大変なことになっているけれど、大丈夫かしらっ。」

傍に近寄ってきたローズが、小声で話しかけてきた。

お、おい。やめろ、いま俺は空気なんだ。現実には引き戻そうとするんじゃない。

「救いの御手といえば、教会以外でも、その名を広く知られた名誉ある職です。以前選ばれたのは先の大戦だったでしょうか」

クレアさんまで、俺を引き戻そうとするのか。  
俺は自由を愛する、フリーター様だぞ。

そんなワケのわからない物に、縛られたくはないんだ。  
きっと、ブラックなカンパニー以上に、過酷な労働を強いられるに決まっている。

福利厚生、老後の安心よりも自由であることを選んだフリーターに、首輪をつけられると思うなよ。

などと、のたまっているうちにも状況は変化していく。  
イケメンの後方から聞こえてくる足音。

数人がこちらへ駆けてくるようだ。

「アッシュ！ 無事かッ!？」

どうやら、イケメンの名前はアッシュというようだ。  
見た目もイケメンなら、名前もイケメンらしい。

アッシュの元へ駆け寄ってきたパーティーメンバーは三人。  
どれもこれもが、アイドル顔負けのイケメン揃いでやまださんとし  
ては悔しいばかりである。

そして、おう。どしたことが。

三人が三人とも、腰に掛けている剣を抜いて切っ先を俺に向ける  
ではないか。

駆けつけてきた一人、金髪のロン毛が口を開く

「……やはりこの男。聖女についた錆かっ！」

よし、逃げよう。もう、付き合ってらんねーわ。



### 聖女3

もっ付き合っつてらんねーわ。

やまださんは逃げるぞ。

こんな修羅場からは、とっつと逃げてやるんだから。

といつてもさすがに、パーティーメンバーを置いて一人で走りだす訳にはいかない。

さらに目の前には剣を抜いたイケメンどもが。それも、その切っ先は俺に向けている。

さすがに大蛇のお腹から出てきた彼は、剣を抜いてはいないようだけど。

しかし、この障害物を何とかしなければ、上手いこと抜け出せないのではないだろうか。

ここはひとつ、信頼のアイコンタクトでタイミングを合わせてヨイ、ドンするしかないだろ。

(クリスティーナ、クリスティーナ……)

やまださんのつぶらな瞳を、ぐわんぐわんと動かさせてアイコンタクトを送る。

おっ、気づいたようだ。

クリステイーナは、俺のアイコンタクトに真剣な表情で頷きを返す。

続いて、ローズとクレアさんにも。

ぐわんぐわんと。

クリステイーナと同じように、真剣な表情で頷きを返すローズとクレアさん。

さすがは、パーティーメンバーである。

この短い期間でも確かな絆ってやつが、俺達の間にはちゃんと生まれていたらしい。

ややあって、クリステイーナが声を張る。

いやいや、張っちゃダメでしょ。

「控えなさいッ!! あなた達が剣を向けている相手は、この聖女クリステイーナが認めし、救いの御手です。今すぐその無粋な剣を降ろしなさい」

ダンジョンに響く、凜としたクリステイーナの声。

……おう。全然アイコンタクト通じてなかったわ。

「アツシュ?」

「俺も先ほど聞いたばかりだ。……とにかく剣を降ろせ」

その言葉で、イケメンどもが俺に向けていた剣を降ろす。

アツシュと呼ばれた王子様系イケメンはきつとパーティーリーダーなのだろう。

短いやりとりだったが、そういえるだけの雰囲気があった。

「聖女クリスティーナ、貴方がそう言うのであれば我々はそれに従いましょう」

「わかれば良いのです。敬虔な使徒アツシュ」

ニコリと微笑むクリスティーナの姿は、聖女のそれだ。

場所がダンジョンではなく、教会や聖堂などであつたら神聖さを感じていたかもしれない。

「しかし、その御手は灌頂かんじやうを経てなつたワケではありません」

「……何が言いたいのですか?」

「聖女クリステイーナ、我々も貴方の意思は尊重したい。だからといって、清鎖……いえ、教会としてはハイそうですかと認める訳にはいきません。ですから、この話は一度持ち帰り、報告をさせて頂きます」

「どうやら荒事なく、お帰り頂けるようだ。となれば逃げだす必要もなく、あとはイケメンどもを気持ちよく見送るばかりである。」

「さあ、お帰りはあちらですよ。」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ！」

と、ここでローズさんが吠える。

え、なんでだよ。せつかく、上手いこといきかけてたじゃん。

「……………君は？」

アッシュがローズに向かって鋭い視線を送る。しかし、そんな視線など意に介せず、とばかりに口を開くローズさん。

「わたしはグレース王国第一王女、シャーロット・グレースよっ！」

「……っ」

イケメンどもがざわめく。

「おいおい、マジかよ」「なんでダンジャンなんかに王女が？」  
「本物か？」

とかなんとか、そんな感じ。

ローズの後ろから前へ出たクレアさんが、その豊満に実った胸元から何かを取りだす。

プルンと揺れる双丘から姿を現わしたそれは、キラリと光る印る…  
…ではなく、黄金製のブローチ。

楕円形に王家の紋章なのか、黒く光沢のある細かい細工、さらにその中心部には赤い大きな宝石が、太陽の陽を受けて輝きを放っていた。

「これが王族の証、ロイヤルワラントです」

と言うと、クレアさんはブローチを掲げてみせる。  
それを受けて驚きの表情を浮かべるアッシュ。

「その魔結晶に紋章、確かにグレース王家の物……」

その言葉に満足したのか、一つ頷いてローズが口を開いた。

「ええ、そのグレース王国第一王女がこの彼を救いの御手と認めるわっ。それでもまだ文句があるのかしら？ もし、これ以上彼を侮辱する気なら許さないわよ」

……マジかよ、やまださん侮辱されていたの。

衝撃の新事実だわ。

「シャーロット王女の言う通りです。あなた方の態度は御手に対するものとは到底思えません」

クリスティーナも続く。

どうやらやまださんは、本当に侮辱を受けていたらしい。

全然、気がつかなかったわ。

むしろ、お帰り頂ける事に喜びすら感じていたよ。

片や王女様、もう片方は聖女様ときて、俺はフリーターだ。

これが社会経験の差というやつなのか。

まさか、異世界に来てそれを感じるとは思ってもいかなかったわ。

「確かにシャーロット王女、聖女クリスティーナが言われる通り、些か礼を欠いていました」

などと、言うが否や。

イケメンどもは、息を合わせたように膝を地につけ軽く頭を下げる。

その姿が優雅だなんのって。

やられた側であるやまださんが、ちょっと悔しくなってしまうのは何でだろうね。

これがイケメンの、アクティブスキルってやつなんだろう。

やっぱりイケメンってズルいよな。

「しかし、我々も教会にその身を置く者。一存では判断しかねるのもまた事実……」

「まあ、いいわ。帰って聖女の神託をこのシャーロット・グレースが認めたと伝えなさいっ」

堂に入った王女様モードのローズがそう言い放つと。

イケメンどもは短く「わかりました」と返事を返して、ダンジョンの出口に向かって帰っていった。

「ね、で、お、お、お、ダンジョン攻略を進められそうだ。」



## ダンジョンと壁

忘れそうになっているが、ここに来た理由はアリナリーゼから発生したお使いクエストだ。

どうにもこのダンジョン中心部に用事があるらしく、その代行が今回のお仕事らしい。

着けばわかるとかなりフワツとした説明だったが、貴重な証言者候補を確保する為にも、成功させなければならぬ重要案件となっている。

これの如何では、ローズを取り巻く立場、身の安全が大きく変わることだろう。

などと。ダンジョンへ来た理由を再確認して、決意を新たにしたいところで。

それはそれ、これはこれとばかりに。目の前の現状に、一つ溜息を漏らす。

遡ること数時間前。清鎖派の連中から開放された俺達は、ダンジョン攻略を進めるべく探索を再開した。この迷路のような通路でも、同じ道を何度も通ることなく、順調に進むことができたのは、偏にマップ機能のおかげだろう。

しかし、この巨大な壁を見てわかるように、陽の当たるダンジョン・アルカンは今まで踏破してきたダンジョンに比べて余りにも広大だった。

数時間歩き続けたのにもかかわらず、全体の十分の一以下の進行度しかない。

ダンジョンの事情通こと、ローズさんの話によれば最高進度の冒険者でも、全体の半分も攻略が進んでいないとのこと。

少しばかり、安請け合いしてしまったかと後悔を浮かべた矢先。本日二度目の袋小路、つまり行き止まりに遭遇してしまったのだ。

「完全に行き止りね」

清鎖派の連中とやりあって以降、ノリにノったローズさんが壁を叩きながら呟く。

どことなくベテラン冒険者の風格を漂わせているのは、きっと幻だろう。

「これは参りましたね、ここを引き返すとなると半日は覚悟しなくては……」

クレアさんも続く。

確かに言う通りだ。このまま引き返して違うルートを選べば半日を無駄にしてしまう。

途中、魔物に遭遇することを考えると。場合によっては、もっと時間を取られてしまうことだって充分に有り得る。

現に此処に来るまでに、三度ほど魔物との戦闘があった。

そのどれもが時間節約の為と、俺が先頭に立って一撃で倒してきたが。  
結局は魔石の回収やら何やらで、時間をとられてしまう結果になった。

とはいえ、時間のロスは勿体無いが、ここは引き返すしか手段がないようだ。

「道がない以上、仕方ないですね。来た道をひ……」

そう言おうとした時だ。

「この壁が壊せたらいいのに」

ローズが呟いた何気ない言葉に、天啓が降りた。

なるほど。そうか、そうだよな。

わざわざ異世界に来てまで、現代人の常識に縛られる必要なんてないよな。

「あ、ありがとうございます！　ローズさんっ！」

思わずローズの手を硬く握りしめて、ブンブンっと上下させた。

「えっ、あっ、なに!？」

頬を赤くして戸惑うローズ。

それとは他所に一頻りお礼を言い終えた俺は、『アイテムパック』から始まりの剣という名の戦斧を取り出して、ダンジョンの壁に向かって構える。

「ごっ、ご主人様っ。どうするつもりですか？」

俺の奇行にクリスティーナが心配そうな声をあげた。

「ローズさんにヒントを貰ったんだ、いや答えその物と言ってもいい。進む通路がなければ、自分の手で作ってやればいいんだ」

スキル『フルスイング』が発動してことを感じ取ったところで、ダンジョンの壁めがけて戦斧を全力で叩きつける。

戦斧が風の壁を破り、爆発音とも聞こえる大音響が響く。一拍遅れて生まれた暴風が周囲の砂埃を巻き上げた。

砂埃が晴れた先、姿を見せたのは大きくヒビの入った壁。

「……すい」

後ろからクレアさんの感嘆の声が漏れた。

「わたしのご主人様ですからね、これくらいの事は当然ですっ」

なぜか、鼻高々なクリスティーナさん。

ほんの少し前まで、心配そうな声をあげていたの知っているよ。やまださんは。

「さすがね、でも貴方の力を持ってしても壊すことは難しいのね。一体この壁はどんな材料で作ってあるのかしら」

「もう少し待ってください、試してみたいことがあるので」

ここは一つ。困ったときのスキルウィンドウさん。

カモンツ、セイ。

スキルポイント：19

アクティブ：スキル

HPストック：LvMax

フルスイング：Lv1

火属性魔法：Lv20

水属性魔法 Lv1

回復魔法：Lv2

パッシブ：スキル

アイテムパック：LvMax

マップ：LvMax

言語：LvMax

ちなみにレベルは魔物の経験地がよかったのか、42までレベルアップしていた。

よし、残りのスキルポイント19を全部スキル・フルスイングへ注ぎ込めばきつといける。

スキルポイントを振込先へと。……よし。

無事に引き落とされたのをウィンドウ画面で確認して、再度『フルスイング』発動。

ブオンつと頼もしい発動音と共に、赤いエフェクトが全身を包む。

「ちょ、ちょっとソレ魔法なのかしら？　なんだか燃えるように赤いけど大丈夫？」

「……ええ、大丈夫です」

いや、わからないよ。

わからないけど、大丈夫だと信じてる。

そう自分に言い聞かせるように、全力で振り抜く。

踏み込んだ石材の床は大きく抉れ、戦斧が赤い閃光になって壁に撃ち込まれる。

先程とは違った砲撃にも似た打撃音、巻きあがった暴風は螺旋状に吹き荒れる。

ピキッ、ガガッダ。

蜘蛛の巣状に広がったヒビは中心部が決壊すると同時に、ガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

「……ほ、本当にダンジョンの壁を壊してしまったわ」

## 笑顔と土下座

「……ほ、本当にダンジョンの壁を壊してしまったわ」

ローズが驚きとも、感嘆とも取れる声をあげる。

『 経験値取得にボーナスがつきます。19000ポイントの経験値を獲得しました。 』

『 レベルアップ。スキルポイント15獲得しました。 』

自分でやっておいてアレなんだけれど。ダンジョンの壁って壊れるんだな。

そして、経験値貰えちゃうんだなって。

本当、これタダの壁なのだろうかという疑問さえ湧いてきちゃうわ。

いや、ダメだ。深く考えたら負けのような気さえする。

本当であれば、壁を壊して最短ルートを行けばいいのだけれど。

しかし、ごっそりと抜けたMPと疲労感。

これは何度までできるような代物じゃないようだ。



「さすがです、さすが私のご主人様ですっ。まさか、ダンジョンの壁を壊してしまうなんて凄すぎますっ！！」

いつもよりも、ヨイシヨ度がお高いクリスティーナさん。  
もしかして、先程の救世の御手とかなんとかの一件を気にしているのだろうか。

ちょっとわかりやすすぎる反応が可愛いじゃない。  
童貞の心をピンポイントで刺激してくるこの感じ、わるくないですぞクリスティーナさん。

さてと。先程ダンジョンの壁に開けた穴は、人が三人並んで通れるほどの大きさだ。  
俺達はそれをくぐって、向く側の通路へ移動する。

これで来た道を引き返すこと考えれば、半日以上の節約になったはずだ。

「……………ねえ、アレを見て」

ローズが声をあげた先。今まさに、くぐったばかりの穴へと振り返る。

すると、どうだろうか。

開いた穴の縁が少しづつ土が盛り上がり、穴を塞いでいく。しばらくすると、盛り上がった土は石材のように固まって、壁の他の部分と見分けがつかないほどに同化していった。

ついでた傷や年月を感じさせる風化具合も同じなだから。見ているコッチとしては疑問が残るばかりだ。

「ダンジョンって壊れたら直るものなのですね」

ダンジョンが直っていく様を見ながら呟くと、

「壊れるなんて話は今まで聞いたことがないから、わからないわ……」

ローズさんから、もっともなお答えを頂く。

そりゃそうだ。

今回は結果オーライだったが、普通に考えればこの巨大な壁に穴を開けようとは思わない。思ったとしても、今まで見てきた冒険者のレベルであれば難しいのではないだろうか。

それをやらかした自身がそう考えるのも、どうかと思わなくもないけど。

「き、きつとですね、ご主人様の無意識のパワーというか……ま、魔法が直してしまったのですよ！ さすがですっ……！」

褒めようとしてくれるのは嬉しいけれど、それはちょっと無理があると思うんだ。

「さすがにそれはちょっと……」

ほら、ローズさんもこう言っているじゃない。

「クリスティーナさんやい」

「なっ、……何でしょうご主人様」

明らかにキョドキョドとした姿で答えるクリスティーナ。

「もしかして、さっきの清鎖派との一件を気にしている？」

「っ……」

ビクツと肩を震わせたかと思うと、猫が驚いた時に見せるジューン。

まさにそのような感じで飛んでみせるクリスティーナさん。

空中で足は折り畳まれ、そのまま地面へストーンと着地。

その際に両手は綺麗に前で揃えられ、頭は地に着かんばかりに下げられている。

所謂、ジャンピング土下座というやつだ。

「もっ、も、申し訳ありませんっ!?!」

「ど、土下座……!?!」

驚きの余り、思わず口に出してしまった。

後ろからは、ローズとクレアさんの驚きの声が聞こえる。

「はい、以前ご主人様の家で見たてれびなる物でやっていました。これがあちらの世界での最高位の謝罪だと」

それ、日本限定の話だけだな。

いや、最近ではHARAKIRI、GEISHAと並んでDOG EZAとして海外にも伝わってるとも聞く。

だからと云って、外国人が謝罪でDOG EZAをするわけじゃない

が。

しかし、クリスティーナほどの美少女が土下座して見せる姿は破壊力が高い。

否応なしに罪悪感を抱いてしまうのは聖女様の持つオーラせいか、はたまた自身の小心さだろうか。

それにこんな姿を清鎖派の連中に見られてもしたら、きっと教会の敵として問答無用で襲い掛かられる気がするわ。

「おうふ……わ、わかった！ とりあえず土下座はいいから顔をあげてくれ」

「いいえ、そういう訳にはいきませんっ！ 聖女の義務とはいえ、勝手にご主人様を『救世の御手』と宣言してしまったのですから…」

…」

確かにクリスティーナが言う通り、教会側である清鎖派に宣言した以上、遅かれ早かれ教会全体に伝わることは間違いないだろう。それがどのような結果になるかはわからないが、聖女についた錆や聖女をさらったなどと因縁をつけられ、敵対するよりは幾分かはマシなはずだ。

それにあの状況では何かしら言い訳も必要だったはずだし、一概にクリスティーナ一人を責める訳にはいかない。

まあ、後ほど間違っていたと訂正でもすればきつと問題ないだろう。

「状況がアレなわけだし、その場をやり過ごす為に言ったのはわかっているからさ」

「……えっ？」

「え？」

おう、どしたことが。やまださんが、可笑しな事を言ってしまったような空気が流れる。

え、もしかして……もしかすると本気マジだったの？

いや、まだだ。ちゃんと確認するまではわからない。

「ええっと、俺が本当にそのナントカのおてて……？」

「はいっ！」

い。  
H A H A H A……やだもつ、クリスティーナさんの笑顔がまぶしい。

チヨイチヨイと肩を叩かれた感触に振り返ればローズさん。

「私も王女の名をもって宣言したのだから、もう逃げられないわよ?」

## ベース

あれから頑なに土下座をやめないクリスティーナを立たせ、ダンジョン攻略を再開すまでに小一時間程かかった。

その際に、『救世の御手』をなし崩し的に了承してしまったのはちよつと早計だったかもしれない。

といつても、俺も男だ。「あなたは英雄ですよ」と言われて正直、悪い気はしなかったのも事実。

しかし、気になるのはその義務や責任といったやつだ。

その重さ如何では、お断りする方向に話を持っていかなくてはならない。

フリーターが背負える責任など、バイトリーダーが精々である。

三人以上の上に立つなど、ちよつと荷が重い。

「御手の義務ですか？ えっと、人々を救い導く者の総称で、特にやらなきゃいけない事とかはなかったと思います」

クリスティーナから返ってきた答えはこんな感じ。

もしかして、名前だけは大層だが所謂マスコットのなふわつとしたモノなのだろうか。

だとすれば、このままでも良いのではないかと思わなくもない。



それに、カッコいい肩書きがあったほうがモテるかもしれないな。

昔読んだ雑誌にそんなことが書いてあった気がする。

童貞はモテるといふパワーワードにめっぽう弱いのだ。

さて、やまださん御一行はナンヤカンヤとダンジョンを進む。

ここまで魔物にも遭遇することなく、順調に進度を稼ぐことが出来た。

そして、高かったお日様も随分と下がり、もう少しすれば空は茜色に染まることだろう。

そろそろ、本日の寝床となる場所を探さないといけない。

考えてみれば、ダンジョン内で泊まるのは初めてじゃんね。

キャンプなんていつ以来だろうか、ちょっとワクワクする。

やっぱ、キャンプファイアーにマシユマロは外せない鉄板だと思うんだ。

あつたかなマシユマロ。アイテムパックに家にあつた物を片っ端から入れてきたから、もしかしたら入っているかもしれない。

後で確認してみないとな。

「今日はダンジョン内で夜を明かすことになりそうです。どこか泊まれそうな場所を探しましょうか」

「そうね、ダンジョンで野宿なんて初めての経験だもの。楽しみだわっ」

ローズさんですか、奇遇ですね。わたくしもなんですよ。

「クレアは以前、ダンジョンの中で野宿した経験があるって言うていたわね。クリステイナは随分とダンジョンに慣れている様だけれど、そういつた経験はあるのかしら？」

おっと、それ以上はいけない。

クリステイナは呪いを掛けられていたせいでスケルトンだったのは記憶に新しいところ。

その見た目からか人里を追われ、ダンジョン逃げ込んだ悲しい経験を持っている。

慣れているどころの話ではない、むしろ住処すみかだった。

きつとそれは、トラウマを刺激する苦々しい記憶ではないだろうか。

ほら、見てみれば俯き加減で顔に暗い斜線が入っているかのよう。

「まあ、まあ。ローズさん、この話はやめにしましょう」

「そ、そう？ 貴方が言うのであれば……」

「あ、あそこあたりはどつでしようか？ 随分と開けていて野営によさそうですが」

話を变えるべく、やまださんが指を差す方、石材で整えられたかのような広場。

そこに蔦つたや樹木、さらに青々しい苔が石材と絡み、ここがダンジョンの中でなければちよつとした趣を感じさせるそんな場所。あそこあれば、野営するのにつうてつけではないだろうか。

星空の下、焚き火を中心に車座になって夕食なんて最高に冒険者してる。

わるくないな。むしろ、それしかないって感じがするわ。

「あの場所はもしかして、ベースかしら」

「ベースですか」

なんだろう、ベースって。

言葉の響きからして、野営に向いてそんな感じがするのだけれど。

「ダンジョンには魔物が集まりやすい魔素溜まりと、逆に魔物がほとんど拠りつかないベースと呼ばれる場所があるのよ」

「なるほど、ダンジョンの中にも色々あるものなのですね」

「ええ、そうなのよ。魔素溜まりはその濃い魔素によって魔物を寄せつけていると考えられているのだけれど、ベースについてはどうして魔物が拠りつかないかはまだ説明されていないわ。一説によれば神の祝福が在るとも、魔物の嫌う何かがあるからとも云われているの」

さすがは、ダンジョン通ことローズさん。

おかげで、また新しいダンジョンの知識を得られたぞ。

ゲームで言うところの、安置と考えていいだろう。  
であれば、アレだなアレしかない。

「……」じくを、野営地とするー！

これだ、これを言いたかったのだ。

漫画であればきっと背景にドンって擬音が入っているに違いない。

やだ、やまださん滾っちゃう。

「……そ、そうね。それが良いと思うわ」

「は、はいっ……ご主人様」

満足げな俺とは対照的に、ポカーンとした反応を見せるパーティーメンバー。

このネタは日本でも一部の人間にしか通じないニツチな部類に入らうだろう。

とはいえ、この反応はちょっと悲しい。

ベースと呼ばれた場所は、ちょっとした公園程度の広さだ。

造りは欧州の庭園あたりをイメージをすれば、ドンピシャな感じだろう。

その中で比較的平らな場所、中心部よりもやや外れたこの場所が今夜の寢床だ。

準備をしている内に空を茜色に染めていた陽はすっかりと落ち、俺たちの頭上には無数の星ぼしが煌く。

零れんばかりとは、まさにこの事を云うのだろう。

そして、車座になって囲む焚き火がパチパチと音を立てて燃える様は最高にアウトドア。

手に持つレトルト食品でさえ、美味しく感じてしまうのはこの雰囲気呑まれてしまっているせいだろうな。

「本当に美味しいわね、これ！」

アイテムパックから出したレトルト食品を夢中で頬張るローズさん。  
それ実は百均で買ったやつなんですよ。でも、喜んでもらえて嬉しいです。

「ローズ様、これも美味しいですよ」

それも同じ百均で、しかも親子丼のルーだけ。  
用意する前に食べ始めてしまったから、言いだせなかったけど。

白米にかけて食べるとね、もっと美味しいんですよ。

「クレア、一口貰うわね。んっ……美味しいっ！卵とアツサリとしたお肉が合うわね」

「私も一口頂いていいですか、ローズ様」

ああ、今度はハヤシライスのルーだけ。  
本当にどうしよう、完全に言うタイミングを逃してしまったわ。

俺には今更、白米を出す勇氣なんて持ち合わせていないよセニール。

「ご主人様のいた世界の料理は何を食べても美味しいですねっ！」

おう、マジかよ……。

なんとうことでしょう。クリステイーナさんが食べているそれ、ドックフードじゃないですか。

アイテムパックから出した時、一つ一つ確認もせず適当に出してせいだろつか、そこで混じってしまったのかもしれない。

しかし何故、ドックフードが家にあつたのかはわからないが、美味しそうにドックフードを食べているクリステイーナさんを見ると、チクチク胸が痛んでくるぞ。

「……喜こんで貰えて何よりデス」

もう、直視なんて出来ない。

俺には……、俺には真実を告げる勇氣がなかった。ごめんよ、クリステイーナ。  
だけれど、世の中には、知らないほうが良い真実ってあると思うんだ。

こうして腹を満たした俺たちは、明日に備えて早めに寝ることにした。  
持ってきた厚めの布を敷いただけの簡素な物だったが、不思議と不快感はなかった。

それはレベルが上がったことで体が強化されたのか、それとも単純にこの世界の生活に慣れてきたのかわからないが、横になって目を瞑るとすぐに意識の綱を手放した。

カサツ……。

衣擦きぬぬすれの音で目が覚める。

どれくらい眠っていたのだろうか。まだ周りが暗いことを考えると、そんなに時間は経っていないように思える。

目を擦り、ぼやけた視界の先に見えたのは、月明かりに照らされて佇むクリスティーナ。

起きあがった俺に気がついたのか、クリスティーナは振り向いて視線を向ける。

「あっ……ご主人様」



## ベース（後書き）

しばらく大型パッチが来ないので更新速度をあげれると思います。  
これからもどうぞ、本作をよろしくお願い致します。

## ダンジョンとコーヒ―

「 あっ……ご主人様」

月明かりに照らされ、佇むクリスティーナはまるで聖女様のようだった。

いや、本当に聖女様なのだけけれど。

違った。元だ、元聖女様。

しかし、思わず考えてしまうほどに神秘的で……そう、美しかったわけ。

「クリスティーナ、寝れないによあ？」

童貞のやまださんが盛大に噛んでしまったことを、誰が責められようか。  
きつと心優しい クリスティーナさんはスルーしてくれると信じている。

「ごめんなさい、起こしてしまいましたか？」

月の光を受けて、キラキラと輝く艶やかな銀髪をかきあげて答えるクリステイーナ。

さすがは出来る女、期待通りにスルーしてくれたようだ。

パーティーメンバーはやっぱり、助け合っていないかねとね。

背中を預けられるって、案外こういう事を言うのかもしれない。

「いや、こんな月が綺麗な夜に寝てしまつのは勿体無いと思つてね」

そして、やまださんは精一杯、格好をつけた。

きつと人はこんな些細な事から嘘を重ね、そして、大人になっていくのだろう。

まさか、こんな所で大人の階段を一段、登ると思っていなかったけど。

「っ……」

「クリステイーナは寝れないの？」

さらにやまださんは噛んだ事実を消し去るために、言い直すことにした。

ところがどうだ、

「あつ、ふあんっ……はっ、はい」

クリステイナーの方が最高に、あたふたしている。  
それに、よく見てみれば、頬が赤い。いや、真っ赤だ。

「……大丈夫？」

「ひゃいつ、だ、だ、だいじょうぶです」

そう言い終わると、両手を大きく広げて深呼吸。  
数回ほど繰り返してようやく、落ち着きを取り戻したクリステイナーさん。

そして、佇まいを正す仕草を見せると、

「コホン、あのですね。このダンジョン出たら、少しお時間を頂いてもいいでしょうか？」

予想外の言葉に一瞬、思考が止まる。

ほんの数秒の沈黙。しかし、この時ひどく間抜けな顔を晒していたんじゃないだろうか。

「えっと、それって……つまり……？」

そういう事だよな。パーティーを抜けるとかそんな感じの。

「あっ、違うんです！ パーティーを抜けるとか、そういうのではなくてですね。用事というか、やらなくてはいけない事があって、それで少しだけお暇を頂けたらと……」

なるほど、そういう話ではなかったようだ。

やめてよ、やまださんチヨット焦ったじゃんね。

繁盛期前にして、ぞくぞくと新人が辞めていく様を目の前にした心境だったよ。

店長と二人、乗り切れるかどうか。お互いどちらが欠けてもアウト、そんなギリギリな感じ。

あの時はヤバかった、もう二度と体験したくない素敵な思い出だ。

「そうか……うん。わかったよ何をするのかはわからないけど、困ったことがあれば言ってほしい。その時は、協力を惜しまないつもりだよ」

「はいっ！ ありがとうございます」

ふう。なんだか安心したら、眠気がまた戻ってきた。  
今日はこのまま寝て、明日に備えるでしょう。

ネット黎明期を支えた偉人もこう云っていたではないか。

『明日から頑張る』ってね。これって、ほんと名言だよな。

「それじゃあ、俺はまた寝るね。クリスティーナも早めに休むんだよ」

「わかりました、起こしてすみませんでした。では、おやすみなさい」

パーティーリーダー的なことも言えだし、やまださん的には満足だ。

さてと、もう一眠りするでしょう。

眠気が下がりはじめた瞼を擦り、元の場所ねどこに戻ろうと振り返った時、

「……必ず戻ってきます。待っていてくださいね」

囁くかのような、クリスティーナの声が風に乗って聞こえた。

チュンチュンと鳴く、スズメに似た鳥の声で目覚めた。

ダンジョンの中にも元気に生息しているのだなと、関心しつつも。

思いの他グツスリと寝れたようで、すっきりとした気分朝を迎えられた。

昨日は一日歩き詰めだったのにもかかわらず、翌日には疲れが残っていないとか。

まるで、十代前半にも迫る勢いを感じる。

もしかすると、アレだ。あと数レベルもあげれば、バブル時代のサラリーマンのように、24時間だって戦えちゃうかもしれない。

「あら、おはよう。お湯を沸かすために道具を借りてしまったけれど、よかったかしら？」

「おはようございます、ローズさん。その為に持ってきたようなものですから、どうぞ気兼ねなく使ってやってください」

ローズさんは携帯用ガスコンロの上で蒸気をゆらゆらと登らせていたヤカンとると、カップにお湯を注ぐ。すると、香ばしいコーヒーの匂いが辺りに広がった。

「はい、どうぞ。貴方の国では寝起きにこのコーヒーという物を飲むのよね?」

「ありがとうございます。ええ、個人差はありますが、概ねそのような感じですよ」

「初めはインクを落としたようなこの色に驚いたのだけれど。いざ飲んでみると中々どうして、悪くないわ。鼻を抜ける奥深い香りがクセになってしまいそう」

インスタントコーヒーに、ここまで感想を述べる人って初めて見たじゃないね。

いや、決してわるいことじゃないのでけれど。その価格を知っているやまださんとしては、ちょっとした罪悪感を感じてしまう。

「……気に入って貰えて嬉しいです。まだいくつか持っていますの



で、よかつたら差し上げますよ」「

「えっ、本当につ！？ 嬉しい！」「

喜ぶローズさんに『アイテムパック』から取り出したインスタントコーヒーを1瓶、それにガムシロとフレッシュをつけて渡す。

「えっと……コーヒーはわかるのだけれど、これは？」「

渡したガムシロの一つを太陽の光にかざすローズさん。

「どうやら、興味深々のご様子。」

「もしかして、糖蜜かしら」「

「正解です。それは白糖を煮詰めて作った甘味料ですよ、そのままの味を楽しむブラックも美味しいですが、甘味料を足したコーヒーもまた違った味を楽しめますよ」「

「それは良いわね！」「

「せっかくですし、試してみますか？」「

「ええ、もちろんっ！ クレアもどうかしら？ 一緒にコーヒー道を極めるわよ！」

「はいっ、ローズ様！」

インスタントコーヒーで極められるコーヒー道ってなんだろうね。と、喉まで出かかった言葉を飲み込み、モーニングコーヒーをローズとクレアさんの三人で楽しんだ。

しかし、何か忘れてる気がする……って、おい。

「あの、クリスティーナの姿が見えないようですが……」

「お花を摘みにいくとは言っていたけれど……さすがに遅いわね、何かあったのかしら」

……おいおい、マジかよ。昨日のは完全にフラグだったわ。

## ダンジョンとマシーン

おう、マジか。これは完全にフラグをへし折ってしまった感があるじゃんね。

……いや、待て。まだまだ、慌てる時間じゃない。もしかしたら、ちょっと長いお花摘みの可能性だってゼロじゃないだろ。

兎にも角にも、探さなくては。

ベースから一歩出れば、危険と隣り合わせのダンジョンである。何があっても、なんら不思議ではない。その何かが起こってからでは遅いのだ。

と、いってもその何かが現在進行形で起こっている気もするけど。

「……心配ですね、ちょっと辺りを探してきます」

「そうね、さすがに遅すぎるわ。手分けして探しましょう！ クレアと私であっちを、貴方は向こうをお願いできるかしら？」

「いや、でも……ベースの外には魔物がいる可能性も」

「見くびらないでほしいわね。こう見えても貴方と行動するうちに、私も少しは強くなったのよ、それにクレアも一緒よ。だから……少しは信頼してほしいわね」

ドヤ顔で腕まくりをするローズさん。その細腕には小さな力こぶがプニッと、コンニチワ。

どうしよう……全然、大丈夫な気がしないわ。

漫画の登場人物であれば、真っ先に死んでしまうタイプじゃね。そして、たまに回想シーンで登場して主人公を励ましたりするヤツだきつと。

などと考えていたら、

「私も見ていますし、危なくなったらベースまで引き返してきますので安心してください」

と、ここでクレアさんからの助け舟。

さすがにここまで言われてしまったら、信用しないほうが関係にヒビが入ってしまいそうだ。

「では、そちらはお任せします。少しでも危険を感じたらベースに退避してください」

「ええ、まかせてっ！」

クリスティーナ搜索から数時間。

結果からいえば、見つけることはできなかった。

そして、俺たちは一旦ベースまで戻りこれからの作戦会議をすることに。

クリスティーナさんは一体、どこへ行ってしまったのだろうか。探せる範囲で見て回ったが、魔物に襲われ痕跡はなかった。

それどころか、なんの手掛かりもなく完全に空振り状態の帰還である。

ということとは……つまり、そういう事なのだろう。クリスティーナは自分の意思で、このパーティーから出ていったに違いない。

思い返せば、昨夜なにやら考え事をしていた様子だった。もしかしたら、こんな冴えないアラサーとはもう冒険したくないとか、思われていたらどうしよう。

これはもう、本格的に立ち直れないかもしれない。

「……本当にどこへ行ってしまったのかしらね」

「これだけ探してもいないという事は、クリスティーナの意味で去ったと考えていいでしょう」

なにか自分で言っていてちょっと悲しい。

思えば、今までの人生の中で一番長い時間をともに過ごした女性ではないだろうか。

そう考えると、どうにもお酒が飲みたい。

ストロング系のアレなら、きつと忘れさせてくれると思うんだ。

きつと9%のアルコールだけが、やまださんを癒してくれる。

「貴方はそれでいいのかしら？」

ローズさんからお声がけ。

その声は凜と透き通っていて、なんだか胸を射抜かれた心地がした。

良くないよ、良くないに決まってるじゃん。

でもさ……。

「きつと、何か考えがあつての事でしょう。私はそれを尊重したいと考えています」

だから、こんな綺麗ごとしか言えないじゃんね。

できることなら、ダンジョン攻略なんか放りだい気持ちでいっばいだよ。

「ふーん、それならいいのだけれど。じゃあ、このままダンジョンを進むってことでいいのよね?」

「……はい、そうしましょう」

という事になった。

薄暗かった早朝から太陽の位置はずいぶんと高くなり、時刻は昼過ぎ。

やまださん一行はダンジョンをひたすら進む。

向かうは、ダンジョンの中心部へ向けて。

打撃音を鳴り響かせながら

ガツン、ガツン　バラバラバラ。

「よし、壁に穴が開きました。さあ、急いで向こう側へ」

ダンジョンの壁に空いた二メートルほどの穴を潜り素早く向こう側へ。

あれから何度となく繰り返してきた、最早ルーチンと化した動作だ。

そして、次の壁へと戦斧を無心で打ちつける。

ガツン、ガツン

そう、俺はマシンなのだ。

ただ、ダンジョンの壁に穴を開けるだけのマシン。

そうすればこのモヤモヤした気持ちに負けて、余計なことなど考えなくて済む。

そして、ダンジョンの壁に穴を開け続けたことで得る膨大な経験値が、レベルアップのお知らせを何度となく鳴り響かせた。



ゲームでは当たり前のようにある、レベルアップごとに訪れるスタミナの完全回復。

それはこの世界も同じようで。おかげで休憩を挟むことなく、ひたすら戦斧を打ち続けることができる。

今まさに、永久機関を得たマシンは無敵。

もう、誰にも止められないんだぜ。

ガツン、ガツン

ガツン、ガツン

「ね、ねえ………?」

「なんですか、ローズさん」

「ちょっと休まないかしら……だって、貴方ずっと壁を壊し続けているわ。倒れてしまわないか心配で……」

「マシンに休憩はいりません。ただ、壁を壊し続けるのみです」

「まつ、ましーん? ごめんなさい、ちょっと貴方の言っていることがわからないわ」

「お気になさらずに」

ガツン、ガツン

ガツン、ガツン

「あつ、待つて！ クレアがお腹が痛いって。こ、これは休憩をとらなくちゃだわ。 そうよねえ、クレアッ??」

「えっ？ あつ、はい！ あたたつ、……おつ、お腹が痛いなあ」

むむ。マシンとしては遺憾ではあるが、そこまで言われては止まらざるを得ない。

「わかりました。あと、一振りでこの壁が壊れます。向こう側の通路で休憩をとりましょう」

「ええ、そうですね！ そうしましょう」

マシンは戦斧振りあげ、渾身の一振りを壁へと打ちつける。

ピシッ。

何度も打ちつけ脆くなっていた壁に、無数のヒビがクモの巣走。  
やがてそれは破片となって、バラバラと音を立てて床へ落ちていっ  
た。

破片が巻き上げる砂煙が視界を覆う。

甘い香りが鼻腔をくすぐったかと思うと、壁の向こう側から吹く  
風に砂煙は洗われ、

そして、目に飛び込んできたのは一面に咲き誇る花だ。

花びらが雪のように降る。ベースと呼ばれる広場よりも、更に広  
がりを見せる空間。

それはまるで、一枚の絵画のようだと思う息を呑む。

「……これは」

「ええ、すごいわね……」

「私もこれだけの花を一度に見たことはありません」

どれだけの間、見とれていたのだろうか。

五分か、十分か。いや、それ以上かもしれない。

感動は人を成長させるとどこかで聞いたが、思わぬところで実感するとは思わなかった。

なにせ、このマシンに人の心が戻ったのだから。

そして、ポップなメロディーのお知らせがレベル50に到達したことを告げた。

## 一角豚の串焼き

ベースと呼ばれた広場よりも、さらに開けた空間。

その上下、左右の四方向から中心へ伸びる通路を歩く。

石畳で造られた通路の両端には美しい彫刻が施されており、それは一つの物語が描かれているようだった。

美しい女性に恋をした男が、その女性を守るため魔物と戦い、そして死ぬ。

そんな切ない物語。最後は、男の墓の前で恋した女性が涙を流す場面以て終わっていた。

繊細にそれでいて、ダイナミックに彫られた見事な彫刻。

まるで、魅入られたかのように目を離すことはできなかった。

物語を綴った彫刻が切れた先にある、広場の中心部には二メートルほどの石碑が歴然とした姿でそこに鎮座している。

陽の光に照らされてキラキラとした光沢のある表面には、象形文字のような物が彫つてあるのが見てとれた。

が、しかし読むことはできなかった。

つまりそれは、現在では使われてはいない文字か、極少数のみに使われているものなのだろう。

公用語のように一般的なものなら、『ビギナー支援パック』で得

たスキルで、読むことができる筈だからだ。

「ええっと、これは……」

ここで声をあげたのは、クレアさん。

アゴに人差し指を当てて、真剣に文字を見ている様子。

「ここに、愛した男が……ここに眠る……ですかね」

マジすか、クレアさん読めちゃうんっすか。  
頭の良い女性って、とても魅力的だと思うの。

「私が読めるのはこの部分だけです」

スキルで言語習得した立場のやまださんとしては尊敬せざるを得ない。

そう、第二言語といえば、学校で習った英語だ。

しかし、六年間通して得た物はハローサンキュー程度の物。

ゲームばかりやっていたせいか、使われるスラングだけは得意になったのだけれど。

あいつら、自分たちが勝っているときはGGとか、余裕ぶつて言うくせに。

劣勢になった途端に罵ってくるのな、沸点低いわ。

お里が知れるっていうのだけ、まったく。

「すごいじゃないっ、クレア」

ローズさんも同じ感想だったらしく、驚きの声をあげた。

「これは古代メール文字ですね、前に少しだけ習ったことがあって」

なるほど。古代メール文字ね、さっぱりわからない。

そもそも、ここがどの国なのかさえ、未だにわかっていないやまださんとしては少しばかりレベルの高いお話だ。

今更、聞いたところでドン引きされるだろうし。

なにかこう、自然に聞きだせればいいのだけれど。

やあ、ごきげんよう。ここは何て名前の国なんだい？ みたいなアンニユイ。

「で、ここが目的の場所なのかしら？」

おっと、いけない。

このダンジョンへ来た、本来の目的を忘れかけていた。

ここへ来た理由は、ローズ暗殺での証言を得るため、アリナリ―ゼさんから受けたお使いクエストを果たすためだ。

そのお使いの内容とは、『アルカン中央部に届け物をしてほしい』とのこと。

で、これが納品アイテム。

迷宮都市にある屋台から買ってすぐに仕舞<sup>しま</sup>っておいた串焼きだ。未だ湯気がのぼる姿は、その身に温かい肉汁をたっぷり蓄えており、かぶりつけばきつと滴り落ちることだろう。

それもこれも、アイテムパックに収納していたおかげである。

時空魔法が云々<sup>うんぬん</sup>。仕組みはまったくわからないが、入れたアイテムの時間を止めることが出来るらしい。

なんて便利なアイテムパックさんだろうか。

それを石碑の前にある、香炉にも似た台石に置く。

ちょっとしたお供え物をしている気分になった。



「これは一角ブタの串焼きかしら？」

「ええ、そうですローズさん。今回ここに来た理由は、これを届けたいと頼まれたからです」

「そう、変わった依頼もあったものね」

「はい、本当に変わった依頼ですね」

「まあ、いいわ。依頼はなんであれ、冒険を楽しめたのだから私は満足よ！　ねえ、クレア？」

「はい、ローズ様。刺激的な経験で、思わず昔の血が騒いでしまいました」

クレアさんの昔の血ってなんだろう、すごく気になる。

しかし、勝手についてきたとはいえ、喜んで貰えて何よりだ。即席パーティーリーダーのお役御免といったところだろうか。

そして、このお使いクエスト。

受けた当初はなぜ、そんなことを頼んだのかわからなかったが。

今はちょっとだけ理解できたような気がする。

アリナリーゼはこの彫刻された女性に近い人物か、それとも本人なのか。

真相はわからないが、きっとこれは自分の代わりに墓参りしてくれということなのだろう。

まさに、お使いというわけだ。

なんて、ちょっとぴりセンチメンタルな想像をしてしまうのは、この絵画のような花々のせいに違いない。

だって、アラサー童貞とセンチメンタルなんて最高に相性がわるいじゃんね。

「さて、無事に依頼は果たせました。迷宮都市へ戻りましょう」

「ええそうね！ このダンジョンは、これで終わりなのだけれど。次は一体、どんな冒険に連れていってくれるのかしら？ 本当に貴方というると退屈しないわ」

そう、笑ったローズの笑顔はとても眩しく見えて。

新しい冒険への期待を否が応にも、掻きたてられる物だった。

## 迷宮都市再び

レベル50といえば、開始間もないネトゲで例えるならレベルキヤップ、つまり上限値相当にも匹敵する数字だ。

この世界で、この数字がどの程度かはわからないが、異世界一年生のわずかな経験から見ても、決して低いものではないだろう。

むしろ、相当高いように思える。もちろん上には上がいるだろうが、しかし、一つの大台に載ったといえるのではないだろうか。

などと、考えていたのも束の間<sup>つか</sup>。

ダンジョンから外にある集落に着いた頃には、レベル50を大幅に超える57になっていた。

もし、これがソロだったらしばらく籠ってダンジョンの壁を壊していたい衝動にかられる。

こんな美味しい狩場など、ゲームの中ですら滅多に見ないレベルだからだ。

しかし、パーティーを組んでいる以上そうもいかない。少し惜しい気もするが、……本当は物凄く惜しいのだが、今回は大人しく諦めることにしよう。

そして、まるっと二日かけてダンジョンを出た時には日も落ち、すっかり夜の様相。

本日は集落にある宿に一泊して、朝一番の乗り合い馬車で迷宮都市へ戻ることにした。

泊まるお宿は前回と同じ、麦わら亭。

ゆっくり休息をとったやまださん一行は、翌朝一番の乗り合い馬車で迷宮都市まで丸半日かけて揺られることに。

それはもう、パカパカと。

二馬力のお馬さんでひかれる、サスペンションも装備されていない木製の馬車。

決して乗り心地はよくないが、窓から見える景色は別だ。

ゆっくりと流れていく、田舎の景色。

某国営放送が手掛けてたドキュメンタルでよく見る、欧州のそれを思い浮かべたらドンピシャな感じ。いいね、こういう感じ好きかもしれない。

現代日本では、なかなかお目にかかれない光景じゃなからうか。一段落着いたら、のんびり異世界観光もわるくないかもしれないな。

思い返せば、迷宮都市と先程までいた集落しか知らない自分。せつかく異世界に来たのだから、色々と見て回らないのは損している気がするし。

よし、決めた。ローズの暗殺の魔の手から守ることが出来たのなら、やまださんは観光するぞ。

異世界観光、響きからしてテンションがあがるじゃね。

それからたつぷり半日、馬車に揺られ、迷宮都市に着いた頃には昼頃を過ぎていた。

街の中心部からやや離れた馬車停で降り、宿の点在する繁華街へ向けて歩く。

徒歩15分といったところ。

当初まばらであった人も、進むにつれてその数は増えていく。

都市の繁華街、大通りに差し掛かった頃には、お祭りのような賑わいだ。

やはり、此処は活気があって大変よろしい。

平均年齢が低めの発展途上国とか、こんな熱気を感じるのだろうか。

日本から出たことがないから、わからないけど。

だって、日本もとい、お家サイコー。

ネット環境とPCがいけない、アレがあればずっと引きこもってられる。

案外、人類にとって禁断の果実とは、インターネットのこともかもしれない。

「ねえ、宿はどこでとるつもりなのかしら？」

「そうですね、猫のマタビ亭に泊まるうかと思えます。一般向けの宿ですが、これが中々サービスの良い所だったので」

と、知った風に語ってしまったけれど。

本当はここぐらいしか知らないの、ちょっと通ぶって見たかっただけ。

色々と泊まり歩いてますよ、的な感じですよ。

「初めて聞く名前ね、貴方が泊まると言うのなら……そう、私たちもそこにしようかしら」

どうやら、ローズさん達も同じお宿にチェックインとのこと。  
忘れてしまいそうになるが、ローズさんの身分は王族だ。

それが一般向けの宿に泊まっても大丈夫なのだろうかと思わなくもない。  
しかし、考えてみれば本人自身、冒険者に扮しているのだからその辺りは寛容なのかもしれないな。

「それなら、案内しますので一緒に向かいましょう」

「それは頼もしいわね、お願いするわ」

「ええ、この通りを左に……」

勝手知ったる何とやら。

迷宮都市にきて間もないやまださんは、これでもかと思ったかぶりで案内をする。

途中に一本、道を間違えてしまったが問題はない。

要は、間違えたときに焦るからいけないのだ。

堂々と間違えれば、「そうなのかも？」と、思わせられるだけの説得力が生まれるのだ。

なんてことはなく。二・三本道を間違えた所で、通行人に道を聞き無事に辿り着いた。

カランカランとドアベルが鳴り、

「あっ、やまだニヤーー！ いらっしやいニヤーッー！」

中にいたエルザが元気よく迎えてくれた。

いつも元気だなこの子。

大量のモンスターに追われているときですら、元気一杯だったし。

……いや、違う。あれは必死だった。必死の形相だった。

あの時は、クリスティーナもかなり驚いていたなあ。

って、………ついつい、考えてしまう。

それもそのはず。短い期間だったが、こちらに来てからの思い出には、クリスティーナがいつも横にいたのだから。

それからエルザと幾つかの世間話を交わして、無事にチエックイン。

二部屋を確保したやまださんたちは、各自荷物を置いて、ちょっと遅めの昼食をとりに出掛けることにした。

「あの猫人族の娘、知り合いだったのね」

「ダンジョンでちょっと知り合いになったんです」

などと、会話をしながら宿から外へ出たところ。

進路を塞ぐように立つおっさんがいた。

自分自身、アラサーである。片足を中年に突っ込んだ手前、言え



る筋合いではないが。

それでも、目の前のおっさんは齡四十代後半ほど。

日本のサラリーマン然としていなく、外人部隊の筋肉モリッモリなマッチョ感じ。ちよっと怖い。

そして、何故か、やまださんをガン見しているのだから性質タチがわるい。

「ええつと……知り合いなのかしら？」

「そんな、まさか」

目前を塞ぐ、筋肉の塊を避けて進もうとすると、鉄壁のガードを誇るゴールキーパーのように行く手を塞がれる。

右へ行こうとすれば、左に。

左へ行こうとすれば、右にと。

何度かそれを繰り返した後、いよいよ声を掛けようとした時だ。筋肉さんが、ガシッとやまださんの肩を掴んでイカツイ笑顔を浮かべる。

ああ、間違いない。これは、数人殺ヤッている顔だわ。

「探したぞ！ 今、迷宫都市を騒がしてる超大型ルーキー」

「……あの、どちらさまでしょうか？」

筋肉さんは更にイカツイ笑顔を深め、歯列をキラリ光らせると、

「俺か？ ……俺は、この都市のギルドマスターだ」

## ギルドマスター

「俺か？ ……俺は、この都市のギルドマスターだ」

やだ、この凶悪な笑顔を浮かべている人ギルドマスターだってさ。  
絶対に傭兵レンジャーの方が似合っているって。

「……パードウン？」

「ぱっ、ぱーどん？」

「いえ、何でもないです。忘れてください」

「おう、そうか……」

「それでギルドマスターさんが、私に何か御用ですか？」

そう言つと、傭兵レンジャーごと、ギルドマスターの齒列が太陽の陽を受けてキラリ。

やまださんに熱い視線を向ける目は、愉快なものを見たとはかりに

細くなった。

もしかして、ソッチの気があるのだろうか。

いや、それはちょっと困る。

女性方面ですら新品未開封の自分としては、余りにも未知の世界  
だと思っの。

「驚いた。これだけ肩を掴む手に、力を入れているのに、顔色ひとつ  
変えないとはな……」

確かにしつかりと肩を掴まれてはいるけど。

それはどちらかというと、肩を揉んでいる時のような心地良い感じ  
だ。

だから、ソルジャー傭兵さんが言っていることが、いまいちピンとこない。

「はっははは、さすがは超大型ルーキーだ！ さあ、いこうか」

パンツと一度、背を叩き腕を肩にまわすソルジャー傭兵さん。

これはもう、完全にマブダチの雰囲気。

ウエイイですか、ウエイイしちゃうんですか。

しかし、流されるまま行った先にめんどくさいことが、待ち受け

ているのは目に見えている。

「ここはひとつ、ノーと言える日本人にならなくては。」

「すみません。この都市に帰ってきたばかりで、まだ済まさなくてはいけない用事が残っていて……」

「ああ、わかっている。なぜなら、帰ってくるまでずっと張っていたのだからなっ」

まじかよ、完全にロックオンされているわ。

一体、どこで身バレしてしまったのだろうか。

ダンジョンを踏破した時点で、『レコード』と呼ばれている石碑にその名前が刻まれるのらしいので、その辺りは仕方ないとしても、

この迷宮都市に、やまださんの名前と顔を一致させることの出来る知人など、片手で数えるほどだ。

などと、考えていたら。

「に、にゃーは干物なんかに負けてないにゃーっ……」

半分だけ開いたドアから顔だけ覗かせて、震える声をあげるエル

ザさん。

どうしよう。この子、アホな子かもしれない。

犯人が判明したことで、一気に脱力感が襲う。

もういいや、素直について行ってさっさと済ませてしまおう。

と、思ってしまうほどに毒気が抜かれてしまった。

「ま、そういうことだ。なァーに、ギルドマスターと懇意にして損はあるまいよ」

「ま、待ってっ！ 私達も行くわ！」

という事になった。

半ば連行される形で歩くこと、十数分。

どつやら目的地はギルド会館であつたらしく、現在その前に立っている。

大通りに面した木造二階建て、それがこの迷宮都市のギルド会館だ。

その扉を傭兵ソルジャーさんこと、ギルドマスターが両手で勢いよく開くと、  
観音開きの扉が、ギイイと木を軋ませた。

昼間だというのに、ギルド会館の中には想像よりも多くの人間がいる。

格好を見れば冒険者なのだろうが。

こんな昼間からギルドで、ウロウロしていいのかと思わなくもない。

といっても、昼間からウロウロしているやまださんが、言えた義理ではないのだけれど。

「バカどもが噂を聞きつけて、集まってやがる」

さすがギルドマスター、こんな強面の方々をバカ呼ばわりである。

ちょっと、やまださんは真似出来そうにない。

レベル的には上なのかもしれないけれど、そういう問題ではなく精神的に宜しくないのだ。

「……噂ですか、それは一体どんな噂ですか？」

「ああっ？ お前さんのことだよ」

ギルドマスター曰く、噂の渦中はやまださんらしい。

どうしよう、一気に有名人の予感。

サインの書き方とか、練習したほうがいいのだろうか。

いや、待て。良い噂ばかりとは限らない、もし、悪い噂だったらどうしよう。

そう考えると、ギルド内に皆様方の視線が痛い。

ちょっと、胃がキリキリする。

ここはひとつ、フリーター生活で培った営業スマイルでやり過ぎすしかないな。

「……ほう。これだけの視線を受けて身動きしないとかな」

ああ、これね。営業スマイルってこのですよ。

現代日本人の固有スキルってやつです。

「アレが噂の超大型ルーキーか」「見てみるよ、これだけの人数に見られてるといふのに、えらく堂々としてやがるぜ」「ばかやろう、あの境界の回廊を踏破せしめた冒険者だ。それぐらいの度胸は持ち合わせているだろうよ」

「しかし、ここらで見ない顔だな」「どうにも、遠方の大陸出



身らしいぞ」「どつりで顔が平たいはずだ」「んだ、んだ」

などなど、そのどれもが好印象な感じ。

一部、どこで流れたのかわからないもの迄あるけれど。

「ねえ、貴方。有名人じゃない」

ローズさんが耳元で囁く。

ちょっと語気が荒いのは、自身が冒険者に只ならぬ憧れがあるからだろうか。

「ええ、そのようですね」

だからか、そんなローズさんに言われてちょっとだけ嬉しい。

さて、ギルドマスターの後について歩くことしばらく。

向かった先は、ホールを過ぎて別館。修練場と、呼ばれる所らしい。

野外球場を一回り小さくして、木人などを設置すればドンピシャな感じだ。

「実はお前さんに、手合わせをしてほしい相手がいるんだが」

マスターが親指を指した先、一人の人物が見えた。

美しい赤髪をポニーテールに結んだ美人さんだ。

強い意志を秘めた瞳、豊穣の神から祝福を受けたとしか思えないたわわをお持ちである。

思わず二度見を決めてしまうほどの、実りに実った、たわわだった。

「もしかして、銀狼のリーダー、じゃないかしら？」

「有名な方なんですか、ローズさん」

「ええ、実物ははじめて見るけれど、間違いないと思うわ。彼女、この都市ではトップクラスの実力者じゃないかしら」

「たわっ……、それは凄い方なんですね」

思わず、たわわと言いきうようになるのを寸でのところで堪える。危ない、危ない。もう少して、言ってしまうところだった。

たわわは、ひとまずたわわに置いておいて。

目の前の相手に集中しなくては、情報通のローズさん曰く。  
この都市では相当な実力者とのこと、そんな相手に失礼があっては  
マズいだろう。

ややあつて、ギルドマスターが口を開く、

「さて、コイツを紹介しよう。マリエル・ホワイトシープ、ウチの  
エースだ」

## 手合わせ

たわわこと、ギルドのエース・マリエルさん。

成り行きとはいえ、手合わせする運びになってしまったやまださん。

どうにかこれを回避できないものかと、無い頭で考えてみるが。如何せんポンコツ仕様となっている為か、この短時間では良い方法が見つからない。

そんなこんなしている内に、

「急な呼び立てに感じてくれて感謝する、私はマリエル・ホワイトシープだ。宜しく頼む」

などと、挨拶されては、

「これは「丁寧」に、私はヤマダ・タケシです。よろしくお願いします」

と、返すしかなかった。

「さて、お互い挨拶も済んだようだし、始めてもかまわないか？」

「ああ、かまわない」

「……はあ、はい」

もうこれは完全に引き返せない雰囲気。

仕方ない、怪我だけはしないようにがんばろう。

渡されたのは、木剣が一つ。

それを持って、修練場の中心で互いに構え合う。

なぜか、周囲には野次馬が集まっていてちよつとしたアウエー感。

そもそも、当然のように木剣をわたされたけれども。

やまださんが魔法使いとかソツチ系の人だったら、どうするつもりだったのだろうか。

なんて、思わなくもない。

しかし、渡された木剣を素直に構えてしまった以上今更だろう。

それに未だ、つなぎにバイク用プロテクターを愛用している自身の姿を鑑<sup>かん</sup>みるに、魔法使いにはとてもではないが見えそうもない。

どちらかといえば、現場作業員。そちらのほうが余程しっくりくる。

今まであまり気にはしていなかったが。

ちょっとは、服装に気を使ったほうがいいのだろうか。

異世界であっても、TPOって大事じゃね。

「ではっ、参る！」

おっと、もう始まってしまった予感。

たわわさんの体が、残像を帯びたかのようにブレる。

そして、気がついたときには、もうすぐそばまで迫っていた。

なにこれ想像以上に速いぞ、このたわわさん。

慌ててその動きに意識を集中させる。

すると、速かった動きも途端にスローモーションに早変わり。

だからか、その動きも容易に捉えることができた。

振り上げられた木剣、弾むたわわ。

振り下ろされるであろう着地点を、やや避けてみせる。

この紙一重感、最高にカッコいい。

木剣は予想通りのルートで地面に叩きつけられる。切っ先が地面を抉り、砂埃を巻き上げた。

周囲を取り囲む野次馬から、ワッと歓声があがる。

「くっ、全力の一撃を避けられるは。ならばっ、これでどうだっ」

次に放たれたのは、横からの薙ぎ払い。

それを後方に飛んで避ける。

やはり、ここも紙一重。ちょっと、クセになってしまいそう。

たわわさんのピンと、伸びきった右腕。

ここチャンスと睨んだやまださんは、一足距離を詰める。

左下からの切り上げ。残影が歪むほどの速度で振られた木剣が生み出す風圧は、たわわさんの顔を舐めた。

そして、切っ先はわずか1センチで急停止。

アニメやラノベであれば、これで勝負ありである。

見てきた物はそうだった、だからこの世界でも、きつとそう。

……大丈夫だよな？

「これで満足していただけましたか？」

ドヤ顔で言ってみたものの、ダメだったらどうしよう。

「恥ずかしさ満載だ。」

「ややあつて、」

「……ああ、完敗だ。まさか、ここまで実力差があるとは思って  
いなかった」

「たわわさんが負けを宣言したことで、野次馬からさらに大きな歓  
声があがった。」

「ところ変わって、ギルド会館の一室。」

「その執務室と呼ばれた部屋が、やまださん一行に与えられた現住



所。

執務机の前に置かれた一对のソファ。

中心にやまださん、左はローズ、右はクレアさんこんな塩梅だ。

向かってたわわさんと、その他一名。ギルドマスター

ゆらゆらと湯気を立てたお茶を前にして、その他一名が開口一番、ギルドマスター

「すまなかつたっ！ お前さんを試すような真似をして」

と、額をテーブルにつけんばかりの勢いで頭を下げて見せた。

当初、頭突きでもするのかと心配になったほどだ。

「私からも謝らせてくれ。マスターに無理を言って、あの場を作ってもらったのだから」

続いて、たわわさん。

「いえ、謝罪には及びません。こちらも良い経験をさせて頂きましたので」

「そうか、そう言って貰えて助かる」

などと、たわわさんとの会話を楽しんでいたところ、

横にいたローズさんがやまださんの肩を、人差し指でチヨイチヨイと。

「……なにか、いつもと対応が違うわね」

そんなまさか、顔に出してまったのだろうか。

おそるべし、たわわ。

「いつも通りですよ、ローズさん」

「ふーん、ならいいのだけれど」

「ちやつて、」

「コホン、謝罪ついでは何だが、もうひとつ言わせてくれ」

と、ギルドマスターさん。

少しばかり、居心地がわるそうに口を開いた。

「ギルド会館占拠の件について、解決してくれた事をマスターとして感謝する」

ああ、ハゲマッチョのやつね。

完全に忘れかけていたわ。

「その礼として、このゴールドクラスの冒険者証を受け取ってほしい」

## ゴールドカード

目の前に置かれたゴールドカード。

さすが、お高そうな輝きを放っておられる。

審査基準のハードルが緩くなったと囁かれて<sup>ささやか</sup>いる、昨今。

それでも尚、与信力の高さを伺わせるだけの存在感がそこにはあった。

果たしてこの世界で、これがどのくらいの価値があるかはわからないが。

ずいぶんと大袈裟に置いて見せたところを見るに、見かけ以上の価値を秘めて思える。

「聞けばお前さん、まだどのギルドにも所属してないそうじゃないか」

どうして知っているのだろう、と一瞬思ったが。

知っていて当然である。目の前にいるのは、当冒険者ギルドのマスターさんだ。

もう完全に傭兵と、やまださんの中で定着してしまった感が否めない。

もういっそ、改名してくれないかな。覚えやすくいいのに。

「……まあ、そうなのですが」

やまださんの言葉を受けて、マスターの口角があがる。少し悪い顔だ。きつとなにか企んでいるのではないかと、つい背筋を正してしまう。

最近、少しばかり慣れてきているが、ここは異世界。もしかしたら、法外な壺や絵画などを売りつけられる、なんてこと有りしもある。

今回は綺麗なお姉さんではなく、ガチムチ相手だが。だからといって、どこに罠が隠れているかわからない。

もう一度気を引き締めなくては。

「なあ、ここは一つこの冒険者ギルドに所属してみねえか？ このカードが示すように、ゴールドクラスで迎えようじゃないか」

どうやら、壺は売りつけられないらしい。

「安心といったところか……いや、まだわからないぞ。」

「……これまた急な話ですね」

「お前さんにとっては急な話でも、こっちとしてそうじゃないねえんだわ」

ん、どういふことだろう。

「いやな、お前さんについて少し調べさせてもらった」

与信調査か、与信調査だろうな。

だとすれば、社会的信用とは程遠いフリーターの身分である自分。

自給いくらの世界でせせこましく生きているやまださんにとってそれは、まるで恥ずかしい部分をまじまじと見られているようで、ちよっとツライ。

「素性が少しばかり怪しいが、それを除けば実力と実績ともに申し分ない」

「それはどうも」

わるくない評価を頂いたぞ、大幅アップの予感。

違う、そうじゃない。

ゴールドカードを目の前にして完全に浮かれてしまっていた。これはきつとあれだ、ギルドへの勧誘に違いない。

思えば、ハゲマチヨ占拠事件や、たわわさんの実力を鑑<sup>かん</sup>みるに。このギルドの戦力層は、ずいふんと薄く思える。

そこで突如、頭角をあらわしてきた無所属のやまださん。これはタイミングがいいとばかりに、ならば一丁、取り込んでやるう。

そんな腹づもりなのだろう。

しかし、自由を愛する自分としてはフルタイム勤務はちょっと遠慮したいところだ。

せっかく異世界まで来て、わざわざ組織に所属するのはよろしくない。

現実世界から離れ、パートタイムからも開放されているのだから、今しばらくはこの自由を満喫したいのだ。ここであれば、空白の職歴を気にしなくてもいい。

「どうだ、決してわるくない話だと思うが」

「せっかくですが……」

お断りさせていただきます、と言いかけたところで、目の前を遮るように手が差し出される。

白く華奢なお手で、この持ち主はクレアさんだ。

やまださんを見つめ、自信に満ち溢れた瞳で頷く。

これは、「私に任せてください」と言っているのだろう、間違いない。

なんとという安心感だろうか、異性に守られるってこんな感覚なんだね。

初めて知った、こう全身を暖かなもので包まれてるって感じが最高のだわ。キュン。

「大変良いお話だと思いますが、お受けすることはできません。ヤマダ様は大きな可能性を秘めた御方、冒険者ギルドとはいえども一つの組織に縛られるのは冒険者の……いえ、この国全体の損失に繋がります。どうか、ご理解を」

凜とした姿で言い放つクレアさん。

しかし、国全体の損失って、

どうしよう……話のスケールが大きくなり過ぎてやまださんついていけない。

そもそも、この国はなんてお名前なんですか。

「……ふむ」



って、マスターはなんだか納得しちゃっているし、

「ふふっ、なるほどな。さすがは、私が認めた男だ」

たわわさんにいたっては、よくわからない尊敬を頂いてしまったぞ。

そして、横に目を向ければローズが小さく拳を握りガッツポーズを見せた。

この世界でも、そのサイン使うんだね。

なんだこの一体感は。

自分の知らないところで、なんだかわからない共通認識が生まれているようだ。

もうやまださんは、考えるのを放棄して得意の営業スマイルを浮かべることにした。

これが長年のフリーター生活で培った処世術。

「……その御令嬢も関係している話か？」

マスターの目線から、ローズを指していることだろう。

「マ、マスターッ、もしかっ……むぐっ」

言いかけた、たわわさんの口をマスターのゴツイ手が塞ぐ。

「おっと、それ以上はいけねえゼマリエル」

何がいけねえのか、サツパリだが。

お話は当事者であるやまださんを置いて、ドンドンと進んでいく。

クレアさんは、口元に薄い笑みを浮かべると、

「それは想像にお任せします」

ややあって、マスターの顔にも薄い笑みが浮かぶ。

「なるほど、わかった。ギルド加入の話は一旦、引っ込めようじゃねえか」

「ご理解、感謝します」

この短い間に、どんな無言のやりとりがあったかわからないが、もう詮索しないでおこう、きつとそれが精神衛生上、大変よろしい

気がする。

「しかしだ、完全に諦めたわけじゃねえ。知っているように、バハラ草原の悲劇で多くの人員を失い、ギルド内の戦力はガタガタだ。

だからヤマダのような活がいい奴は、正直言っただけから手がでるほど欲しい。

背負っている事情は詮索しねえ。だが、もし気が変わったというのなら、冒険者ギルドはいつでもお前さんを歓迎するぜ」

と言うと、敵つい顔を笑顔で大きく歪ませるマスター。

今までは強面が先にきてわからなかったが、笑う顔を見るとこれでも中々、人の良さそうな印象を受ける。

「私も貴殿と同じ戦場を、駆けれることを期待している」

続く、たわわさんからは握手を求められた。

それに返すと、たわわさんの顔に笑みが浮かぶ。

手に伝わる柔らかな感触に、ドキドキしながらも早々に離す。

名残惜しいが、そうでもしなければきっと顔に出てしまっていただろう。

手合わせの一件以降、出来る男を演出しているやまださんにとってそれは避けたいところだ。

さて、やまださんを置いてきぼりに進んだ今回のお話は。

どうやらギルドへの加入は、保留という形で決着がついたようだ。

などと、一息ついていたとき。

部屋の外から、慌しい音が聞こえてきた。

尋常じゃない足音が扉の前まで迫ると、勢いよくドアが開かれた。

そこに立っていたのは受付の女性。

その顔からは血の気が引いているのか青白くなっている。

よく見れば、わずかに体を震えているのがわかった。

彼女に、一体なにが起こったのか。

そして、これから知らされるのは吉報かそれとも……。

ざわざわとした得体の知れない不安を覚える。

「なんだ、騒々しい！ 今は来客中だぞっ！」

マスターの怒声に怯むことなく、彼女が口を開く。

「マスターッ！ 大変ですっ、大変なんです！」

「大変なのはわかった。早く用件を言わねえかっ」

「あ、あの……そのっ……あっ」

どうやら大変取り乱している様子。

彼女は必死で言葉にしようとしているのが、見ている方にも痛いほど伝わってくる。

「スタンピードです！ スタンピードがその……魔物の群れが街へと雪崩れ込んできています！！」

## スタンピード

「街の中でスタンピードだっ！！」

マスターの怒声が部屋の中に響く。

受付の彼女は怒られたわけでもないのに、ビクツリと大きく体を震わした。

なんだかチョット可哀相な感じ。

「まさか、そんなことが……間違いないんだな!？」

マスターに睨まれた彼女は何度も、何度も大きく頷いて見せる。

それを見たマスターは元々強面だった顔が、更に凶悪に変化する  
と、

「レッドだっ！ レッドを発動!! 今すぐ、活動可能な冒険者全員を招集しろ!」

「はっ、はい!」

「それと街に駐在する騎士団への支援要請を忘れるな」

「わかりました！」

そう声をあげた彼女は、開いたままの扉から駆け出していった。

マスターは出て行く姿を見送ると、やまださんの方へ向き直し、

「本来なら冒険者登録もしていない人間に頼むのは筋違いかもしれないねえ。」

だが、あえて無理筋を通して頼む。お前さんの力を貸してくれ！」

自分よりも一回り大きな人間が頭を下げる。

それも随分と歳が離れた人物が見せる姿は、存外に迫力があつた。

だからと云うわけではないが、気がつけば、

「ええ、私でよければ」

と、答えていた。

両サイドにチラリ目を向ければ、ローズとクリアさんも同じように頷いていた。

冒険者会館から一步、外へ出るとそこは戦場だった。

想像以上の数の魔物がダンジョンから抜け出たらしく、あちらこちらで冒険者と思わしき人物たちと戦闘を繰り広げている。

怒号と悲鳴、遠目には黒煙が登り、平和だった街が凄惨にも一変していた。

多少なりと愛着を持ち始めていた街だからか、その惨状に胸が締めつけられる思いだ。

「……これは酷い状況ですね」

「ああ、確かに。だけれどな、不幸中の幸ってやつだ。この街にいる奴らの大半は、多少なりと戦える。もし、他の街だったら考えるとゾツとするぜ」

やまださんの呟きにマスターが答える。



その表情は、苦々しいものだった。

「こんな事はよくあるのですか？」

「あつてたまるかつ！ ダンジョンから魔物は出ねえ、これは大原則だ。

でなければ、迷宮都市なんてもの成り立たねえよ。もっとも、人の手が加わったなら話は別だが……」

マスターが言う通り、ダンジョンからそうホイホイと魔物が出てきては、近くに街を築くなど不可能だ。だとすれば、これは人の手つてやつが係わっているのだろうか。

「マリエール、お前はパーティーを率いて前線へ行ってくれ。これ以上の進入を防ぐんだ」

「了解したマスター」

そう答えた、たわわさんは近くまで来ていたパーティーメンバーと合流し、颯爽と戦場へ消えていった。

「さて、お前さんは根元へ行ってもらいたい。つまりダンジョンの入り口だな、そこで原因となっているモノを叩き潰してもらえねえ

か

なにやら重要な使命を頂戴した予感。

やまださんの働き如何では、街への被害状況も大きく変わってしま  
いそうだ。

これは、ふんどしを締め直す所存。

「わかりました」

「ちょっと待って！ 私も行くわっ！！」

そう叫んだのはローズさん。

街の危機を前にして、どうやら冒険心に火が着いてしまったらし  
い。

「……しかし、この先は危険です」

「危険ならダンジョンでもう経験しているわ、きつと役に立つはず  
よー！」

これは困ったぞ。このままローズとクレアさんを、連れて行くわ

けにはいかない。  
危険なのも間違いないが、一番の問題はやまださんとローズのステータス差である。

最初は大丈夫でも、この数だ。きっと彼女を守らなくては、ならなくなる時がやがて来るだろう。  
そして、守りながら戦えば機動性に欠け、街への被害が広がる可能性も否定できない。

街の為に戦いたいと思うローズの気持ちを考えれば、少々酷かも  
しれないが。

……ここは、心を鬼にして言わなければ。

って、言いづらいわ。

だってさ、「お前は足手まといだから、ついて来るな」、と遠回しに言うわけなのだから。  
ああ、聞こえる、聞こえちゃうわ。やまださんのメンタルが、ギリギリと削られていく音が。

「ローズ様。ヤマダ様を困らせるのも、その辺でよろしいのではないでしょうか」

「なっ、なによクレア。困らせるって……」

「力量に差があり過ぎる者同士が戦場へ駆けつけた場合、どうなるか口

「ズ様ならご存知のはずです」

「むっ……」

「ここはヤマダ様を気持ちよく見送ることこそが、冒険者として正しい姿ではないでしょうか」

僅かばかりの思案顔を見せたかと思うと、

「……わ、わかったわよっ！　いってらっしゃい！　もし、……死んだりしたら許さないわよ」

両手を組み、プイツとそっぽを向くローズさん。

さすがクレアさんだ、扱いに慣れていらっしやる。巧みに冒険者なんてワードを盛り込むあたり、付き合いの長さを見せつけられた気がした。

後方の憂いというやつが解消されて、これだと思う存分戦えそうだ。あとは、やまださんのステータスが通用することを願うのみ。

きっと大丈夫、信じてる。壊してきたダンジョンの壁は、伊達じゃないって。

「はい、必ず戻ってきます」

そう言って会館前の大通りを走りだした、その時だった。

マスターが大声が耳を突く。

今までの怒声とは違う、意図的によく通るように、周囲の者たちに聞かせたい。

そんな意図を込めた声だった。

「野郎どもっ！ たった今、強力な助っ人が向かった。それは、あのルーキーだっ！！」

マスターの声が、通常では考えられないほどに響き渡る。真偽はわからないが。もしかしたら、ある種の技、あるいは魔法だったのかもしれない。

それを聞いた者たちが、ワッと沸きあがる。

「だからといって、ルーキーになんか負けるんじゃないぞ！ 冒険者の意地を見せてやれ！ この街は俺たちが守るんだと！！！」

「「「うっおおおおお つ！！！！！！！！」」」

聴衆の歓声がさらに沸きあがった、幾重にも重なりあつた声が腹底に響く。  
あまりの数に押され気味だった冒険者たちの目に、輝きが戻るのが見てとれた。

本当になんだろうな……。  
一体全体やまださんは、この街でどのような評価をされてしまったのだろうか。

妙な居心地の悪さと、プレッシャーをこの身に感じつつも全力で駆ける。

向かうは、このスタンピードの原因となった

ダンジョンの入り口へ。

## スタンピード2

笑顔って、すばらしい。

他者に不快な思いをさせないばかりか。居心地の悪さやプレッシャーからも、自身を守る防波堤にもなるのだから。

だから只今、やまださんの顔には満面の笑みが浮かんでいる。

そして、走っている。全力で。

オッサン一歩手前。アラサーのやまださんが笑顔で疾走とか、絵図的にやばい。だって、完全に不審者のそれだもの。

もし、現代日本の街中で見かければ、通報されかねない。

しかし、この世界では……

「おい、マジかよ……こんな鉄火場で笑ってやがるぜ」「俺はちつとも不思議と思わないぜ、なんせあのルーキーなんだからな」「くっ……これくらいは奴にとっては、お遊びってことか」

それを見ていた冒険者さんからは、などのお言葉を頂戴した。

もうこれはアレだ。やまださんの評価が迷走しまくっている。これに尾ひれがついた日には、目も当てられない。

そのうちやまださんは、人間をやめてしまっているかもしれないな。

「もうダメにやー！ 死んじゃうにやー！..!」

おっと。

どこかで聞き覚えのある声に目を向けば、絶体絶命のピンチ。尻餅をついた状態で、魔物に襲われる間際とか。

さすが、ピンチに定評のあるエリザさんだ。

「あつ、やまだにやーっ！！ た、たすけてにやーっ！！」

どうやら、こちらに気がついたご様子。

いくら急いでいるからといっても、さすがに無視するわけにもいかず。

やまださんは、走ったままの状態で。

アイテムパックから『始まりの剣』と名のついた戦斧を、振りあげた手の中に出現させて。

それを魔物目掛けて、振り抜く。



ゴブリンをひとまわり大きくさせた、醜悪な魔物。

その上半身が水風船が弾けるように消えると、経験値を獲得したことを知らせるポップなメロディーが流れた。

そして、慣性の法則が乗った戦斧を勢いそのまま、アイテムパツクヘチエツクイン。

さすがはアイテムパツクさん、期待通りの活躍だ。

これで走る速度を下げることなく、魔物を倒すことができたぞ。

様々な物を収納できるだけでもすごいんだけど、任意の場所に出し入れできちゃうとか。

応用次第では、可能性が広がりんぐ状態ではなかるうか。

「あつ、ありがとつにゃー！ この恩は忘れないにゃー！」

そんなことを言っているにも、魚の干物には負けるくせに。

なんて思いつつも、涙目のエリザがあげる感謝の声を後にして走り続けた。

街の外れ、ダンジョン群の境界にある此処は、普段であれば屋台に賑わっている場所だ。

それが今は、スタンピードの最前線。

コミケ一般参加の物量を思わせる、魔物たちがひしめき合っていた。

それをなんとか抑えようとしているのが、冒険者の皆様方。

しかし、多勢に無勢。苦戦を強いられているように見て思える。

ここが崩れてしまえば、街への被害がどうなるかは想像に難くない。

「やまだ殿っ！」

ゆるるたわわこと、マリエール・ホワイトシープさん。

パーティーメンバーを率いて、戦いながら前線の指揮をとられている様子。

持っている剣が冷気を帯びていて、魔剣士みたくちょっとカッコいい。

一体、どんな魔法なんだろう。

中二心をゾクゾク刺激するこの感じ、やまださんも使ってみたい。

右手に焔、左手に氷結とか最高にクールだと思うの。

「これはマリエールさん、大変なことになっていますね」

「……ああ、これは想像以上の数だよ」

などと、お話途中も攻撃を続けるたわわさん。

切りつけた先、瞬く間に氷が魔物を覆うとその動きを完全に停止させる。

見れば数十体を軽く超える、氷の彫像があちらこちらと並んでいた。

そんなクリーチャーな彫像を見て、一つ疑問が浮かんだ。

「なんともすごい魔法ですね」

「ああ、これか？ 付与魔術だよ」

付与魔術<sup>エンチャント</sup>、ゲームでもわりとよく聞く名前だ。

知識が正しければ、アイテムなどに魔法効果を与える術のことだろう。

「なるほど、付与魔術<sup>エンチャント</sup>ですか。しかしなぜ、手合わせときにこれを使わなかったのですか？」

と、やまださんの疑問に。

たわわさんは、

「結果は同じさ。例えコレを使ったとしても、貴殿との実力差は埋めれないよ」

「それは、わかりませんよ？」

「いや、わかるさ」

そう言ったたわわさんの笑顔は、気持ちの良いものだった。

さてと、そろそろやまださんもお仕事をしなくては。

それにしても、この数だ。

一体一体、切りかかって進んでいては、ダンジョンに辿り着くだけでも一苦勞だ。

今は一刻を争う事態、どこまで効果があるのかはわからないが。ここもう、魔法でどーんとやっっちゃおう、どーんと。

右のおててを上に向けて、念じる。

曰く、ファイアーボールさん来てください、できれば大きいやつで。

ずっと体から魔力つばいやつが、吸いあげられる感覚に成功の予感マシマシ。頭のうえで、轟々と燃えさかるファイヤーボールさんに目を向ければ。

……おっと、これはやばい。

想像の数倍は、大きいサイズのファイヤーボールさんがこんにちは。

どうやらやまださん、発注書の桁を間違えをしてしまったようだ。しかし、だからといって納品されてしまった以上、返すわけにはいかない。

廃棄ロスとは、戦わなければならない宿命にあるのだ。

「やつ、やまだ殿っ!？」

近くにいた、たわわさんが素っ頓狂な声をあげる。

「どうしました? マリエールさん」

「いや……その、邪魔をするつもりは毛頭ないのだが。しかし、だな……貴殿の頭上で燃え盛っている巨大なそれは、なんだろうか?」

「ええっと、これはファイヤーボールですが」

さすがに少しばかり大きいとは思うが、納品されたこれはファイヤーボールに違いない。

もしかして、この世界では寸法の大きさによって、名称が変わったりするのだろうか。

出世魚みたいに。

「ふあっ、ファイヤーボール!? そ、そうか……うん。貴殿が言うのであれば、そうなのであるうな」

納得したのかしていないのか、複雑そうな表情をするたわわさん。

動きが完全にフリーズしてしまっている。

しかし、いつまでもファイヤーボールを浮かべているわけにもいかないのです。

冒険者がいない地点目掛けて、ぽいつと。

オーダー  
指令を受けたファイヤーボールさんは、凄まじい回転を見せてイメージしたルートを寸分の狂いもなく一直線に進む。

ややって、重々しい響きとともに、大量の魔物を巻き込んで大爆発。

パラパラと落ちる砂埃、焦がすような熱風が肌を撫でた。そして、視界が晴れた先にあったのは、地形を大きく変えたクレイター。

これがレベル57のファイヤーボール。

数百体は優に超える魔物を、一撃でほぼ壊滅させてしまうなんて

その威力に、やまださんドン引き。

チラリ、横目で伺えば、あんぐりと大きくお口を開けたまま微動だにしないたわわさん。

その仲間も同じように、引きつった顔をしているご様子。

それもそのはず、魔法の知識が乏しいやまださんでもわかる。

この威力はやばいって。

「ま、まあ……こんなものですかね。はっはは……」

乾いた笑い声は、巻きあがった風に乗って空の彼方へと消えていったのだった。

### スタンピード3

やまださんが放ったファイアーボール……。

もはやファイアーボールと呼んでいいのかわからない、巨大な火球。

それが起こした大爆発の余韻が、ジリジリと大地を焼いていた。

地面のところどころがガラス状に変化した様を見るに、その威力の凄まじさを痛感する次第だ。

レベル57の魔法。

それ自体がすでにイメージする魔法の枠を超えて、ある種の近代兵器ではないかという思いが脳裏をよぎると同時に、やまださんの背中に冷たい汗が流れた。

「やまだ殿、これは魔法と呼んでよいものだろうか……？」

たわわさんこと、マリエールさんがうわ言のように声を漏らす。

やはりこの威力、この世界でも非常識だったようだ。

わるい事をしていないにも関わらず、なんだか後ろめたい感じがマシマシ。

だからか、



「マリエールさんと戦場を共にすると思うとどうにも、注ぐ魔力にも力が入りすぎてしまったようで。ははっは……」

よくわからない言い訳に、力がこもってしまったのは仕方がないことだろう。

「っ……」

どっしりよう、たわわさんの反応が芳しく<sup>か</sup>ない。

さすがに調子にのりすぎたか。

アラサーのフリーターに、こんな臭いセリフを言われて嬉しいはずがない。

むしろ気持ち悪いと思われているかもしれない。

社会的地位が好感度に直接作用することは、長いフリーター生活で痛いほど知っている。

は。……間違いない。これ以上、嫌われる前にこの場から逃げなくては。

「では、私は先へ進みます」

「あつ……ああ、残党は任せてくれ。それと、やまだ殿つ……」

会話もそこそこに、逃げるようにその場を後にした。

迷宮都市のダンジョン群は、都市を覆う壁の外側に広がっている。

現在確認されている数は9つ、そのうち踏破されたものは4つだ  
そうだ。

やまださんが踏破した『境界の回廊』を除いて、残りすべては伝  
説的な冒険者であるジョン・スミスが成し遂げた偉業だと、冒険者  
通のローズさんが語気も荒く語っていた話だ。

しかし、肝心のジョン・スミスは現在その行方が知れないという。

一説には、最難関のダンジョンに挑んでいる最中だとか、また冒  
険者を引退して故郷で幸せに暮らしているなど、様々な噂が飛び交  
っているがどれも想像の域をでないものらしい。

やまださん的には今すぐにでも現れて、この事件を解決してほし  
いのだけだ。  
けれども、現実はそのよう上手くはいかないように出来ているらし  
い。

そして、今回の原因であるスタンピードの発生源となっているダンジョンはというと。

ジョン・スミスが踏破したダンジョン『欲望の大口』のようだ。

藁に覆われて全貌を見ることは叶わないが、大きく開いた口を模した彫像に下へ続く階段。

その特徴的な外観は、ローズさんから話し聞いたものに酷似している。

それに今もそのダンジョンの入り口からは無数の魔物があふれ出ているのだから、およそここで間違いないだろう。

なにが原因でスタンピードが発生しているかわからないが、まずは内部に入って確認しなくては対策の打ちようがない。

もし、やまださんの手に余るような事態であるのならば。

……そのときは、そのときだ。

冒険者会館に逃げ帰り、ハゲマツチヨに責任を丸投げするしかない。

あとは軍隊やら、騎士団やらがなんとかしてくれるに違いない。

といっても頼みを聞いてしまった以上、やる事はやらないとな。

アイテムパックさんからとり出した戦斧を握り、ゴブリンにオーク、その他よくわからない形状をしたものが、玉石混交（たまひくせきごんこう）とした魔物たちに切りつけていく。

そのどれもが、やまださんが振るう戦斧に容易に倒れていった。

それもそのはず、魔物のステータスを確認すれば、自身の三分の一以下しかないのだから当然の結果かもしれない。

しかし、肉を切る生々しい感覚というものは、中々慣れるものではないようだ。

今までは必死で戦っていたので、感じる暇もなかったのだが。

なまじ余裕がでてきたせいか、やまださんのナイーブな心をジクジクと刺激する。

人の形から大きく離れた魔物はまだマシなのだけれど、形が人に近いものは少し罪悪感を感じてしまうのは、本能的になにか訴えてくるものあるのかもしれない。

入り口からあふれ出てくる魔物を粗方退治し、一息ついた頃。

足元には切り伏せられた、夥しい数の魔物の死骸が散らかった。おじただ

切り口からこぼれてた臍物からは、悪臭が発ち込め鼻腔を刺激する。

込みあげてくる酸っぱいなにかを無理やり飲み込みつつ、それらを踏み越えてダンジョンの入り口へと向かう。

人の鼻から下を模した彫像、大きく開いた口の中には下へと続く階段が見える。

蔭が深く多い茂り、入り口部分までしか見ることは叶わないようだ。

とはいっても、大きさから判断するに顔全体は作られていないよ

うに思える。

なんとも、不気味さを覚える外観だろうか。

最初に遭遇したダンジョンがこれだったら、潜るのにもっと躊躇していたのかもしれない。

足元には、ざらざらとした石材とまばらについた苔。

ダンジョン内は外よりも気温が低いらしく、動かして熱を持った体に心地いい。

視界に表示されたダンジョンのステータスによれば、ここの適正レベルは16。

自身のレベルと比べてみてもその差は歴然としている。

よほどのアクシデントがない限り、命の危険はないだろう。

たまに出くわす魔物を片付けながら下へと降りていく。

どうやらスタンピードのピークは過ぎたらしく、出くわす魔物の数はめっきり少なくなっていた。

入り口から続く通路を抜けた先に広がるフロア。

このダンジョンの第一階層だろうか、野球場よりもやや広い空間が目の前に姿を現した。

所々に壊れかけの遺跡らしきものはあるが、目ぼしきものは見当たらない。

もちろん人影も、魔物の姿もだ。

原因はこの階層ではなくて、さらに下にあるのだろうか。

周囲に気を配りながらも奥へと進む。

フロアも半ばを過ぎた頃、人の手が加わった痕跡を見つけた。

それは 焚き火 の痕だ、それも暖や調理に用いるような一般的なものではなく。

素人目でもハッキリとわかる、怪しげな儀式の痕跡としか見えない代物だった。

「これがスタンピードの原因か……」

誰に聞かせる訳でもなく呟いた言葉、

「ふむ、そのようだのう……しかし、まあ。こんな古臭い骨董品のような道具を使う人間が、まだいたとは驚きじゃ」

それに応える幼げな声。

手に持った戦斧を強く握り、咄嗟に振り向くと

そこにいたのは幼い容姿とは裏腹に、ふてぶてしい態度で焚き火痕を眺めるアリナリーゼさん。

「なっ……!!」

やまださんが見せた反応がよほど面白かったらしく、クリクリとしたお目々を一度大きくさせかと思うと、腹を抱えて笑いだした。

ナイーブな心のHPが目減りしたいく感覚で待つこと、しばらく。

一頻り笑い終えたアリナリーゼさんが、やまださんの太ももをパンパンと叩きながら、

「はっはは、お主のような兵つわものの虚を突けるとは、妾もまだまだ捨てたものじゃないのう」

なにが彼女の琴線を触れたのかわからないが、とても上機嫌の様子。

「少しばかり買い被りではないですか？ 私を驚かせることなど、それこそ誰にでもできそうな事と思えますが」

「ふふふ、そう謙遜しなくてもよい。しかし、お主は自身の評価が低すぎるのではないか？」

「冗談を。それにしてもアリナリーゼさんは、なぜここへ？」

「ふむ、なにやら騒がしい気配にっ……おっと！」

会話の途中、我々に向かって直刃のナイフが飛来する。

その軌道上にいたアリナリーゼさんが、それを難なく避けてみせた。

さすが、古種。言葉が指す意味はまったくわからないが。

そう思えるだけの風格が、このちっこい体から滲み出していた。

「どつやらこの者が騒ぎの原因かのっ……」

目線の先には黒衣を纏い、フードを深くまで被った不気味な男だった。

その佇まいはまるで、陽炎ように揺らめいて掴み所のないように見える。

「よもやあの数を乗り越えてやって来るとは思わなかったぞ。

くっくく……しかし、好都合だ。裏切り者と姫を護る厄介者を一緒に葬れるとは」

そう言った男の声は、酷くしわがれたものだった。



## スタンピード4

目の前にる不気味な男が笑う。

その姿はどこか現実味がない気薄さがあった。

「アリナリーゼさんお仲間ですか？」

「妾たちはべつに、徒党を組んでいるわけではない。だが、お主の言うところの意味では、そうじゃの……同じ雇い主ではあるかのう」

それはつまり。この男がローズこと、シャーロット王女の暗殺を企てる者からの刺客だとうことを指す。

これまで何度も差し向けられその都度、打ち倒してきただが。まだ、完全には諦めてはいなかったようだ。

しかし、今度の襲撃は今までとは違い、迷宮都市を巻き込んだ大規模なものである。

いよいよもって、シャーロット王女の腹違いの姉である依頼主も本気なのかもしれない。

「……なるほど、それは逃がすわけにいきませんね」

『 彼を知り己を知らば百戦殆あやうからず』なんて言葉もあるわけだし。

まずはそう、ステータスウィンドウさんもん！

名前：アンドル・コロネーネ  
性別：男  
種族：下位アンデットレッサー  
ジョブ：  
レベル：24  
HP：247  
MP：493  
STR：155  
VIT：0  
INT：295  
DEX：115  
AGI：268

ざっとステータスを眺めてみて、それほど強敵でもないように思える。

これがゲームであれば、まず負けはしないだろう。

だからといって、油断してはどこで足元を掬われるかわからない。

ここは異世界とはいえ、生死が現実として存在する世界なのだから。

ただ、ステータスは脅威じゃないにしても、一つ気になる部分は種族に書かれている。

『種族：下位アンデット』、この部分だ。

今までやっていたゲームでは、毒や呪いのデバフを与えてくるモンスターの定番だった。

それもステータスの壁を越えて直接的にドットダメージを与えるものや、ステータスの大幅低下など厄介な<sup>状態異常</sup>デバフが多い。

もしかしたら、この世界でもあるのかもしれない。なるべく、直接ダメージは避けたほうがいいだろう。

「<sup>レッサー</sup>下位アンデットか……」

なにげなく発したやまださんの言葉に、アリナリーゼさんが目を見開く。

そして、開いた目を細くして、

「ほう……遠目からだけでも、わかるのかえ？」

と、少し驚きの色がのった声で答えた。

「ええ、このくらいであれば多少」

などと、偉そうに言ったのけたが、まったくの大嘘である。

ステータスウィンドウさんに、書いてあったからわかっただけで、肉眼では多少不気味な感じの男としてしか、映ってはいなかった。

しかし、あえて言う必要もないので飲み込むことにした。

やまださんのミステリーさが際立って、少しかっこよさが増した気がする。

「ふんっ。あれは、不死を望んだ者の成れの果てじゃ」

酷くつまらなそうに、言葉を吐き捨てるアリナリーゼさん。

アンデットに対してなにか思うところでもあるのだろうか。

しかし、我々の空気とは他所に、

「くっつあっははは……我が恐ろしいか！ 無理もない高位アンデッドを目にする機会などそうそうあるものではないからなあっ！ 存分に恐れ、慄くがいい！！」

両手を大きく広げ、自信満々に叫ぶアンドルさん。

悲しいかな、ステータスには下位アンデットの文字がしっかりと書かれている。

きつと、自己評価がものすごく高い人なのだろう。

「……こいつは阿呆なのか？　なあ、お主の目にはあやつが高位アンデッドなどと大層な者に見えるか？」

「さっきも言ったように、下位アンデットかと」

「うむ、安心した。一瞬、妾の目が曇ったのかと思ったわ」

「あと、アリナリーゼさん。先日、お受けした依頼は無事に済みました」

「お、おおつ……この間で言うことかえ？　お主も大概肝が据わっておるわ。まあ、よいわ後で詳しく聞くとするかなの」

と言い終えたアリナリーゼさんの目が鋭くなる。

ピリピリと肌を刺激する空気感、これは漫画やアニメなどでよく耳にする。

有名なアレ、つまるところの殺気というやつなのだろうか。

ついにやまださんも、殺気を感じることが出来るようになったのか。

「さて、こやつのは相手は妾がしてもええかえ？ お主に負けて以来、体が鈍ってしかたない」

どんな気の回しかわからないが、戦いを買って出てくれるようだ。それならばそれで、全力で乗っかってしまおうじゃないの。

だって、アンデットを切りつけたりした日には、すごく臭い液体とかが飛び散ったりするはず。間違いないって。

「いいのですか？」

「こんな不細工に出来上がったアンデットなど、妾の敵ではないわっ！」

白々しく答えるやまださんに対して、自信満々のアリナリーゼさん。

以前戦ったときに見たステータスは確か、32レベルだった。23レベルのアンドルさんとは、大きな差があるように思える。

であれば、安心して観戦ができるのではないだろうか。

となれば、頑張れ、幼女！ ぶっ飛ばせ！ この世界の幼女は飛ぶんだぜ。（ 47話参照）

「くっくく……その小娘が相手か。不死の王、自らの手にかかって死ぬことを光栄に思うがよいわ！ くあっ、はっははは」

大物感を演出するアンドルさん、悲しいかなステータスが丸見えなんです。ごめんなさい。

そして、さりげなく不死の王に格上げするあたり、小物臭が最高にエモいです。

「ふんっ、ぬかせ木っ端が」

地面を蹴って飛びだすアリナリーゼさん。

傍から見るその速度は、幼女の姿も相まって何かの冗談かと思うほどだ。

「くっ、なんという早さだ！ ならば、これでも喰らうがいい」

驚きを隠せないアンドルさんが、大げさに手を振るう。

すると足元にあった影が大きく膨らみ、まるで液体のように蠢い

たかと思うと、その中から幾つもの分裂した影が迎え撃たんと放たれる。

しかし、悲しいかな。それはアリナリーゼさんの体を捕らえることとはなかった。

「ずいぶんと、ゆっくりな攻撃じゃのう」

アンドルさんの後ろに立つ、アリナリーゼさんが言い捨てる。

その手には、千切りとられた腕が握られていた。

切り口からはドス黒い液体が滴る。きつと臭いやつ。

「なっ……なんだと!？」

驚くのも無理がない。影を操るために手を振るい終えたときにはもう、アリナリーゼさんは背後に立っていたのだから。

力量差は完全に大人と子ども、見た目は真逆なのだけれど。

「くっ……だが、我はアンデッド。腕の一本くらいなど、どうとうこともないわ!」



振り返ったアンドルさんが吠える。

足元の影が蠢き、先ほどよりも数の増えた影がアリナリーゼさんを襲った。

しかし、アリナリーゼさんは余裕の顔で、

「ふん」

千切りとった腕を後ろへ投げ捨て、地面を蹴る。

飛びあがった小さな体をフィギュア選手さながらくると回転させ、思わず見とれてしまうほどの見事な回し蹴りを影へ放った。

巻きあがる風が肌を撫で、襲いかかった影を霧散させる。

「なんだと……不死王の黒き腕が、ただの蹴りで消滅させるなど有り得んっ！！」

さっきの技は大層な名前がついていたらしい。

なるほど、アンドルさんは名前にもこだわりを持つ人物のようだ。

「名前負けも甚だしい技じゃのう、これならまだ殴りつけたほうがマシだわ」

終始、圧倒的な實力差を見せつけられたアンドルさんはジリジリと後ろへ下がる。

深く被ったフードでその顔は窺い知れないが、きつと驚愕の色に染まっていることだろう。

「なっ……なぜだっ！！ それほどの力を持ちながら、我々を裏切る！！」

「元より、仲間になった覚えはない。それに受けた仕事はキッチリ果たした……もっとも、その男に完膚なきまでに返り討ちにあっただがのう」

愉快そうに笑うアリナリーゼさん。

「くっ……！！」

それを受けて、また一歩下がるアンドルさん。

「さて、戯れも終わりじゃ」

と、言い終えたアリナリーゼさんの姿がブレる。

次の瞬間、振るわれた腕によってアンドルさんの頭部がドス黒い液体をぶちまけて弾けた。

「むっ……しまった。証人を殺してもうたわ」

## スタンピード5（前書き）

これまでのあらすじ

迷宮都市を襲ったスタンピート。そこで冒険者ギルド長から要請を受けスタンピートの原因を止めるべく、モンスターを撃退しつつダンジョンに潜ったやまださん。そこで待ち受けていたのは怪しげな儀式を行っていたアンデッド（アンドレさん）、無事に撃退するもそれで終わりではなかった……。

## スタンピード5

「むっ……しまった。証人を殺してもうたわ」

困惑の声をあげて、振り向いたアリナリーゼさん。

幼女然とした困惑の表情は、庇護欲を唆られるが。

しかし、そのお手々からは元アンドレさんだった臭い液体がポタポタと。

少し離れた場所いるのにもかかわらず、強烈に臭うことドブの如し。

それをたっぷりと返り血を浴びた当のアリナリーゼさんは、気にしていないご様子。

やまださんとしては、それを指摘することが憚られる。

昔、仕事帰りのよしえさん（女装をはじめた叔父）に言ったとき、すぐく悲しそうな顔をしていたもの。

今でも汗で化粧が滲んだ、よしえさんの顔が忘れられない。

「むむっ……」

小さく唸って見せたかと思うと。

伏した元アンドレさん（胴）と、お手々の間で目線を行き来するアリナリーゼさん。

すると、どうだ。元アンドレさん（臭い）をやまださんに向けて、

「……いるかえ？」

えっ、いない、いない。……そんな臭いもの。

さすがにそこまでは頭のネジは外れていない。

逆にどうして、その発想に至ったのか教えてほしいくらいだ。

もしかすると、スタンピートの犯人を現行犯逮捕するどころか、ハイテンションで頭部を破裂させてしまったアレヤコレヤが、頭の中で駆け巡ってしまった結果かもしれない。

元アンドレさんには悪いけれど、そんなバツチイものじゃないわ。

「犯人を捕縛することが出来なかったことは大変残念なのですが、こうしてスタンピートの原因は無事に止めることが出来たので、ひとまずは良しとしませんか？」

などと、適当に諭してみたところ。

苦い表情を浮かべていたアリナリーゼさんの表情が、幾分か和らいでみせた。

「うむ、そうじゃな！ 仕方ないよなっ！」

心なしか、機嫌が良さそう。もしかして、この幼女チヨロイかも  
しれない。

なんてことを考えていたら、

パチパチと。まばらに手を打つ音が、ひんやりとしたダン  
ジョンに響く。

物影から姿を現したのは、一人の少年だった。

見た感じ、中学生なりたてを思わせる幼い容姿。

さらに、艶やかな金髪をボブカットに揃え。

まだ性別がどちらにも着地できていない、思春期真っ只中そんな感  
じ。

しかし、その見た目に似つかわしくない。

黒を基調とした仕立ての良い軍服を着こんでいるあたり、どこぞの  
ご息がまさか。

ダンジョンで迷子にでもなってしまったのだろうか。こんな騒動の  
中、なんて運がないのだろう。

だとすれば、早々に保護して安全な場所まで送り届けなければ。スタンピートが収まったとはいえ、ダンジョンの中で迷子とか心休まらないだろ。

「さすが噂に聞く通り、見事な手際です。この程度の罠など、自らの手を下さすまでもありませんか？」

声変りを迎えていない、高い声が耳をつく。

そして、向けられた目線の先にいるのはやまださん。

ええっと、どちら様でしょうか。

あちらさんは自分を知っているようだが、心当たりなどあるわけもなく。

平民の最下層を地でいくフリーターとしては、心苦しいばかりだ。

「てつきり、お一人で来られるものとはかり考えていましたが。まさか、あのアリナリーゼさんを従えて乗り込んで来るとは……さすがにこれは、驚きを隠せません」

と言いつつも、驚いた様子はどこにもない。

やまださんだけではなく、アリナリーゼさんのことをご存知のようだ。

横目でチラリ見てみると、苦虫を潰したよりも更にしょっぱい顔



をしていた。

くうううっ、不味い。もう一杯！ みたいな。

これはどうにも、あまり良い関係を構築できていないらしい。

ならば、突つつくのは藪蛇やぶへび。見なかったことにしよう、それがいい。

しかし、これはアレだ。どうやらこの少年、どこのどの子息でも迷子でもないようだ。

会話から推測するに、このスタンピートとも深く関わっているの  
だろう。

だとすれば、することは一つ。

カモン、セイ。ステータスウィンドウさん。

名前：リアム・セイブル

性別：

種族：人間

ジョブ： 帝国軍人

レベル：41

HP：690

MP：669

STR：255

VIT：152

INT：578

DEX：270

AGI : 670

今まで見た中で一番の高ステータス。

おっとマジか、強敵じゃん。

帝国軍人とか読んでいるラノベでは大体が、悪役と相場が決まっている。

それに幼い容姿に騙されてからの、手痛いしっぺ返しは黄金ルートだろう。

あぶない、あぶない。

まさか、まだ負けてはいないと思うが。

……どうだろう、ちょっぴり心配になってきちゃったぞ。

お願いステータスウィンドウさん、セイッ。

名前：ヤマダ タケシ

性別：男

種族：人間

ジョブ： 冒険者

レベル：59

HP : 5500

MP : 6140

STR : 3100

VIT : 2650  
INT : 2820  
DEX : 2650  
AGI : 1970

ストックHP : 10  
スキルポイント : 100

アクティブ : スキル  
HPストック : LvMax  
フルスイング : Lv1  
火属性魔法 : Lv20  
水属性魔法 : Lv1  
回復魔法 : Lv2

パッシブ : スキル  
アイテムパック : LvMax  
成長速度アップ : LvMax  
マップ : LvMax  
言語 : LvMax

我が軍は圧倒的だった、ステータスの数値がもう別ゲー域に達している。

これもそれも、ダンジョンの壁さんから頂いた膨大な経験値のおかげだろう。  
ネトゲだってあんなに美味しい狩場など、そうそうとお目にかからないからな。

そして、さらに2レベルあがっているのは、ダンジョンから溢れかえっていたスタンピートをファイヤーボールで焼きつくしたからだろう。

あれをファイアーボールと呼んでいいのかは、さておいて。それ相応に美味しい経験値を頂けたようだ。

「ふふ……」

思いがけない高ステータスに思わず、笑みがこぼれちゃう。

「余裕ですね、ボクでは役不足ですか？」

その瞬間、リアム君の姿がブレる。

だからといって焦る必要はない。

だって意識を集中させればこの通り、やまださんには丸見えだ。どんなに素早く動いたとしても、意識を集中させればまるでスローモーション。

そして、君の抜いた剣の切っ先がやまださんの喉元へ向かう。

おっとと、あぶない。

それを身を後ろへ下げ紙一重、剣を躲かわす。

やまださん一押しのカッコいい避け方だ、マイブームが到来しちゃったかも。

「フッ」

で、この「フッ」である。どう血迷ったら、このアラサー野郎がのたまうのか。

客観的に見た姿は、さぞかし悲惨なものだろう。

しかし、やまださんは調子に乗っていた、自身の圧倒的なステータスに裏付けされて。

だからか、そんなのは全然気にならないのだぜ。ふふん。

避けられたのが予想外だったのか固まるリアム君。

その細首に掌を上に向けた手刀を、僅か一センチで止めて見せる。

当てようと思えば、いつでも当てられるのだぜ。そんな感じのアンニユイ。

そもそも手刀を当てたところで、どうにもなるわけではないのだけれど。

それでも最高に、大物感を演出している気がする。

堪らないな、ちょっと良い気分。

しかし、今しがた見せた行動を見るに。これでアンドレさんと共謀関係にあったのは間違いないのだろう。現行犯ってやつだ。

「はっはは、これはすごい。参りました、降参です」

手にしていた細めの軍剣を収め、両手をあげて見せる。

あまりにもアツサリと負けを認めたせいで虚を突かれた感じだ。

まさか白旗をあげた相手に手刀を向け続けるわけにもいかず、やまださんも同じように下げて見せる。

「よし、首をその斧で刎ねるのじゃ」

突然アリナリーゼさんが、物騒なことを言い出した。

……えっ、マジっすか？      いやいやいや。

「捕縛して連れ帰るのは面倒じゃ、首だけあれば事足りるじゃろっつ。ほれ、サクっと」

「丁寧に、手刀で首を切る真似をして見せる。」

この幼女マジだった。サクっとなんだよ、やまださんちよっつとド

ン引き。

モンスターならまだしも、相手は人間。それもシヨタである。さすがにそれは、ちよつと抵抗があるじゃんね。

しかし、よくよく考えてみれば、このアリナリーゼさん。

初対面で人間の首を刎ねて見せたあたり、結構ハードボイルドなのかもしれない。

これが世にいうギャップ萌え、というやつなのか。

だとすれば、やまださん。完全に術中にはまっているのかもしれない。

恐るべし、異世界幼女。色々とブツ飛んでいる。

「ははっは、ご冗談をアリナリーゼさん」

「負けを認めたくせにしては、随分と尊大ではないか」

確かに、リアム君の様子は追い詰められた者が見せるそれではない。

どこか自信に裏付けされた余裕のようなものを感じさせるのはきつと気のせいではないのだろう。

「これは手厳しい……でも、ゆっくりしていいのですか？ なにやら、迷宮都市のほづが騒がしいようですが」

それはそうだろう、今や迷宮都市はスタンピートで大わらわだ。

まさに蜂の巣を突つついたとはこの事をいうのだろう。

しかし、此処はダンジョンの中だ。入ってすぐとはいえ、街の喧騒が聞こえるとは思えない。

「むっ、不味いぞお主」

アリナリーゼさんからのお問いかけ。

「……そのようですね」

何がマズいのだろうか、わからない。

スタンピートが街に溢れているのなら、一大事だろう。

現在進行形で平和なシティライフが危機に陥っている。

しかし、アリナリーゼさんの表情を見るにそれとは違うご様子。

だけれど、雰囲気的にそれを聞き返すわけにもいかず、それらしく返してみるテスト。

「やはり気がついておったか……これは帝国がよく使う手じゃ、すぐに街へ戻るぞ」



おう、マジかよ……全然知らなかったわ。

やまださんが知らないうちに、迷宮都市がマズい事になっているようだ。

この幼女、色々とブツ飛んではいるが、ここで変なウソをつくとは思えない。

となれば

「わかりました、すぐに戻りましょう」

という事になった。

## スタンピード5（後書き）

ぶんか社BKコミックス様よりコミカライズして頂けることになりました。

タイトルは『現実世界にダンジョン現る！〜アラサーフリーターは元聖女のスケルトンと一緒に成り上がります！〜』になります。各種配信サイトで連載中です。

どうぞ、よろしく願います！！

私は航空券A@wabisuke | 217

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n8016ds/>

---

【コミカライズ】現実世界にダンジョン出現！？ ~ 2  
8歳フリーターは攻略を目指す~

2022年1月6日01時36分発行